

関西学院大学総合政策学部

2019 年度

研究演習 II-18

卒業論文集

目次

日本人が外国人と共に居心地よく働いていくための
コミュニケーションの在り方とその成立要件について

胡子 奈々 1

教職の魅力とは

尾崎 亮太 16

「書く」文化とその未来

柏木 乃愛 34

若者言葉の機能性

川口 美佳 53

英語に対する壁をなくす教育法について

北川 樹 73

神戸市の外国人観光客増加への道

権 炫喆 90

外国にルーツのある子ども達への日本語学習支援

～ボランティア活動から見た地域のボランティア団体と学校の在り方～

佐野 花奈江 105

e-sports の将来性

宍倉 莉央 138

客室乗務員がより健康的に働き続けるためには
～日系大手 2 社の実例から考える～

嶋本 弥生 159

経営面から見た歯科業界と医院マネジメント

竹安 貢紅 176

外国人が鉄道を利用する際に困難のないサービスとは何か

手島 智輝 196

中学生の不登校の現状と要因

—中学校卒業後の進学の見込み拡大案—

中川 真里奈 212

「人を動かす」から説く組織運営

原田 篤 234

コメント

牲川 波都季 別紙

日本人が外国人と共に居心地よく働いていくための
コミュニケーションの在り方とその成立要件について

総合政策学部 総合政策学科

胡子奈々

1. 問題意識

近年、中小企業・小規模事業者等において人手不足が深刻化する中、外国人材を受け入れていく仕組みの構築、在留資格の創設が行われている。新たな外国人材の受け入れ制度は、国内で人手確保が必要な産業上の分野において、一定の専門性・技能を有し即戦力となる外国人材を受け入れることを目的としている。この制度を実現するため、2018年12月に成立した入管法等改正法により、在留資格「特定技能1号」及び「特定技能2号」が新設され、2019年4月から、14分野を対象に運用が開始されている。法務省(2019)によると、2019年から5年間の受け入れ予定人数は34万人程度と推計されており、中でも介護人材の確保を深刻な課題とする日本において、その受け入れ見込み数はかなり多い。

このような状況の中、外国人が継続的・安定的に日本で働くためにという視点の先行研究は、主に看護・介護分野など、特定のコミュニケーションの在り方に限られる。例えば、最近のものとしては、武内(2018)、池田 他(2018)などである。しかし、日本人と外国人が共に働いていく上で大切なコミュニケーションの在り方については、そのような特定の分野に限らないと考える。

私が、そのことについて考えるきっかけとなったのは、物流センターでのアルバイトだ。それは、日本人と外国人の距離感を過度に感じた印象的な体験であった。

アルバイトの休憩中、一人でいた私は日本人、中国人、フィリピン人等の労働者が国別に集団になって会話をしている様子が気になった。さらに気になったのは、聞こえてきた日本人集団の会話だ。会話は「外国人労働者たちは日本語がある程度理解できるらしい、そして自分たちには通じない言語で悪口を言っているのではないか」という内容である。日本人労働者たちは外国人労働者に対して不信感、警戒心を感じている様子であった。

このような光景を目の当たりにし、日本人労働者と外国人労働者が共に働く場での居心地の悪さを身をもって知ることができた。

ところが、別の時期に別の工場で働いたとき、外国人と日本人の距離感を感じない経験をした。そこで、この2つの体験は比較することができ、外国人と日本人が共に居心地よく働くために重要なことについて導き出す鍵を握っていると考えた。

これより、私の2回の経験を比較・分析し、必要最低限のコミュニケーションしか必要でないとされる分野においても、日本人が外国人と共に居心地よく働いていくためにはコミュニケーションの在り方とその成立要件について考えていく必要があることを明らかにしたい。

2. 研究方法

本論文では、質的調査方法の参与観察（その中でも、「完全なる参加者」としての調査）を用いた。完全なる参加者としての参与観察とは、現場の正規の役割に就き、環境内で構築される行動、行為、相互作用を秘密裏に観察することによって、環境内で構築される意味を理解し、日常生活体験の意味を理解できるようにする主観的なデータ収集の技法のことである。（Carol, 2003, p110-111）古くはシモーヌ＝ヴェイユの『工場日記』や鎌田慧の『自動車絶望工場』、最近では横田増生の『潜入ルポ amazon 帝国』もこういったタイプの調査手法をとったものと言える。私の場合、期間は短いものの、同様の調査方法で工場の観察を行い、そこでの経験を詳しく書き起こしたものを分析対象とすることとした。

以下、私が2回経験したアルバイトのエピソードである。1回目は2年前の出来事だ。問題意識のきっかけとなる出来事だったため、3回生の時に最も印象的だった所をピックアップして書き起こしていたが、その前後で何があったかは詳しく述べていなかった。

2年前の出来事を一連の流れで思い出すことは難しかったため、断片的に思い出しながら携帯電話のメモに残して、記憶を繋げていく作業を行った。一人で電車やバスに乗っているときに思い出すことが多かった。男性の会話、集合場所の状況、バスに乗っているときの感情、声をかけた女性の雰囲気は思い出しやすかったがその日の大半を占める8時間の作業状況は詳しく思い出すことができなかった。

しかし、1回目のアルバイト経験に強いマイナスの印象を受けたことは確かであり、この論文のために思い出すことのできた出来事は、この負の印象の要因と関連する重要なものと言える。2回目の経験は数か月前のことであるため、私の周りにいた人の雰囲気や発言、動き、作業工程も鮮明に記憶に残っており1回目より詳しく述べている。

3. 1回目のアルバイトの体験

1の問題意識で印象的だった体験について述べていたが、ここで作業内容についても詳しく述べる。

2017年 11月18日土曜日 就労時間9時～18時

私は日雇いの派遣アルバイトとして大阪市此花区舞洲にある物流センターで梱包・ピッキング作業を行った。

事前に準備するものはラバー軍手、厚手の服、昼食だった。ラバー軍手をホームセンターに買い行き、持っている服で動きやすそうな服を選んで、当日の朝はお昼ご飯用におにぎりを握った。派遣会社に出発報告のメールを送り、家を出る。

その日に同じ工場で働く人はJR桜島駅に集合だった。すでに数人同じ派遣アルバイトだと思われるような恰好をしている人たちがいたが、みなスマートフォンをいじりながら壁の方に寄って立っていた。その後、周りをきょろきょろ見ながら待っている人たちが数人現れた。私と同じ派遣会社のアルバイトの人たちだろうと思った。金髪の同い年くらいの女の子、鼠色の髪の50代くらいの女性がいた。友人同士で来ている人はおらず、集まっている

人たちはみんなスマートフォンを見ているので、無表情だった。私もできるだけ駅の出入口の端っこに寄って立っていた。私は 1 人で来ていたこともあり、少し寂しい気持ちになっていたが、自分から近寄って誰かに声をかけようとは思わなかった。

集合時間が来て派遣会社の担当者が来た。「点呼をとるので私の周りに集まってください。名前を呼ばれたら返事をしてください。」と言って、順に名前が呼ばれた。みんな担当者とも周りの人とも少し距離を置き、担当者を囲み込むような形でだらだらと集まった。なかなかみんなが担当者の近くに寄らず、「もっと近くに来てください！」と言われているのにほとんどの人が半歩ぐらいしか動こうとしない。点呼が取りやすいようにみんな近くによればいいのに、、、と思いながら私は担当者のそばに寄った。この状況で遠くから返事をするのは何となく恥ずかしいと思ったからだ。

20 名くらいのアルバイトの人たちの点呼をとり終わると、担当者の男性を先頭に 200m ほど先のバス停へと列になって向かった。駅に着いたときは初めての工場バイトが楽しみで少しわくわくしていたのに、その時は遠い所に収容される気分になって工場に行きたくないと思った。黒いズボンに運動靴、地味なシャツを着ている集団が無言で列になってぞろぞろと歩くのは異様な光景だった。

全員が座ることのできるほどの大きめの送迎バスに乗る。普段公共バスで乗客が無言でいるのは何の違和感もないのに、なぜかこの送迎バスで誰もしゃべっていない状況がとても息苦しく感じられた。送迎バスは、ユニバーサルスタジオジャパンの横を通った。開園時間を過ぎた頃で、ジェットコースターに乗る人の楽しそうな声が聞こえた。その後工場や倉庫、焼却場などの横を通り、10~15 分後に私たちの働く工場に到着。

工場は想像よりも大きかったので驚いた。建物も更衣室も綺麗で清潔感があり、少し気分を取り戻した。

更衣室に入るが、その後の流れが分からなかったので、近くにいる人に尋ねた。40 代くらいのもの凄くおとなしそうな女性だった。更衣室のロッカーのところで手荷物は透明な袋に入れることになっていることをその女性の方が教えてくれた。そして静かに「仕事は最初優しいおじいちゃんが教えてくれるから大丈夫。」と言って、先に作業場へと向かっていった。

私も準備を終え作業場へ行った。段ボールがベルトコンベアー上で絶え間なく流れ、機械音がする。内はトレーナーを 1 枚着けていても少し肌寒いくらいひんやりしていた。工場内の器具等の説明書は、英語、中国語、など数か国語で表記があったので、工場には外国人労働者がいるという事が分かった。

始めはアルバイトの人たちが社員の方に集められ、タイムカードを切ってからそれぞれの作業場へと向かった。初回の方は私だけであった。声をかけられ、初回の私は他の人たちとは別のラインの方へ行き、そこには小柄で優しいような顔つきをしたおじいさんが一人いた。おじいさんはしばらく私の隣で作業内容を事細かく説明してくれた。私の作業場は私以外に 3, 4 人日本人の社員の方がいたが、一切かかわることは無かった。

作業はベルトコンベアーで流れてくる段ボールの中に入っている商品、伝票を確認して、正しいサイズの袋に入れてテープで止めるだけのとても簡単な作業だった。

休憩は2回に分けてあった。1回目は45分休憩で昼ご飯を食べた。休憩室は女性専用と、共同スペースがあったが、私は近くの階の共同部屋で昼食をとった。丸テーブルが数個あるだけで、あとは硬めの長イスが並べられていた。30代から50代くらいの男性が多く休憩していた。丸テーブルに座っている男性は会話をしているようだったが、他の人たちは皆一人で座っていた。私の年代の女性は1人もいなかったこともあり、できるだけ人と距離をおいて一人でのおむすびとパンを食べて、スマートフォンをずっと操作していた。

その後、お手洗いへ行くために別のフロアに行くと外国人労働者がたくさんいた。トイレの入り口付近で中国人女性が固まって大きな声で話しており、避けながら中へ入った。

私が休憩していたのとは別の休憩室を見てみると大きなテーブルを囲んでどこの国の方か正確には分からなかったが10人弱の外国人労働者のグループが数カ所に分かれて談笑していた。イスラム系の人たち、中国人や韓国人、ベトナム人は見かけで分かった。同じ国同士の人たちが集団になって談話しているフロアに日本人の男性職員も数人おり、彼らは休憩終わりで作業場に行くようだった。

そして私は1で述べた状況に直面したのだ。エレベーター前で30代くらいの男性と50代くらいの男性2人がしていた会話だ。さっきまでお手洗いに居た中国人の女性の集団の方をちらちら見ながら言っていた。

私も作業場に戻る。休憩の時初めて外国人の労働者を見て、気になって作業場にもいないか見渡したが一人もおらず、すれ違うことも無かった。

作業に慣れると、同じ作業がとても退屈になってくるのでなかなか時間が過ぎない。大量に袋詰めをして、自分が何を入れたかほとんど記憶がない。ただ、これくらい自分の足で買いに行けばいいのと思う程どこにでも売られているシャーペン芯や消しゴムなどの文房具や駄菓子を包装する時は、ネット通販の裏側を見た感じがした。発送先の住所が書かれており、北海道、熊本県など全国に輸送されることが分かった。今後できるだけ通販サイトで買い物をするのは控えようと思った。

ひたすら同じ作業をして、2回目の休憩は移動時間込みで15分しかなかったのでお手洗いで済ませて作業場に戻った。誰とも会うことは無かった。座ってゆっくり休憩ができなかったので疲労がたまって、それからずっと早く終わらないかという事ばかり考えていた。

私の終了時間が着て初めに丁寧に教えてくれた親切なおじいちゃんが終わりを告げに来たときは、やっと終わった〜！と思ってすごく嬉しかった。

しかし、私の周りの社員らはまだ作業は続けているようだった。段ボールは途切れることなく流れていた。タイムカードを切って、更衣室で荷物を取り、集合がかかって朝と同じメンバーで送迎バスに乗る。行くときとは違ってもう二度と来ないだろうなと思うと気持ちが軽くなり、バスの暗さは相変わらず同じだったが気にならなかった。バスから降りて、誰とも話すことなくすぐに電車に乗って帰った。

4. 2回目の工場アルバイトの体験

以前のアルバイトで問題意識を持ち始め、今年の8月に問題意識を持った状態で再び工場アルバイトをしてみようと思い、以前とは別の派遣会社に登録して単発で食品製造工場で働いた。

2019年 8月21日水曜日 就労時間9時～18時

私は日雇いの派遣アルバイトとして宝塚市内にあるコンビニの麺を製造する工場に1日働いた。コンビニの麺製品を製造するライン工場だ。

私は三ノ宮駅に7時に集合だった。着いたら派遣会社の点呼係の若い男性社員の人がおり、名前を言うと、食品工場初めての人向けの注意点が書かれた用紙を渡され、「始まる前に目を通しておいて下さい。」と言われた。

その後私が一人できるところに、50代くらいの小柄で痩せた女性がそばに来た。目はぱっちり開いてはっきりとした口調で「学生さん？今日が初めて？」と笑顔で声をかけて来てくれて、おかげでその女性と仲良しの女性たちにも声をかけてもらった。みな笑顔だった。

久しぶりに出会った人同士が「あら～〇〇さんやん！久しぶり！当分見いひんかったから××さんと心配しててん！」「それがな、・・・でなあ～」というような会話、「今日はどこで働くん？」「私そこないだ行ったわ。今日△△工場やねん。」「化粧品の工場も楽しいけど、モロゾフの工場も楽しいよなあ。」というような会話でにぎわっていた。

みんな本当に大きな声でよくしゃべる人たちだった。点呼係のお兄さんが「通行の人の邪魔にならないように端っこに寄って、店の前には立たないで下さい！」と注意するほど騒がしかった。

集合場所は私とは違う工場に行く人たちも集まっていたので20人くらいその場に居たと思う。

送迎バスが少し遅れているという知らせがあり、さらにぎわめく。さっきもしゃべりかけて来てくれた人たちが「遅いなあ！こないだはもっと遅れて5分で着替えて走って作業場行ったわ。めっちゃ焦ったわ。」と教えてくれた。

周りのおばさん達はバスが遅れていることに不満を持っており、顔をしかめて「嫌やわ～」とばかり言っていた。一々反応する人たちだった。バスの遅延で作業開始時間に遅れそうになって、更衣室でバタつくのが相当嫌なようで、始まる前はゆっくりしたいというような話をずっとしていた。

バスが着て、再度点呼後、同じ工場に働くメンバー50代くらいの主婦の方5人と一緒に送迎の車で工場に向かう。運転手は50歳前後の男性の方で、にこにこした穏やかな人だった。

「運転手の〇〇です。今日はよろしくお願ひします。」とあいさつをし、私も「胡子です。宜しくお願ひします。」と言って乗車した。私は1番にバスに乗り、その後50代主婦の方々が「お願ひしまーす。」と言いながら乗車した。

バス内では、助手席に座った女性が運転手と話していた。他の人たちはたまに喋るくらいだった。バスの中で私はとてもリラックスしており、約1時間爆睡していた。

工場に到着後、受付の物腰の柔らかい50歳前後くらいの女性が初回の人を招集した。初回メンバーは他の派遣会社から来たアルバイトの高校2年生の女の子、大学生の男子4人、20代前半くらいのベトナム人男性1人と私だった。初回の人にはかなり丁寧に優しく対応して下さった。集まった人が全員初回であることと、高校生の女の子がいることで安心感があった。

制服に着替えた後、食堂で15分間の公衆衛生のビデオ視聴、15分程度衛生講習を受け、工場内を回りながら工場でのルール説明を受けた。ベトナム人の男性に対しては外国語表記の説明書を渡し、再確認する配慮をしていた。

10時過ぎから作業を開始した。制服の帽子には番号が描かれたシールを貼ることになっており、私は番号1であった。おそらく、この番号は1回目という意味だと思う。作業ラインのエリアへ行くと、日本人の男性社員の方が初めての作業場に誘導してくれた。

始めはパスタ容器の淵に付いたソースを綺麗にふき取る作業だった。「この作業、初めは酔って体調崩す人多いから、その時はすぐにそばにいる社員の人に言ってね。」と言われた。社員の方はアルバイト、パートの人と制服の色が違うため、見た目ですぐに分かるようになっていた。

そして、言われた箇所のラインで作業に入る。アルコールシートを両手に持ち、ひたすら容器をふく。かなり速いスピードで流れてくる容器を見ていると目が回りそうになる。慣れない手つきの私に、隣にいた日本人の女性社員の方が作業をしながらぼそっと「遅い。早くしてもらわないと次の人が困る。」と言った。目つきが怖くて、ドキッとした。はじめは隣にいるその女性社員の方が怖いと思ったが、ラインは止まることなく手を動かさなければならず、気にしている暇もなかったため、作業になれようと集中した。

11時過ぎ。私は作業を始めて1時間ほどしかたっていないが、社員の方に「君も休憩ね。」と言われたため、ライン工場とは別の階にある食堂へ向かった。

この工場では、生産するコンビニの麺類が半額で売られていたため、私はそれを買って食堂で食べることにした。アルバイト、パートの人たちは私と同じように安売りの麺を買っていたが、他の外国人の労働者は手作りのお弁当を持参していた。麺類が売られている冷蔵庫の横にも冷蔵庫があり、それは持参したお弁当を入れる用だった。ぎゅうぎゅうにお弁当袋が詰め込まれていた。

11時過ぎは昼時で、食堂は工場に一つしかなく大した広さもないため、かなり込み合っていた。食堂には2つ電子レンジがあった。持参したお弁当を温める人も多く、順番待ちをしていた。私の前にはアルバイトで来た30代くらいのふくよかな男性がパスタを二つ持っていた。私の方を向いて「君ははじめて？僕はいつも2つ食べるんだ。待たせてごめんね。」と笑って話しかけてくれた。そして、その男性は自分のパスタを温め終わって、私に電子レンジ温めの時間を教えてくれた。

席について食べ始めた時に、ベトナム人の 20 代の女性 4 人組が席を探してうろうろしていた。2 人ずつで分かれたら座れるようだったが、私が席を移動すれば 4 人で向かい合って座れる状況だった。私から「すみません。どうぞ。」といって席を譲ったところ、4 人ともが笑顔で「ありがとうございます！」と御礼を言って嬉しそうにお弁当を広げて楽しそうにご飯を食べ始めた。会話の内容は分からないが、にこにこしながら食事を楽しんでいる彼女たちを見て私はほっこりした。

私はご飯を食べ終わって周りを見渡してみると、男性は日本人も外国人も一人で黙々とご飯を食べて、スマートフォンを見ていた。外国人の男性がお弁当箱を持ってきていることに驚いて、ちらっとお弁当は何が入っているのか見てみると、タッパーに彩のよい野菜、お米、簡単ではあるが手のくわえられた料理が詰められていた。朝早くから出勤なのに自炊してお弁当を用意している彼らに感心した。他には、中国人の 40 代くらいの女性の 3 人組は 1 人が持って来ていたリンゴを剥いて、仲良く分けて食べているのが目に留まった。この食堂ではみんな食事休憩を楽しんでいるんだなあと考えた。もう少し、その場に居たかったが、席が空くのを待っている人がいたため私は食堂を出た。

他に休憩できる所はないか廊下を歩いていると、廊下に並べられた椅子に 20 人くらいの人々が座って仮眠をとっていた。多くは外国人の男性で日本人男性の社員も数名いた。そこにいる人たちはものすごく疲れている様子で、もっとゆっくりできる休憩場所があればいいのにと思いつつながら、彼らを横目に女子更衣室へと向かった。

真っ暗の女子更衣室には畳が 2 枚置いてあり、そこに 20 代くらいの中国人女性が 4 人横になって寝ていた。私のロッカーの場所にいくために彼女たちをまたがなくてはならなかったのが隙間を縫って歩いたが、びくりともせず爆睡していた。5 分ほどロッカーのそばにいたが、狭くて居心地も悪かったため、作業場に戻った。

11 時半ごろに作業場に戻ったが、私と一緒にのタイミングで休憩をとった人たちは 1 人も戻ってきていないようだった。後から知ったのだが、休憩時間は 1 時間で私が早く作業場に戻り過ぎていたのだ。

私は何の作業をすればよいか分からず突っ立っていると、ライン作業の総監督らしき男性が私を手招きした。作業服に書かれた名前を見ると日系ブラジル人であることが分かった。「あなたこの作業ね。」と言われたのは麵容器にわさびの袋を入れる作業だった。袋の表裏に気をつけること以外注意点は無く、とても楽な作業だった。それが終わるとラインの真ん中の方に連れていかれ、「あなた次卵ね。」と言われた。半分にカットされたゆで卵を容器の定位置に入れる作業だ。

初回の私がどこにいて何の作業をしているのか把握し、声をかけに来てくれたので、安心して作業を進めることができた。私以外の作業員の進捗度合いやミス等も把握し、時には注意もするが笑いをとって場を和ませ、雰囲気づくりをしていた。

私が卵を入れる作業の前では、紅ショウガを容器に入れる作業が行われていた。40 代くらいの女性と私と同年くらいの女の子が担当していた。二人ともパートで数回この工場

で働いたことがあるようで「この作業は初めてやわ。難しいわあ。」「難しいですね。」と仲良さげに話していた。作業を続けていると40代女性の方の入れる紅ショウガの量が多くなっているように見えた。すると総監督の男性が「ちょっと量が多い。」「さっき量見て来てって言ったよね。」と声をかけに来た。私と同年くらいの女の子が「私一人でやっとくんで量りで再確認してきて下さい。」と言い、その女性は量を別の場所にある量りで確認し「ありがとうございます。」と言って戻ってきた。

女性の入れる紅ショウガの量が多かったミス、総監督は自分が初めに“量見て来て”が言葉足らずだったことを反省していたのか「日本語って難し〜。」と何度も言いながらまた別の作業場へと向かった。しばらくしてまた女性の作業を見に来て、「そうそう。」と声をかけた。その女性は「慣れてきたわあ〜。」と少し声を弾め、総監督もにこやかだった。

1時間弱経過して、再び現場の総監督が私に声をかけに来て「あなた次こっち。」と言って、私は隣のレーンに配属された。そのレーンでは前の方が容器に入れたキムチやチャーシュー、サラダチキン等を綺麗に並べて整える作業だった。具材が変わるごとにレーンのアルコール消毒とゴム手袋の交換をするのだが、その都度隣の日系ブラジル人の女性が「次も抑えるね。」と声をかけてくれた。これは具材を抑えて均す作業のことだ。

その女性はその隣や近くにいる女性と、私の前にいる中国人の女性2人も作業中外国語で会話をしていたが、私に対してだけ日本語で話しかけてくれた。私が作業に遅れると初めの方は日本語で「遅い。」ときつめに言われたのでびっくりしたが、その後も「手袋換えて。」「また同じ作業ね。」など、気にかけてくれてくれたのでありがたいなと思いながら落ち着いて作業が進められた。

3時間黙々と同じような工程を立ちっぱなしで行っていたので、首、足の裏と腰、手首が痛み始めた。作業ラインは製造の商品が変わる時だけ材料の入れ替えと掃除をするために、その場を離れたり、態勢を変えることができるが、その時以外は代わりの方が来ない限り態勢を変えることは不可能だ。

残り2時間の時点で、私はじっとしているのが辛くなったため、交換用のゴム手袋はライン場に置いてあったのだが取れて少し遠めのところまで急いで行ってゴム手袋を換えることにした。ついでにそばにあるウォータークーラーで水分補給をするなどして休憩をとった。他の作業員の人たちは水分もろくに摂らずずっと働きっぱなしで、よくこの作業が続けられるなと思った。

最後はそうめん容器にわさび袋を入れるとても簡単な作業だった。前、横にはイラン人の若い女性がいた。彼女たちは表情を変えることなく黙って作業を行っておりとても静かだった。作業中、ラインの調子が悪かったのか、ラインがストップした時があった。私はその間休憩できる！と思って嬉しかったのだが、ライン作業の最後の工程を担当する外国人の女性2、3人が「なんで止まる止まるねん！！」と叫んでいた。私はそんなに怒らなくても、、と思ったが、作業ラインはその日に決められた量の製品を製造し終わらないと、仕事を終わることができないことを思うと、早く終わらせてくれて苛立つ気持ちも理解できた。

6時ちょうどに総監督がまた私のところに来て「終わり！」と声をかけてくれた。私は帰ることができたが作業ラインはまだ動いており、具材の入った容器が大量に積み重なっていた。

5. 考察 2回の経験の比較

1回目も2回目も外国人と日本人が同じ空間で働いているというところでは共通していたが、2回目の工場では、1回目に感じたような外国人と日本人の間の距離感を感じることがなかったのが一番印象に残っている。そこで、2017年度と今回の経験でなぜ印象が違ったのかを考えるために、以下いくつかの項目に分けて比較をする。

5-1 派遣会社での対応

1回目 登録説明会終了後、面接。受付の横に登録説明のビデオを見る部屋があった。ビデオ視聴が終わると、登録用紙を記入し終わったら受付に来るよう言われた。

面接は立って行われた。私は出勤可能な日だけを社員の方に教えると、すぐに紹介できる案件があると言われた。その案件が今回の物流センターでのピッキング作業だった。他にどんな案件があるか色々紹介してくれるわけでもなく、選択肢はなかった。迷う余地もなかったなので、その案件を承諾すると、必要なものの説明をされて、証明写真を撮った。私の名前とスタッフ番号が書かれたホワイトボードが用意され、それを持って私の携帯で撮影された。撮影は私の携帯で行ったので後で会社へ送信するよう言われ、面接はあっという間に終了した。面接は10分もかからなかった。

受付ではもう一人別の担当の人が面接を行っているほか、給与の手渡し作業が行われていた。受付の後ろが社員の方の作業場で電話対応に追われ、かなり忙しそうにしていた。

2回目 登録説明会終了後、面接。登録用紙を書き終わったら手元にあるベルを押してくださいと言われた。ベルを押すと正面の部屋から社員の方が出てきて一人ひとり、丁寧に記入漏れがないか確認し、面接までお待ちくださいと言われ、みんなその場で面接待ちをしていた。夏休み期間中だったこともあり、大学生が8人くらいと多く、他フリーターの男性が数名と主婦の方一人だった。

待っているところのすぐ横に簡易の仕切りで囲まれた面接室が二つあった。一人当たりの面接時間は長く、私の前に呼ばれた30代くらいのフリーター男性は15分以上面談の時間をとっていた。仕事経験や、自分の性格、希望の勤務地、時間帯など話してスタッフが何件か案件を紹介して、男性はその中から選んでいるようだった。

その後、私が呼ばれた。今までのアルバイト経験、希望の職種、勤務地、働く期間など聞かれた。その後スタッフの方に、この派遣会社で電話対応のアルバイトをしてくれないかと提案されたが、単発で働きたかったので断った。面接する机にいくつか短期、単発アルバイトの「初心者大歓迎、簡単、軽作業」等が書かれた広告が貼られているのが目に留まったの

で、私からこの仕事はどうか聞いてみると、いいんですか?!と少し驚いた感じの反応だったが、空きがあるから大丈夫だと言われたので、お願いした。化粧品、食品工場などあり、家から一番近い今回の工場アルバイトを選んだ。希望日程 8月 21 日から 29 日まで毎日というシフト希望を出した後、デジタルカメラで証明写真を撮ってもらって、15 分程度の面接が終わった。

最後「ありがとうございました。宜しくお願いします。もし、1 日目で自分に仕事が合わないと思ったらお昼に会社まで連絡してくださいね。」と丁寧な挨拶でお別れした。

1 回目と 2 回目の違いは二つある。一つ目は面談内容である。1 回目は人柄などは重視せず、人手不足の案件を一方向的に紹介し、承諾を得られると終了という流れ作業だったが、2 回目はその人に合う仕事をきちんと見極めて仕事紹介をする形をとっており、マッチングに時間をかけていた。軽い雑談などもしてリラックスした雰囲気だった。

二つ目は、給料手渡しの仕方だ。1 回目は受付で給与受け取りを伝えると、スタッフがお金をコイントレーに入れて持ってきて、それを自分で受け取って終わり。2 回目の会社は給料手渡し専用の部屋があり、数人が集まる。集まった人同士も顔見知りでおしゃべりをしている。一人ずつスタッフに呼ばれ、封筒に入れられた給料を手渡しで受け取るようになっていく。

1 回目よりも 2 回目の方が派遣会社とアルバイト・パートの人の対面時間が長く、コミュニケーションが慎重に行われている。それゆえ、スタッフとアルバイト・パートの関係、アルバイト・パート同士の繋がりが強いという事が明らかである。

5 - 2 現場での違い

3、4 で詳しく述べた現場の違いを①～④のように概要でまとめて整理する。

① 集合場所

1 回目 駅に集合。会話はなく、とても静か。

2 回目 ある店の前の歩道で集合。集まった人同士で会話があり、とても賑やか。

② 移動手段

1 回目 大きめの送迎バス。バス停まで列になって移動。無言で乗車。

2 回目 送迎のワンボックスカー。集合場所にお出迎え。運転手と顔合わせをして乗車。

③ 車中

1 回目 誰もしゃべらず、静か。

2 回目 運転手との会話あり。

④ 工場の印象

1 回目 巨大な建物で比較的新しい。中の受付、更衣室、事務室も清潔で掃除が行き届いている。全体的に無機質な空間という印象。

2 回目 1 回目ほど大きくなく、中くらいの建物。木製の汚い下駄箱、更衣室に置かれ

た作業用の靴 7 割は麺がこびりついたまま放置され、更衣室には塵がたまっている。掃除が行き届いていない。雑然とした空間。

⑤ 受付

1 回目 名簿をチェックした人からそのまま更衣室へ向かう。

2 回目 初回の人だけ集められる。初回のメンバーに外国人もいた。

⑥ 作業を教えてくれる人

1 回目 1 人。60 代後半日本人男性。とても優しい。

2 回目 複数人。工場の社員。同じレーンのパートの女性（中国人、日系ブラジル人）

1 回目と特に違いを感じるのが総監督である日系ブラジル人男性社員の存在。

⑦ 作業工程

1 回目 全部 1 人で完結するため自分の作業が滞っても直接他の作業員に失敗が影響しない。伝票通りに正しく品物を袋に入れるだけ。

2 回目 細かく作業が分かれており、同じラインに居る人みんなで一つの製品を作る。失敗が他の作業員に直接影響するため緊張感がある。例；冷麺 麺を量って入れる 2~3 人、具をのせるよう容器を麺上に乗せる 2~3 人、肉を入れる 2 人、肉を整える 1 人、もやしを入れる 1 人、錦糸卵を入れる 1 人、キュウリを入れる 1 人、蓋をする 2 人。

⑧ 外国人労働者の雰囲気

1 回目 5 人以上の集団で固まっている。

2 回目 女性 2~3 人少数グループ 男性単独行動。

⑨ 外国人労働者に対する日本人労働者の対応

1 回目 休憩時、外国人を不審視している。

2 回目 工作中、日本人と同様に指示を出す。

⑩ 日本人労働者の印象

1 回目 アルバイト、パートの女性全員とてもおとなしい。社員の人も必要最低限の会話のみでほとんど声を発しない。無表情。

2 回目 アルバイト、パート男女ともよくしゃべる。社交的な方が多い。リアクション、笑顔がある。

⑪ 休憩のとり方

1 回目 タイムカードできちんと管理されている。

2 回目 交代制。作業の進み具合に左右される。

このような比較から明らかになった大きな差は、1 回目は労働力が機械と同様の扱いをされているのに対して、2 回目は労働者が人間としての扱いをされているということである。また、②、⑤、⑥から迎える側、伝える側の意識が高く、意思疎通が丁寧に行われていることが明らかである。

5-3 私の立場と周りの反応

1回目 大学2回生 大学1回生から続けていた阪急百貨店の惣菜売り場で接客・販売を8か月、SOGOのケーキ屋で接客・販売を短期で3か月经験済み。接客以外のアルバイトも経験したいと思い、派遣アルバイトで仕事を探した。物流工場アルバイトをしようと、友人も家族も止めようとした。友人は「そんなとこ絶対やばいやつしかおらんやん。」母親は最後まで否定的だったが、私は絶対一度経験したかったので辞めなかった。アルバイトの内容を話すと友人、家族に周りにどんな人がいたか聞かれ、やっぱりね、他にいい仕事あるのに敢えてそんな気持ちが荒むようなきついことしなくてもいいのに、という反応だった。

私が工場アルバイトをすることに対して家族、友人が反対するのは、工場での仕事内容が重労働できついからというよりは、工場で働く人達は柄が悪く、敢えてその人たちと同じところで働こうとしなくてもいいのではないかという、工場で働く人への差別的な思いがあったからだ。私がアルバイトを諦めることがなかったのは、そこまで差別する理由が分からなかったからだ。工場で働くという事は私にとっても、今までのアルバイトとは違う特別な体験になると思った。世間では劣悪と思われている仕事は実際どんなものなのか、私にもできるか、興味半分、自分試し半分の気持ちでアルバイトに向かった。

2回目 大学4回生 1回目の工場バイトの後、私はお客様との会話のある接客の方が好きだと確信し、薬局で接客と喫茶店で接客・調理の掛け持ちでアルバイトを始めた。2月から8月までは就職活動のため、一度アルバイトを辞めた。8月に就職活動が終わり、短期でアルバイトをしようと思った。1回目の単発工場アルバイトを思い返すと二度とやりたくないと思ったが、卒業論文を進める上で参考になりそうな工場アルバイトをもう一回やってみようと思い、登録会へと足を運んだ。

家族に話すとあきれたという反応だった。一言、「気をつけてね。」と言われた。就職活動が終わったことの報告をするため、お世話になった喫茶店の店長のところへ行ったとき、短期のアルバイトで明日から食品工場で働くことなども話すと、びっくりして笑われた。そんなところで働かなくてもいいのに、止めといたら？と反対された。そのアルバイトが終わったら数か月でもいいからまた喫茶店で働いていいと言ってもらえたので、9月分のシフトを提出させてもらった。

私は、家族や友人に1回目の時も反対され、仕事が終わってから職場の様子やしんどかったことを話していたため、家族があきれる理由も理解でき、自分でも懲りない人だと思った。1回目やしんどかったという記憶はあるが、乗り切ることができたから大丈夫という自信と、工場も作業内容も違うから1回目よりはましかもしれないと多少の期待をもって、アルバイトに向かった。ここまで前向きにアルバイトに向かうことができたのは、就職活動も終わって、9月からは喫茶店のアルバイトが再開できることも分かっており、晴れやかな気分だったからかもしれない。

9月、喫茶店で再び働き始めてから工場アルバイトは1日で辞めてしまったという、まあさうだろうね、私に単純ライン作業は絶対に向いていないと分かり切った感じで言われた。友人には終わってから話したが、変なことをすると笑われた。また、1回目とは違って作業場の状況を話すと面白がっていた。

1回目と2回目での違いは三つある。一つ目は、2回目の時の方が接客経験をつんでおり、周りにいる人たちをよく観察し、意識的に自分から声をかけたり、笑顔で対応することが身についていたことである。

二つ目は、友人や家族はまたやったのかという反応で、特に反対はしなかったことだ。

三つ目は、大学3年生からの薬局と喫茶店のアルバイトの経験は以前の百貨店のアルバイトとは違い、色んな年齢層、所得層、外国人と接する機会が多く、多様な人に対応する経験をしているということだ。私自身が、どんな人にも親切に接客したいという気持ちで働いており、その中でも外国人のお客様を意識していた。他人の外国人に対する反応にも注目するようになった。

注目する機会が多かった場合は喫茶店だ。

1回目の経験以降、外国語をあまり習得していない日本人と外国人との関係が気になっており、来店するお客様の中でも外国人労働者と日本人労働者が一緒にいるグループが来たときに彼らがどのようにうまく関係を築いているのか注目するようになった。

喫茶店は、朝8時からのモーニングセットを450円で提供している。近くで建設工事が行われていたこともあり、土木作業員の方が毎日数組は来店される。その時に外国人作業員が日本人の作業員と一緒に会話をしながら楽しそうに朝ごはんを食べている光景が印象的で、彼らが仲良くしていることが嬉しいと思うようになった。日本人のほうから外国人に積極的に話しかけていたので、1回目の体験で感じたような距離感は全くなかった。1回目の経験がなかったら彼らの人間関係に関心を寄せて、うれしいという感情は湧かなかったと思う。

このように、1回目の経験があるからこそ2回目の時は外国人と日本人の関係を意識してみるようになっていたと思う。この意識の違いが、アルバイト後に抱いた感情にも変化を及ぼしたのだと考える。

1回目のアルバイトの後は、格差社会だ、勉強は大切だという感情をもった。

2回目のアルバイトの後は、決まった動きを同じ調子で繰り返していくと考えることを止めてしまうことや、ひどい疲れを感じると、頭がぼーっとし、私は何をしているのだろうか、なぜこうして工場の中に身をおいているのだろうかという感情をもった。こんな仕事よく続けられるなとも思った。外国人労働者と同じ単純作業をし、この感覚を味わったため、外国人労働者の体力と気力に感心するとともに、日本に来てまでこんな思いをしていることを考えると、とても悲しい気持ちになった。また、コンビニの面を見るたびに工場と一緒に働いた外国人たちの顔が浮かぶようになった。工場で働いた経験により、このような感情を

抱くことができるようになり、2回の経験はとても貴重で、有り難いと感じている。

1回目よりも2回目のほうが、日本で単純労働をする外国人労働者の苦しみの理解、その苦しみを理解できるようになりたいという意識が高まったと考える。

6. 結論

5でいくつかの違いを述べたが、1回目よりも2回目の方が働きやすい職場であったという事は明らかである。肉体的な疲労感はあまり変わらないが、精神的な疲労感は圧倒的に2回目のほうが軽かった。最も異なると考えたことは、2回目の方が作業中に周りの人を意識する場面が多く、他人の親切心や人間らしさを見て感じる事ができたことだ。

このことは外国人労働者と日本人労働者が同じ職場で居心地よく働くことができる環境とはどのような環境か考える上で重要になると考える。

2回目の工場では、日系ブラジル人の総監督が初回である私を気にかけてくれたこともあり、周りの人も同様に私のことを気にかけて声をかけてくれたのだと思う。その総監督は日本人に対しては日本語で、外国人に対しては外国語でコミュニケーションをとり、日本人と外国人のつなぎの役割も果たしていたため、かなり安心して働くことができた。次にどこに動いて、何をすればいいのかなど、分からないことを誰に聞けばよいのか明確であると、たとえ周りが日本語でのコミュニケーションが難しい外国人であっても動揺せずに作業に取り掛かることができるということが分かった。

2回目の作業工程は1回目とは異なり、1つのレーンで複数人が連携して行わなければならないため、できるだけ自分のせいでレーンが止まってしまうように、注意を払い、人に気を遣いながらの作業であった。レーンが変われば多少作業内容も横並びになる人も変わる。初めての工程であれば、すぐに横の人に教えてもらう必要もある。1回目の作業と同様に、機械的な動きの作業ではあるが多少の人とのやりとりがあることで、自分の存在意義や人間らしさを感じながら働くことができた。

1回目のように誰にも迷惑をかけずにすむ仕事は楽だが、途中で息が詰まり退屈になる。しかし、2回目のように仕事をしながら人と繋がりを持ち、多少のストレスを感じながらも誰かに頼ることや、人に同情する気持ちをもつことで精神的に正常を保つことができ、働きやすくなるという事が分かった。

また、私自身の経験で外国人に対する捉え方が変わった点も、職場での働きやすさに影響していると考えられる。1回目は外国人と共に働くことに抵抗があったが、2回目はその抵抗は無くなり、外国人を同じ一個人の労働者として捉え、接することができるようになった。

そして、2回の工場アルバイトの後に、接客のアルバイトをしながら気づいたことがある。作業中は基本的に無言である一定の機械的な動きを繰り返す作業だからこそ、ほんの少しの人の優しさにほっとしたり、嬉しくなったり、表情の動きに敏感になれるということだ。逃げ出したくなる程の疲労感の中でも、これ以上苦しまず、時間が過ぎていくのを耐え抜いていくために、怒りや愚痴ではなく人の温かい心を見つけ、そこで働く同志として、自ら居

心地の良さを作っていくことが可能であることが分かった。

このようなことから、外国人の受け入れ側として、共に働く人たちが、外国人の同じ立場で働く経験や、多様な人とコミュニケーションをとる経験を持っていることが重要であるといえる。

7. 謝辞

本論文の作成にあたり、最後まで温かく見守り、ご指導、ご助言をしてくださった指導教官である牲川先生をはじめ、いつも多くの意見や感想をくださった牲川ゼミの皆様から感謝致します。

8. 引用文献

Carol,G 上田礼子・他訳 (2003)『保健医療職のための質的研究入門』 p110-p111

医学書院

鎌田慧 (1983)『自動車絶望工場』講談社文庫

Siomone, W 田辺保訳 (2014)『工場日記』筑摩書房

横田増生 (2019)『潜入ルポ amazon 帝国』小学館

池田佳代・他 (2018)「外国人労働者の環境に関する一考察 —ベトナム人看護師・介護福祉士候補者を対象として—」『環太平洋大学研究紀要』 12:19-28

武内博子 (2018)「外国人介護福祉士が捉えたいまういかなかったコミュニケーションの要因」『日本語研究』 38:59-74

法務省 (2019)『出入国在留管理基本計画』

<<http://www.moj.go.jp/content/001292994.pdf>> (2019年11月28日アクセス)

教職の魅力とは

総合政策学部 総合政策学科

尾崎亮太

目次

- 1 概要
- 2 自分と教師という仕事の関係性
- 3 教師に対する一般的なイメージ
- 4 教師の問題の要因
- 5 教師の実態
- 6 教師の仕事をより魅力的にするために
- 7 自分にとって魅力的な教師とは
- 8 最後に

引用文献

1. 概要

私の夢は、教師になることだ。ずっと憧れていた仕事だが、世間では教師という仕事にいいイメージを持っていない人は多いように感じられる。その背景には、マスメディアによる教師の不祥事の報道や、仕事量が多いブラックな仕事というイメージがあるなどのいくつかの理由が挙げられる。さらに、教師は休みが少ない、サービス残業が多い、毎日の授業準備が忙しい、保護者対応に頭を抱える、土日の部活動の引率により休日がないなど、世間のイメージを裏付けるかのような現場の声もよく耳にする。それらの声を聞いた友達は、私の夢を応援する傍らで心配する人もいるくらいだ。

一方で、私の中での教師という仕事のイメージはそれらとは大きく異なる。それは、私の家庭環境が由来している。私の家庭は母と年の離れた姉が小学校の教師をしていることもあり、父を除く家族全員が現役教師あるいは教師を目指す人で構成されたいわゆる教師一家だ。私は、その環境下で幼いころから現役教師の母の仕事ぶりを見てきたが、世間が言うようなブラックな仕事だとは到底思えない。むしろ、教師はとても楽しくてやりがいのある仕事というイメージが大きい。

ここで私の中で大きな矛盾が生まれた。なぜ世間は教師という仕事にそこまで悪評をつけるのか。教師という仕事の実態はどのようなものなのか。母が教師という仕事を楽しんでいるように見えるのはなぜなのか。教師という仕事のどこにその魅力が潜んでいるのか。本論文では、これらの点に焦点を当て研究していきたい。

2. 自分と教師という仕事の関係性

前述した通り、私は小学生の時に教師という仕事に憧れて以来、教師になるのが1つの夢だった。現在も教師になるため大学で教職課程を履修している最中だ。本論文を書くにあたって、なぜ教師になりたいのかと自分に問いただした結果、大きな理由として母の存在があった。母は大学を卒業して以来、昨年退職するまで37年間教師生活を続けていたベテラン教師だ。現在は、退職後も非常勤教員として学校現場の仕事に携わっている。そんな母は、いつも食事の際に学校で起きた出来事や、その日に起こったハプニングを楽しそうに話していた。母は単純に教師という仕事を自身が楽しんでいるというイメージだった。その背中を見てきた私には、学校の先生はとても楽しい仕事という印象しかなかった。

しかし、自分も成長するとともに教師に関する様々な耳の痛いニュースを聞くよう

になり、一時期は教師以外の道も考えたほどだった。さらに、高校進学、大学進学と人生のターニングポイントとなりうるタイミングで教師になるかを真剣に考えた。その上で現在一般企業ではなく教師になるという道を決めたのは、やはり教師という仕事に魅力を感じているからだ。

3. 教師に対する一般的なイメージ

この章では、私の友人へのインタビューを中心に世間からの教師に対するイメージを聞き、それらに対する考察をしていく。今回対話を申し込んだ2人とも幼馴染で、普段から仲の良い友人なので対話もリラックスして臨むことができた。

事例1－教職を履修しているが、教師にならず一般就職するNさん

Nは小学校から大学まで同じ学校で過ごしてきた幼馴染で、勉強は要領よくこなすタイプだった。人当たりがよく、友達も多く、中学と高校では吹奏楽部に所属し、それぞれ部長、副部長を任されるような人望のある性格だった。彼女はとても教師に向いている性格だと思っていたが、教職の道を止めたと聞いて、なぜ一般企業への就職を選んだのか、また現在の彼女の教師に対するイメージが気になり、今回のインタビューを申し込んだ。

私「なんで教師じゃなくて一般就職を選んだん？」

N「大学に入って教師を目指して勉強していくうちに、自分の性格が教師に向いてないんじゃないかと考えたのがきっかけかな。」

私「でも、ずっと教師になりたかったんよな？」

N「教師は将来の仕事としてやりたいと思っていた職業やけど、教師に求められる素質と自分が離反してるんじゃないかと思ったときに、1つの職業に絞るんじゃなくて、別の職種でも自分の性格や生活のスタイルに合った仕事があるのなら探したいと思って一般企業での就活に切り替えたな。」

私「気になったんやけど、Nは教師に向いてると思うから、教師に求められる素質を持ってると思うんやけど、具体的にはなにがその素質に離反してるって感じたん？」

N「勉強していくうちについて言ったけど、具体的には教育法の授業を受けた時に、自分の性格が向いてないって感じたな。」

私「教育法の授業でなんか衝撃的なことがあったん？」

N「衝撃的なことってのはなかったけど、例えば授業作りでも生徒のことを考えてクラスによって授業を作り分けたり、一つの授業の指導案でも細かく書いて準備しなあかんかったり、子どもが好き、物事を教えることが好き、面倒見がいいってだけじゃ務まらへんなって思ったな。私、雑な性格も持ち合わせてるから、自分がそこまで行き届いた教育をできる自信がなくなったって感じかな。」

私「なるほどね、でも免許さえ取っとけばまた教師になりたいと思ったら、目指せるもんな。」

N「そう、最初に就きたいと思った職業やから未練がないわけじゃないから免許は大学のうちに取得するよ。」

私「じゃあ最後に、そんなNが思う教師に対するイメージってなに？」

N「他人のことを中心に考えられて、生徒一人ひとりに目を向けながら、その将来への指標を示して導けるだけの信頼感がみえる人って感じかなあ。だからこそ、私には荷が重いというかまだ教師は難しいと思ったな。人から尊敬される人にならなあかんからな。」

私「時間作ってくれてありがとう。」

インタビューを終えて、やはりNは人一倍責任感が強いと感じた。Nの考える教師に求められる素質は納得できたし、教師のイメージもその通りだと思った。Nが教師にマイナスイメージが出来て止めたわけではないことがわかって、少し安心した。

また、Nは教育系の達成感をあまり知らないのではないかと考察した。言い換えると、教師の楽しさをあまり知らないのではないかと思った。家庭教師、塾講師、学童保育といった教育系のバイトをしていた私と違って、Nは飲食店でのバイトをずっとしていた。そこに大きな差があったのではないかと考える。大学時代にバイトすることで教師という仕事が身近にあった私とは違い、Nは教師のイメージをすることが難しかったのではないかと考える。

事例2－教師になる自分を心配してくれていたYさん

Yは小学校と中学校で同じサッカーチームに所属していた幼馴染で、高校からはそれぞれ違う学校に進んだが、今でもよく一緒にフットサルをしたりするほどの親友で

あり、一番の相談相手だ。Yは一般企業への就職が決まっており、その一方で教師の仕事あまりよく思っていない人間の一人だ。私が小学校のころから言っていたので教師になりたいことを知っていて、教師になることをよく心配してくる。私の夢と知りながら心配してくるのはYぐらいで、同時にYぐらい仲が良いからこそ心配してくれているのかもしれない。そこで、Yは教師にどのようなイメージを持っているのか気になる、今回のインタビューを申し込んだ。

私「なんで僕が教師になる時、もっといい仕事あるやろって心配してくれたん？」

Y「だって教師ってブラックって聞くし、中学やったら部活の顧問とかもあってめっちゃ大変やろ。土日とかないんじゃないん？」

私「一応、部活は土日のどちらかは休みって方針になってきたらしいけど、現場が実際にどうやって部活を運営させてるかわからんから、もしかしたら土日なしでめちゃくちゃ忙しいかもしれへんな。」

Y「やっぱそうやろ？新任やし、やらなあかんこととかおぼえなあかんことばかりやのに大変そうやん。それだけ忙しい可能性があるのに、教師になろうとは思わへんな。」

私「やっぱり、その忙しさがネックに思えるよな。実際にそうやと思うし、好きでやりたいと思わな出来ひんよな。」

Y「それだけじゃなくて、いじめ問題やったり保護者との付き合いやったり、いろんな仕事が増えちゃってパンクしてまいそう。対人関係ってデリケートやから気も使うし。」

私「そこは避けては通られへん道やろな。実際に、それらの対人関係の問題で心の病気になって辞める教師の数も少なくないしな。」

Y「そうそう。教師って仕事が悪い仕事とかじゃなくて、あんまりいい噂を聞かへんし、特別に給料が高いわけじゃないから、俺にとってはマイナスのイメージがあるんかなあ。おざには向いてると思うし、昔からなりたいて言ってるの知ってるけど、もっと他の仕事があるんじゃないんかなとも思うな。」

Yは教師を目指していない人の意見として、私が想像していた答えのほとんどを実際に口にしたり。やはり、世間の大半は教師という仕事についてあまりいい印象を持っていないことが改めて確認できた。あくまでマスメディアによる批評を鵜呑みにしたり、

浅い知識で語っているのだろうが教師という仕事が悪く言われるのは少し悔しかった。

しかし、Yの立場になり、私の夢と知った上でのことと考えると、私が想像している以上に世間からのイメージは悪いことがうかがえる。私は、幼いころから教師が楽しい仕事だと思っていたので、色眼鏡で見えてしまっているのかもしれないと思った。それと同時に、やはり対話の最後にも出てきた対人関係を億劫に考える人が多いということも感じた。いじめ問題などマスメディアが取り上げるニュースの影響力は大きいと実感した。

4. 教師の問題の要因

先の二つのインタビューからは、一般的に教師の仕事にはいいイメージがもたれていないことが確認できた。実は教育学の文献でも、同様のことが指摘されている。大内(2018)は学校現場の現状、もっと言えば教育の現状はとても疲労していると指摘している。大内と佐藤と斎藤との鼎談で大内は教師の負担が増えた多忙化する教育現場のことを、「悪夢のサイクル」とまで表現している(大内,2018,p52)。このサイクルという表現は、プラスに転じる可能性が低い負のスパイラルに陥っている教師の現状を表現しているかのように感じられる。具体的には、教育予算の運用の問題が1つとして挙げられている(大内,2018,p50-54)。世間からのバッシングを受け続け改革の方向性を見失っている教育現場は、それでも現状を打破するために教育改革を続けようとしている。それを成功させるには、相応の予算と人員が必要になってくるのにも関わらず、国は教育に投入する予算を減らしているという現状だ。これでは、現在の教育レベルを維持するのも無理があるのではと懸念される。このような予算の増加も見込めない現状で、教師の仕事には改革のための研修の増加や、改革メニューたるものが増加した。このような予算や人員の増加なしの無鉄砲ともいえる改革に教育現場は疲弊している。

NPO 法人日本標準教育研究所が行った「多忙」に関するアンケートによると多忙と「強く思う」人は42.6%、「思う」人は48.8%という結果で合計9割を超える教師が多忙だと感じている実態が明らかになった(NPO 法人日本標準教育研究所,2014,p34-35)。このように教師が多忙化していると感じている要因の一つに、単純な仕事量の増加によるものがある。20年前との比較では、「総合的な学習の時間」・「外国語活動」の教科化、増加するいじめへの対応、生徒への対応以外の雑務の増加などが挙げられる。これ

らの仕事量の増加への対応により、教師の多くは過労死ラインを超える仕事を強いられている。先のアンケートによれば、所定外労働時間は1時間59分という結果で朝早くから、夜遅くまで学校に残って仕事をする教師が多くいることがわかる。驚くべきことに、これは勤務終了時刻から学校を出るまでの時間であり、平日帰宅後に自宅でのくらしい仕事をするかという質問には平均1時間25分という結果であった。これだけでも教師の現場は多忙と断定してもいいような結果だ。さらに、中学校や高校の教師ともあればこれにプラスで担当の部活動の指導をしなくてはならない。それらとは別に休日出勤して仕事をする教師も7割弱もいる。

これらの多忙は同時に生徒と向き合う時間を減らしていることになる。アンケート結果を見ると、「所定外労働の内訳」と「自宅での仕事の内訳」の上位5つの中に教材研究や授業準備、校務分掌に関わる業務以外に、資料や報告書の作成という直接の教育活動と言えないものが混ざっていた。これらは例えば行政からの報告書やアンケート類の提出であり、教員の事務量を増大させている大きな理由となっている。NPO法人日本標準教育研究所（2014）は、「削除」のないままに「新規導入」が次々と重ねられていくことで「多忙」の増幅が起こっていると教育現場における多忙を分析している。新しい取り組みや仕事が入れば、従来の取り組みや仕事を削除しない限り仕事は増えていくばかりで、仕事の増幅のスパイラルに入っていると言える。さらに、これらの多忙のしわ寄せは教師を疲弊させ、仕事に対する意欲を失わせる可能性を秘めており、最終的には生徒と向き合う時間を奪っている。これでは教師という仕事において一番大事ともいえる生徒をないがしろにしている。

さらに、教師がブラックといわれる大きな原因の一つは残業時間の多さだ。中学教師なら6割以上が過労死ラインを超えているという噂はよく耳にするが、その残業時間自体も十分驚くべき実態なのだが、本当に驚くのはその給与システムだ。教師の残業代は「教職調整額」といい、働いた時間に応じてもらうのではなく、金額が毎月一律という特殊なシステムになっている。極端に言うと、残業時間が0であろうと100時間であろうと定額が支払われるということだ。その定額というのは月給に対して4%という雀の涙ほどのものだ。これは月給30万円で計算すると残業代が約12000円という計算になる。これを過労死ライン（時間外労働80時間）で割ると一時間あたり150円という計算になる。つまり6割以上の中学教師は時給数百円で働いているということになる。（佐藤,2018）は、この額を聞いて、「そんなにもらえるんだ。うれしい！」という

人は、おそらく皆無だろう。多くの人は、その安さに絶句すると思いますと分析している。これは本当にその通りで、私も残業代の安さと給与システムの理不尽さに驚愕した。国はこの状況を把握しながらも財政状況が悪いせいで教員の給料を上げられない状況が続いているのだ。

5. 教師の実態

この章では、一般的なイメージや先の文献が示すような、忙しすぎるといった教師像とは異なる側面を、実際に現場で働いていた母と、高校三年の時の担任との対話をもとに現場の様子から考察していきたい。

5-1 小学校教師の母

母は大学卒業から昨年退職するまでの37年間教師を続けてきた。現在も非常勤講師として新人教育などを担当しており、今も現場で働いている。母はずっと同じ市内の学校での勤務を続けており、市内の5校で勤めた経験がある。

私「いきなりやけど、教師という仕事を長年続けてきた感想は？」

母「そうやなあ、一言でいえばとても楽しかったよ。」

私「やっぱり、お母さんは楽しんでたよなあ。近くで見ててそう思ってたもん。逆に大変なことはどんなことがあった？」

母「大変なことなあ・・・。」

母はしばらく沈黙して深く悩んでいた。

私「え、なかったん？なんか仕事の量が割に合わへんとかよく聞くけど、どうなん？」

母「それは感じなかったけど・・・。仕事にきっちりとした終わらないってことは大変ってことに入るかなあ。」

そう言った母は、大変ということ認識していなさそうだった。

私「なるほどな。仕事がありすぎて終わりが無いってこと？」

母「それもあるけど、いくらでも突き詰められるっていう意味の方が大きいかな。」

私「授業の作り方とか？」

母「そうそう、子供がどうやったら理解しやすいかってのは答えがないから、いくらでも工夫できるから、自分なりの正解を見つけるしかないんよ。」

もったもたことでありながら、家で様々な工夫(耳の聞こえない生徒のために手話をおぼえようとしていたことや、授業をよりわかりやすく展開するために休日は図書館で借りた本を読んでいることなど)をしようとしていた母の背中を見てきた私にとってこの言葉はとても重かった。

私「それはわかるけど、お母さんなんか長年やってきたから、慣れるってことはないん？」

母「子供との接し方とかは慣れるけど、授業はその時の教え子のレベルによって変えなあかんからなあ。」

私「なるほどね。じゃあ、今度は教師をしてよかったなあと思う瞬間とか、達成感がある瞬間とかは？」

母「お母さんはなにか一つのことを子供たちと一緒に作りあげた時かなあ。」

私「それって、運動会とかのこと？」

母「そうそう、運動会や音楽会、授業もそうよ。」

私「授業？」

母「あんたが教師になったらわかるよ。」

母はあえて含みを持たせて、笑いながら言った。

私「子供の協力がなかったら授業が成り立たへんってこと？」

母「う〜ん、言葉にするのは難しいなあ。でも、チープかもしれへんけど本質はそういうことかな？」

とても悩みながら、答えを探していた。

私「やってみんとわからんのかあ。他ある？」

母「やっぱり、子供の無邪気さに触れることかなあ。」

そういうと母は、今日の音楽会の練習で〇〇君がこんなことしてん。めっちゃ可愛いやろ？と普段通り学校でのエピソードをととても楽しそうに話してくれた。

私「多分、亮太はそうやってお母さんが楽しそうに家で学校の話をするから教師を楽しい仕

事やと思ってるねん。」

こう言ったとき、私はやっぱり母がきっかけだと確信した。

母「そうやったのね。子供は、教師の行動に必ずなにかしらの反応を見せるの。それは良くも悪くもはっきりね。それを見るのが楽しいし、子供をいい方に育てるために工夫をして試行錯誤をするのが難しいけど楽しいかなあ。」

私「仕事に終わりが無いって言ってたのってこういうことかあ。」

母「そうそう、だから仕事量が割に合わないって感じる人は、私は教師には向いていないと思う。一番楽しいところを苦痛と感じているんだものね。」

母も言葉にしてはじめて気づいたと言っていた。

私「じゃあ、お母さんは子供のために働いてたって感じ？」

母「子供のため……。最初はやらなければならないことを必死にやっていたけど、やっぱり何事もいいものを作りたいって思いが根底にあるから、結果として子供のためになるかもね。」

私にとってすごく衝撃的なひとことだった。

私「なんか、その言い方やったら一番は子供のためじゃないってこと？」

母「最初はそう思ってたけど、どんどん私が楽しくなって続けてこれたってのが一番かなあ。最近の若い子って入ってすぐ辞めたりするでしょ？それは、自分が仕事を楽しんでないんじゃないかなあって思うわね。」

私「自分が楽しむことが巡り巡って子供のためになるんかあ……。」

今まで頭になかった発想だったがとても納得できた。

私「なんか楽しむ秘訣とかってある？」

母「秘訣はやっぱり仕事を楽しむことかなあ。さっきも言ったけど、教師っていう仕事が好きで私は楽しいから続けることができたっていう結果が全てかなあ。でも、それは環境とかでも大きく左右するのよ。」

私「職場の仲間とか？」

母「そうね。職場に恵まれたこともあるけど、家庭環境がやっぱり大きいかな。共働きやっ

たから、亮太やお姉ちゃんが小さい時におじいちゃんやおばあちゃんが世話してくれたでしょ？あとお父さんも家事を全部手伝って協力してくれるでしょ？そういう環境があったからお母さんは仕事を精一杯楽しめたのよ。」

私「なるほどね。じゃあ、これまでの内容を含めて教師という仕事を亮太に勧める？」

この質問を聞いてお母さんは大爆笑した。

母「勧めるわけではないけど、亮太は向いてるんじゃないかな？」

私「どんなところが？」

母「亮太は人が好きでしょ？」

私「うん、好きやなあ。」

母「学童保育のバイトが楽しいでしょう？」

私「うん。」

母「やっぱり人と接するのが好きな人じゃないとこの仕事は難しいんじゃないかなあ。あと学校に対して楽しいイメージを持っているのもすごく大事だと思う。あとは、仕事を楽しむかは自分次第ね。」

母との対話で、やはり教師は魅力のある職業だと再確認できた。教師ならではの達成感というのは、やはり特別であり教師の魅力の大部分と共にやりがいとも言えるポイントだと感じた。人と人とのコミュニケーションなので、相手が変わればやり方や言い方を柔軟に変化させることは少し技術がいるが、人と接することが好きな私にとってはそこにもやりがいを見出せるとも思った。

だが、母との対話では確認したかった現場の問題点にはあまり情報が得られなかった。ただ、対話中で同僚に恵まれたから、また家族に恵まれたからということをして口にしていたので、現場の問題点ではないが周りのサポートがあったからこそ仕事に打ち込むことができたという風にも捉えられる。逆に言えば、周りの環境に少し依存する可能性があるとも考えられる。Nの例でも言えるように、教師は比較的にまじめで責任感が強い性格の人が目指すイメージがある。そういった性格の人が多く、周りのサポートの環境がよく、仕事に打ち込むことが出来るというのは、満足な仕事をするという点で大きな差になっていく。

対話中にきっちりとした終わりのない仕事やいくらでも工夫できる仕事という表現

をされていたように、言い換えると自分のさじ加減で仕事の終わりを決められるとも言える。正解がない中でその人なりの正解を探し自信をもって仕事をするることにつながる。母も例外でなく、家族のサポートが一番大きかったと言っていたので、周りの環境というのは教師という仕事を楽しむうえで大きな役割を果たしていると考ええる。

5-2 高校でお世話になったS先生

Sは私が高校3年の時に担任をしてもらった女性の先生で、担当教科は英語だ。担当教科が同じということもあり、教育実習の際にもお世話になった。細かいところにも注意を払う、とても教育熱心な印象が強い先生だ。

私「仕事は楽しいですか？」

S「私はとても楽しいけど、それと同時にと～っても忙しいわね。」

Sはとてもわかりやすく忙しいことを伝えてくれた。

私「教育実習中も僕にほんまに教師なるんかってしつこく聞いてきてましたけど、あれはその大変さに僕が耐えられるんかって意味ですよ？」

S「そうです。それが一番の理由ですね。あなたが教育実習で見たのは、教師のほんの一部でしかないからね。実際はもっといろんな仕事があるからね。」

私「もっといろんな業務って例えばどんなことがあるんですか？」

S「代表的なことと言ったら、まずは保護者対応。他には成績処理、部活の運営、校務分掌で与えられた仕事とかあなたが経験していない仕事はたくさんあるわよ。むしろ授業をすることは当たり前でそれ以外の仕事の方が忙しかったりするのよ。」

私「僕は実習期間中、授業作りにほとんどの時間割いてましたけど、あれじゃダメってことですか？」

S「いいえ、あなたは実習生だったからそれでよかったのよ。ただ、来年からは授業作りもして、他の仕事もしてという風に忙しくなるのよってこと。」

私「保護者対応ってそんなにする機会あるんですか？」

S「結構多いわよ。」

私「あんまりイメージが出来ないんですけど、どんな感じが軽く教えてもらえますか？」

S「例えば、生徒を指導した時には、必ずその生徒の保護者にも指導した内容を伝えるよう

にしてるの。」

私「いちいち保護者に連絡しないとダメなんですか？」

S「そう。生徒が家で指導された内容や指導された事実を捻じ曲げたりすると保護者が学校に来たり、とても大変なことになるの。だから、それを防ぐために保護者への連絡が必要になってくるの。」

私「確かに大事にならずに済むなら、電話した方がいいですもんね。でもやっぱり結構めんどくさいですね。部活も忙しいですよ？」

S「そうね。練習試合を組むために他校の先生に連絡したり、大会にエントリーしたり、部費のやりくりをしたり、遠征するときはバスをチャーターしたり、そういうことに限って忙しい時に山積みになるのよ。」

私「軽く聞いただけでもたくさん出てきますね。確かに具体的なことを聞くとやっぱりやることって部活だけでもたくさんあるんですね。」

S「そうですね。これら全てをしながら授業を作ったり、クラス運営をしなければならないから教師は大変よ。」

私「そうですね。校務分掌の仕事って具体的にどんなことがあるんですか？」

S「そうね、例えば私は英語担当だから、この学校がオーストラリアの高校と姉妹校として提携してるの覚えてる？」

私「覚えてますよ。」

S「その交流会の準備とか大変だったわね。この夏に実際に生徒を連れてオーストラリアに行ってきたんだけど、準備から何から何までほんとに忙しかったわね。」

私「それは確かに大変そうですね。最後になるんですけど、その大変さの見返りってというか、やっぱり教師の魅力ってなんですか？」

S「やっぱり生徒の成長を感じた時とかには、他の仕事にはない達成感があるっていうのは大きな魅力かな。人の成長に関われる仕事は選ばれた人にしかできないと思うから、あなたも頑張ってるね。」

私「ありがとうございます。」

Sは私の知らない教師の現状や、母とは違い部活の顧問もしているので、部活の現状も詳しく教えてくれた。実習中の自分がしていた仕事がほんとに一部ということを痛感させられた。教師になってからの自分をより強く想像することが出来たと同時に、教

師の忙しさの実態を学ぶことが出来た。

だが、教師の忙しさを語ってくれたSにとって、それらの忙しさは仕事の上で当たり前前で苦に思ったことはないそうだ。印象的だったのは、多忙の中だからこそ自分の時間がとても充実していると言っていた点だ。Sは私が高校に在籍していた当時からヨガが好きだと公言していた。ヨガは現在も続けているらしく、ヨガをすることが仕事のリフレッシュになっていると言っていた。休日や寝る前の時間の使い方を有意義に使うことは仕事とプライベートを分けることに繋がり、仕事を楽しむためにも必要なことではないかと思った。

6. 教師の仕事をより魅力的にするために

4で述べたように、教師の問題や現状は劣悪で、世間が悪評をつけるのも頷けるような内容だと言えた。多忙のしわ寄せで生徒のことを考える時間が少なくなるということはあってはならないことで、本来あるべき教師の姿を見失っている。だがしかし、教師の現状を変えることは簡単なことではない。実際に、教師の仕事量を減らすには国の政策が変わるか、また仕事の新規導入をした際に旧来の仕事を削除するというのが解決策として挙げられる。では、教師は現状を変えるために自分たちでなにもできないのかというところではないはずだ。多忙の実態とは別に、教師自身が感じる多忙感を減少させることは可能だ。本章では、教師の仕事をより魅力的にする方法を模索していきたい。

6-1 同僚性を高める

教師の特徴として、雇用形態が鍋蓋式となっており、一般企業とは大きく異なる。鍋蓋式とは校長、教頭（副校長）を鍋蓋のつまみ部分として、その下に各教員が横並びに配置されていることを意味する。これは同僚性を高めることが比較的容易な組織だと言える。同僚性とは、互いに支え合うことで高め合っていく協同的な関係のことだ。例えば、担当教科が同じ教員同士で授業を見せ合い、お互い指摘し合うことで専門性を高めるといったことをいう。こういった専門性を高めることも同僚性における大きなメリットだが、今回はその中でも同僚との雑談における多忙感の減少効果に焦点を当てていく。

NPO 日本標準教育研究所が行った「勤務時間内に校務と関係のない雑談や休息をする時間がありますか」という問いに、「ある」と答えたのが 48.1%で「ない」が 51.9%

であった(NPO 法人日本標準教育研究所,2014,p48)。雑談の内容は趣味やスポーツの話、家族の話、他愛もない世間話などが多かった。だがしかし、驚いたことに約半数以上の教師はこのような雑談をする余裕さえないのだ。半数の教員は周りとは雑談をすることなく一日を終えるのだ。

では、雑談にはどのような効果があるのだろうか。先ほどのアンケートの記述欄を見ると、「同僚が自分をサポートしてくれる仲間だと感じる事ができた」「ストレスをほぐせた」「人間関係が良くなり、仲良くなることで学校が楽しくなった」「なごやかになり、気持ちが落ち着く」などのメンタル面で大きなプラス効果があることがわかった(NPO 法人日本標準教育研究所,2014,p48)。この文面を見るだけでも、同僚との雑談に多忙感を減少させる効果があることは一目瞭然だ。さらに、NPO 日本標準教育研究所は「雑談での良い影響や効果」についてのアンケートを実施しているが、なんと 81.6%が雑談の良さを認めている。ある学校では、校長自らが職員室の後方に仕切りを作り、雑談出来るようにしていた。勤務時間外に、教師たちはそこでお茶を飲み、お菓子を食べ、子どものことや人生のことなど、様々なことをしゃべってから帰路に着く。しかも、晴れ晴れとした顔で帰っていくのである(NPO 法人日本標準教育研究所,2014,p48)。この取り組みのおかげで教師たちはリフレッシュする時間とスペースができ、ストレスを軽減することにつながり、仕事の効率が上がったそうだ。

6-2 休息時間の充実

仕事の時間を充実させるためには、休息の時間を充実させることも必要不可欠だ。仕事が忙しくてストレスが溜まった時に発散する場所や趣味があるのとならないのでは、次の仕事へのモチベーションを上げるという面では大きく変わってくるだろう。これは姉が毎晩行っているヨガがいい例だろう。姉はヨガを仕事のリフレッシュとして行っており、明日も仕事を頑張ろうという気持ちにさせる毎日のルーティンだと話していた。つまり姉にとってのヨガは仕事を楽しむための道具とも言い換えられるかもしれない。

姉に同僚性と休息の重要性について聞いてみた。姉は私の 10 歳年上で、大学卒業と共に小学校で教師として働いている。今年で 9 年目の中堅教師だ。

私「同僚性って仕事にとって大事？」

姉「うん、私は大事やと思うで。」

私「どういう点で同僚性がプラスに働くん？」

姉「一番大事なのは情報共有かな。あの子はこういう癖があるとか、AさんとBくんが喧嘩してたとか、些細なことでも同僚の間で共有することは大事やな。生徒の情報を共有することでクラス運営や行事がやりやすくなるケースがあるな。」

私「なるほどね。現場で実際にあったんか。雑談にメンタル面でプラスの効果があるって言われてるねんけど、それについてどう思う？」

姉「そうやなあ。あんまり考えたことはなかったけど、そういう雑談で先生同士の仲が良くなることはいいことやと思うな。べらべら喋るのはどうかと思うけど、さっき言ったような情報共有がやりやすくなったり、シンプルに人と話すことでストレス発散にもなると思う。学年団の仲が良いと仕事もやりやすいし、協力することで仕事が効率的になったりするから、先生同士で仲良くなることはやっぱりいいことやと思うな。逆に言うと仲が悪い教師同士が学年団におったらめっちゃ仕事しにくいしな。」

私「お姉ちゃんはストレス発散するためになんかしてる？毎晩やってるヨガとかはなんでやってるん？」

姉「ストレス発散はカラオケで大声を出すことかな。毎日仕事で大きな声出してるけど(笑)ヨガは毎日の日課やから特に考えたことはないけど、今日も一日終わったなってその日を振り返ると、明日も頑張ろうって気持ちになれるかな。」

私「最初は体のためにやり始めたけど、いつの間にか仕事のためにもなってたってことか。」

姉「そうそう、仕事のために始めたわけじゃないけど、今は仕事とも結びついてるかもしれへんな。でも自分の中で、ヨガをしている時間はなくてはならへん大事な時間やわ。自分と向き合うというか、心を落ち着けるというか。」

私「なるほどね。じゃあ、お姉ちゃんが考える教師の魅力ってなに？」

姉「よく言われることやけど、毎日の成長を感じられるのは教育者の唯一無二の強みやと思う。跳び箱苦手やった子が練習して跳べるようになったり、逆上がりできひんかった子ができるようになったり、算数苦手やった子がテストで100点取ったりっていう成長を感じたらやっぱり教師やっててよかったってなるな。あと日々の喜怒哀楽や驚きを子供と共感できるっていうのも教師のいいところやなあ。」

やはり、同僚性を高めることと充実した休息をすることは多忙感を減少させるには

大きな効果があることがわかった。姉の話では、仕事のやりやすさは学年団の仲の良さに大きく依存するようだ。つまり、教師同士が雑談を通じて仲良くなることは仕事の効率が良くなるなど、仕事をする上で重要なポイントにもなることがわかった。また、姉も母も休日に「〇〇先生とご飯食べに行ってくる」と同業者とプライベートを共にすることも少なくない。これは同僚性を高めることが、休息を充実させることにも繋がっていることを体現している。結果として、同僚性を高めることは休息を充実させることにも繋がる可能性を持っており、この両方を実現することで教師の多忙感は大きく減少するということがわかった。

7. 自分にとっての魅力的な教師とは

教師という仕事は世間が言うほどブラックな仕事なのかという問いに対しての最終的な私の答えは現状ではノーだ。これには私なりの根拠がある。それは、全ての仕事が「子供のため」というやりがいがあるからだ。自社の利益だけを追求し、社員に圧力をかけるブラック企業とは大きく様相が異なる。仕事量や残業時間を見れば確かにブラック企業に匹敵している可能性は高いが、果たしてその労働時間を苦痛と感じている教師はどれくらいいるのだろうか。私の推測では世間が思っているほど多くはないと思う。なぜならブラック企業のやらされる仕事とは違い、やりがいが感じられるからだ。私も生徒のためなら残業などを厭わないタイプだと思う。だから、教師になる人はそのような考え方の人が多いのではないかと考える。少なくとも私の母もこの考え方の一人だと言える。私の母は過去に耳の悪い生徒の担任になったことがある。それをきっかけに母は手話教室に通い始めた。もちろんその生徒のために手話を習い始めたのだ。家ではよく「全然覚えられへん。」と弱音をはいたり、手話を覚えるのに手こずっている様子だった。私は、母は学校の経費で手話教室に通わされているのだとばかり思っていた。だが、母はなんと学校にも生徒にも内緒で手話教室に通っていたのだ。ただでさえ初めての特別学級の担任で忙しそうにしていたのに、学校に秘密で生徒のために手話教室に通っていると聞いたときは本当に母を尊敬した。さらに、この推測には裏付けるデータもある。OECD（経済協力開発機構）が日本の教員を対象に実施した調査によると、「全体として見れば、この仕事に満足している」教員が、85%にも上っている（佐藤,2018,p21）。もし教師という仕事がブラックならば、このような結果にはならないだ

ろう。この調査から大半の教師は多忙な毎日を送りながらも仕事を楽しんでいることがわかる。

私が目指す教師も、多忙な毎日の中で仕事を楽しめる教師というのが条件にある。それは母が言った「自分が仕事を楽しむことが巡り巡って子供のためになる。」という言葉が心に深く突き刺さったからだ。どれだけ忙しくても、手を抜かず精一杯のものを作ることが仕事を楽しむことに繋がるということがわかった。母にもSにも言えることは、忙しいけどとても楽しいと話していた点だ。残業や割に合わないと言われる仕事も生徒のために頑張るといのは理想の教師像だと考える。そして現状を悲観せず、教師という仕事を楽しむための努力をすることが魅力的な教師になるための第一歩ではないか。

8. 最後に

今回、この卒業論文を書いたことで、教師という仕事について深い見解を持つことが出来たことをうれしく思う。教師として働くうえでなにが大切か、そして自分のなりたい教師像を確立することができた。また、様々な教師の実態や現状を見たうえで、教師という仕事が未だに輝いて見えることが今回の一番の収穫かもしれない。

本論文の作成にあたり、手厚くご指導いただいた牲川先生に心より感謝いたします。また対話を引き受けご協力してくださった方々、そしてたくさんの貴重な意見をくださった牲川ゼミのみなさまにも厚く御礼申し上げます。

引用文献

NPO 法人日本標準教育研究所（2014）『先生は忙しいけれど』日本標準

大内裕和（2018）『ブラック化する教育 2014-2018』青土社

佐藤明彦（2018）『職業としての教師』時事通信社

2019 年度卒業論文

「書く」文化とその未来

関西学院大学 総合政策学部 総合政策学科

柏木 乃愛

目次

第1章 私と「書く」文化の繋がり	
1.1 「書く」経験と思い	2
1.2 問題意識	2
第2章 書道家から見た「書く」文化の魅力と課題	
2.1 アポイントメント	3
2.2 対話相手について	4
2.3 対話	4
2.4 小括～対話を終えて～	8
第3章 「書」の教育の現状と人々の考え方	
3.1 見えた現状と課題	9
3.2 日本書道ユネスコ登録推進協議会とは	9
3.3 書道文化に関する基礎調査報告書（付）書道団体実態調査の目的と内容	10
3.4 アンケート内容を用いた持論	10
A.全国の小学校	
B.全国の中学校	
C.高等学校・大学（短大・大学院を含む）	
3.5 小括	13
第4章 書写教育の改革	
4.1 従来の書写教育からの脱却	14
4.2 どのようなことから始めるべきか	15
第5章 まとめ	17
謝辞	17
引用文献	18

第1章 私と「書く」文化との繋がり

1.1 「書く」経験と思い

私は、幼い頃によく祖父が書道をする姿を見た。その影響で、文字を書くことにとても興味や憧れを持ち、どうしてもやってみたかったので親に頼み込んで習字を始めさせてもらった。すると、私は自分の字がどんどん上達していく魅力にはまり込んでしまい、そのころから今までずっと続けている。中学時代や高校時代には文字を書くことで、周りの多くの人を喜ばせられる機会もたくさんあった。まず、小学生のころから今まで年賀状は必ず手書きであった。それをもらった相手はいつも喜んでくれて、「めっちゃ嬉しい!」「私も来年は手書きにしようかな」と言ってくれる人が多くいた。中学1年のときはクラスの目標・スローガンを画仙紙に大きく筆で書く役割を任されたり、中学3年のときは、卒業式の際にクラス皆で手書きの横断幕を担当の先生方にプレゼントしたりした。先生方は感動して泣いてくれた。3年間の思い出とともに、私たちが心を込めて書いたものの温かみを感じてくれたのではないかと思う。また、高校時代は書道部に入り、展覧会の作品以外に、合唱コンクールの題目や、文化祭の劇のキャスト表、卒業アルバム表紙の校歌なども書かせていただいた。特に、卒業アルバムの校歌などは一生に残るものであり、何よりたくさんの人に見ていただくということで書く時はとても緊張していたが、私の高校生活の集大成を飾るものとなり、また、これまでの人生の一番の作品となった。私を知ってくれている人、先生、友達、そして家族がみんな喜び、私に笑顔を見せてくれたのである。

上記のように、私はこれまでに「書くことってやっぱり楽しい」と実感する経験を何度もしてきたとともに、他の人にもこの魅力が分かるととても嬉しいなと思った。大学生になると、練習できる時間が極端に減ってしまったため、定期的な展示会への作品提出などしかできていないが、文字を書くことが大切だという思いは消えていない。そんな中、社会では次々とデジタル化・データ化が起り、文字を実際に書く機会が現在進行形で減少しつつある。手書き文化の衰退だ。そして、さらに減少しているのは、「書」の文化に触れられる日常的な機会である。そこで私はこの論文を通して、現代における電子媒体上の活字等の繁栄に対して手書き文字（肉筆）、つまりは「書」の文化が今後存続し、繁栄するにはどのような方法があるのかを調べていきたい。

1.2 問題意識

現代では、パソコンやスマートフォンが急激に普及するようになり、人々は日常的に文字を書く機会が少なくなってきている。学校や企業においても、パソコンがほとんどの重要な

役割を担っているといっても過言ではない。つまり、社会で通用するのは「パソコンを正確に早く打つ」という能力であり、いずれはどの学校にも一人一台パソコン導入（もしそのようなことがあれば私は猛反対するだろう）などの政策がとられるとすれば、板書など書き写す必要もない。確かに、そういった情報を媒介したりデータ化したりするものには多くの利便性があり、データ送信もより早く、容易にできてしまう。しかし、私はその簡易性は恐ろしいと考えている。大げさに言うと、より効率化を追求していく世の中は、いつかはすべての物事がデータで行われ、私たち人間にしかできない「文字を書く」という大切な文化が失われてしまうのではないか。

日本では年賀状の文化も今では衰え、手紙などは書く機会も少なく、昔流行っていた先生や友達との交換ノートなどももう誰もやっていないに等しいだろう。ソーシャルメディアを中心に、ネットを利用した情報交換が主に支配権を持っているのが現状である。それを問題であるとするかしないかは、個々人によるが、皆さんはそれを悲しいと感じたことはないだろうか。少なくとも私にはそういった感覚がある。例えば、メールやアプリケーションを使ったメッセージは簡単に消え去る。しかし、手紙やノートはいつまでも保管できる可能性がある。私も今までもらった手紙や大事なノートは、当時の思い出とともに大切にしまい、何度も見返したりしている。パソコンやスマートフォンで反映された文字や文章は「美しく正しい」かもしれないが、その人の「感情」や「個性」がそのまま映し出されているのはめったに見かけない。実際に私のこの活字文というものから個性や感情を読み取れる方はきっといない。このように、私個人が考えるだけでも「書」の魅力というものはたくさんある。素朴で人間味のある「書」の文化は今後どのようにすることで生き延びられるだろうか。

第2章 書道家から見た「書く」文化の魅力と課題

2.1 アポイントメント

まず、文字を書く文化の代表ともいわれる「書道」に関して身近である、書道家でもあり、習字の先生でもある山下千晶先生にお話をお伺いした。私が彼女に話を聞いてみたかった理由は、彼女こそが私の最も身近な「書」に関する人物であり、長年の書道歴や講師経験の中で、「書」の文化の移り変わりや現状を見てこられていると思ったからである。

山下先生と対話をするアポイントメントを取る際、電話でお伺いした。その時に、先生は、「全然答えるけど、私なんかでだいじょうぶかなあ（笑）」と不安そうにおっしゃっていたが、私がこのインタビューが彼女でなければならない理由を話すと、快く承諾してくださった。

2.2 対話相手について

日本習字 晶泉書道教室 山下千晶先生

彼女は私が地元で通っていた書道教室の先生で、幼稚園児から大人まで幅広く教えておられる習字の先生で週に二日(月曜日と水曜日)、同じく違う曜日にはピアノの先生もされている。教室は私が書道を始める前に書道教室を開校されていると聞いたので、約15~16年続いていると思う。昔は古い感じの教室を借りられていたが、ご結婚されて、お子さんができてからはご自宅で教室をされている。現在小学1年生と小学3年生の、2人のお子さんがいて、二人とも外部の書道教室に通っているそう。なお、私から見た先生についての情報は下記の通りである。

- ・超がつくほど優しい
- ・生徒がとても信頼できる人
- ・入ってすぐやめていく人を見たことがない=教えるのが上手
- ・私の周りで一番「書くこと」の魅力が何なのか知っている
- ・基本的にどの年齢層の方にも対応されている
- ・(とても家庭的な方で料理もものすごく上手)

2.3 対話

インタビュー当日：2018年11月1日木曜日の午後5時から6時

場所：山下先生宅

山下先生は日々お忙しい中、教室のない木曜日の午後に時間を空けてくださった。当日は、子育て支援員として毎週月曜日と水曜日に先生宅に来ている私の母とともに訪問させていただいた。山下先生以外に2人のお子さんがいらっしゃったので、リビングのある部屋で私の母が子どもたちと遊んでくれている間に、いつも習字教室として使われている部屋で先生にインタビューを行った。

はじめに、私が書いた対話相手の紹介文について異論や間違いがないか見ていただき、次に、先生に私のテーマについて詳しく話した。すると、先生も私と同じように、考えていたようで、文字を書く機会が年々減ってきていることを実感していた。そのことを中心として、先生の経験談も含めた対話を始めた。山下先生と私は、生まれも育ちも大阪なので、内容はほとんどそのまま関西弁で書くことにする。

以下対話文である。※「☆」マークにて持論や感想を挟む。

私 「はじめに、教室始められて15から16年ていうのはあっていますか？」

先生 「えーっと、22の時からやってるから、教室自体は18年くらいになるかしらん、かれこれ（笑）17、8年かなあ？」

私 「そうなんですか、すみませんでした（汗）幅広い年齢層って書いたんですけど、ちなみに今現在ほどのくらいの年齢層の方をおしえてらっしゃいますか？」

先生 「えーと、今は大人の方は来てなくて、一番下で、小学校2年生とかかなあ、で、一番上が大学生。」

☆というわけで、私の書いた情報は一部間違っていた。しかし年齢層の話で、もう幼稚園の子も大人の方もいないというのには少し驚いた。

私 「なるほど。幼稚園生や大人の方はいないんだ。」

「あの、先生の特徴も合ってるか見ていただけますか。」

先生 「あー、ここ？…いやでも、超が付くほど優しいはないかなあ、（笑）」

私 「えー、めっちゃ優しいですよ！」

先生 「そんなことないそんなことない、でも前の教室のほうが（自分が）うるさかったかしらんなあ。あの時は生徒が多すぎて、自分も若かったから、なかなかなんかうまくまとめられへんかってー、でもこっちに来てからのほうが人数も少なくなったしー、なんか間近で見れるから目も行き届いて、今のほうが教えられるから。」

先生 「んであと子供が生まれてー、その親目線？ていうか、前やったら気づかへんかったことを今は親目線に立って色々気づくことができるようになったっていうのはあるかな。前の教室のほうがいろんなタイプの生徒がおったしなー」

私 「あー。先生のお子さんもうお習字されてますしねー。なんか前の教室では、大人の方数人いらっしゃいましたよね？何歳くらいかちょっと忘れてしまったんですけど、」

先生 「いたいた、えっとね、あの人はもう結構80近くのおばあさんやって、でももうやっぱりみんな足がわるかったりとかでー。でも最初は友達2人できてはってー、で、そのあとにもう一人違う人が来てー、んでまたそのお友達が2人くらいきたんかな？たしか。」

私 「へえー。そのあと何年か続けてらっしゃったんですか？」

先生 「うん、一番長い人で5年かなー。ほかの人もみんな段取りはって、一人おばあさんが展覧会とか出してはったかな。でもみんな体の不調だったり旦那さんが病気になったりとかで続けられへんくなってやめはったねー。」

私 「じゃあ大人の方ではご年配の方が多かったんですね。皆さんすごいですねー。先生のような若い大人の方とかはいらっしやらなかったんですか？」

先生 「私もそんな若くはないけど(笑)私ら世代の生徒はいなかったかなー、やっぱり大学生から年配の人まではけっこう間が空いてて。やっぱり教室？この教室自体が知られてないかも。」

私 「あー、ここら辺けっこう見えないとこだからですかね？」

先生 「それもあるし、だいたい知られる元もほとんど友達つながりとか、口コミとかやし、それにも興味があってもそれに割く時間がまずないと思う。」

私 「なるほど。でもやっぱり生徒さんの数が減ってきている理由の中に、普段から字を書く機会が減ってきているし、スマートフォンとかパソコンに移り変わってるのもありますよねー」

先生 「せやなー。そもそも習字を始めるきっかけも、年賀状を上手に書きたいとか、結婚式とかお祝い事の字が上手になりたいとかやしなー、今そんな年賀状もコピーでできるしな。あと、ペン字っていうより筆を持ってしっかり書きたいっていう人のほうが昔は多かったかな。」

私 「そうなんですね。文字を書く上で、年賀状の存在は大きいですよ。筆の芸術性とかも人気だったんでしょうかねー。個性とかもみえてきますしね。」

先生 「そうそう、文字はその人の心を表すって言うからー。やっぱり、おなじお手本見てもみんな書く字が違うから。そういうところは面白いとおもうかな。筆は特に。」

☆やはり、書く文化の減少もあるのか、大人の生徒人数もともに減ってきているようだ。実際に筆を持つ機会も普段はほとんどなく、大人であればなおさらその文化がだんだん薄まってきているのだと思われる。

私 「パソコンとかスマートフォンに比べて手で文字を書くことのメリットとか魅力って何ですかね？」

先生 「うーん、年賀状とか手紙やったらやっぱり、もらったらうれしいし、温かみがあって気持ちが伝わるよね。でまあその、書く時も、そのもらった相手じゃなくて書いてる自分も、その相手のことを思いながら書けるし。」

私 「わかります。私も年賀状や手紙は、自然と相手のことや喜ぶ顔を想像しながら書いてるので(笑)他に魅力とかはありますかね？」

先生 「うーん…私の個人的な意見やねんけど、筆の場合は体を使って書くのはすごく楽しいし、自分の字と向き合えるっていうか…ほら、やっぱり普段ってそんな時間てないやん？その体を使って書くっていうのは私の先生に教えてもらったんやけど…」

私 「あー、先生が産休してらっしゃったときに来てくださった方ですよ？」

先生 「そうそう、あの先生が今私の先生やねん。で、前の先生は…」

私 「前にもいらっしゃるんですか？」

先生 「うん、全部合わせたら今まで三人の先生に教わったかな。最初は、私も幼稚園の時やったからちょっとよく覚えてないんやけど、すごい楽しかったのは覚えてるよ。優しい先生やったなあ」

私 「へえ、良い方だったんですね。」

先生 「で2人目の人はすごい、なんか厳しい人で、なんかめっちゃ枚数書かされて、一気に半紙五枚くらい書いて、足しびれてこけそうになりながら（添削してもらいに）持って行ってたよ（笑）最終的にはその中の一枚しか見てもらわれへんかったけど。」

私 「そんな先生もいらっしゃるんですか！私（教えてもらってるのが）ずっと山下先生なんで、この地域では厳しい先生いないと思ってたんでびっくりしました。」

先生 「そう、でも今ではそこで諦めずに続けといてよかったなあって思うよ。やっぱり書くことって、乃愛ちゃんもやってるからわかると思うけど、続けとかんと急に時間が空いたら手が震えて書けなかったり、落ち着いて書かれへんかったりするやろ？筆やと特に」

私 「めっちゃわかります。私も長い間筆は持ってないから感覚とかも鈍ってしまうことがあります。」

先生 「それと、ピアノでも習字でもなんでもそうやけど、続けることって、自分の自信につながってくるから。うまくならなくても、そういうのってやっぱり後々力になるからね。」

☆先生は書くことの魅力について、「自分の字ないしは自分と向き合うことのできる貴重で大切な時間」という風におっしゃっていた。山下先生自身も長年書道をされていて、今まで3人の先生方に出会い、それぞれ「書の楽しさ」「書き続けることの大切さ」「体を使って書くことの面白さ」と、その他多くのことを学んだらしい。私も同様に、山下先生からその三つを学んだので、それをどのように伝えていけるのかを考えたいと思った。

私 「今後到手書き文字が反映していくには、どんな方法がありますか？私は、習字教室をもっと広めていくことも一つの方法だと思うのですが。」

先生 「うんうん。あとはなんか、学校でも字を書いたり習字の時間って減ってるからー、最近では月に1回あるかないかやしなー、そこを何とか増やしていくとかかなー」

私 「そうですねー。国語の授業内ですよ？習字の時間って」

先生 「そうやねー、私の時代でも普通にあったけどー、こんなに今みたいに少ないってことはなかったかなー。あと冬休みの宿題とかあったやん？」

私 「書初めですよ？」

先生 「そうそう、毎年生徒が教室に持ってきてたのに、あれももう無くなってるしねえ。な

んか中学も書く機会ってどんどん減ってるし。ますます忘れ去られていってる気はするよね。」

私 「ええ！もう書初めもないんですか？よく生徒さんが持ってきてたのに。ちょっと悲しいですね…」

先生 「そうそう。それに今はなんかその、小学校でもパソコンとか英語の授業とかも入ってきてるみたいやし、なかなかそこに習字の授業を食い込ませていくのは難しいんやろうね。」

☆この時先生はすごく悲しそうな表情だった。私も、自分が予想していたよりも地域の学校での「書く時間」が減少している状況に驚いたし、やはり他授業との兼ね合いもあり、学校への導入はなかなか厳しいものなのかなと実感する。

私 「そうですよね。じゃあやっぱり習字とかが一番いい方法ですかね。」

先生 「でも今はやっぱり生徒が減ってきてて、その理由としては、習い事の多様化かなー。最近やと、ほかの習い事を優先する子とかー、あと塾もやねー」

私 「あー、今塾通ってる子多いですよー。」

先生 「うん。今の子は受験とかなんもなくても小学生でも塾行くみたいやし、両立も難しいよね。でも字を書くことって、定期的にしないと意味ないからねー、」

私 「やっぱり時代も変わってきてますね。」

先生 「でも実際に今ピアノも習字も来てる子がいるんやけど、その子は塾が習字の時間と被ってて、習字のほうに来れなくてー。でその子の弟がピアノ習ってやるんやけど、その時間でいいなら来る？って聞いたら絶対に続けたいのでさせてくださいって言うて(笑)ほんで今も弟がピアノやってる横で習字の練習してるよ。」

私 「へええー…、今の子どもそんなに凄い子がいるんだ。やっぱり字は書きたいけどその時間がないっていう人もいらっしゃるってことですね。」

2.4 小括～対話を終えて～

私の最も身近な「書」に関する存在である山下千晶先生との対話で、「書く」ことの魅力と、以前から考えていた字を書く機会と習字教室の認知度の低さが改めて分かった。魅力の面では、文字を書くことで、より相手の心情を思って文章を考えるようになり、温もりがある点や、思い出として残る点などが挙げられた。また、筆を使った文字では、体を使って書くことや、自分の字と向き合うことで、集中力を高め、精神を安定させることができる。しかし、年賀状や書初め、手紙を代表とした書の文化的行事も年々減っており、先生もその文化が薄れゆくことに対してやはり悲しみを表していたし、それを今後どのように存続させて

いくかについても、考えれば考えるほど難しい問題である。

習字教室の利用も「書」の文化を定着させる方法の一つである。しかし、インタビューにもあった通り、習い事の多様化であったり、大人の書字行動離れが進んでいたりして、親族や周りに勧められない限り、あまり選択されないことが多い気がする。唯一人々が必ず通う小中学校に導入させるにしても、逆に減少傾向にある「書の時間」をどうして増加させていけるだろうか。

一方で先生のお話の中でもあったように、実際に文字を書きたい、習いたいという人も多くはないがいるということが分かった。目的は年賀状をはじめ、お祝いなど身近な書字をきれいに書くためや、子どもの集中力を養うため、また姿勢をよくするためなど様々である。

第3章 「書」の教育の現状と人々の考え方

3.1 見えた現状と課題

私対話を経て考えたのは、やはり家庭、学校、社会の中で「書」に触れる機会が少なくなっているのが問題なのではないかということである。その中でも、児童・生徒が長時間過ごす学校では「書道の時間も減り、書初めなどの宿題もなくなっているらしい」とあり、授業では「書」の時間はあまり重要視していないことが伺える。日本の書写教育に、なにか変化があったのだろうか。

そこで、「書」の教育や人々の「書」に対する考え方についてもっと詳しく知るために、日本書道ユネスコ登録推進協議会が平成30年に発行している、「書道文化に関する基礎調査報告書（付）書道団体実態調査」の結果・回答についてみていきたいと思う。

3.2 日本書道ユネスコ登録推進協議会とは

日本書道ユネスコ登録推進協議会とは、『日本の書道文化』を国際連合教育科学文化機関（＝ユネスコ）の「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表（＝代表一覧表）」に記載するため、平成27（2015）年4月4日に、公益財団法人全国書美術振興会、公益社団法人全日本書道連盟、公益社団法人日本書芸院の3つの団体が登録推進運動を行う目的で発足したものである[4]。実際に、現在まで日本のユネスコ無形文化遺産一覧に登録されたものとしては、能楽（2008年）、歌舞伎（2008年）、人形浄瑠璃文楽（2008年）、雅楽（2009年）、和食：日本人の伝統的な食文化（2013年）など現在計21件の例がある。一方で国指定文化財

ではない書道をはじめ、茶道、華道、和服将棋などの団体が登録を目指している傾向であるようだ [4]。

3.3 書道文化に関する基礎調査報告書（付）書道団体実態調査の目的と内容

日本書道ユネスコ登録推進協議会では、平成 29 年に調査委員会を設置し、平成 30 年に、アンケート調査を実施することにした。日本国民において書道文化がどのような位置付けにあり、日常生活の中でどのように捉えられているか、また、今日の日本社会で書道文化が抱える問題点はどのようなものなのか、その実態を把握しようと試みたものである。

調査委員会は、幅広い意見を得るために、小・中学校、高校・大学、一般の書道愛好者、展覧会参観者、全国の書道団体、書道用品生産者・小売業者、表具店・設営業者など、今日の書道に関係すると思われる各所に回答を求めている。また、「この調査は、手書き文化自体が衰退する今日、生活文化としての書道の現状を詳細に把握して、適切な保護・振興策を検討するための基礎的な資料を作成することを目的としている。」と示されている。[2]

3.4 アンケート内容を用いた持論の展開

内容はそれぞれ、①小学校、②中学校、③高等学校・大学、④月刊『大東書道』定期購読者、⑤書道展に来場した方々、⑥書道団体、⑦書道具の生産・販売業者等、⑧書道具店等、⑨表具店・設営業者という 9 つの調査対象によって少し違うものとなっていたが、すべて書道・書写に関する設問であった。

それでは、私が注目したい現在の書道教育や、書の日常生活への浸透度合などの問題点をこのアンケート調査 [2] の結果の中から一部抜粋し参考にしつつ言及していく。そのため、書道教育に関わりがあると考えられる小学校、中学校、高等学校・大学へのアンケート結果についてみていく。

※以下、本節での引用は、「書道文化に関する基礎調査報告書（付）書道団体実態調査」からの調査結果および分析結果である。

A. 全国の小学校

まず小学校では、毛筆を使った書写活動の機会についての設問に対して、全体の 96% の学校が「小学校 3 年生以上である」と答えている (p.8)。これはおそらく、「小学校書写」についての新学習指導要領によるものであり、1、2 年生は基本的に書く時の姿勢や筆記具

の持ち方、文字の点画、書き順などに気を付けて正しい書き方を学ぶことが目的となっているので、硬筆のみの学習が主となっているようだ。私自身も「書写」の毛筆で行う授業は3年生の時からは始まっていた。そして用具の用意の設問に関しては、94.3%が「すべて児童・生徒個人が用意する」という回答である(p.9)。この点については私も学校が用意するのではなく、個々人で用意させるほうがいいと思う。自分専用の書道用具を持つことで、学校でも家でもその取り扱いには気を付けるようになるし、「書」を身近に感じる切り口にもなると考えられるからだ。校外の書道展やコンクールに参加しているかどうかという設問では94.7%が「参加している」と、とても高い水準であった(p.10)。書初めに関する設問についても、9割が書初めを「行っている」と答え、私が思っていたより多くの学校が行っており、その大半は通常の授業内で行っているようである(p.12,13)。また、ほぼ全校にわたり、校内(教室、廊下、図書室など)には毛筆で書かれた文字が掲示されているという回答も多かった。こういった掲示物は、生徒たちに興味を引かせる、もしくは手書き文字を身近に感じさせる手段の一つであるので、非常に有効なものであると思う。

このような結果を見て、小学校内で「書」に触れる機会は私が想像していたよりも多く設けられており、書道塾などがなくとも学校の中で学べるものがたくさんありそうだと感じた。しかし、問題であるのはその定着率である。学校で得られた機会によって児童・生徒たちには、生活における「書」の文化への考えが深まっているかどうか重要である。そこで、この部分に関する設問を見てみると、「児童・生徒の生活に毛筆の使用が定着していると思いますか。」の回答としては残念なことに93.5%が「思わない」(p.14)。そして「児童・生徒の日常生活に毛筆で書かれた文字が定着していると思いますか。」という設問には66.6%が「思わない」と回答した(p.15)。つまり、書写教育から得られる日常生活における定着はあまり見られないということになる。

自由記入欄に書かれた小学校の先生方の意見や感じていることのまとめ(p.16)を見ると、「毛筆書写は日常生活に活かされておらず、授業内で完結してしまっている」「日常生活に手書きをする機会が失われている」といった意見もあり、厳しいことにアンケートの数値を見るとそれが証明されている部分はある。その反面、多数の意見として「毛筆書写の教育的意義は大きい」「生徒の日常生活でも毛筆書写が活かされている」というものがある。それはどういうことだろうか。アンケートの中で協議委員会の言葉で書かれていたのは、「書写が、筆順や字形の学習に効果的であるとともに、集中力を高め、落ち着きが得られるといった内面的効果があり、道徳的な側面があるという意見が多い」(p.17)、つまり書写の授業は、「書」の文化を学ぶだけでなく、そういった他の教科や学習につながる多方面の学びができ、児童・生徒にも良い影響を与えている可能性があるのではないかということだ。「字を書く」という行動そのものが、子どもたちの安定した精神、集中力を養うことができるのなら、書写教育は大変大きなメリットにつながるだろう。

B. 全国の中学校

中学校では、ほぼ全校、全学年にわたって毛筆を使って書く機会があるようだ (p.22)。道具は小学校と同じく「すべて生徒が用意する」の回答が88%と大多数を占めている (p.23)。これはおそらく小学校から使用している書道具を持ってくる生徒が多いのと関係があると思う。ほかの設問に対する回答も小学校と同じで、書道展・コンクールに出す機会や書初めをする機会は設けられているところが多いようだ。しかし、書初めに関して、「行っていない」と回答したのが占める割合が28.7%と、小学校の6.9%を大きく上回ったのである (p.26)。書初めを行うという行事について、中学校は小学校に比べるとあまり重要視されなくなっているようである。また、なぜ行わないのかという設問に対して、圧倒的に多い理由が「時間が不足している」である。学習指導要領上、ほとんどの中学校では、「国語科」の中に「書写」の授業が組み込まれており、他の単元との兼ね合いもあってか、その時間の確保が年々難しくなっているようだ。

そして小学校のアンケートと同様、「書」の文化の日常生活における定着はあまりみられないことのない傾向にある一方で、毛筆書写の教育的意義についてはとても重要視されている。協議委員会の言葉では「毛筆に対する生徒の興味関心が高く、書写能力の向上にも益しておりその教育的な意義を高く位置付けている。また、掲示物や筆ペンによる書写などによって、毛筆書写は生徒の日常生活に一定の形で息づいており、実用的な役割を担っている。」とある (p.30)。私が中学生時代の時もあったが、授業での筆ペンの導入は、毛筆よりも扱いやすく、簡単に文字を書くことができるという点でとても人気があった。また、校内掲示物として書写活動の作品が飾られ、行事の看板、商品パッケージなどで「書」に触れる機会が多く、生徒が興味を示しやすい。

書写教育は多方面への良い影響もあり、教育的意義があると考えている教員が多数いる (p.29)。その中で課題点として挙げられるのは、毛筆書写のための時間の不足や教員の指導力についての事項が多かったようだ。つまり、授業自体を重要視していないのではなく、毛筆を使った授業は準備等に非常に時間がかかり、実生活との関連性が薄いため、必要性を感じながらもその時間を削ってしまうという現状がある。そのため、書写の授業は国語科のごく一部を占めるのみとなり、その中で生徒の関心を引くのは難しいと考えられる。

私個人の意見としては、書写の授業が減ってしまうのは時代の流れからすると、ごく当たり前のように感じる。しかし、生徒全員が自分の書道用具を持っているのにも関わらず、書の文化に触れる機会が減らされてしまうのはもったいない気がする。また、国語科の指導教員とは別に、書道専門の教員養成をすることで、他教科との時間の兼ね合いがうまくいき、教員の負担も減り、生徒にも深い学びが与えられるのではないかと思う。

C. 高等学校・大学（短大・大学院を含む）

高校・大学についてのアンケートでは、小・中学校のように教員のみでの回答ではなく、大

学の書道部員などの学生も含んでいる。また、回答の多くは、書道の選択授業や書道部、書道専攻がある高校・大学から寄せられたものである (p.43)。

上記の情報により、毛筆による書道活動について機会があると回答したのが 80%を超えているのは納得できる(p.35)。しかし、「校内で書道展を開催しているか」という質問に対して「開催している」の回答が全体の 52.6%と、意外と多くはないことに驚いたが、「校外で書道展を開催しているか」の回答で「開催している」が 79.5%であったので、どうやら作品は外に発表していく傾向があるようだ(p.36,37)。

生活文化としての書についての質問では、「日常生活の中で、毛筆（筆ペンを含む）を使用している場面を見聞するか」にたいして、「ある」の回答が 52.6%と半数ほどを占め、その事例としては「年賀状」が最も多く、他には手紙、寄せ書き、芳名録、のし紙・のし袋などが挙げられている (p.40)。これを見ると、小・中学校に比べて、社会や周りを見る範囲、つまり視野が広がることにより、「書」の具体例が多くなることが分かる。だが残念なことに、定着率の質問については小・中学校と同じく「定着していると思わない」という回答が約 8 割である (p.41)。

高等学校・大学では、主に教育目的よりは芸術的観点をもって「書」の文化に触れているような気がするが、やはり日常への浸透はしにくい状況のようである。しかし、自由記述の中では、「手書き文字文化を大切にしていきたい」「伝統文化として大切にしたい」など、文化としての存続を願う意見が多数を占めており、定着がみられない状況下でも人々が「書く」という行動を大事に思っているのが伺える (p.42)。この意見は、私にとっては大変うれしいものであり、今後このように「書」の文化を大切に考えてくれる人が増えてほしいと思う。

3.5 小括

「書道文化に関する基礎調査報告書」を通して、学校教育上での書写が占める位置やもたらされるメリット、問題点など様々な実態が具体的に浮かび上がった。小・中学校では、書初めを中心に、展覧会への参加、作品の掲示などを書写教育の一環として行っており、著しく授業が減ったというわけではなく、導入率は予想していた数値より高かった。高等学校・大学では、意見の偏りがあるものの、校外の書道展や年賀状など、「書」に触れる機会はたくさんあることが分かった。また、書道文化を今後存続させたいという意識を持つ教員や学生が多数おり、私が恐れている学校・社会から文化ごと排除されるという可能性は現状からは低いと考えられる。

書写教育のメリットとして、「字が綺麗に書けるようになる」「文字の字形を理解できる・覚えられる」というものの他に、「精神を安定させられる」「集中力を養える」など、道徳的側面を持つものが挙げられていた。しかし、その中で統一している否定的な代表意見は、「日常生活には活かされていない」「導入する時間と指導力が足りない」である。つまり、書写

教育は、授業範囲を超えて活躍することが減多になく、生活上の定着が見られない点で課題となっている。また、アンケート内では「毛筆」を中心としているが、「硬筆」についても同様に、我々の実生活に定着はあまり見受けられないだろう。パソコン・スマートフォンが主流になっていく中で、生活に「書」をわざわざ組み込んでいくケースは少なく、例を挙げるとしてもその頻度は微々たるものである。

私がアンケート結果を見て疑問に思ったのが、このように教育がなされているにも関わらず、反対に日常での「書」の定着率が極めて低すぎることである。活かす場がないかというところではない。問題はその教育方法自体が生活・日常に「活かそうとしていない」ことにあるのだと思う。つまり、まず注目すべき点は、学校における書写教育についてではないかと私は考えた。

第4章 書写教育の改革

ここまで、1章で私自身が持つ問題意識、2章と3章で「書」「手書き文字」の文化・教育に関する魅力と課題点について言及してきた。私はその魅力を伝え、今ある課題（おもに定着率）を解決する方法として、「書写教育の見直し」が必要だと考えている。そこで第4章では、はじめに、その授業・教育方法に常に疑問を抱き、実際に社会や生活が変化してきた中、「書写」を平成6年から20年以上にわたってご教授されてきた鈴木慶子の著書を参考に、これからの書写教育の変革すべき点について言及する。次に、私が理想とする今後の書写教育について述べたい。

4.1 従来の書写教育からの脱却

現代の日本では、ほとんどの人間が書字行動を行わない。それは取り巻く環境・社会が変化してきたことと密接に関係している。例えば、「ワープロやパソコンによる文章作成をしたことがない」という人は、平成初期から比べるとかなり減少した。つまり、それだけ手書き離れが進んだということになる（鈴木、2018）。また、スマートフォンに関しては、日本国内の15歳から49歳の9割以上が所有しており、全体では8割以上という、驚異の所有率をたたき出していることが分かっている[3]。鈴木は、このような手書きが必要のない社会状況において、書写教育が従来のままで良いのかと指摘した。

かつて、私が小学生、また中学生だったころ、従来の書写の教育方法は、教科書を見て、筆順・位置・点画に注意して書くこと、手本通り「きれいに」書くことが重視されていた。鈴木（2018）によると、それは生活の中にまだ手書きの機会が多くあった時代だったため、

より丁寧に書くことが目的とされていたという。一方、現在かというと、児童・生徒、または学生は「一步教室を出れば、スマホ三昧、PC依存の生活」(鈴木, 2018, p.27)とは、まさにその通りである。いくら書く技術面を磨いたとしても、それが授業を飛び出して実生活に生きることが少ない。従来の、手本を書いて写すだけの繰り返しのような教育方法を行う意義はほとんどないのではないか。環境・社会が変化したら、教育にも変化が必要なのだ。

私は、鈴木 of 著書を読みながら考えた。

「そういえば、私自身は学校の書写教育で何を学んできたのだろうか。」

小・中・高と書写や書道の授業を受けてきてはいるが、その中で唯一印象に残っているとすれば、それは「とにかくたくさん書かされた」ということだ。おそらく今の大学生以上の世代は、書写教育で学んだことはほとんど覚えていないはずだ。また、当時、お手本のような字を書くことが目的とされていたことで、綺麗な字を書けない人や、そもそも字を書くことが嫌いな人は、きっと「適当に書いて提出してしまおう」「どうせ綺麗に書けないし、諦めよう」と考えていたと思う。私も、もし書道を趣味としていなければ、書写の授業は特につまらなかっただろうし、苦痛で意味のないものとなっていたかもしれない。「書写は、一般的には、屈辱的な授業である」(鈴木, 2018, p.63)とはこういった点で見えてくる問題点なのだろう。

まずはこのように、「書写」に興味のない、または意味を感じていない児童・生徒に対して、学校はその授業の意義を提示しなければならない。では今後の書写教育は、何から始めればよいのだろうか。

4.2 どのようなことから始めるべきか

そもそも「書写」の目標は技術的側面の達成を目標としているものが多い。その大きな理由はもちろん、パソコン・またスマートフォンが普及する以前は手書き文字が主流になっていたからである。私が理想であると思う書写教育は、「誰もが書くことが好きになる」という目標を掲げた教育だ。人間は楽な方法があるのに、わざわざ不便で、嫌いな方法を選ぶだろうか。否である。デジタルに環境が支配されていく中、「書」を選ぶ理由として残るのは、「好き」であるという気持ちだと考える。よって、書くことに対して価値を見出すことと同時に、「興味」「好き」という感情を児童・生徒に持たせることで、鈴木が述べるような手書きの主体を育てるのだ。それには、「書写」のみならず、他の授業、学校・社会の中の工夫も必要になる。

例えば、字を書くのが嫌になる理由の一つとして、「書くのが疲れる」というものがある。鈴木によると、文字を書く主体を作るには、まず「身体」を作らせることが大切だという。確かに望ましい書字フォームを実践していれば、すぐに疲れたりすることはない。著書にて紹介されていた学生や教員の書字フォームの写真では、ある人は机に突っ伏して書いてい

たり、ある人は筆記具を強く握りしめていたり、またある人は肘をついて書いていたり、望ましいものはなかった。(鈴木, 2018, p.74,75,157) 筆記具を使わない時間が増えていくにつれて、基礎が崩れているのだ。こういった文字を書く時の姿勢、筆記具の持ち方から教え、直していくことが、書の文化度を高めていくことにつながる。

学校の書写の授業では、筆で正しい文字・お手本の文字を写すだけではなく、自分の自由な文字を書かせたり、クラスメイト同士でその文字を見合ったり良かった点について話し合う時間を作ったりすると、児童・生徒たち自身の字に対するコンプレックスが減少し、個性あふれる文字が「好き」になるのではないか。そして、教師も、技術重視の指導を一度見直し、「書」を芸術の一つとして、認め合う関係作りから始めると、「多様性の認め合い」という点では、指導の苦にならないのではないかと思う。そして、書写教育として重要になってくるのは、「国語科」の授業である。ひらがな、カタカナ、漢字の書き方・成り立ちを子どもたちに教える過程がある。鈴木は、この指導は、特に読み書きの力を育てるうえで必要なものであり、その方法は必ず手書きでなければならないと述べている。(鈴木, 2018, p.219)

また、学校の中では、書き初めや年賀状を中心とした、「書」の文化を知る時間が必要であると思う。そのために、「書道文化に関する基礎調査報告書」のアンケートであったような展示会への参加や、手描き文字の掲示物を増やしていくことはとても効果的であると思う。その他に、私自身が小学校時代に体験した印象に残っている方法がある。それは、学校内で郵便局を模した、学校ハガキ運動(仮称)だ。その運動は、給食の牛乳キャップを通貨とし、それで自分でハガキを買って、友達、先生、クラスや学年が違う人に自筆のメッセージを書いて専用ポストにいれると、相手の元に届くというものだった。当時この活動が児童に大人気で、休み時間は生徒みんながハガキを書くことに夢中であった。ハガキを書くこと、またはその返信が来ること、またそのハガキがたまっていくことに、非常にわくわく感や興味が湧くのだ。ここで注目したい点は、絵を描くだけのひとも、宛名・住所を書かなければ相手に届かないということと、生活であり得るような書字行動を自然と児童に経験させられるところ、そして書く内容を自由に考えられるところだ。

このように、学校・社会の書写教育に対する価値を、その日常性と特別性に向けてみることは非常に重要である。日常だけど特別というのは、矛盾しているように感じるかもしれないが、「書」にはそういった点がある。今人々は手紙やハガキを書くことは日常的でありながら主流としていない、だからこそ、その特別性に焦点を当てる。

書写教育は、社会、学校、家庭の中に繋がり、生きることによって意味を成すのである。書く目的は「文字を綺麗に書けるようになるため」、「漢字を覚えるため」、「後で忘れないようにするため」、「人を喜ばせるため」、「大切なことを伝えるため」、何でも良い。それを日常生活の中の一つとして取り入れ活かそうとする姿勢が、人間の考える力を豊かにしていくものなのではないだろうか。

5章 まとめ

論文中に述べてきたように、デジタル化・効率化が進めば進むほど、生活範囲内での手書きの機会は減少してきた。実際に、山下千晶先生との対話で「書写の授業が減っている」「日常に書く機会があまりない」という問題点が挙げられ、日本書道ユネスコ登録推進協議会による「書道文化に関する基礎調査報告書」では、書字行動の定着率の低さがみられた。私は、この状況を打開するためには、まず若い世代から「書」の文化の定着を図ることが重要であると考えた。私が例に挙げたような書写教育の改革をはじめ、学校全体、そこから社会全体の意識を変えることを目標とする。そうすることで、少しでも書字行動の道が開けるのではないかと考える。

私は先日、ある小学校で生徒一人につき一枚タブレットが導入されているというニュースをふと目にした。[5]「ついにそういう時代が来たか。」と思った。私の危惧していることが、利便性の激化とともにゆっくり押し寄せているのである。そのうち、子どもたちは学校に鉛筆、消しゴムを持ってこなくても授業が受けられるような時代が来るだろう。人々は次第に、何も考えることなしに予測変換にしたがって文章を書き始める、いや「打ち」始める時代が来るかもしれない。そのような中で、我々人間が唯一できる「文字を書く」という行動を、皆さんにぜひ誇りに思ってもらいたい。そして、書くことを好きになり、大切な文化として、未来に受け継がれていってほしいと心から願う。

謝辞

本論文を進めるにあたり、ご指導をいただき、最後まで温かく見守って下さった指導教員の牲川波都季准教授に厚く御礼を申し上げます。また、お忙しい中対話にご協力くださった山下千晶先生、そして進級論文の作成時から多くの助言や貴重な意見を下さった牲川ゼミの皆さまに、心から感謝申し上げます。

引用文献：

[1] 鈴木慶子 (2018) 『文字を手書きさせる教育—「書写」に何ができるのか』 東信堂

[2] 日本書道ユネスコ登録推進協議会「書道文化に関する基礎調査報告書（付）書道団体実態調査」2018年（最終閲覧日：2019年10月31日）

<http://www.shodoisan.jp/images/152.pdf>

[3] 「70歳以上のスマートフォン所有率が5割を突破、女性20~24歳は100%に【ドコモ調べ】」YAHOO JAPAN ニュース 2019年6月18日（最終閲覧日：2019年11月13日）

<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20190618-00000002-webtan-sci>

[4] 「日本書道ユネスコ登録推進協議会」日本書道ユネスコ登録推進協議会 2019年9月12日（最終閲覧日：2019年10月31日）

<http://www.shodoisan.jp/>

[5] 「iPadを生徒全員に導入した名門小、学校も驚く「学びの質の向上」」マイナビニュース 2019年12月2日（最終閲覧日：2019年12月10日）

<https://news.mynavi.jp/article/20191202-931769/>

1. 研究動機

私は若者言葉に愛着があり、日常で周りの人より高い頻度でそういった言葉を使用している。若者言葉は自分にとって会話する際に欠かせない言葉の一つだと思っている。その理由は、友人や仲間とのコミュニケーションがより楽しく、円滑に行えるためである。自分たちの間でしか理解できない言葉を使用することで、自然に集団意識や団結力が芽生えると私は感じる。

一方で、ゼミで発表した際には、若者言葉を使用するという人は少なかった。また、戦後以降、若者言葉に対して拒否反応を持つ若者言葉が一定数いることが分かっている。それは現在でも変わっておらず、若者言葉に対し否定的な言語意識を持つ人が身近にいる。

しかし、「それな」や「あーね」といった同調を示す若者言葉は多くの若者が使用していると私は考える。実際に、私のバイト先も同期メンバー同士で若者言葉を使用することが多くある。さらにその結果として、上司とのラインや会話の中でも若者言葉が使用されるようになった。こういった若者言葉は多用しやすく、また、日本人の特徴である集団意識も関連し、使用され続けているのではないかと。

言葉遣いの悪化や言葉の乱れに繋がるという指摘もあるが、本稿では、若者言葉は意義のある重要なツールであることを仮説とし、それを検証していきたい。

2. 若者言葉とは何か

2-1. 基本的な定義

若者言葉の代表的研究者である米川によると、若者言葉とは「中学生から 30 歳前後の男女が、仲間内で、会話促進・娯楽・連帯・イメージ・伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う。規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の語や言い回しである。個々の語について個人の使用、言語意識にかなり差がある。また時代によっても違う」とされている(米川, 1996, p12)。

本稿でもこの定義に従うこととする。なお、若者言葉と同様の意味を持つ用語として「若者語」があるが、本稿では先行研究からの直接引用箇所を除き、全て「若者言葉」で統一する。

2-2. 若者言葉の歴史

まず本節では、米川（1998, p184）の第7章に基づき、これまでの若者言葉の変遷を概括する。

2-2-1. 明治時代の男子学生の言葉

明治時代の前半、日本では文明開化によって西洋文明が受け入れられるようになった。その影響により、英語を学ぶ学生の数が上昇し、外国人教授が増えた。その結果、「書生言葉」が広がっていった。書生言葉は会話の中で外来語や外国語を多用するものであり、現在の例でいえば、芸能人のルー大柴のような話し方である。

2-2-2. 明治時代の女子学生の言葉

明治末頃になるまでは、男子と比較して女子の就学率が低く、官立ではなくキリスト教主義の女学校が栄えていた。その結果、「てだよわ言葉」が広がっていった。てだよわ言葉は、文末に「てよ」「だわ」をつけて話すのが特徴である。当時この話し方は下品な言葉であると新聞や雑誌で取り上げられていた。どの時代においても、若者言葉は批判されやすいものだといえる。

てだよわ言葉はこの時代に始まったことではなく、100年以上前から使用されている。その他に、明治時代に女子学生が使用している言葉として、男子学生の言葉を真似て「オレ」「メシ」「クウ」といった語が流行していた。これらの言葉は現代でも継続して使用されている。

また、恋愛や家庭に関する外来語「スイートホーム」「ミス」「ミセス」「ラブ」「ロマンチック」といった言葉も当時の女子学生は好んで使用していた。

2-2-3. 大正時代から昭和20年までの男子学生の言葉

大正から昭和20年ごろにかけては、男子学生の中でも中学生・高校生・大学生それぞれで使用する言葉に変化がみられた。中学生は英語、高校生、大学生はドイツ語を頻繁に使用しており、履修科目の違いによってみられた変化であるといえる。

旧制高等学校では外国語学校と言われるほどに外国語が偏重され、男子学生はドイツ語を日常的に頻繁に使用するようになった。この結果、現代で誰もが使用する「アルバイト」「サボる」といった学業に関する言葉が生まれた。

2-2-4. 大正時代から昭和20年までの女子学生の言葉

この頃は、国家観念に基づく良妻賢母主義教育が唱えられていたことで、女子学生の言葉に大きな影響を及ぼした。その一つ目に、「遊ばせ言葉」がある。東京華族の婦人・少女が日常的に使用していた言葉で、「ごきげんよう」「恐れ入ります」が例として挙げられる。

現在でも「恐れ入ります」は飲食店の店員や立場が上の人に対して一般的に使用されて

いることから、遊ばせ言葉も継続して使用されているものが少なからずある。

2-2-5. 昭和初期の若者言葉

この時代には「モダン」が流行語となっていた。その結果、『モダン用語辞典』（喜多壮一郎著、1930年発行）を主として、様々なモダンを付した辞典が出版された。他にも、この頃から使用され始めた若者言葉の一つに「もち」がある。勿論を略したものであるが、同意を示す目的でも使用される。この若者言葉は現在でも継続して使用されている。

2-2-6. 1945～1960年の男子学生の言葉

敗戦後、教育の方針が一転し、男女共学となったことで、男女平等の思想が広まった。しかし、未だにこの時代でも男女で言葉の違いがあった。この時代の男子学生の間では、ドイツ語や麻雀、パチンコ用語からの借用や、不良の隠語が流行していた。現在でも使用されている若者言葉は見つからなかった。

2-2-7. 1945～1960年の女子学生の言葉

戦後、男女共学になったことで、女性の男性を見る目が以前より厳しくなった。この頃の女子学生の間では、巧みな造語が頻繁に使用されていた。例として、あいたくてあいたくてしょうがないを省略した「IIC」が挙げられる。お洒落でユーモアあふれる若者言葉が多く見受けられた。

2-2-8. 1970～1990年の若者言葉

1970年代にもなると、現在でも使用されている若者言葉が続々と登場してくる。たとえば、スケバン用語の「マブダチ」「ダサイ」が挙げられる。また、形容する語が新たに造り出された時代でもあった。「ムズイ」や「えぐい」、「きもい」は、現代においても一般的に広く若者に使用される若者言葉である。

1980年代は会話のテンポを重視する傾向が高かった。「スーパーMMC」がこの時代の若者言葉の例として挙げられる。この言葉は、非常にモテるヤンエグという意味で使用されていた。「MMC」はもててもてて困るの頭文字をとったものである。

1990年代になると聞きなじみのある若者言葉が頻出する。この頃はバブルが崩壊したことも起因しているのか、治安の悪い語が多い。「援助交際」や「きまる」（ガスやシンナーを吸ってふらふらになること）、「させ子」（誰とでも性行為をする女の子のこと）が代表として挙げられる。

2-3. 若者言葉と俗語

俗語は大きな括りでカテゴライズされているもので、俗語の中に若者言葉が含まれている。そのため、ここではまず米川（1998）の『若者語を科学する』を参考に、俗語を読み

解く (p. 1-17)。

俗語の意味は古典的な意味を除いて学者間でも異なっている。学者によって俗語の解釈が異なっているのは図 1 から見ても明白である。

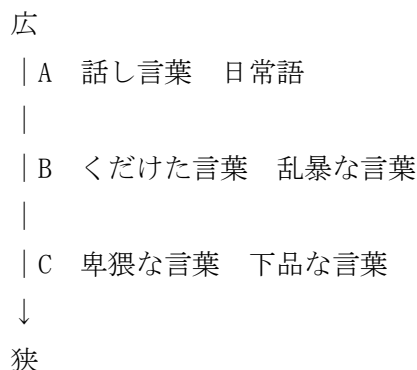


図 1 俗語の解釈の違い

「俗語」とは話し言葉の中で公の場、改まった場では使えない(使いにくい)、語形・語源・意味・用法・使用者などの点が、俗っぽい・くださった・下品・卑猥・荒っぽい・誤っているなどと意識される語や言い回しをさす。これが若者言葉である。

多くの場合、改まった場で使う同意語または同意の表現を持っている。主な俗語の候補語に若者語・業界用語・隠語・卑語・流行語・蔑視語の大部分あるいは一部分がある。

若者語、その中でもキャンパス言葉はほとんどが俗語である。「般教」(一般教養科目)、「カテ教」(家庭教師)「ブッチ」(サボる)などが挙げられる。若者語のようにその世代でなければ使用されない言葉もあるが、俗語という全体の括りにした場合、全ての人々が俗語を持ち得る。

俗語は世間一般に広く使用されているかどうかは関係しないため、若者語・隠語といった語となると、きわめて限定された集団のみに通用する場合がある。また、俗語かどうかという判断は個人的、主観的なもので、その人の言語意識による。これは辞書間で俗語の定義付けに違いがあることからいえる。

2-4. 若者言葉と新語

俗語に加えて、若者言葉は新語にも包括されている。そのためここでは米川 (1989) の『新語・流行語』を参考に、新語を読み解く (p. 11-14)。若者言葉をより具体的にイメージしやすくする。

『国語学大辞典』(国語学会著、1980年発行)によると、新語は「新しくその言語社会に現れた、又は既存の事物や概念を新しく表現するために作られ、または正当なその語の自然な語義変化とは言いがたい新しい意義を与えられて、その存在権を社会によって承認さ

れた語」と定義されている。

3. 若者言葉の批判と機能

3-1. 若者言葉の言語意識の差

以上概括した通り、明治以降に限っても、いつの時代にも若者言葉が存在した。しかしながら、若者言葉は一般の言葉とは異なり、同世代、同学歴、同性であっても語の使用・語の言語意識に大きな違いがある。米川(1998)が梅花女子大学文学部2年生137人に若者言葉51語をAよく使う、B時々使う、C知っている、または聞いたことがないので使用しない、D意味がわからない、または知っているが使わない、E以前使用していたが今は使用しない、の5分類のいずれかに分けさせた。

「けばい」を使用すると答えた学生(A+B)が95%であるのに対し、「クリパ」は使わないと答えた学生(C+D+E)が75.2%と使用に大きな差がみられた。「クリパ」に関しては、知っていても使わない人(C)が27.7%、すなわち4人に1人いる。これは、「クリパ」ということばに対してマイナスな感情を持っているためだと米川は推察している。

この結果から、若者言葉は個々の語ごとに違った様相をもち、個人の言語意識と非常に密接して結びつき、存在しているものであることがわかった。

では、なぜ若者は若者言葉を使用するのか？若者言葉の機能を知ることで明らかになるだろう。これを明らかにするためには、若者言葉の機能に着目する必要がある。そのため、次の章で詳しく述べる。

3-2. 若者言葉の機能

米川(1998)によれば、若者言葉は仲間内での会話で使用されるのが一般的であるコミュニケーションの機能から考えると、若者言葉の機能は娯楽機能・会話促進機能・連帯機能・イメージ伝達機能・隠蔽機能・緩衝機能・浄化機能の7つに分類できる。以下、米川(1998)より、この7つの機能をまとめる。

娯楽機能は若者言葉を使用することで会話に笑いを生みだし、楽しむ機能である。これには2種類あり、第1は造語における娯楽、第2に使用による娯楽である。

会話促進機能は娯楽機能をさらに進め、若者言葉を使用することで会話を盛り上げたり略語を使ってテンポを良くしたりする機能である。若者言葉には略語を多用することで会話のテンポを速め、会話全体を促進する働きもある。インストラクターを「イントラ」、エレベーターガールを「エレガ」と略して使用することが例として挙げられる。娯楽機能・会話促進機能は会話のノリを求める若者にとって最も重要な機能である。

連帯機能はくだけた若者言葉、仲間内の言葉を使用することで親近感を持たせ、ウチの人という仲間意識を強める機能である。仲間意識を強化させる反面、仲間以外の者を疎外する機能も持ち合わせている。

イメージ伝達機能は視覚的、または聴覚的表現を用いて瞬間的に物事のイメージを伝え

る機能である。「目が点になる」が例として挙げられる。

隠蔽機能は何かを聞かれた際、既存の語だと都合の悪いことを言い換え、隠す機能である。

緩衝機能は相手の感情を害したり傷つけたりすることになるのを避け、相手への印象を和らげる機能であり、言葉の暴力を緩和している。

浄化機能は若者言葉を使用することで不快な感情を発散させ、浄化する機能である。若者言葉の中には人に対するマイナス評価語が多く、面と向かってはそれを言わないが、仲間内で陰口をたたくときに使って感情を発散させている。「タカビー」（高飛車の意味）があげられる。

4. 同じ位相の連帯感を深める若者言葉

4-1. 会話調査1の目的と概要

若者言葉に対する言語意識やその実態を理解するためには、実際に若者言葉を使用している者同士が会話をしているシーンを記録し、録音することが不可欠である。従って、普段から私と一緒に若者言葉を頻繁に使用している友人とともに会話し、これを研究データに生かすことにした。

本調査はマリィ(2007)の方法を基に、参加者を尊重したデータ収集法を取り、当事者性を強調する研究法を用いる。当事者を強調する研究法とは、調査に参加する人の価値観や意見を強く反映した研究方法のことである(p. 63)。この録音データには私も参加しており、他の友人3人と同じように会話した。

友人A・B・Cに対しては、若者言葉に関するデータのために会話を録音させてもらうことを説明し、匿名とした上で公開する許可を得た。また、友人A・B・Cには普段通り、録音していることを全く気にせず意見を言ってほしいことは事前も伝えておいた。

また私自身は、この研究に目的を持って参加していることから、他の友人と同様の立場で無くなることを危惧し、会話の際には出来る限り普段通り何も意識せず参加するように心がけた。普段とは違う会話をを行い、そのデータを録音しても意味のないものになってしまうと考えたためである。

この会話は2019年8月13日午後7時頃から、地元で私たち4人が頻繁にアルバイト終わりに通っていた居酒屋で行った。参加してくれた3人は第1章の研究動機で触れたアルバイト先の同期で、元々は中学生の頃、部活動が同じだったため仲良くしていたメンバーである。4人で集まるのは1年ぶりであった。

参加してくれた3人は4-2以降、A・B・Cとし、私はIと記述する。また、会話分析した上で発話者が分からなかった場合はXと表記する。4-2では、ボイスメモで録音した2時間程度の会話から、若者言葉が顕著に表れている部分を抜粋し、マリィ(2007)の談話資料表記寸法の表1に基づき、記述する。ただし、若者言葉を分析するにあたり、会話中で一般的に普及している若者言葉は太字で表し、私たち4人の中でのみ使用している造語

には下線を引いた。また会話中の若者言葉の表記方法は、参加メンバーが普段 SNS 等で使用しているものを用いる。

I : 発話者 (仮名) A、B、C、I
X : 発話者が特定出来ず
(C) : 不明な発話・発話者
複数 : 複数の話者による発話
・ : 語彙の一分のみが発話された発話
[: 同時に発せられる発話
= : 発話が間もない状態で続く
、 : 平常イントネーション
? : 上昇イントネーション
。 : 下降イントネーション
— : 伸ばされた音節
<FF> : 大きく発せられた発話
<PP> : 静かに発せられた発話
<CR CR> : 徐々に大きく発せられる発話
<DIM DIM> : 徐々に静かに発せられる発話
<AA> : 早く発せられた発話
<LL> : ゆっくり発せられた発話
<WH> : つぶやき
<QQ> : 引用
<HH> : 高く発せられた発話
<DD> : 低く発せられた発話
<SS> : 強く
<UU> : 歌調
<@@> : 笑いながら発せられた発話 (<@ははは@>)
<咳き込む> : せきなど
<hx> : 息を吐く
<XXXX(6)> : 聞き取れない発話(6 秒間)
<qq(地名)> : プライバシーのため地名などの代わりに表記
(2) : 秒単位で沈黙を示す

表 1 談話資料の表記寸法

4-2. 調査結果

会話 1

久しぶりに4人で集まったこともあり初めの方は少し緊張していたが、食事を始めて30分程度経ち、緊張感がほぐれ、お互いの近況報告を兼ねて就職活動の進行具合について話しているシーンである。AとBは就職活動が無事終わっている一方で、CとIは未だ内定が出ておらず、不安な気持ちが現れていた。

A:「正味大変やった、就活。」

B:「えらいまじで」

A:「<XXX>っただ私も言うて、13社くらいしか受けてへんし。」

B:「<XXXXXX>私も12個くらい。」

I:「やんな、もう<SむりむりS>」

C:「わかる。」

A:「<@ははははは@>」

I:「もう諦めてる。」

C:「私も。」

I:「<XXXX>てか金髪の時点で就活なんかできるわけない、終わってんねんて。」

C:「<F人生オワタF>」

X:「<FわかりみF>」

B:「わかりみがふかみざわ。」

会話1におけるXの「わかりみ」、それに対するMの返答である「わかりみがふかみざわ」は、一見何の意味も持たない無駄な会話に思える。しかし、場面①においてXとBが「わかりみ」「わかりみがふかみざわ」と反応したことで、YとCの就職活動がうまくいっていないことに対する不安に共感している。

また、この若者言葉は「大丈夫だよ」「落ち着いていこう」といったニュアンスも含んでいると私は感じた。CとIの心を傷付けないように、かつ場を盛り下げないように配慮し、出てきた若者言葉だったのではないかと思う。そのため、会話1における「わかりみ」「わかりみがふかみざわ」は、緩衝機能を持っている。

会話 2

お互いの就職活動に関する話が終わり、最近のアルバイト事情について話していたシーンである。Cは接待飲食業（いわゆる水商売）でアルバイトをしており、彼女の売り上げが70人中10位以内にランクインしたという話をしているところで若者言葉が自然と出てきていた。

話し始めて1時間程度経過し、場の雰囲気は少しずつ盛り上がっていた。

C:「70人中ナンバー<HテンH>やから。」
A:「<Sはっ!?S><@やばすぎ@>」
I:「やばないお前。」
B:「<XX>やーばーそれはやばい。」
C:「まじでやばたにえん、」
C:「ほんま私やばい。」

会話2における4人全員の“やばい”の使用は、Cの接待飲食業の売り上げが非常に良く、強い驚きを表現している。この場面では、テンションが上がり、4人の声が大きくなっている。そこで、より場を盛り上がると考え、若者言葉を使用しているのである。そのため、会話2における「やばい」は、娯楽機能と会話促進機能を持ち合わせている。

「やばたにえん」は元々ある若者言葉ではなく、Bが作り出した造語である。従って、娯楽機能に当たる。意味合いは「やばい」に比べ、会話を円滑に、かつ面白おかしくする目的で使用している。「やばたにえん」は4人の間でのみ、2~3か月前から使用するようになっていた。

会話3

お酒を飲んでいて、この辺りから酔いが回り始め、Iが誤って飲み物をこぼした際に、煽りや笑いを生む目的で若者言葉が使用されていた。

I:「あっやべ<DIMめっちゃこぼした、めっちゃDIM>」
B:「びちゃびちゃいってんでお前、」
C:「水浴び〜。」
I:「<DおいコラD>」
B:「バッジョイ、」
C:「日本語でおけまる水産、」
X:「<@@@@><XX>かよ」
I:「<ワロタ>」
B:「<ワロタ>」

会話3では若者言葉が会話中で連続して飛び交っている。「バッジョイ」という言葉は深い意味を持たない、Bが作った造語である。Bは自分自身が作り出した造語を用いることで会話に笑いを生み、また、会話のテンポを損なわず、場を盛り上げている。そのため「バッジョイ」は娯楽機能を持っているといえる。

「おけまる水産」「ワロタ」は造語ではない一般的にも用いられる若者言葉であり、使

用することで、会話のテンポを速め、団結力を無意識に高める目的があるといえる。

会話4

4人の恋愛事情に関する会話が盛り上がり、Cが好きな芸能人の画像をスマートフォンで見せた際、頻繁に若者言葉が現れていた。

C:「え～私の顔のタイプはこれやねん」

C:「え～これはあの・・・メンヘラに殺されそうになった人に似てる」

A:「<@ははは!!!!@>」

B:「**がち**かよ。」

C:「私**B専**やからさあこんなんが好き」

I:「それは100、**B専**やわしんど」

B:「Cは昔から**B専**やもんな」

C:「**草**、やめて」

B:「Cちゃん…」

会話4の「メンヘラ」は会話の中で流行の若者言葉を使用することで会話を促進し、場を盛り上げており、会話促進機能を持っている。若者たち同士でしか通じない言葉のニュアンスを理解し、会話を円滑にしている。

「B専」は浄化機能を顕著に示している。この若者言葉は昔よく使用された「タカピー」のように、仲間同士の会話中でネガティブな意味合いを示す目的として使用されている。Cの好きな顔のタイプを否定することは、Cを否定しているのではなく、Cに関係のない芸能人を批判するために使用している。

仲間内で面と向かわない相手に対し、マイナスな感情を発散させる目的で使用していることが明白である。そのため、浄化機能に当てはまる。

会話5

会話4の続きで、「メンヘラ」について詳しく話していたシーンである。

元々自分達自身、メンヘラ気質があると考えているCとIが「メンヘラ」の性格を熱弁している。それに対し、AとBが若者言葉を用いてYとCに反応することで、場を盛り上げている。

I:「だって、<CR 死ぬほど好きなんやん、相手のことが、そういうことやろ? CR>」

C:「**わかりみがマリアナ海溝**、」

I:「自分のこと考えてくれてるんや、じゃあ私ももっと変わらなってなる。」

C:「それが**メンヘラ**<hx>」

A:「名言多いな C。」

C:「だってメンヘラやもん。」

A:「メンヘラって治せへんのかな？」

C:「治んねーよ<@バカか@>」

I:「メンヘラは一生の病気、精神疾患。」

C:「<S まじで S>メンヘラは精神疾患。<A 自分のメンタルが<xx>た時にメンヘラが爆発する、それが癖づいて慢性化 A>」

I:「メンヘラ闘病記かかなもう<@ははは@>」

B:「やばたにえん」

C:「わろたにえん」

X:「の」

複数:「<F くそ茶漬け F>」

会話5における「わかりみがマリアナ海溝」はイメージ伝達機能・連帯機能を兼ね備えている。本来、若者言葉は省略するパターン、いわゆる略語が多いにもかかわらず、この若者言葉は文字数が非常に長い。そのため会話のテンポを損なわせると感じてしまうかもしれない。しかし、「わかりみ」に「マリアナ海溝」をくっつけることで、どの程度深く共感しているのかをイメージしやすい。そのため、「わかりみがマリアナ海溝」はイメージ伝達機能・連帯機能をフル活用した若者言葉といえる。

「やばたにえん」「わろたにえんのくそ茶漬け」は無意識のうちに団結力を高める目的で使用されている若者言葉の代表格である。単にその若者言葉の意味を理解しているだけでなく、それに呼応する言葉を瞬時に無意識せず4人全員で発することが出来るのは簡単なことではない。そのため、私は「やばたにえん」「わろたにえんのくそ茶漬け」は今回の録音で使用された若者言葉の中で最も団結力を高める機能を持っている。

会話6

夜11時頃になり、おそらく4人共がそろそろ解散しようと考えていた。4人共、忙しいため、しばらく再度会うことが出来ないことから少し寂しい雰囲気は漂っていた。

そこで若者言葉を使用することにより、場の雰囲気を明るくし、和ませようと無意識に多くの若者言葉が出てきていた。

C:「そーいやA あした練習やったっけ？大丈夫なん」

A:「明日6時起きやねん」

C:「それいける！？耐えてる！？」

I:「私が起こしたるわどうせ起きてるし」

A:「いやもうあきらめてるからwwwwははwwww」

- C:「やばいって・・・」
 B:「わ、わるた大分 ^{まんじ} だな」
 I:「^{まんじ} ってくそ懐かしいねんけど無理バイバイ今まで」
 B:「ありがとう今まで愛してた」
 I:「分かる バッジョイ ぐっばいマン」
 C:「心底友達辞めたい」

会話6で使用された「^{まんじ}」は、「やばい」と同じ意味で使用される若者言葉であり、様々な用途で用いられる。場面⑥の会話での「^{まんじ}」の持つ機能は連帯機能である。元々この若者言葉は私たち4人同じアルバイト先で働いていた際に頻繁に使用していた。そのため、どういったシチュエーションで使用するのかということ私たち4人のみが理解し、使用している。

詳しく説明すると、会話が促進され、相手にもその言葉の意味が理解してもらえる状況であり、若者言葉に寛容な心を持つ者だと認識出来たときに使用している。つまりこの若者言葉は、無意識のうちに団結意識を生み出し、仲間以外の者を排除する目的で使用されているのである。

「マン」は特に意味を持たない若者言葉であり、この会話中では、緩衝機能が働いている。この言葉を使用することで、言葉のニュアンスをマイルドにすることが出来るためである。

4-3. 考察

以前から若者言葉を使用している者同士の会話分析により、若者言葉には親近感・連帯感をもっている同世代の者同士が、さらにそれを深めるという機能を持っていることが明らかとなった。連帯機能をもつ若者言葉としては「わかりみがマリアナ海溝」や「^{まんじ}」が挙げられる。この2つの若者言葉は仲間同士でしか言葉の意味を理解できないことから、仲間以外の者を疎外し、より仲間意識を強める働きを持っているといえる。そのため、連帯感を深める目的で使用されていることが明白である。

また、「やばい」、「がち」、「草」、「おけまる水産」、「ワロタ」、「やばたにえん」、「わるたにえん」、「くそ茶漬け」や「わかりみ」、「わかりみがふかみざわ」、「マン」、「オワタ」といった若者言葉は、会話をスムーズにする、相手に対する同調、場の雰囲気や和ませる機能（会話促進機能、緩衝機能）を持っていることも判明した。これらは直接連帯感を深めさせる若者言葉ではないが、使うことですでに作られていた連帯感がさらに深まる。これらから、若者言葉は連帯感を深め、相手に対する同調、理解を示す上で使用されるケースが多いことが分かった。

そうした連帯感を強化する若者言葉として、本会話データで特に注目すべきなのは、造語の多さである。その例として、Bの作り出した「バッジョイ」や「やばたにえん」とい

った若者言葉が挙げられる。このような言葉を編み出すためには、まずは前提としてお互いがその言葉の意味を予想できることが必要であり、その予想に基づいて実際に言葉を使い続けていくうちに、メンバー内に根付いていくと考えられる。

一般的なイメージとして、若者言葉は“流行していて、大勢の人が使用しているから使用する”という認識を持つ人が多い。しかし、録音し改めて詳しく聞くことで、現在流行している若者言葉だけでなく、自分達で生み出した若者言葉も頻繁に使用していた点は非常に興味深かった。

一般的に普及している若者言葉と比較すると、こうした造語の若者言葉は使用する相手が限られる。そのため、造語の若者言葉を使用することが出来るのは非常に密な関係で、距離が近く、位相の人でなければ難しい。実際に、5章の上司とのインタビュー調査においては造語を使用するケースが無かったことから明らかである。

また、この会話を通して、相手に対する同情を示す若者言葉が頻出していることに私は気づいた。会話1～6で使用された若者言葉は全部で35回使用であるが、その中で、同調や場の雰囲気のを和ませる目的で使用されているものが14回もあった(会話促進機能、緩衝機能にあたる若者言葉)。たとえば、会話1の「わかりみ」、「わかりみがふかみざわ」や、会話3の「ワロタ」、会話5の「わかりみがマリアナ海溝」が挙げられる。

このデータからも分かるように、若者言葉の機能という視点で考えた際、会話をスムーズにすること、相手に対する同調、場の雰囲気のを和ませることの3つが使用する上で重要視しているのだと私は感じた。

機能	機能の説明	若者言葉	若者言葉の説明
娯楽機能	会話に笑いを生む。 造語による娯楽、 使用による娯楽。	<u>やばたにえん</u>	やばい+たにえん(永谷園のお茶漬けをもじったもの)であり、やばいと意味は同じである。
		<u>バジジョイ</u>	友人Bが作り出した造語であり、一般的に用いられている若者言葉ではない。Good jobを語呂良くさせるために友人Bがグジジョイと使用しはじめたことがきっかけであり、バジジョイはBad jobを意味する。ネガティブな意味で用いられることが多い。
会話促進機能	娯楽機能を更に進めたもの。 会話を盛り上げたり、略語を使って	やばい	ポジティブな意味でもネガティブな意味でも使用する。この場面ではやばいの持つ意味合いは危険だ、に近い。

	テンポを良くしたりする。	がち	本当に、という意味で使用する。「マジ」と似た使用方法である。
		草	笑うことを意味する。
		おけまる水産	オッケーに居酒屋チェーン店である磯丸水産をくっつけて出来た言葉である。意味はオッケーと同じ。
		ワロタ	笑ったを省略したものであり、意味は笑ったと同じである。
		<u>やばたにえん</u>	やばい+たにえん（永谷園のお茶漬けをもじったもの）であり、やばいと意味は同じである。
		わろたにえん	「やばたにえん」同様に、わらったの省略である「わろた」と永谷園をくっつけたもの。意味は「笑った」と同義。
		くそ茶漬け	永谷園のお茶漬けをもじったもので、この語そのもの意味を持たない。
連帯機能	仲間内の言葉を使用することで親近感を持たせ、仲間意識を強める機能。 仲間以外を疎外する機能も持ち合わせている。	わかりみがマリアナ海溝	わかりみが深いを更に変化させ、深さがマリアナ海溝並であるという意味で使用している。非常に、非常にわかる、という意味。
		^{まんじ} 卍	やばいと似た意味で使用されている若者言葉であり、マジが派生して卍として使用されるようになったという諸説がある。
緩衝機能	相手の感情を害したり傷つけたりすることを避け、相手への印象を和らげる機能。	わかりみ	「分かる」に“み”をつけたもの。意味は分かると同じ。
		わかりみがふかみざわ	「わかりみ」に「深い+み」、「ざわ」をつけたもの。深みは強調を意味するため、「非常によく分かる」という意味である。「わかりみ」の「み」や「ふかみざわ」の「ざわ」そのものに意味はない。
		マン	アンパン「マン」やウルトラ「マ

			ン」からとったもの。意味を持たない若者言葉である。
		オワタ	ネガティブな意味合いで使用する。「終わった」をもじったもの。
浄化機能	使用することで不快な感情を発散させ、浄化する機能。	B 専	不細工専門を省略したもので、不細工が好みの人に使用する。
		メンヘラ	最近若者の中で非常に頻繁に使用されている言葉である。元々はメンタルヘルスからきている。どこか精神疾患を持っているような、精神的に安定していない人を意味して使用する。
イメージ 伝達機能	視覚的、または聴覚的表現を用いて瞬間的に物事のイメージを伝える機能。	わかりみがマリアナ海溝	わかりみが深いを更に変化させ、深さがマリアナ海溝並であるという意味で使用している。非常にわかる、という意味。

表2 若者言葉それぞれの機能性
(下線を引いた若者言葉は会話参加者による造語であることを示す)

5. 調査 2-異なる位相間の関係性を作り出す若者言葉

5-1. インタビュー調査の目的と概要

4章では、同じ位相同士で若者言葉を使用する際の機能を明らかにしたが、異なる位相間で会話する際でも若者言葉は機能するのかわせていない。そこで、アルバイト先の年齢の離れた上司2人に若者言葉に対する言語意識を調査するため、インタビューを行った。参加してくれた上司2人は以下、D・Eとする。

インタビュー相手は、私と同じように若者言葉を話すアルバイト先である、スーパーの男性社員D(30代半ばくらい)・E(40代後半くらい)である。実際に上司の方がこういった言葉を使用している機会があり、私たちの発話を真似している理由が気になったため、対話相手に選んだ。

Dは誰にでも優しい上司であり、積極的には若者言葉を使わない。しかし、私たちに合わせて会話中、時折そういった言葉を使用し、笑顔で受け入れてくれる。

Eはノリの良いお父さんのような人である。若者言葉を使う頻度が非常に高く、会話一回につき一つはそういった言葉を混ぜて話している印象である。

D・Eの順でそれぞれ一人ずつ、1時間程度のインタビューをさせていただいた。2018年10月20日の午後1時頃、アルバイト先の事務室を借りて行った。5-2では、4章と

同様、ボイスメモで録音した1時間程度の会話を抜粋し、若者言葉に対する言語意識について顕著に表れていた部分を記述した。

5-2. 調査結果

5-2-1. インタビュー調査1

私：「私たちが使っている若者言葉についてどういう風に思っていますか？」

D：「うーん。時と場合によるかなあ。使っていい時とダメな時がきちんと使い分け出来ている分には問題ないんじゃないかなって思う」

私：「私も使えるって思った時しか使ってないです。でも、一般的に上司の方に若者言葉を使うのはちょっと失礼かなって思うんですよね。」

D：「あーまあ、うんそれはそうだね。それはちょっとね。」

私：「そんな勇氣あるわけじゃないですよ、それこそ^{まんじ}です」

D：「出た^{まんじ}。笑 正直最初はね、僕らも、え、何言ってるんだ、あの言葉なんだ？って思ってたよ。」

私：「そりゃそうですよね。バイト同士で使ってるだけでも気になりますよね。」

D：「そうそう。だけど使ってるの聞いてるうちに気になっちゃってなんとなくニュアンス掴んでって。」

私：「最初の衝撃はLINEで上司の方が^{まんじ}を使ってた時でした。」

D：「そういえばそんなのあったね。笑 まあ、それがある種のコミュニケーションになるかなって思ったからだね、たぶん。若者言葉は自分と離れてる人をつなぐツールになるんじゃないかな。」

私：「じゃあDさんは若者言葉は別に使ってオッケーって考えてるってことですか？」

D：「うん、さっきも言ったみたいに時と場合を理解できるなら全然あり。僕はあつていいと思うけどね、若者言葉。お互い使ったら関係性が築けるものだよな。」

私：「はい、なんか、使ってくれれば距離が縮まった感じがしてこっち的に嬉しいです。笑 使う人選びますけどね、店長とか絶対無理です！」

D：「ちゃんと理解できてんなら、全然いいと思う、使って。寧ろ何がダメなのよって感じ。というかないほうがいって言ったところで絶対消えることないよね。笑」

Dが「使っていい時とダメな時がきちんと使い分け出来ている分には問題ない」と言っていることから、若者言葉に対し、ネガティブな印象はないことが分かる。

また、「使ってるの聞いてるうちに気になっちゃって」という部分から、Dは若者が若者言葉を使用することに対し興味を持ち、自分から若者への距離を近づくために歩み寄る姿勢がうかがえる。

若者言葉は同じ位相同士でのみ使用するものであると私は考えていた。しかし、「若者言葉は自分と離れてる人をつなぐツール」と話していることから、若者言葉は立場や年齢

の離れた人同士でも使用することで距離を縮める機能を持っていることがDとの会話から明らかとなった。

5-2-2. インタビュー調査2

私：「なんでEさんは私たちの言葉を真似て使うようになったんですか？」

E：「コミュニケーションをとるためかな。世代が違くと距離が離れちゃうやん。最初、会話するためのスタートとして、こっちが詰め寄って、相手のペースに合わせあげよって思っただけ。」

私：「なるほど。道理でEとは喋りやすいわけですね。」

E：「まあ、川口さんたちの使ってる言葉の意味理解してないけどね。ただ使ってみてるだけ。」

私：「え！？分かってなかったんですか？意味わかって使ってると思い込んでました！」

E：「共通点？接点？を作るためにとりあえず合わせてみようって感じ」

私：「若者言葉、職場以外でも使ったりしますか？」

E：「いや、はっきり言って全く使わない。笑 職場でだけ、若い子とも距離を縮めた方が仕事楽しいかなって思って使ってる。」

私：「てっきりプライベートでも使ってるんじゃないかと思い込んでました…」

E：「いや、それはもうやばいおっさんやん。笑」

私：「ところで、Eさんは若者言葉は必要だと思いますか？」

E：「うん、コミュニケーションツールとして必要なものじゃないかな。若者との接点になるわけやん。」

ゼミの人達には別になくても良いのでは？と言われていただけあって、今思えばかなり意外だった。

E：「そもそも俺は若者言葉が無礼とか思わへんもん。わっしょいとまじ^{まんじ}出^ではいける。でも人による。使っても良い人もいれば、使ったらムカつく人もいるって感じかな笑 普段の付き合いも関係してるってことじゃないかな。」

「最初、会話するためのスタートとして、こっちが詰め寄って、相手のペースに合わせて…」とEが話しているシーンから、異なる位相間同士で若者言葉を使用する際は、年齢や立場の高い人が気を遣って歩み寄ろうとする目的があることが分かった。立場や年齢の低い私達若者との距離を縮め、話しやすい雰囲気を作り出すために配慮してくれていたことにインタビューを通して気付いた。

また、「川口さんたちの使ってる言葉の意味理解してないけどね」とEは話していた。この会話から、上司、つまり年齢の離れた人にとっても若者言葉は、言葉自体の意味を持たなくとも（知っていなくとも）、使用することで親密な関係をもたらすものだとEは考

えていると分かる。私たちにとって若者言葉は、言葉それぞれが意味を理解した上で会話の空気や団結力を高める目的で使用していることから、若者とそうでない人では使用する目的が違うことに気づいた。

しかし一方で、「普段の付き合いも関係している」と話しているところから、Eはお互いの距離感を理解した上で若者言葉を使用していることが明らかとなった。そのため、若者言葉を使用する上での距離感についての捉え方は年齢に関わらず、認識が同じであることが分かった。

5-3. インタビュー調査の考察

私と年齢の離れた上司の二人とも、若者言葉はあって良い、必要であると話していたことに驚いた。「若者言葉はなくても良いのではないか？」とゼミの同級生が話していたこともあり、私以外の人々にとっては若者言葉が必要ないのではないかと感じていたためである。しかし、実際に対話を通してDさん・Eさんの率直な意見を聞くことで、若者言葉が不必要なものではないということを再確認出来た。

Dさん・Eさんの二人は共通して、若者言葉を使用する目的は私たちとの会話を促進し、仕事仲間として距離を縮めるために使用すると話していた。しかしその一方で、若者言葉を使用する際は、普段の付き合いからお互いの距離感を掴んだうえで話すべきであるとAさんは話していた。若者言葉を気兼ねなく使うためには、周りの状況や相手の立場を考えるだけでなく、相手との距離を配慮しなければ成立しないと私は感じた。

身近に若者言葉を使用している人との対話を通して、他者が若者言葉をどういった意図で使用しているのかを知ることができ、改めて私にとって若者言葉は重要なものであると気づいた。

この対話を通して、老若男女問わず、コミュニケーションを円滑に行い、距離感を縮めることが出来る若者言葉は、排除されるべきではないと私は考える。他者との交流を深め、団結力や仲間意識を芽生えさせることが出来るという点では、若者言葉は重要なツールといえると私は感じる。

私のアルバイト先では、仕事内容は社員も含め主に“品出し”であり、会話をしようと思意識しなければ6時間以上誰とも話さず仕事をしている場合もある。長時間、人と話さず続けて仕事をしていると、店舗内で悪い雰囲気や漂い始め、仕事を積極的にしたいと思える環境が押しつぶされることが頻繁にある。

そうした状況に応じて、Dさんはよく仕事中、私が重い荷物を持ち運び続けて疲れている時に、若者言葉を用いて話しかけてくれていた。つまり、若者言葉を用いて会話をすることで、仕事を楽しく、リラックスした環境で行う状況を作り出していたのである。こうした点からも、若者言葉は重要な役割を果たしているのだと私は感じている。

しかし、私は気づいていなかったが、若者言葉を使用するには周りの状況を読み取り、相手との距離感を気遣うことが必要であるということも今回の対話を通して学べた。

今後は友人や自分の所属するグループで若者言葉を使用する際、そうした点に気を付けたいと感じた。

誰でも、自分の所属するグループ内でしか通じない言葉や方言を使用することがあると思う。私にとって、若者言葉はそれらの言葉と同じニュアンスで使用している。これらの言葉は、決められたグループ内で使われる“ことばの機能“を持ち合わせていると考える。

6. 結論

同じ位相の者同士での会話では、様々な種類の若者言葉をそれぞれのシチュエーションに合わせて使用していた。若者言葉は数多く存在するが、その中で主要の目的としてとして挙げられるのは会話をスムーズにすること、相手に対する同調、場の雰囲気や和ませるの3点である。この3点を無意識のうちに求めて私たちは若者言葉を話しているのだ。

また、若者言葉は同じ位相であっても距離が近く、密な関係でなければ使用することはできない。相互に連続して呼応するように使用することは一般的に難しい。若者言葉を気兼ねなく使用できるということは、それほどまでに距離が近く、お互いを理解し合える存在であるという証明でもあるのだ。

私たち4人が気兼ねなくこうした若者言葉を使用できるのは、お互いが心を許し合い、距離が近いからであると思う。そういった意味で、若者言葉を連続して相互に使用し合うのは、特別に仲が良く、長い付き合いでないとできないことではないかと私は考える。

その一方、若者言葉は若者に限らず幅広い年代においても活用できるものであることが分かった。上司のような年齢の高い人は、若者言葉の意味そのものは理解していない。しかし、使用することで会話を楽しくし、より親密な関係を築くために使用していると上司は話していた。そのため、若者言葉はどの世代においても活用できる重要なツールであることが明らかとなった。

これまでにあった言葉では代用するのが難しいからこそ、その伝えにくい感情を簡単に表現する上で、若者言葉は欠かせない。使用しない人からすれば疑問を感じたり、批判されたりしがちな若者言葉であるが、それでも尚、平安時代から形を変えて使用され続けている。このことから分かるように、若者言葉は意味を持っていないように見えて、重要な役割を持っているのである。

私たちは他者からよく「アホ」で「バカ」な言葉を使っていると言われがちであるが、本当にそう言えるだろうか。若者言葉はうまく言い表せない感情を巧みに表現するために不可欠なものであると私は考える。若者言葉に対して否定的な意見を持つ人からしても、実際にどういった目的で、どういったシチュエーションで使用していることを知ることで、若者言葉へのイメージが変わるのではないだろうか。

使用している私からすれば、「バカ」「アホ」と言われようが、ただ適当に若者言葉で話すことが楽しいから使用しているわけではないことを伝えたい。それぞれ若者言葉は独特

なニュアンスを伝えるために必要な役割があり、その言葉1つ1つをお互い同じ位相の者同士で理解した上で、その場のシチュエーションに合った若者言葉を意識せずともパッと閃かせ、使用しているのだ。

自分自身が若者言葉を使用しているからこそ理解できる多くの若者言葉の持つ機能があったが、実際他者にその機能を理解してもらうことは難しかった。しかしこの研究を通して、若者言葉に対して批判的な人にも若者言葉を使用する意義を理解してもらうことが出来たのではないだろうか。

以前から、若者言葉は偏見の目で見られることが多かった。平安時代から否定され続けても残存するほど、若者言葉には見えない機能や役割があることを研究を通してより深く実感できた。

無意識のうちに口から発する若者言葉は、その言葉そのものに意味は無くとも、お互いの関係性を理解し、心から許し合えていないと使用できないことから、何か特別な力を持っていると思った。心置きなくこうした緩い言葉を使用できることを私は誇りに思う。心を許し合える友人たちをこれからも大切にしていきたい。

引用文献

米川明彦(1996) 『現代若者ことば考』 丸善ライブラリー

米川明彦(1989) 『新語と流行語』 明治書院

米川明彦(1998) 『若者語を科学する』 南雲堂

クレア マリィ(2007) 『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究』 ひつじ書房

英語に対する壁をなくす教育法について

総合政策学部 4年 北川 樹

目次

1. はじめに
 - 1.1 問題意識
 - 1.2 動機

2. 予備調査
 - 2.1 調査の目的
 - 2.2 調査の結果 1
 - 2.2.1 英語はきらいですか？理由も。
 - 2.2.2 英語のクラスや教員はきらいですか？理由も。
 - 2.2.3 将来、英語を使うと思いますか？理由も。
 - 2.2.4 自分の周りの人々が英語ができると、強く気にしますか？理由も。
 - 2.3 調査の結果 2
 - 2.2.1 英語はきらいですか？理由も。
 - 2.2.2 英語のクラスや教員はきらいですか？理由も。
 - 2.2.3 将来、英語を使うと思いますか？理由も。
 - 2.2.4 自分の周りの人々が英語ができると、強く気にしますか？理由も。
 - 2.4 調査の総括

3. アンケート調査
 - 3.1 調査の概要
 - 3.2 質問項目
 - 3.3 調査の結果と考察
 - 3.3.1 英語に対して壁を感じる原因
 - 3.3.2 英語を使うことが好きになるための、中学校での具体的な要件
 - 3.3.3 英語を使うことが好きになるための、高校での具体的な要件
 - 3.4 調査の総括

4. 自律的な学習意欲の心理学に関する研究
 - 4.1 研究の概要

- 4.2 学習意欲の分類
 - 4.3 学習意欲を具体的に分類するには
 - 4.4 動機づけとは
- 5. 英語に対する壁をなくす教育法の提案
 - 5.1 中学校における日本人と外国人の英語教員の組みあわせを活用した教育法
 - 5.2 高校における生徒らの苦手な科目に注目した補習クラス
- 6. まとめ

文献

1. はじめに

1.1 問題意識

今日の多くの学校では英語教育が行なわれている。中学、高校において必修化されたり、小学校においてもとり入れられる事例が存在したりしている。このように学んでいる人々の中には、英語に対する壁を感じているものもある。たとえば、私の母は街中で外国人に「すみません。」とかたことで話しかけられても拒否してしまったことがあるという。これは日本語で話しかけられても、英語を使わなければならないかもしれないという不安からきた行動なのではないか。また、私が高校の教育実習に行ったときに担当したクラスの中には、大学進学を目指し授業を聴こうとする生徒がいるところもあれば、授業をぼかーんと聴きノートをあまりとれない生徒がいるところもあった。この後者は英語について壁をより感じているのではないか。人々がせっかく学んでいる英語は彼らにとって楽しくあって、上に述べたような状況をなくすべきであると私は考える。本稿では、壁を感じる原因をアンケート調査で明らかにしたのちに、効果的な英語教育法を提案していく。

1.2 動機

このテーマを考えるようになった動機は、大きく分けて2つある。まず1つ目は、私が英語を好きだということである。小学生のときの定期的なALTの授業から私の生涯における英語学習ははじまったといえるが、発音やつづりを「法則性がなさそうなものを1から暗記しなければならないのか。」と難しく感じ、成績がとてもよいわけでもなかった。しかし、英語にはさまざまな表現方法がありおもしろいと思ったことや、私が中学2年生のときの洋楽の曲を用いた授業をへて、興味を持っていった。この授業では、曲を聴くことにより、英語の音のつながりなどといったリスニングにおいてのポイントを学ぶのだ。ま

た歌手について知る機会もあり、私は音楽が好きなので、ただリスニングのみを学ぶよりも受け入れやすかった。そこから他の科目に比べ成績が伸びていき、「将来、英語を發揮できる職業に就きたい。」と自ら進んで学ぶようになった。

英語において最も好きなのは、外国人と英語でコミュニケーションをとり、意思疎通ができるととても楽しさを感じることである。たとえば留学をしたときには、私は現地の人々とそれぞれ自分のことについてたくさん話した。バディーとしてついてくださった方々に日本のおみやげを渡すとその場がとても盛りあがったり、それぞれの国での暮らしを紹介し合うと、「大学ではどんな勉強をしたり、何かクラブに入ってるの？」や「結婚式の感じがうんだね。こっちでは日本よりももっとお客さんを呼ぶんだよ。私が結婚するときには招待するね。」などと興味を持ったりしていたのだ。自分とちがうことや新しいことを知れるからこそ、もっと話したいと楽しむのである。

またアルバイト先では、困っている外国人のお客さんと話し笑顔で帰ってもらえたことがある。私は人の役に立つことがとても好きなので、日本語が話せる方に対応するときと同じくらい丁寧にしたいと思う。このような場のみでなく、駅や町中でもよく外国人にたずねられる。その経験をとおして私はもっと英語を理解していればよかった、次はもっと上手に教えたいと考えることがあり、自ら進んで英語を学ぶ姿勢にもつながっている。

次に2つ目は、将来の自分の進路の1つとして英語教員を考えていることである。現在はひとまず教員免許取得を目指しているのだが、高校3年生のときのクラス担任の先生の影響がきっかけである。その先生は授業や指導の場において教えることがとても上手であり、実際に成績が上がる生徒も多く存在した。また、そのほかの休み時間や放課後、学校行事などにおいても私たちと人間関係をつくり、彼女自身楽しんでいた。たとえば文化祭や体育大会では、私たち生徒が団結できるようさまざまなサポートをしたり、私たちと同じように準備や練習に積極的に参加したりしていたのだ。このように、学習や活動を通して成長する生徒らの姿を近くで見れるのはとても良いことだと思うようになったため、私は教員免許を取得したい。もし私が教員になれた場合に、本稿で提案していく英語教育法を活用することも研究目標の1つである。もともと英語が得意な生徒の存在を今後も維持し続けるということはもちろんだが、クラス分けをした場合、成績が悪いクラスの「英語の授業を受けたくない。」という雰囲気少しでも変えるということを私は最も実現させたい。

2. 予備調査

2.1 調査の目的

予備調査として、数人と1対1で対面し、選択肢のある質問ではなく文章で回答するような質問を通して、最終的に自分が調査したいことに関連する事例をじっくりきく。この目的は、最終的に自分が調査したいことを明らかにするアンケートをはじめから作成する

よりも、事例をもとに行なうことで、人々の傾向をつかみ、より詳しい結果がわかることである。2人に話をきいた。

2.2 調査の結果1

21歳の関西学院大学総合政策学部生である、友人Mさんに話をきいた。予備調査を申し込んだとき彼女は「役立ててもらおうと思って。」と多くの話を準備してくれていた。

2019/8/27(火)に兵庫県三ノ宮の飲食店で行なった。以下では結果を記していく。

2.2.1 英語はきれいですか？理由も。

きれいというか、英語(の文法のしくみなど)がわからないまま勉強を進め、現在まで来てしまった。わからなくなったきっかけは、中学のとき教科担任の先生がおらず数学の先生から教えていただいていたのだが、彼を好きではなかったことである。また、英語が好きではない理由の1つとして、英単語を暗記することが苦手であり時間がかかることがあげられる。

2.2.2 英語のクラスや教員はきれいですか？理由も。

日本語が話せない外国人の教員には、緊張してしまい、自分から話しかけようと思わない。なぜなら、日本と外国のものごとのとらえ方がちがい、「彼らにとって不快なことを言ってしまったらどうしよう。」と不安になるためである。また、私がそのようなことを言ってしまうと、彼らが教えてほしいが、正しく言い直すための英語表現がすぐに出てこずパニックになることも理由の1つとしてあげられる。

高校のときは、中学とちがい、教科担任の先生がおりわからないことを聞きにいける環境にあったのだが、そのときいらっしやった英語で授業をする日本人の教員が好きだった。英語で授業をすること自体は、英語で授業を理解できたという達成感が生徒の中でうまれるため、日本語が話せる教員がする分には、むしろ日本語でするよりも良いと私は考える。その好きだった教員に担当していただいたクラスでは、英単語のCDをかけ発音することが楽しく、また、全員で発音するため、しなくてはならない雰囲気があった。

2.2.3 将来、英語を使うと思いますか？理由も。

話すことによって使いたい。なぜなら、海外旅行をするときに話すためである。しかし、これまで海外へ留学したことがなく、英語の必要性がわからなくも感じる。また、「このとき私は英語を使うはずだ。」という目ぼしがなかったら、勉強するモチベーションが上がらない。ちなみに私は、将来英語を使うために、勉強したいが、英語の何がわからないのかもわからなくなってしまうため、勉強につまずいたとき、それが解消するまで教えてくれる人がいたら良いのにと思う。

2.2.4 自分の周りの人々が英語ができると、強く気にしますか？理由も。

気にする。なぜなら、現在では英語はできて当たり前であるような教科になっており、できても教科担任の先生にはほめられないためである。このことは私が英語をきれいになる直接的な理由ではなく、「彼らと同じぐらいがんばろう。」と英語を勉強するモチベーションが上がるきっかけになることもない。「すごいなあ。」などと称賛するぐらいである。

この前町中で彼氏といたとき、観光しにきた外国人らが迷子になっていたため、とりあえず彼らにそのときの状況を教えてもらった。しかし、彼らの英語を話すスピードが速すぎて、また、なまっけていて、聴きとり助けることができなかつたり、私が、週4回行なう English Communication という科目を履修する総合政策学部生であり、英語ができるものだと彼氏から思われているため、「Mは、本当はあまり英語ができないのか。」と反応されたりと、とてもいやだった。

2.3 調査の結果2

22歳のホテルウーマンである、友人Sさんに話をきいた。予備調査を申し込んだとき彼女は「私英語すきじゃないから、ぜひ話きいてもらおう。」とすすんで引き受けてくれて、2019/9/6(金)に神領さんの友人の家で行なった。以下では結果を記していく。

2.3.1 英語はきれいですか？理由も。

仕事をするとき英語が必要なため話すだけであって、必要でなかったら勉強したくなく、話さなくても良かったら話したくない。なぜなら、私は幼少期から英語を学んでいなくて、英語や外国人に対してもものおじしてしまうためである。英語を勉強したくない私は、わからないことが出てきたら、また勉強したくなくなり、負のループにはまってしまう。学生のときは、リスニングがきれいであったが、そのほか文法などはそうではなかった。人々が仕事をするときなどに英語を話すということ自体は、良いことであると私は考える。

2.3.2 英語のクラスや教員はきれいですか？理由も。

授業に対して、完全に受け身状態になってしまっていたわけではない。クラスで英語を発音する機会があまりなかったため、専門学校のときそれにつまずいてしまった。また、私は中学のときのクラス担任であり教科担任でもあった先生が好きではなかった。なぜなら、彼の、英文を読みたくない生徒に対してでも読ませるという教え方が良くないと思ったためである。このことが原因なのか、塾に通ったら成績が良くなった。

2.3.3 将来、英語を使うと思いますか？理由も。

使うと思う。なぜなら、今後も私はホテルウーマンでいて、シティホテルウーマンに転職するつもりであるためだ。兵庫県神戸などのシティホテルには、ビジネスマンである外

国人のお客さんがたくさんいらっしゃる。

2.3.4 自分の周りの人々が英語ができると、強く気にしますか？理由も。

もし私が働いている会社に、私よりもっと英語ができるスタッフがいたら、彼または彼女のことを目指す。なぜなら、そのスタッフと一緒に仕事をするとしたら、自分と比較できてしまい、恥ずかしいためである。また、反対に英語ができるスタッフがいなかったら、「もういいか。」と英語を勉強するモチベーションが上がらない。専門学校の時も生徒らが英語に対して一生懸命であったため、私もがんばっていたが、中学校と高校のときは生徒らの英語の発音が日本語らしくなってしまうなどしていたため、私も同じであった。

2.4 調査の総括

調査を行なうまでは、人々が英語に対して壁を感じる原因は、英語の教員のことがきらいであることや、将来英語を使わないと思っていること、自分の周りの人々が英語ができると強く気にすることであるかもしれないと私は考えていた。しかし、英語の何がわからないのかもわからないことや、英語ができて教科担任の先生にほめられないこと、自分の周りに英語ができる人がおらず英語を勉強するモチベーションが上がらないことなども挙げられるということがわかった。その事例を活用し、自分が調査したいことに関して、人々のより詳しい傾向をつかむアンケートをつくるのではないかと考える。また、上に述べたような原因に効果的な教育法の実案を、さがし出す質問なども入れていく。

3. アンケート調査

3.1 調査の概要

アンケート調査は18～23歳の関西学院大学などの学部生や、スーパーマーケットの店員などの職業である人々を対象とした。なぜなら、高校生より上の(高校生は含まない)人々は、すでに小学校、中学校、高校、大学・専門学校を経験していることから、どの学校でのどのような教育が、英語に対して壁を感じる原因に直結するのかを調査できるのではないかと考えたためである。また、年齢層をしばったことで、彼らが受けてきている教育それぞれに世代差が生じ、データの統一感がなくなってしまうことを防いだ。

2019/11/5(火)から11/20(水)まで、Google フォームをメールで送信するなどして行なった結果、60人から回答を得た。質問項目の中には「問5の英語を使うことは好きですか?」に、そう思う寄りの回答(1または2)をされた方は、なぜ英語を使うことが好きなのか?」などのように、該当者のみに答えてもらうため回答必須にしていなかったものも含まれる。そのため、答えていない該当者もあり、項目数と回答者数をかけあわせた全体の

うちの回答率は約 99%であった。

3.2 質問項目

アンケートの質問項目は以下のとおりとする。

問1 あなたの年齢を教えてください。

問2 あなたの性別を教えてください。

問3 現在の、あなたの学校または職業を教えてください。

問4 問3に職業と回答された方は、その職業を教えてください。(回答の例)会社員、高校の英語教員

問5 英語を使うことは好きですか？ここでいう「英語を使う」には、話すこと、聴くこと、読むこと、書くこと、すべてが含まれます。

問6 問5の英語を使うことは好きですか？に、そう思う寄りの回答(1または2)をされた方は、なぜ英語を使うことが好きなのですか？(複数回答可)

問7 問6のなぜ英語を使うことが好きなのですか？に英語を使うことに目的があるからと回答された方は、その目的を教えてください。(回答の例)アルバイト先で必要、英語教員になる

問8 問5の英語を使うことは好きですか？に、そう思わない寄りの回答(3または4)をされた方は、なぜ英語を使うことが好きではないのですか？(複数回答可)

問9 問6,8のなぜ英語を使うことが好き/好きではないのですか？に回答されたような理由には、過去や現在のどこでの英語教育が最も影響していると思いますか？

問9の英語を使うことが好き/好きではない理由に、影響していると回答した教育について、この後の質問に回答してください。(例)問9で高校で受けた教育が影響しているを選び、この後の質問に高校での教育について回答する。

問10 英語のクラスの生徒数はちょうど良かった(ちょうど良い)ですか？

問11 英語ができたら、あなたを担当している英語の教員からほめられました(ます)か？

問12 自分の周りに英語ができる人がおり、強く気にすることがありました(あります)か？

問13 自分の周りに英語ができる人がおらず、英語を勉強するモチベーションが上がらないことがありました(あります)か？

問14 あなたが英語ができるものだと周りの人から思われ、プレッシャーを受けることがありました(あります)か？

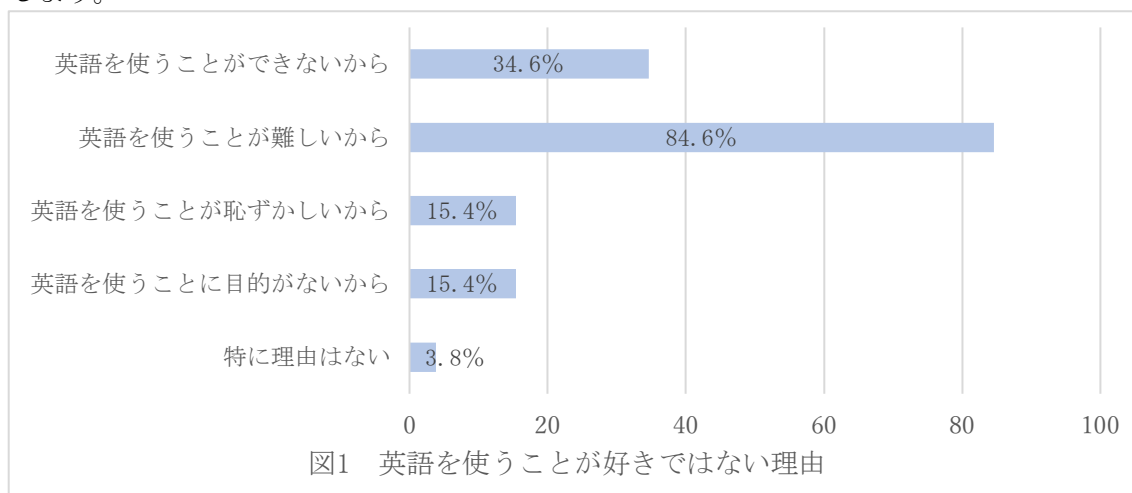
問15 働いたり海外へ旅行したりするときなど、将来実際に使うような英語を教えてもらいました(もらっています)か？

- 問 16 英語のクラスで、英語の歌を歌うことは好きでした(です)か？
- 問 17 英語のクラスで、ゲームをすることは好きでした(です)か？
- 問 18 英語のテストや、それにより成績がつくことはうれしかった(うれしい)ですか？
- 問 19 外国人の、英語の教員は好きでした(です)か？
- 問 20 あなたを担当している英語の教員の教え方は良かった(良い)ですか？
- 問 21 英語の勉強につまずいたとき、それが解消するまで教えてくれる人はいました(います)か？

3.3 調査の結果と考察

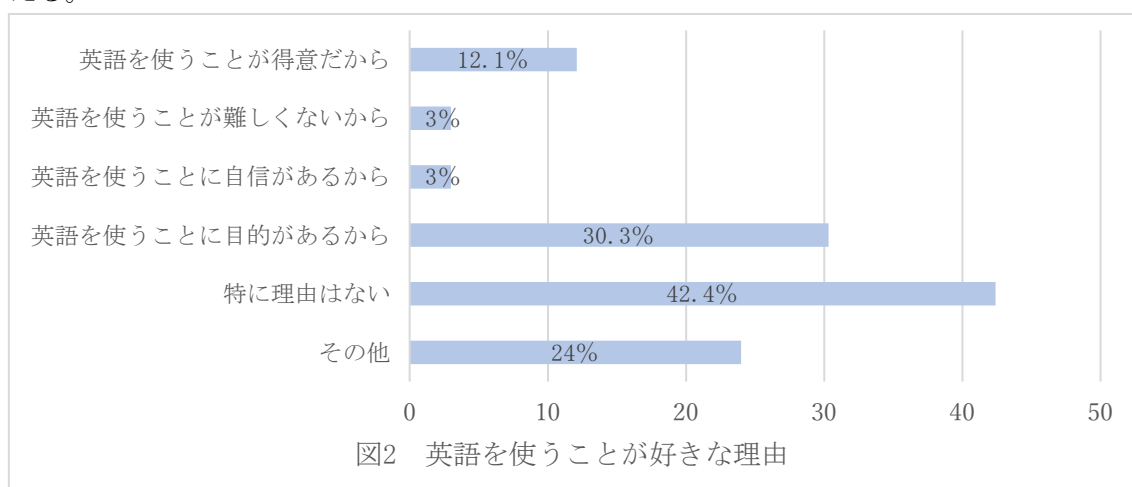
3.3.1 英語に対して壁を感じる原因

はじめに、「英語を使うことは好きですか？ここでいう『英語を使う』には、話すこと、聴くこと、読むこと、書くこと、すべてが含まれます。」と質問をした。そのところ、そう思う寄りの回答をした人が全体の 56.6%、そう思わない寄りの回答をした人が 43.4%であった。「そう思わない寄りの回答をされた方は、なぜ英語を使うことが好きではないのですか？(複数回答可)」という質問においては、第一に「英語を使うことが難しいから」が 84.6%であった。次いで「英語を使うことができないから」という答えが 34.6%、「英語を使うことが恥ずかしいから」、「英語を使うことに目的がないから」という答えが共に 15.4%、「特に理由はない」では 3.8%であった。この結果から、「英語」ときいて、もしそれを勉強したことがあったとしても、ないとしても、「英語＝難しい」という概念を抱いてしまう人が多いのではないかと私は考える。たとえば、私は数学の「二次関数」ときいて、高校のとき勉強したはずなのだが、わからない、難しそうだと思ってしまう。



「そう思う寄りの回答をされた方は、なぜ英語を使うことが好きなのですか？(複数回答可)」という質問においては、第一に「特に理由はない」が 42.4%であった。次いで「英語を使うことに目的があるから」という答えが 30.3%、「英語を使うことが得意だから」という答えが 12.1%、「英語を使うことが難しくないから」、「英語を使うことに自信

があるから」では共に3%、「その他」が24%であった。「英語を使うことに目的があるから」という答えの割合が高めであったことは、もし人々が目的を持ったら、英語を使うことが好きになる、つまり、英語に対して壁を感じることから遠ざかるということがうかがえる。



3.3.2 英語を使うことが好きになるための、中学校での具体的な要件

次に、「なぜ英語を使うことが好き/好きではないのですか？」に回答されたような理由には過去や現在のどこでの英語教育が最も影響していると思いますか？」と質問をしたところ、第一に「教育は影響していないと思う」が28.3%であった。次いで「高校で受けた教育が影響している」という答えが25%、「中学校」が23.3%、「学校外で受けている(受けた)教育が影響している」が8.3%、「小学校で受けた教育が影響している」、「大学、専門学校で受けている(受けた)教育が影響している」では共に6.7%、「その他(幼少期から家で使っているから)」が1.7%であった。「高校」と「中学校」の割合が高めであったため、重点を置いて分析していく。まず、「中学校」の方を選んだ人々のうち、「英語を使うことは好きですか？」という質問において、そう思う寄りの回答をした人は約64.3%、そのうち「英語ができれば、あなたを担当している英語の教員からほめられましたか?」、「あなたを担当している英語の教員の教え方は良かったですか?」、「英語の勉強につまずいたとき、それが解消するまで教えてくれる人はいましたか?」という質問にそう思う寄りの回答をした人はそれぞれ約55.6%、約77.8%、約77.8%であった。同じく、「中学校」の方を選んだ人々のうち、「英語を使うことは好きですか？」という質問において、そう思わない寄りの回答をした人は約35.7%、そのうち「英語ができれば、あなたを担当している英語の教員からほめられましたか?」、「あなたを担当している英語の教員の教え方は良かったですか?」、「英語の勉強につまずいたとき、それが解消するまで教えてくれる人はいましたか?」という質問にそう思わない寄りの回答をした人はそれぞれ100%、80%、60%であった。この結果から、「担当されている英語の教員からほめられる」、「教員の教え方が良い」、「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がある」人ほど、英

語を使うことが好きであり、反対に「教員からほめられない」、「教員の教え方が良くない」、「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいない」人ほど、英語を使うことが好きではないという相関関係があることがうかがえる。つまり、これら3つのことは、英語を使うことが好きになるための具体的な要件に含まれるということである。

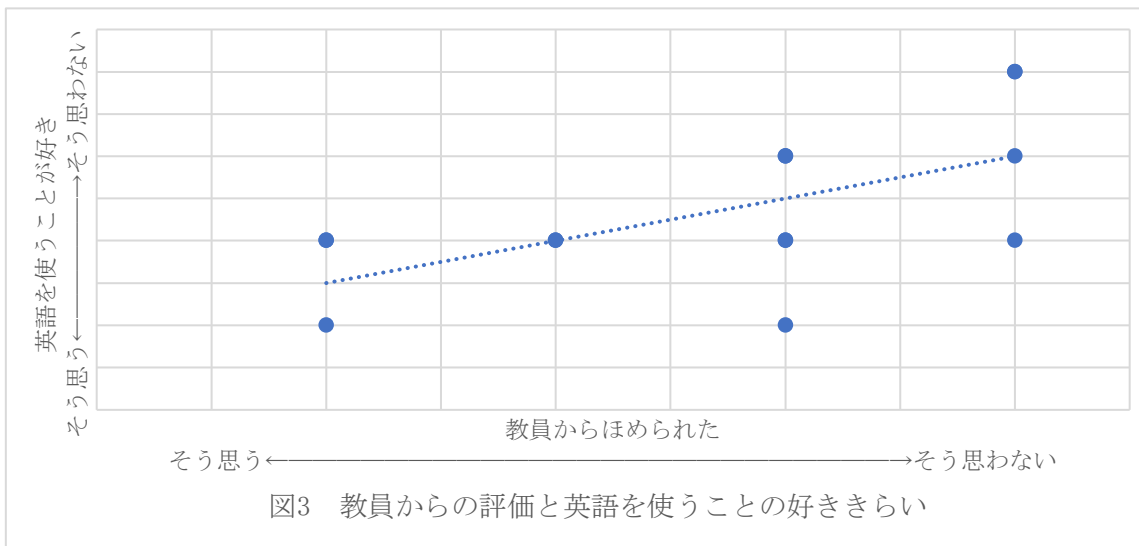


図3 教員からの評価と英語を使うことの好ききらい

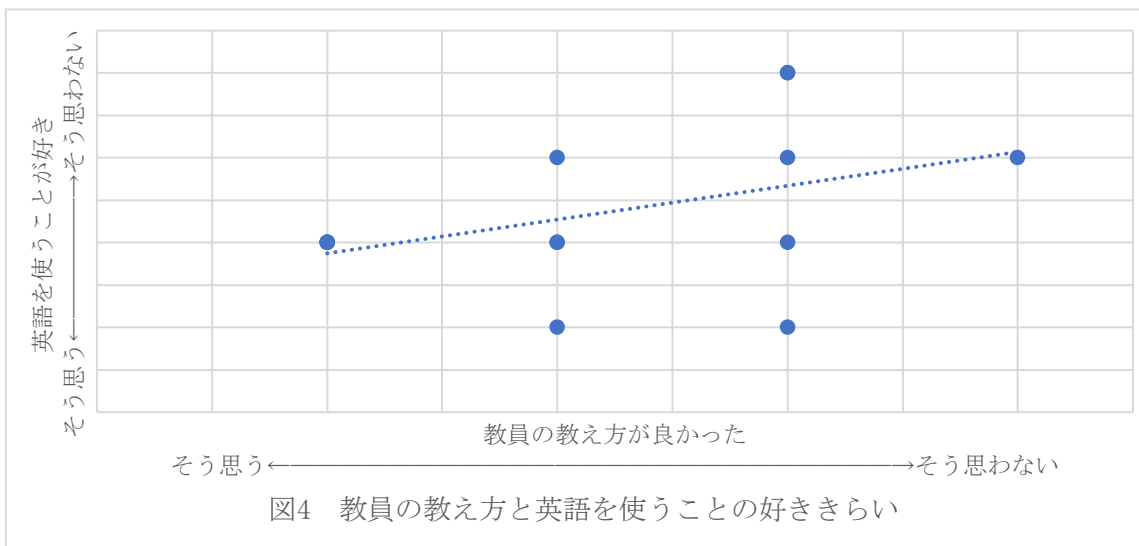
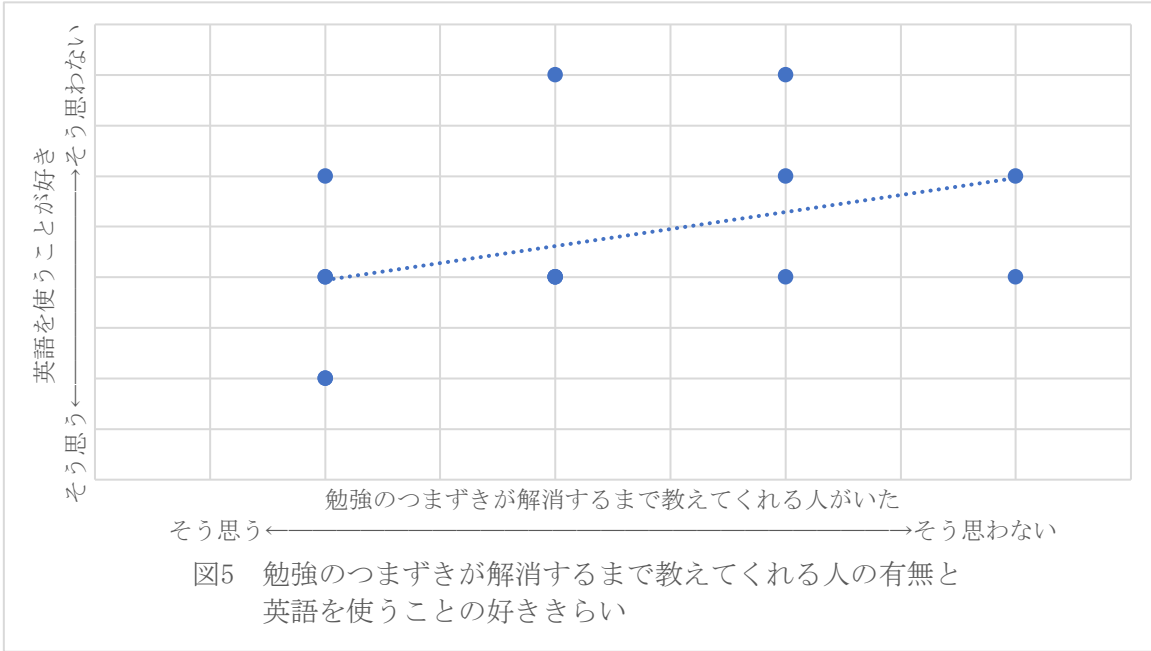


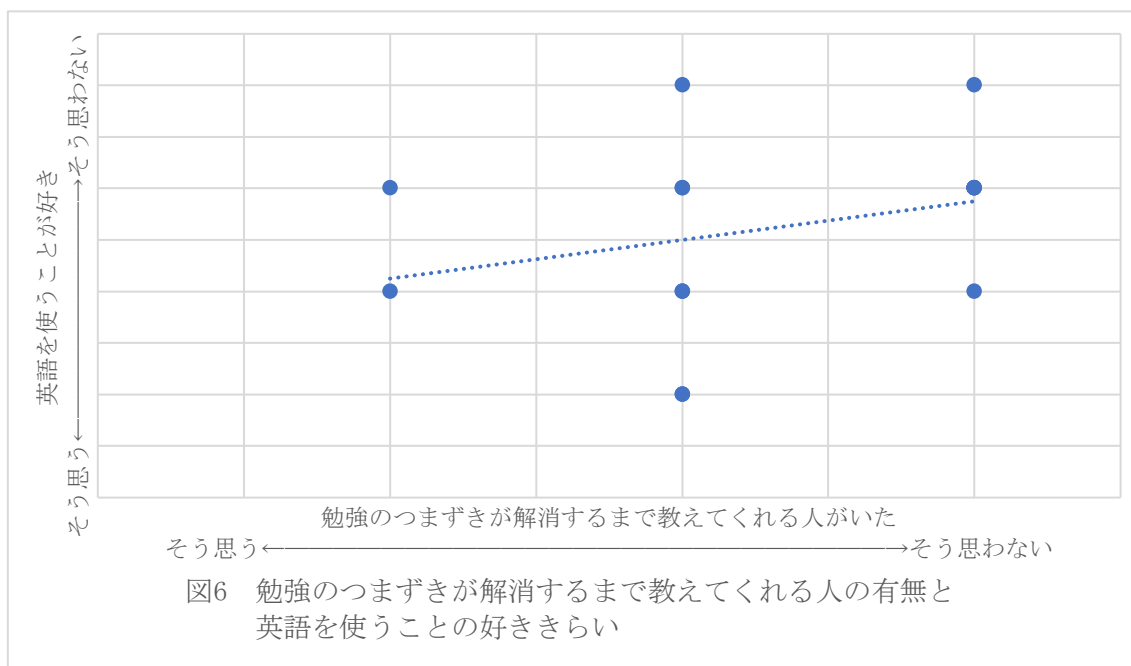
図4 教員の教え方と英語を使うことの好ききらい



「中学校」を選んだ人々のうち、「英語を使うことは好きですか？」という質問において、そう思う寄りの回答をした人とそう思わない寄りの回答をした人どちらにも関わらず、「外国人の、英語の教員は好きでしたか？」という質問にそう思う寄りの回答をした人は約 85.7%であった。この結果から、多くの人々が好きと言っている外国人の教員をとり入れていくことは、彼らが英語を使うことを好きになるきっかけとなるのではないかと私は考える。

3.3.3 英語を使うことが好きになるための、高校での具体的な要件

「高校」の方を選んだ人々のうち、「英語を使うことは好きですか？」という質問において、そう思う寄りの回答をした人は 40%、そのうち「英語の勉強につまずいたとき、それが解消するまで教えてくれる人はいましたか？」という質問にそう思う寄りの回答をした人は約 83.3%であった。同じく、「高校」の方を選んだ人々のうち、「英語を使うことは好きですか？」という質問において、そう思わない寄りの回答をした人は 60%、そのうち「英語の勉強につまずいたとき、それが解消するまで教えてくれる人はいましたか？」という質問にそう思わない寄りの回答をした人は約 55.6%であった。この結果から、「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいる」人ほど、英語を使うことが好きであり、反対に「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいない」人ほど、英語を使うことが好きではないという相関関係があることがうかがえる。つまり、このことは、英語を使うことが好きになるための具体的な要件に含まれるということである。



「高校」を選んだ人々のうち、「英語を使うことは好きですか？」という質問において、そう思う寄りの回答をした人とそう思わない寄りの回答をした人どちらにも関わらず、「英語のテストや、それにより成績がつくことはうれしかったですか？」と、「外国人の、英語の教員は好きでしたか？」という質問にそう思う寄りの回答をした人はそれぞれ約 86.7%、約 86.7%であった。この結果から、多くの人々が好きと言っている成績評価と外国人の教員をとり入れていくことは、彼らが英語を使うことを好きになるきっかけとなるのではないかと私は考える。

3.4 調査の総括

調査を経て、人々が英語を使うことを好きになるために必要なことやものは、「英語を使うことを難しく考えない」、「英語を使うことに目的を持つ」に加え、中学校の英語教育においては「担当されている英語の教員からほめられる」、「教員の教え方が良い」、「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいる」、「外国人の英語の教員」であり、高校の英語教育においては「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいる」、「英語のテストやそれによる成績評価」、「外国人の英語の教員」であるとわかった。これらはそれぞれ、「英語を使うことを難しく考えない」と「英語を使うことに目的を持つ」は積極的に学習する動機として、それ以下は動機づけにおける環境や記憶などの先行要因として、置き換えられるのではないかと私は考える。つまり、「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいる」などの生徒らを取りまく環境をつくり出すと、彼らに「英語を使うことを難しく考えない」などの学習動機が生まれ、英語を使うことが好きになるというメカニズムがあるということだ。本稿では、このメカニズムを説明することで、効果的な教育法を提案していく。しかしその前に、上に述べた積極的に学習する動機が、1人1人に

あるべきものであり、そのすばらしさについて論じられている文献が存在するので、先行研究とし説明しようと思う。

4. 自律的な学習意欲の心理学に関する研究

4.1 研究の概要

学習意欲は、後述の櫻井(2017)によると、積極的に、場合によっては消極的に学習をしようと思う気持ちをいうが、ここでいう消極的とは、学ぶように言われたため学ぶことを意味する。つまり学習意欲は、大きく分けて「自ら学ぶ意欲」と「他律的(=消極的)な学習意欲」がある(pp. 1-5)。櫻井(2017)は1997年に、学習意欲の心理学に関する研究を行った(櫻井、1997)。それは基礎編という性格が強いが、2017年のものは発展編といえる内容になっている。「自ら学ぶ意欲」(自律的な学習意欲)には、従来の、好奇心から学ぶ「内発的な学習意欲」に加え、「自己実現のための学習意欲」があること、そしてこれは内発的な学習意欲をベースに形成され、自分の将来の仕事や生き方と関わる学習意欲であり、キャリア発達のための学習意欲といっても過言ではないこと、さらに新学習指導要領で注目されている「主体的・対話的で、深い学び」(アクティブ・ラーニングの視点)を実現するための学習意欲でもあること、自ら学ぶ意欲によって学ぶことがとても素晴らしいことであることを述べた。本研究の英語に対する壁をなくす教育法の提案を支える先行研究であり、本章で詳しく検討する。

4.2 学習意欲の分類

例をあげてみよう。幼い頃から昆虫の生態に強い興味・関心を示す子どもを想像してほしい。その子が、小学校の理科の時間、こうした領域のことに、のめり込むように学んでいるとすれば、それは内発的な学習意欲で学んでいる状態といえる。一方、その子が中学生になり、自分の主たる興味・関心は昆虫の生態にあることを“自覚し”、さらに理科の成績もよいことから、将来は理科の教師になりたいと決意し、理科の教師になるために理科以外の教科にも“意識的”・積極的に取り組んでいるとしたら、それは自己実現のための学習意欲で学んでいる状態といえる。(以上この段落、櫻井、2017、p4)。

自ら学ぶ意欲を2つに分類した、内発的な学習意欲と自己実現のための学習意欲を櫻井(2017)がうまく説明している。説明のあとには、これらと対照的な、学ぶように言われたため学ぶ他律的な学習意欲についても書かれていたが、『自律的な学習意欲の心理学』という研究テーマから、自ら学ぶ意欲の方が独自に存在し続けるものであり、注目すべきかどうかは異なる。たとえば、高校1年生の間、英語の教科担任の先生がきびしく、しかられないよう学ぶという他律的な学習意欲が存在したとしても、学年が上がりやさしい先生に変われば、それはなくなってしまう可能性が高い。これに対して、日常会話で使えるような英語の言い回しがとても多く存在することに興味を持ち、新しく覚えるごとにノートに

書きとめていくなどして学ぶという自ら学ぶ意欲は、自分の内から「やってみよう。」と現れているものであるため、学年が上がってもなくならないのではないかと私は考える。

4.3 学習意欲を具体的に分類するには

学習動機の種類は、学習する理由を問うことによって明らかにできる。学習する理由が明らかになれば、そこから、学習に対して自ら学ぼうとする(自律的な)目標をもっているのか、それとも他律的な目標をもっているのかを判別することが可能となる。具体的な項目例を示そう。

- (1)内発的に学習する理由——①興味・関心(好奇心)があるから、②学ぶことがおもしろいから、③学ぶことが楽しいから、④学習内容を理解できるとうれしいから、⑤好きだから。
- (2)自己実現のために学習する理由——①志望する仕事につきたいから、②自分の将来にとって大切だから、③人や社会のために役立ちたいから、④充実した将来のために必要だから、⑤自分の能力を十分に発揮したいから。
- (3)他律的に学習する理由——①しないと先生や親がうるさいから、②恥をかきたくないから、③友達にばかにされたくないから、④ご褒美がほしいから、⑤お金持ち(有名)になりたいから(以上この段落、櫻井、2017、pp7-8)。

本稿のアンケート調査では、英語を使うことが好きかどうか回答してもらい、その理由を問うた。英語を使うことが好きかどうかは、英語を学ぼうとするかどうかとして置き換えられると私は考えるため、櫻井(2017)と同じような方法で学習意欲を分類できた。まず英語を使うことが好きではない理由として、「英語を使うことが難しいから」という回答の割合が高かったため、反対に「英語を使うことを難しく考えないから」が英語を学ぼうとする理由となる。これは、上に述べたうちの内発的に学習する理由であるといえる。また英語を使うことが好きな理由としては、「英語を使うことに目的があるから」という回答の割合が高かったため、同じく英語を学ぼうとする理由となる。これは、上に述べたうちの自己実現のために学習する理由であるといえる。

4.4 動機づけとは

ある目標を達成しようとする行動するプロセスのことを「動機づけ」という。動機づけというプロセスは通常、環境、記憶、内的状態などの先行要因によって触発される。こうした刺激がなければ、動機づけの過程は生起しない。先行要因は、個人内要因である欲求、認知、感情に影響を与え、動機が形成される。欲求、認知、感情は行動の理由を説明するとしても重要な要因であり、個人外要因である環境と相互に影響し合って動機を形成する。動機とは、目標を設定し、その目標の達成に向けて行動しよう(あるいは行動を続けよう)とする力(エネルギー)のことである。動機が形成されると具体的な目標達成行動が発生し、目標が達成された場合には満足や報酬を得て、動機づけプロセスはいちおう終了する(以

上この段落、櫻井、2017、pp16-17)。

本稿のアンケート調査で、中学校の英語教育においては「担当されている英語の教員からほめられる」、「教員の教え方が良い」、「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいる」、「外国人の英語の教員」が、高校の英語教育においては「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいる」、「英語のテストやそれによる成績評価」、「外国人の英語の教員」が、生徒らが英語を使うことを好きになるための具体的な要件であるということが明らかになった。これらはすべて、上に述べた動機づけプロセスのうちの、先行要因である環境にあたるのではないかと私は考える。これらが個人内要因である欲求、認知、感情に影響を与え、4.3節で述べた「英語を使うことを難しく考えない」と「英語を使うことに目的を持つ」という学習動機が形成されるのである。そして、人々が英語に対して感じる壁をなくすことができる。

5. 英語に対する壁をなくす教育法の提案

4.4節で述べた動機づけプロセスに当てはめて提案していく。アンケート調査では、中学校と高校の環境について重点を置いて分析したため、本章でも中学校と高校での教育法について論じる。

5.1 中学校における日本人と外国人の英語教員の組みあわせを活用した教育法

これは、アンケート調査で明らかになった、英語を使うことが好きになるための中学校での要件である「担当されている英語の教員からほめられる」、「教員の教え方が良い」、「外国人の英語の教員」の3つを活用した方法だ。外国人の教員をとり入れるべきだと言っても、彼らが教育にどうやってたずさわることなのかをよく考える必要がある。1つの例として私が考える場面は、授業において、外国人の教員が生徒らに出身国について詳しく紹介するというものである。有名な食べものや観光地などについて話にとり入れ、「訪ねてみたい。」と感じさせるのみでなく、その国のものごとの考え方や慣習も取りあげ、それらにふれる際に発生する可能性も一緒に教えるのだ。ここでいう可能性とは、たとえば私たち日本人がアメリカ人と話す際に日本人は自分のことを褒められるとそれを否定するのに対して、アメリカ人はお礼を言うというちがいがからコミュニケーションのとりにくさが生じることである。また、私は母校で高校の教育実習を行なったのだが、高校生ときにはなかったあるスピーキングテストを1年生にさせていた。それは、授業内で暗記した英語の日常会話文を使い、1対1でALTの教員からの質問に答えるというものであり、生徒らがしっかりとアウトプットできる機会となる良い活動だと思った。

上に述べたような場面に日本人の教員もうまく交わりあうことで、さらに効果的になるのではないかと私は考える。授業中に外国人の教員が出身国について英語で紹介していても、クラスの進行度におくれをとっている生徒にとっては何と言っているのかわからない

かもしれない。また、スピーキングテストのときに自分の答えに対して、外国人の教員が英語で反応したとしても、その答えが本当にあっているのか、もしまちがっていればどの部分がどのようにまちがっているのかを解釈できない生徒がいるかもしれない。しかし、その場に日本人の教員がいれば、日本語でフォローを入れたり、わからないことを聞いたりすることができるのだ。この方法によって生徒らは外国人教員の出身国の魅力をより知ることができ、また実際に英語を使う状況もイメージしやすくなる。

授業のみでなく、休み時間などといったほかの時間においても、外国人の教員は生徒らに積極的に英語で話しかけコミュニケーションをはかるべきである。そうしてなかよくなった教員の出身国には、より行ってみたいくなるはずだ。「こんにちは。今日も元気？僕は少し眠いな。」程度の話しをし、そのときも日本人の教員と一緒にいるようにする。生徒が受け答えできたときには英語と日本語の両方で“ほめる”ことで、「私はうまく英語を使えているんだ。」などと自信が持てるのだ。日本人と外国人の教員の組みあわせを活用するという英語の教え方は、生徒らによりそった“良い教え方”であるといえるのではないかと私は考える。

上に述べたうちの、外国人の教員が英語で、日本人の教員が日本語で生徒らを丁寧にはめるといふよりそった教育が、動機づけプロセスという環境、つまり先行要因にあたり、これが「実際に英語を使うってこんな感じなんだ。」という生徒らの感情、つまり個人内要因に影響をあたえる。そして、「もっと英語を使ってみたい。」という学習動機が形成される。その英語を使うという目標が達成され、満足が得られたとしても、1度きりで終了してしまうようなプロセスではないと考えられるため、動機は存在し続け、英語を使うことが好きという気持ちも大人になってからのこる。

5.2 高校における生徒らの苦手に注目した補習クラス

これは、アンケート調査で明らかになった、英語を使うことが好きになるための高校での要件である「勉強のつまずきが解消するまで教えてくれる人がいる」と「英語のテストやそれによる成績評価」の2つを活用した方法だ。私は本稿を書くときに、周りの人々から「そもそも、高校での英語教育を改善するという考えは、中学生の間にすでに英語に対して抵抗感を感じてしまっている可能性のある生徒を変えるということに値し、難しいのではないか。」という指摘をうけた。たしかに、高校生の時点ではすでに英語の苦手な部分ばかりになってしまっているかもしれない。そこで、苦手が解消するまで聞くことのできる補習クラスをとり入れるべきだ。例として私の母校ではよく、教員が通常の授業とは別に問題プリントを用意し、といて答えあわせまでするという補習が行なわれている。良い活動であると思うが、前もって生徒らに苦手な範囲を聞いておくなどし、それに沿った内容のプリントを用意することで、より効果的になるのではないかと私は考える。さらに、わからない範囲を「助動詞」などと大まかに聞いておくのではなく、「推量の助動詞」などと詳しく聞いておくことで、補習授業中に教員がそこに重点を置いてわかりやす

く説明することができる。

また、生徒らがつまずいていたところを理解することができれば、その範囲の“小テストや成績評価”も実施すべきである。なぜなら、「よくできました。」という評価やマルをもらえたとき、「私の中に苦手はもうないんだ。」などにより自信を持つことができると考えられるためである。

上に述べたうちの、勉強のつまずきが解消するまで聞くことのできる補習クラスと、その解消を実感できる小テストや成績評価が、動機づけプロセスという環境、つまり先行要因にあたり、これが「私の中に苦手はもうないんだ。」などという生徒らの感情、つまり個人内要因に影響をあたえる。そして、「英語を使うことを難しく考えない」という学習動機が形成される。再度、彼らの中に苦手は解消されないままの環境に変わらないかぎり、この動機は存在し続け、英語を使うことが好きという気持ちも大人になってからのことと考えられる。

6. まとめ

今日の英語は中学、高校において必修化されたり、小学校においてもとり入れられる事例が存在したりしているのに、このように学んでいる人々の中には英語に対して抵抗感を感じているものもいるという状況は、より重視されるべき問題であるにちがいない。本稿では人々が抵抗感、すなわち英語に対する壁を感じる原因をアンケート調査し、明らかになった「英語を使うことが難しい」という考えを減らし、英語を使うことが好きな理由として回答が多かった「英語を使うことに目的がある」という状況を増やすための方法を紹介した。「英語を使うことを難しく考えない」と「英語を使うことに目的を持つ」という考えは、積極的に学ぼうとする動機として置きかえることができ、それらを存在させ続けることにより英語を使うことが好きになるのではないかと考えた。

中学校における日本人と外国人の英語教員の組みあわせを活用した教育法と、高校における生徒らの苦手に注目した補習クラスを提案したが、外国人の教員数の確保が難しかったり、補習クラスを受ける生徒がそもそも少なかったりなど、欠点が生じる可能性もある。そのような欠点も考慮しながら、教育法を活用していくべきだ。

文献

櫻井茂男(1997).『学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる』誠信書房.

櫻井茂男(2017).『自律的な学習意欲の心理学 自ら学ぶことは、こんなに素晴らしい』誠信書房.

2019年度卒業論文

神戸市の外国人観光客増加への道

関西学院大学 総合政策学部 総合政策学科

権 炫喆

目次

1. はじめに

1.1 動機

1.2 文献の紹介

2. 調査

2.1 フィールド調査

2.2 神戸市の魅力ポイント

3. 考察

3.1 神戸市のイメージ

3.2 これからの課題

3.3 神戸の推薦観光スポット

3.4 旅行プランの提案

4. おわりに

・謝辞

・参考文献

1. はじめに

1.1 動機

本稿の研究テーマは、神戸市に外国人観光客を増やす方法である。まず、私が旅行をテーマに卒論を書こうと決めた理由は、普段から旅行をすることが好きだからである。私は子供の頃から新しい経験をすることが好きで、食べたことのないものに挑戦してみたり、初めての場所を旅してみたりするなどが好きだった。そして、それらの要素が全部込められているものが旅行だと私は思っている。そして、卒論を書かざるを得ない以上、好きなものについて書こうと考え、進級論文から現在まで旅行を大きな柱として書いている。もう一つの理由としては、将来旅行関係の仕事に就きたいと思っているからである。具体的には旅行商品の開発に関する仕事がしたいと思っているが、そのような仕事に勤めるためには、客の構成やニーズ、現在の状況など様々な様相について知っておかねばならない。そのため、この卒論はそれらを含んだ予行練習の一環として良い機会になるのではないかと考えた。

次に神戸市を対象とする理由を述べたい。神戸市は古くから日本を体表する港として成長し、アジア最大級の港とも呼ばれる場所である。明治維新直前、その歴史を辿れば横浜、新潟、函館、長崎とともに貿易港として開港された街であり、外国の文物を取り入れ交易を行い、その影響で外国人も多く住む街へと発展してきた。しかし、三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2019)によれば、兵庫県に年間訪れる外国人の数は2018年基準約190万人であり、これは約1150万人の大阪や約800万人の京都に比べたら非常に低い数値であり特に大阪の近隣でありながらも、大阪の1割程度の観光客しかいない。しかもこの数値は兵庫県全体の観光客数であり、神戸市だけに絞ればさらに低い数値だと言えるだろう。ここで私は「なぜ同じ関西なのに神戸だけはあまり来ないのか」という疑問から始め、直接神戸市の観光を数回かけて行った際に、神戸市も観光地として魅力を十分に持っていると感じたため今回のターゲットにしてみたいと思った。

(単位)	2018年								2019年	
	1-3月期		4-6月期		7-9月期		10-12月期		1-3月期	
	実数 (万人)	前年比 (%)	実数 (万人)	前年比 (%)	実数 (万人)	前年比 (%)	実数 (万人)	前年比 (%)	実数 (万人)	前年比 (%)
滋賀県	4.6	35.8	5.9	-28.6	4.7	71.8	5.4	45.3	4.9	6.7
京都府	178.6	11.7	222.9	10.0	191.2	-2.1	211.0	14.9	187.0	4.7
大阪府	271.2	14.8	316.6	7.3	262.2	-12.8	292.1	4.5	282.3	4.1
兵庫県	45.7	19.1	53.4	21.1	41.2	3.9	47.2	31.3	45.2	-1.0
奈良県	57.5	32.0	78.2	40.5	69.8	13.8	73.7	51.3	71.0	23.4
和歌山県	6.8	23.6	10.6	7.5	8.2	-13.1	10.1	11.9	5.4	-19.3
関西地区	287	13.9	344	5.4	292	-10.0	317	4.3	298	3.6
関東地区	360	8.4	412	11.1	395	3.3	378	1.6	383	6.4
中部地区	80	-2.5	101	-2.7	101	-9.1	91	-3.5	95	18.2
全国	762	16.5	828	14.7	757	1.8	772	3.1	805	5.7

表 1 関西の訪日外国人数の動向

具体的なテーマとしては関西地域に訪れる外国人をどうやって神戸に呼び込むかについて研究したいと思う。特になぜ神戸市を選んだかという点、普段からアルバイト先としてほぼ毎日通っている街でもあり、友達との約束や遊び場としてもよく訪ねている場所であるため、居住しているわけではないが馴染みのある街だからである。そして現地に行って調査を行うためには距離が近い方が一番良いと判断したため、神戸市をモデルにしようと思ったのである。

1.2 文献の紹介

この論文を始める前に私の研究と私はデービット・アトキンソンの『世界一訪れたい日本のつくりにかた〜観光立国論【実践編】』を紹介したいと思う。そして、その本の中で私の研究に参考になるような部分を取り上げ、内容の簡単な紹介と感じたことについて述べたい。

第2章 ターゲット設定

第2章の主な内容としては、現在日本に訪れている外国人観光客はどの国から来ており、戦略を立てる際にどの国から来てもらうかを定めることが大切だと書いている。本の内容によると日本を訪れている外国人観光客の半数を示しているのが中国と韓国であると書かれており、デービットはアジアだけでは限界があるため、欧州、特にドイツをターゲットにすべきだと述べている。確かにアジアからは現在多くの観光客が来ているが、欧州からの来訪客が少ないのは事実である。大阪や京都の場合にはすでに外国人によく知られており、多くの観光客が来ているからこそ、いろんな国から来てもらうという意見が説得力を持っていると言える。しかし神戸の場合は、すでに来られているアジア人の観光客にすらあまり来ていない状態であるため、この場合には逆にそのアジア人の観光客をターゲットにする必要があると私は思った。その中でも特に観光客が多い東アジアをターゲットに絞っていかうと考えている。

第4章 自然環境を生かした街

第4章の内容は豊かな自然に囲まれている日本の環境上、その自然を「売り」にしていくべきだということである。特に日本は四季がはっきりしており、季節ごとの自然環境の味がそれぞれ異なるという点を強調し、日本独特の文化と豊かな自然を合わせることがポイントだと述べている。また、自然を観光にした場合、長期滞在の可能性が高まるため、その分利益も増える可能性が高いと述べている。神戸の港がある街だという特性のおかげで海がすぐそこにある。もちろん大阪も海が近くにある街ではあるが、大阪観光は難波を中心に行われており、難波以外にも大阪城や天王寺など海とは少し距離のある場所に観光スポットがあるため、大阪より神戸の方が、自然という要素が強い魅力ポイントになり得るのではないかと考えた。また、六甲山のような山にも囲まれており、自然を感じるにはもってこいの場所である。実際に山の上の方にハーブ園や展望台などが設置されており、自然を有効活用しているとも言える。さらに神戸には有馬温泉という温泉街が存在し、温泉を楽しむと同時に旅館などで日本の文化を感じ取ることもできる。この本に書かれているような点を活かすには丁度良い環境なのではないだろうか。

第5章 伝える力

第5章の内容は一言でいうと「誰に何をどう伝えたいかを考える」ということである。この章では言葉によって国ごとに受け入れかたが異なるということに加え、文化の違いから来る誤解や認識の違いなどについて書かれている。本によれば「アメリカと欧州から来られた外国人が感じる日本に対する印象は、冷たいという意見が強いと言われている。つまり心からは歓迎されていると感じられていないという事である(p.180)」と書いているように日本の「おもてなし文化」を体験してもなお、歓迎されていないと感じるということは相手に真心が伝わっていないという事になる。単純に文化圏の違いから生じた誤解かもしれないが、日本人からとすれば当たり前のサービスとして受け入れられるかもしれないものでも、文化の違いや生まれ育った環境の違いによっては寄ってくる行為自体を負担に思ってしまったたり、それが逆に何かを企んでいるかのように感じ取ってしまう可能性すらあり得るということだ。結局重要なのは表面上の表現ではなく心から歓迎するという気持ちを外国の人々に知ってもらえる事であろう。

ターゲットに何かを伝えるためには、そのターゲットとなる国についての背景知識が必要であり、日本に来た際、誤った認識を持たれないために考えざるを得ないということである。今回の研究ではターゲットをアジア人に行っているため、欧米に比べたら文化的に似ている部分が多いと言える。そのため、比較的簡単と思われがちだが、同じアジアの中の日中韓ですらそれぞれ独自の文化が存在し、相違点が存在するため一番注意しなければならないところである。

2. 調査

神戸市は私が現在勤めているアルバイト先がある場所であり、それ以外にもよく訪ねる街である。そのため神戸市を訪ねるたびにこまめに観察するようにしていた。こうして、通いながら感じたことや気がついた問題点をいくつか挙げていきたいと思う。

2.1 フィールド調査

まずは外国人に向けて地域を案内してくれるようなサービスが整っていないという点である。確か、前には三宮の生田ロードの方に、観光案内所がおかれていた。そこを訪ねたことはなかったが、いつも思っていたのは、閉まる時間が早すぎるという事であった。私が三宮を歩いている時間帯はほぼ午後の時間帯で、詳しい運営時間は把握できてないがだいたい午後4時から5時の間にはもう開いていなかったと記憶している。そのため、あまり役に立っているようには見えない印象が強かった。しかも今となっては案内所さえもない状況である。現在はJR三宮駅付近に一つだけ存在し、これについて知っている人やわざわざそこを訪ねる人以外、外国人観光客に来て地図などに依存して観光をするしかない。

2つ目としては、夜の三宮である。神戸は昼ももちろん素晴らしいが、夜になると夜景スポットが多く存在し、個人的には昼より夜の方が楽しめる町だと思っている。しかし、ここで問題なのは神戸市の中心とも呼べる三宮、特に生田神社付近が夜になると歓楽街に変わるという点である。20

15年より「客引き行為等の防止に関する条例について」が制定され、客引き行為は原則禁止となった。にもかかわらず、実際には今も午後6時を過ぎると多くの店から勧誘の人々が出てきて数メートル歩くたびに誘われる場合もある。警察が巡回をしているとはいえ、事実上客引きはなくなっていない。これが問題な理由は、裏路地などでこれらをやっているのではなく、中心街の大通りなどでも同じく行われているからである。外国人の特に西洋人の場合は観察したところ勧誘される人はほぼいなかったが、街のイメージを考えると素晴らしい光景とは言いにくいと思われる。

これに続いて3つ目としては有名な夜景スポットの一つである神戸ポートタワーやモザイクなどに行くためのルートが少々不便ではないかと考えた。神戸市にはシティーループバスが存在し、ポートタワーを含む神戸市の主な観光地を回っているのだが、最終バスが18時半前後であり夜景を楽しむためには向いていない。また、ポートタワーの運営時間が短いというのも一つの問題点である。神戸ポートタワーのホームページによるとポートタワーの営業時間は3月から11月までの方は21時まででそれほど短いとは感じなかったが、問題なのは12月から2月までの3か月間である。その時期の営業時間は19時までであり、最終入場時間が30分前だという点を考えると、早く終わってしまうと感じた。もちろん冬の時期は日が短く午後16時以降になると日が沈んで暗くなるため、夜景を見ることに支障はないと思うが、だからといって19時までの営業は非常に短いのではないだろうか。

4つ目は飲食店についてである。もちろん世界的なバスケット選手のコービー・ブライアントの名前の由来が神戸牛だと言うのは有名な事実でありそれほど神戸牛そのものは有名だと言える。国内はもちろん世界各地からそれを味わいに来るともいるぐらい美味しいというのは有名な事実である。しかし、それがまた問題点にもなりえる。なぜなら、神戸牛を目当てに神戸を訪ねた人ならともかく、上記でも述べたような夜景を見に来る人や、海を見るために来るとも神戸市に観光客が来る理由は1つとは限られないためである。阪急三宮駅周辺を歩くと外からだいたい観察できる飲食店の5割以上は神戸牛の店であり、神戸牛の次に多いのが居酒屋や焼き肉屋などであった。これらの単価は少々高く、アメリカやヨーロッパからの観光客に多く存在するバックパッカーには、あまり手ごろな値段とは呼べないのが事実である。もちろん神戸牛の店にも1500円から始まる比較的低価格の店も存在するが、基本的に長い列が並んでいるため、長時間待つのが苦手な人には向いていない。神戸は大きい町であるため、様々な種類のチェーン店や手ごろな価格の飲食店も多く存在するが、そのような店はサンプラザ地下の食堂街や阪急駅の裏側など観光地にはあまりないため、地元の人や三宮に馴染んでない人でない限り、外国人がそこに足を運ぶ確率は低いと思う。

さらに上の4つに加えて5つ目の問題点は、北野異人館の各館の料金についてである。北野異人館は神戸を体表する有名な観光地であり、多くの観光客が訪ねる場所であるが、坂の上に位置し16軒の異人館が広い範囲に渡って建てられている。しかし、その16もする異人館の料金が統一されていない。一部の人気の異人館はペアチケットなどを購入することができて、単体より安い価格で観覧することはできるが、先ほども述べたようにそれは一部であり、多くの異人館は個別のチケットを

購入しなければならない。そのため、遊園地の自由パスチケットのような概念を用いて、16個の館の統合観覧チケットが必要なのではないかと思った。

しかし、私が思う神戸市の観光客が少ない最大の理由は知名度の低さである。地理的に京都や大阪などの有名な都市が隣に2つも存在し、阪神淡路大震災などの大災害による負のイメージの影響により観光地としてあまり認識されていない。大都市の隣である点や、港町である点、大きな中華街など色々なところが似ている横浜の場合も神戸市と似たような立場である。東京の隣に位置している横浜市の2018年度の外国人観光客総数は約150万人程であり、神戸市とあまり差がない状況である。有名すぎる大都市の隣に位置しているため、つまり知名度の低さによる外国人観光客数の差だと考えている。

2.2 神戸市の魅力ポイント

2.1では神戸市に外国人観光客があまり来ない理由について、自分の経験から問題点を述べた。ここでは1.2で紹介した本の内容から、私が考えた神戸市の魅力ポイント三つを、改めてまとめておきたい。

一つ目は上記でも述べたように綺麗な夜景である。ハーバーランドのモザイクから、もしくはポートタワーから覗いた海を背景にした夜景はとても綺麗で、海からの風を感じながら、海を背景に灯台のようなポートタワーの夜景を見るというのは、とても良い気分にしてくれる。私の中で最も魅力的なポイントだと考えている。

二つ目は異国的な街だという事である。私が日本の様々なところを旅行してきた中、神戸市程に様々な文化が混ざり合っている町はほぼなかった。神戸市にある南京町は横浜、長崎と共に3大中華街と呼ばれる程の場所であり、並んでいる中華料理屋もちろん良いが、一瞬中国に来たように思わせるその雰囲気味わえるのもまた素晴らしいと思う。そして北野には開港時期に様々な国から来た人々が住んでいた歴史を感じられる北野異人館が存在し、ここもまた日本ではない違う国に来たような印象を与えてくれる。

三つ目のポイントは、本の紹介でも述べたように自然が豊かでありその自然という資源を有効に使っているという事である。その例えとして挙げられるのが、新神戸方面にある布引ハーブ園であり、ロープウェイに乗って山の上に登り山の頂上から見た神戸市を堪能することができる素晴らしいスポットである。また、上で何回も紹介したように神戸の港の方の夜景なども海という自然をよく活用していると思う。

3. 考察

3.1 神戸市のイメージ

上記の問題点にも書いていたように神戸市の外国人観光客が少ないもっとも大きな理由は、大阪や京都のような地域に比べて知名度が低いことが原因だと私は考えている。つまり神戸市が外国に

あまり知られてないということである。例えば韓国の場合、神戸という地名を聞いたら一番先に思い浮かぶキーワードは地震である。これは教育課程において生じた誤解であるが、韓国の学校では「阪神淡路大震災」を「神戸大震災」という名前で習っているからである。なぜそのような名前と呼ばれているのか詳しくは分からないが、私の推測によると阪神と淡路という地名は韓国にあまり知られていなく、そのために一番大きい影響を受けた神戸市の地名を取り上げて「神戸大震災」という名前になったのではないかと思っている。そのため、韓国で神戸市という街は観光地としてのイメージがあまりない。また、観光に関するガイドブックなどにも関西圏の旅行案内は主に大阪と京都がメインに紹介され、神戸や奈良などは大阪や京都に比べたらあまり重要な旅行先として紹介されていない。さらに日本と韓国は距離が近いので1泊2日旅行のような期間が短めの旅行が多く、そのような短いスケジュールの影響により大阪や京都に観光客が集中する傾向がある。

そのためにも現在の神戸市にとって最も重要な解決策は外国の人々に神戸市の魅力を知ってもらうことだと言える。そしてその魅力ポイントとは多様な文化を感じることができる「自然あふれる都会」と「文化の多様性」というポイントである。そしてそのようなポイントを合わせて、夜景スポットとしての魅力のアピールをする必要があると考えている。つまり大阪は活気あふれる賑やかな大都会であり、京都は日本の伝統と歴史が味わえる街であるなら、神戸は「自然」と「多様性」というポイントを活かすことにより京都や大阪と比べて決して劣らない素敵な街だということを知らせる必要があると言える。

3.2 これからの課題

上記でも述べたように神戸市に観光客を呼び込むためには、外国に神戸市が安全で魅力的な観光地であることを知らせる必要がある。そのためにまずやるべきこととしては、海外のもっと多くの都市と連携を取ることだと私は思う。神戸市の資料によると現在神戸市と協力関係に置かれている都市の中で、アジアの国は韓国と中国2か国であり、中国の天津と韓国の仁川、大邱のみである。韓国の方はさておくにしても、中国に1つしかないというのは少し驚いた。日本に来ている観光客数が一番多く、購買力も高いと言われている中国が1カ所であることを含め、東南アジアや日本と交流が深い台湾ですら姉妹都市、もしくは協力都市がゼロであることには問題であると感じた。そのためにも今よりもっと多くの都市と協力関係を結び、神戸市の良さをアピールすべきだと考えた。

具体的には海外の観光会社との協力により、短期旅行の場合は神戸旅行のプランを、一週間ほどの比較的長い旅行の場合は「関西旅行」といった形で神戸市も十分魅力的な観光地であることを積極的に勧めてもらう事により、単純に言えば大阪や京都だけの旅行を考えていた人にも神戸という場所に目を向けてもらうことという効果が期待できる。さらに、産経新聞（2019）の記事によれば、2025年に開かれる国際博覧会に向けて神戸空港を国内線だけでなく国際線も就航の動きもあるという発表がある。つまり、関西空港を通して神戸につくのではなく、海外からすぐ神戸まで来ることができるかもしれないということだ。そのためにも、神戸を観光都市として海外に知らせる必要があるといえる。これに関しては、大阪旅行、もしくは京都旅行の「ついで」の概念ではなく、

神戸だけのために外国人観光客が来られるよう、旅行会社との連携を取って神戸の旅行商品を計画してみるのも、神戸を知ってもらうにはいい方法になり得るのではないだろうか。例えば、海外にいる観光客が関西地方を旅行しようとする際に、大阪や京都に向かう方向けに神戸の旅行商品も一緒に進めることにより、興味がなかった人でも「こういう場所があったな」と知ってもらうことが大事だと思う。

もう一つの課題としては、国内の都市との連携が必要であると考えた。つまり同じ関西圏である大阪と京都、特に大阪との協力が必要不可欠である。なぜなら、関西を訪ねる旅行者は関西空港を通過する可能性が高く、そのため大阪に滞在するケースが多いと考えているからである。実際にも上記でも述べたように大阪に来られている外国人観光客数は約1150万人であり、兵庫に190万人しか来ないという事は関西に来られる観光客の大半は大阪の観光にとどまっているとも言える。しかも兵庫県全体で190万人であるため、姫路などの観光地も考えるとより少ない数だとも言える。そのため、大阪市との連携を用いて、関西に流れてくる外国人観光客をそのまま神戸市までも流れてこられるように工夫することが大切であると考えた。私の提案としては、大阪市に神戸市の観光に関する案内所などを設置し、大阪観光をしている観光客に神戸について知ってもらうという事が必要なのではないだろうかと考えた。もちろんバックパッカーのように予定を特に決めずに自由に旅行する人のためにもなるが、パッケージ旅行などで来られている観光客にもまず、神戸について知ってもらう事を通して、次回は神戸にまで来てもらうという事を前提にする必要がある。

また、問題点でも挙げたように「神戸といえば神戸牛」といったプレミアム感をメインに押し出すのではなく、誰もがその場所にこれば楽しめる「夜景」をメインの観光テーマにして宣伝をする必要がある。もちろん大阪や京都でも夜景を見ることはできる。しかし、私が直接観光をしてみても感じたこととしては、大阪や京都、神戸の夜景がそれぞれ異なるということである。大阪の方は高いビルが詰まった都会的な景色だとすれば、京都の方はオレンジ色の照明を使って日本の伝統的な建物を強調して日本らしさを表している。神戸の場合、この2つの都市とはまた異なる。何度も言っているように神戸は多様な文化が混ざり合っている都市であるため、中国風の中華街の夜景や北野異人館の異国的な風景、そして神戸の主な夜景は海を背景とするため、スペースが広く、海に反射された綺麗な照明などにより独特の雰囲気を楽しむことができる。そのため、私は大阪や京都に勝らない素晴らしい夜景スポットだと考えており、これを神戸の売りにすべきだと考えている。

また、これも問題点でも取り上げたことだが、神戸市の中でも観光案内所などの外国人に向けての案内が足りない。メインストリートともいえる阪急駅前の商店街は2021年まで工事を行っており、グーグルマップなどの地図では場所を探そうとしても困難になる可能性が高い。そのためにも観光案内所を今より多く設置する必要がある。他の地域は多言語対応や通訳、翻訳などの外国人観光客の対応について考えていると聞くと、神戸の問題はそれ以前の問題である。案内所がないのに多言語対応がどうこうの問題ではないということだ。また、今回私の論文での神戸市観光のメインポイントは「夜景」であるため、観光案内所の時間帯を少なくとも夜8時までとする必要がある。

なぜなら、いくら昼に観光案内所が開かれていても、夜景のために夜に神戸に来られる観光客も必ずいるはずだからである。そのような観光客にまで対応できないのであれば、観光案内所の意味が薄れてしまうということだ。したがって、これからの外国人観光客のためにも観光案内所をもっと設置するべきである。

3.3 神戸の推薦観光スポット

以上の意見を元に神戸市を旅行するにあたって、私個人がお勧めする旅行プランを紹介していきたいと思う。だがその前に神戸の観光スポットを紹介して行き、その中からお奨めルートを探るといった形で進んでいきたいと思う。

まず、初めに紹介したい場所は北野異人館である。北野異人館は上記でも説明したように神戸が開港してから主に外国人が住んでいた地域であり、街を歩くとまるで日本ではなく欧米に来ているかのような気分を味わえる場所である。位置は阪急三宮駅から出て生田神社方面にまっすぐ進んだら出てくる。北野異人館には英国館、ライン館、イタリア館、フランス館など欧米の国々をテーマとする家が存在し、中に入ったら開国当時の外国人たちが生活していた家を再現していたり、博物館や美術館に改造して展示を行なっている。しかし、上記での問題点でも取り上げたように各北野異人館は料金が発生するため、数館しか見られないという人のためにいくつかおすすめていきたいと思う。まず、はじめにオススメする場所はライン館である。ライン館は北野異人館の中で唯一無料の異人館であり、木造2階建ての建物である。因みにライン館の名前の由来は、市民からの応募により決まった名前であり、ホームページの説明によると「この館の下見板の横線（ライン）が美しいから」という由来だと言われている。また、北野異人館にあるスターバックスもまた特別である。なぜなら、北野異人館に存在していた異人館の建物をそのままカフェとして使っているからである。中に入ったら漂うコーヒーの香りと共に、昔の趣を感じ取れる古い家具や内装がまるでタイムマシンを乗って過去に戻ったかのような錯覚を呼び起こす。コーヒー1杯と共にリラックスしてみるのも観光の一つだと言えるだろう。

次に紹介したい場所は、私の一押しでもあるハーバーランドである。ハーバーランドはモザイク、観覧車、アンパンマン博物館や神戸ポートタワー、海洋博物館など多くの観光地が密集している地域である。まず、モザイクはショッピング街であり、お土産を買ったり食事をする事も出来る場所である。モザイクのレストランは三宮とは違って和食から洋食、ファストフード、カフェなど飲食店の種類が多く、値段の設定も様々なため自分の好みと都合に合わせることができる。その上、上記でも述べたように一番の魅力ポイントである夜景を見れるという利点がある。

ハーバーランドにある夜景観覧スポットは主に3つある。図1は私が直接訪ねた際にとった写真だが、こちらを見れば分かるようにモザイクの反対側にあるポートタワーと海洋博物館から出る綺麗な照明が、海に反射し輝いている風景は、大阪や京都では感じられない特別な雰囲気を楽しむことができると思う。もちろん同じくモザイクにある大観覧車は、大阪のHEP FIVE観覧車とはまた異なる景色を見ることができるのでオススメできるスポットである。HEP FIVE観覧車は大阪の中心

部にあるため、高いビルからの光などで都会的な夜景を楽しむことができるが、モザイクの観覧車は神戸市の都会的な夜景はもちろん反対側には海があるため、海に反射された光まで合わせて2倍に楽しむことができると思う。神戸ポートタワーから見る夜景もまた格別である。モザイクから見る夜景と同じ様に、ポートタワーからモザイク方面を見る夜景も素敵だからである。様々な色に変わりながら輝くモザイク大観覧車や白く光る看板と薄く黄色に輝くモザイクの照明が海にまで反射し輝くその光景は旅の中忘れられない景色となるだろう。しかし、3つもスポットがあると言うことはどちらかを選ぶ必要があると言うことだ。この中で私が特にオススメしたいスポットは、モザイクからの夜景である。理由としては、お金がかからないメリットがあるからである。観覧車もタワーも両方入場料又は観覧料がかかる上に入場時間もまた制限がある。つまり、お金をあまり使えないバックパッカー、時間やスケジュールをあまり気にしない人など、皆それぞれの旅行スタイルがあるため、その点を踏まえて一番オススメできる場所だと考えた。



図 1 モザイクから見た神戸ポートタワーの夜景

次に、神戸には南京町という中華街がある。日本の3大中華街の一つである南京町は、中国風の街でありまるで中国に來ているかのような気分を味わうことができる場所である。中には北京や四川など中国の有名な料理を売っている飲食店はもちろん、道に沿って屋台もあるため、食べ歩きが好きな人ならば食べ歩きしながら店を巡ったりすることもできる。

また、神戸はポートアイランドという人工島もある。東京のお台場のようなポジションに置かれている島であり、中にはコーヒー博物館や青少年科学館、スポーツ博物館などが集まっている場所でもある。そのため、子供も大人にも楽しめる場所だと考えている。その中で特におすすめしたい場所はUCCコーヒー博物館である。UCCコーヒー博物館は、三宮からポートライナーを乗って15分ほど向かったら出る南公園駅で降りたらすぐ見える場所にある。博物館ではコーヒーの歴史や豆の種類、産地などの知識から、カプチーノやカフェラテなどのコーヒーの作り方を動画で学ぶことができるなどの色々な勉強ができる。さらに観覧が終わった後にはサービスとして2種類のコーヒーの試飲もでき、コーヒー豆の味比べ体験もできる場所である。その上、試飲まで終わったら出口の

ところに今まで観覧した内容がクイズ形式で出題される機械があり、それを当てることにより記念の認定書まで無料でもらえる。そのため、子供はもちろんコーヒー好きな人にもおすすめできる場所だと思っている。また、その一帯は青少年科学館やIKEAもあるため、交通に便利だという利点もある。

次に紹介したい場所は布引ハーブ園である。このハーブ園が他と違う部分は、山の上にあるというところである。正確には山の頂上の少し下に存在し、新神戸駅から5分の距離にある駅からロープウェイに乗って山の上まで登ることができる。頂上の前に降りたらハーブ園があり、散歩コースとしてもってこいの場所である。ハーブ園の中には色々な種類のハーブが並んでおり、ハーブの爽やかな香りを嗅ぎながら散歩をすると、自然と自分の一体感を感じることができる。さらに、ハーブ園を楽しんだ後さらに上に登ったら山の頂上に着き、神戸市の全景を見ることができる。山の上で見る夜景は前日にハーバーランドで見た夜景とはまた違った景色を楽しむことができ、旅行の疲労や日常のストレスなどを一気に解消できるであろう。

神戸には有馬温泉という温泉街も存在する。有馬温泉街は三宮マスターミナルから高速バスに乗って約30分ほど行けば着く。有馬温泉は温泉旅行を楽しみたい人に丁度良い環境が整っている。有馬温泉には温泉旅館やお寺など、日本の伝統的な温泉街の風景を味わうことができる。さらに温泉旅館での一泊は忘れられない経験になると思う。温泉街には足湯も存在し、旅行で疲れた足を癒すこともできる。温泉旅館はかなり高めの値段であるため予定に入れるのが厳しいというバックパーカーには、宿泊ではなく温泉のみを楽しめる金の湯や銀の湯なども存在する。値段は1000円未満であり、比較的低価格で有馬温泉を楽しむことができるので日本の温泉と文化を感じたいという人におすすめである。また、図2は私が有馬温泉に行った際に取った写真であるが、こちらは神戸の市内とはまた違ったオレンジ色の照明が輝いて美しい夜景を見ることができるので夜に行ってみるのもおすすめである。

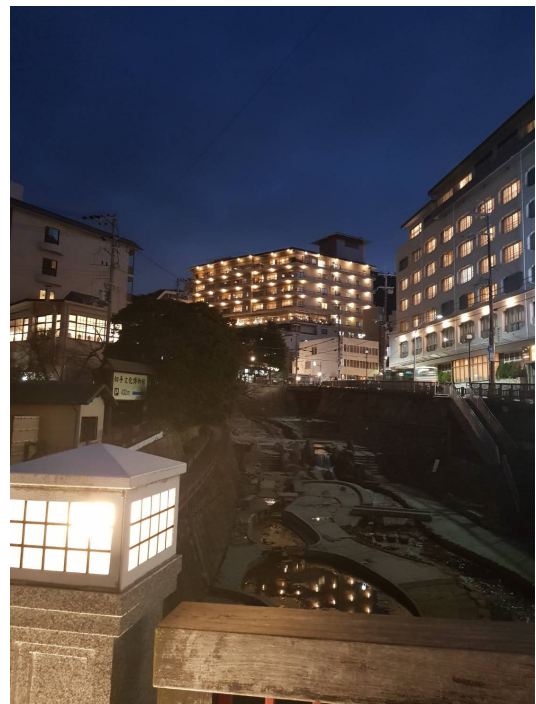


図 2 有馬温泉駅から見た有馬温泉街の夜景

最後にオススメしたい場所は「人と防災未来センター」である。三宮から大阪方面へ電車に乗って行くと、阪神春日野道駅がでる。そこから10分ほど歩いたら「人と防災未来センター」出てくる。ここは災害に関する勉強ができる場所だが、直接行ってみたいこととしては、地震災害を多く経験している日本ならではの場所だと思った。特に地震と津波について詳しく学べることができ

て、阪神淡路大震災の時の状況を再現した場所や、地震災害の対策についても調べてとても勉強になると思う。私がこの場所をおすすめする理由は、私の出身国である韓国との関わりがある。韓国は最近まで地震に対して安全な国だという認識が強かったが、近頃になって小さい規模ではあるが、地震が頻繁に起きているため地震災害に関する関心が高まってきている。もちろん韓国だけでなく、中国もまた大きな震災を含め何度も地震を経験している国であるため、地震に対する関心は高いと思われる。そういった意味でこの人と防災未来センターは、東日本大震災や阪神淡路大震災などの大きな災害を何回も経験している日本ならではの防災知識と経験を学べるという、いい勉強の場になると思った。ただし「災害に関する場所だから雰囲気重たそう」とか「退屈で硬い雰囲気の場所」という印象ではなく、地震をいう災害を映像や体験などを行うことにより、楽しく学ぶことができる。地震や津波などの災害はどの国にあたって安全とは限らない。災害の経験を野元に積みかさねられた日本の防災について学ぶことができるいい機会になると考えている。

3.4 神戸旅行プランの提案

上記のおすすめスポットをもとに私が考えたオススメプランを考えて行きたいと思う。まず、このプランの前提として日数は1泊2日、つまり宿泊を前提としている。また、正確な1時間単位でのプランではない。その理由としては、対象の年齢や身体的条件によって時間が前後する可能性があるからである。特に神戸市の観光地はお互いにかかなりの距離があり、正確な時間でスケジュールを作るのはあまり意味がない。また、時間に追われてまともに楽しめずに旅行が終わってしまう可能性もあるため、細かな時間単位ではなく大まかな流れだけを説明していきたいと思う。

神戸旅行のスタートとしては北野異人館がオススメだ。ルートの最初として選んだ理由は、北野異人館は急な傾斜が多く、全部回るだけでかなりの体力を消費してしまうからである。また範囲が広く、傾斜が厳しいということは、観光するにかなりの時間を消費するため、異人館を全部回ることができない可能性もある。博物館や異人館などの場所は入場時間が過ぎてしまい観覧することができない可能性があるため、必ず昼の時間帯に行くべきであると判断した。そして、次に向かう場所はハーバーランドである。時間の余裕があればポートタワー方面に向かい神戸ポートタワーや海洋博物館などを観覧したあと、モザイク方面でショッピングや食事をして夜景を見るなど、ハーバーランド全体を巡るのが一番おすすめである。しかし、もし北野異人館で時間を使いすぎてしまい全部回れない状態であれば、一番おすすめしたい場所はモザイクの方面である。モザイク方面にはモザイクはもちろん、観覧車や阪神淡路大震災のメモリアルパーク、アンパンマン博物館などがあるが、時間がないのであればモザイクだけ訪ねても大丈夫だ。理由はこの論文で何回も述べたように夜景が綺麗だからである。

翌日に向かう場所は神戸の中心から少し離れて人と防災未来センターに向かう。理由は上記でも述べたが、私の出身国である韓国も含め地震に安全な国はなく、だからこそ地震を多く経験してきた日本の知恵を学ぶ必要があると感じた。特に神戸は阪神淡路大震災の直撃を受けた町であり、人と防災未来センターはそれを加減なく見せてくれるため、いい勉強にもなると思う。防災センター

から出た後は布引ハーブ園に向かう。ただし、防災センターの方の観覧をなるべく午後2時以内に済ませた方がいい。なぜなら、夜景を頂上の展望エリアは夜になっても営業しているが、ハーブ園の方は午後5時までの営業だからである。そのため、山の上で夜景のみを楽しみたいという人は構わないが、美しいハーブ園を回るのも悪くないと思う人は、防災センターの方のスケジュールに気を付けた方がいい。最後に向かう場所は南京町である。南京町は昼に行っても素敵だが、夜に向かうとさらにその雰囲気が増してくる。屋台からの食べ物の匂いと中国風の建物まで楽しめるだろう。

おすすめプランを見れば分かるように神戸市旅行の重要ポイントは「夜景」である。山や海などの自然に囲まれている町でありながらも、都会的な風景も同時に持っている町である神戸だからこそその魅力ポイントではないだろうか。少なくとも大阪や京都では味わえない経験ができる場所であることには自信を持って言える。このプランはあくまで個人のおすすめであり、プランの内容以外にも有馬温泉やポートアイランドなど、神戸には観光するに良い場所が沢山あるという事だけは覚えていて欲しい。

4. 終わりに

開港と共に海外の人々や物を受け入れて150年以上の歴史を持つ神戸が、他の都市に比べ観光客数が少ないというのはなぜかという疑問から始め、神戸市の問題点と魅力ポイント、そして神戸市を知らせるための方法から、私からの旅行プランの提案まで観光というテーマをもとに進んできた。旅行と言うものは、人それぞれのスタイルがあり目的もまた皆異なるため、必ず外国人観光客を神戸に集める方法というのではないかもしれない。しかし、今回の研究を通して分かったことは、神戸は十分に観光都市になり得るということであった。特にこの論文で継続的に述べてきた大阪と京都に比べても遜色のない、「夜景」という神戸だけのアイデンティティがあるという発見があった。残りは課題の方でも述べたように外国の人々に神戸がどれだけ魅力的な町であるかを知らせること、そして来てもらうことであろう。現在は大阪や京都に頼ったり、海外との協力により神戸を知らせる方が先であるが、上記でも述べているように段々神戸に来る観光客が増え、神戸空港に外国人が直接来るようになることにより、他の都市に比べても劣らない程の観光都市になるはずと私は信じている。

謝辞

まず、今回の卒業論文を書いていくに当たり、途中テーマの変更も多くあったのにも関わらず、テーマ設定から結論に至るまで細かく指導を行ってくださった性川波都季教授に深く感謝の言葉を申し上げます。また、進級論文から卒業論文まで2年間の間、貴重な意見をくださったゼミ生の皆様にも深く感謝の言葉をお伝えします。

参考文献

デービット・アトキンソン (2017) 「世界一訪れたい日本のつくりかた～新・観光立国論【実践編】」

三菱UFJリサーチ&コンサルティング「関西のインバウンド消費 ～関西のインバウンド消費額は前年比ほぼ横ばい～ (2019)」 pp.2-4

アジア太平洋研究所『「インバウンド先進地域としての関西」研究会報告書 (2017)』

神戸市ホームページ <<http://www.city.kobe.lg.jp/a74716/shise/kekaku/shichoshitsu/international/sister/index.html>> 2019年11月18日アクセス

神戸北野異人館街ホームページ <<https://www.kobeijinkan.com/>> 2019年12月03日アクセス

神戸交通振興株式会社 <<http://www.kctp.co.jp/outline/car/cityloop/>> 2019年12月3日アクセス

兵庫県ホームページ <<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk14/27kyakuhikikoutouboushijourei.html>> 2019年12月8日アクセス

日本経済新聞「神戸空港 国際化へ一歩 規制緩和で、伊丹は先送り」

<<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO45516530R30C19A5ML0000/>> 2019年12月8日アクセス

布引ハーブ園ホームページ <<http://www.kobeherb.com/>> 2019年12月8日アクセス

外国にルーツのある子ども達への日本語学習支援
～ボランティア活動から見えた地域のボランティア団体と学校の在り方～

総合政策学部 総合政策学科
佐野 花奈江

目次

第1章 はじめに

- 1.1 問題意識と動機
- 1.2 なぜ外国にルーツのある子ども達への支援を考えるのか
- 1.3 支援の現状
- 1.4 先行研究

第2章 兵庫県の外国にルーツのある子どもたちについて

- 2.1 兵庫県の外国にルーツのある子ども達に関するデータ
- 2.2 兵庫県のボランティア団体に関するデータ
- 2.3 こくさいひろば芦屋について

第3章 対話

- 3.1 対話(1) こくさいひろば芦屋
- 3.2 対話(2) 特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター (KFC)
- 3.3 対話(3) 三田国際交流協会 SKIP
- 3.4 対話を終えて

第4章 実現可能な連携とは

第5章 おわりに

謝辞

引用文献

第1章 はじめに

1.1 問題意識と動機

そもそも、「外国にルーツのある子ども」とは、どのような子どものことを言うのか。NPO 法人青少年自立支援センター 定住外国人子弟支援事業部（2018）には、

「国籍にかかわらず、父・母の両方、またはそのどちらかが、外国出身者である子ども」と定義されている。

外国にルーツのある子どもについて考えるきっかけとなったのは、中学生のときに中国にルーツのある女の子が転校してきたことだった。その生徒は、他の生徒から異質なものとして見られていた。その理由は、理解しにくい日本語を話していたり、他の生徒とは違う文化や価値観を持っていたりしたことが原因だろう。しかし、私は雨の日に行われた体育の卓球がきっかけで彼女とすぐに仲良くなり、友達になった。彼女の国では、卓球が国技なので、卓球を習っていた私に親近感を抱き、声をかけやすかったと後に教えてくれた。初め、彼女は気が強いイメージだったが、本当はとても明るくてフレンドリーな性格だった。しかし、私以外の生徒とはあまり仲良くなれることはなかった。多くの生徒が、彼女の話す日本語がおかしいと馬鹿にし、試験で点数が悪い彼女を見下していた。担任の先生でさえ、彼女に対してのみ態度がきつかった。意味の理解できない言葉を何度も質問する彼女に先生はうんざりしていた。その子が多数の生徒から差別的なことを言われたときも先生は無視していた。さらに、成績の低さを勉強せず遊んだり、先生の話聞いていないからだど決め付けていた。私は、生徒を守る立場である先生までもが生徒と同じような態度で彼女に接していたことや、学習面でサポートをせず見て見ぬふりをしていたことに対して憤りと不信感を感じた。

その一方で、私の人生を大きく変える出会いがあったのもこの頃である。当時、勉強よりも卓球に力を入れていた私は、学校の授業についていけなくなっていた。特に中学校から本格的に始まった英語の授業が理解できず、英語が嫌いだった。さらに、ほとんどの生徒が塾に通っていたため、中学校の授業は解説も足りず面白味もないものとなっており、私はますます英語が分からなくなっていた。その時、他学年の英語を担当していた英語科の先生が放課後に、私のような生徒を集めて授業で習った範囲を初めから理解しやすく説明して下さった。その先生はとても優しく、常に勉強熱心でいつも生徒と真剣に向き合うような先生だった。私はその時間のおかげで英語の点数が伸び、英語を学ぶ楽しさを知ることができた。その先生は元々英語が得意ではないと言っていた。苦手だからこそ、よりわかりやすく教えることが出来ていると言っていたのを今でも覚えている。私はその先生の姿を見て、将来英

語教師になりたいという夢ができた。いつか、私のように塾に行っていなくても、英語が嫌いでもできるようになり、学ぶ楽しさを伝えられるような授業をしたいと強く思うようにもなった。また、授業以外でも一人ひとりの生徒と向き合うことを大切にする教師になりたいと思うようになった。

そして今、大学で中学校の英語教師を目指して勉強している。ある日、大学のチャペルで「外国にルーツのある子ども達への日本語学習支援」という話を聞き、中学時代の中国にルーツのある友達との出来事を思い出した。この時参加した理由は、将来、中学校の英語教師を目指す私にとって身近に関係のあることだと思ったのと、中学時代に転校してきた女の子との出来事に関係があったからである。この時、講師としてお話しされた方は当時「こくさいひろば芦屋」の代表をされていた辻本先生という方だった。チャペルの後、こくさいひろば芦屋のボランティアが足りていないという話を聞き、すぐにボランティア団体の活動に参加するようになった。

こくさいひろば芦屋には様々なルーツの子どもたちがいる。日本語がほとんど話せない子どもから流暢に話せる子まで様々である。子どもたちと会話をすると日本語の支援が必要ないかのように感じることもある。しかし、日本語が流暢に話せるからといって日本語が完璧なのではないと、活動を通じて感じた。書くことができない子どもや、会話ができていても意味が分からずに話をしている子ども、漢字やカタカナが読めない子どもなど、一人ひとりの能力は全く違う。ボランティア活動を始めたばかりの頃は能力の見極めが非常に難しく、言葉が理解できていないことに気が付かないことも多々あった。こくさいひろば芦屋では、日本語の学習支援のほかにも様々な活動を行っている。例えば、新しいボランティアが来た時には勉強を一旦止め、自己紹介をする。これは自分のルーツを隠さず、誇りをもって相手に伝えられるようになる練習である。他にも、母語の喪失を防ぐために各言語を学ぶための教室を定期的で開催したり、子ども達だけでなく子ども達のご両親にも日本語を学ぶ手助けを行ったりしている。この場所は単に勉強だけをする場ではなく、外国にルーツのある子ども達のコミュニティづくりの場にもなっている。

私は、ボランティア活動を続けていく中で疑問に感じてきたことがある。それは、地域のボランティア団体と子ども達が通っている学校とが連携していないことである。子どもたちは学校での悩みをボランティアの方に伝えているが、それを子どもたちの学校へ伝えることができていない為、問題が解決していない。子ども達にとって学校の先生よりもボランティアの方が安心して接することができる子が多い。さらに、学習の会場には地域の公立学校の教室を借りることが多いのだが、その時にも学校側から教室を貸すことを快く思っておらず、話が通らないこともある。子どもたちがこくさいひろば芦屋に来て勉強を頑張っている姿を知らない学校の先生も多い。ボランティア団体での活動は時間も限られており、そ

の時間だけでは日本語が上達するのは難しい。少ない時間で、日本語学習、学校での課題や宿題、勉強の予習と復習を全て行うのは不可能である。しかし、もし学校と地域のボランティア団体が連携し、情報交換を行うことが出来ればそれは可能になるかもしれない。少なくとも今よりは子ども達にとってプラスになると考えている。例えば、授業で習った範囲で理解できなかった箇所を学校で補う時間があれば、日本語教室で日本語の勉強する時間を増やすことができる。そのほかに、外国にルーツのある子どもたちへの関わり方に少し配慮するだけで勉強の効率を上げることが可能になる。漢字が線の塊に見えるため、文字を早く書けない子どもに対してゆっくり板書する、もしくは板書の内容をコピーしたものを配布する。そうすることで、ノートが書けず帰ってからノートを見て復習が出来ない状況を減らすことに繋がる。実際、私がこくさいひろば芦屋で授業の復習をした時、授業で分からなかった箇所がノートを見ても分からず困ったことがある。私達にとってはすごく些細なことだが、そこに配慮するだけで子どもたちにとって助かることが多くあると感じたことがある。

将来、学校の教師を目指す私にとって外国にルーツのある子ども達が他の生徒と同じように勉強ができる環境をつくり、志望高校に受かるようサポートすることは必要なことである。その支援を実現するために、将来は私自身が学校と地域のボランティア団体とを繋ぐ役割を担いたいと思っている。そこで、今回の研究を通してボランティア活動を行っている側の目線から見た、連携の現状とその問題点について考えていきたい。

1.2 なぜ外国にルーツのある子ども達への支援を考えるのか

このテーマに決めた当初、周囲の人からなぜ「外国にルーツのある子ども」なのか、教育現場にいる子どもの多くが日本語のできる日本人の子どもであるため、大多数である彼らにフォーカスを当てるべきではないのかと聞かれることが度々あった。その時、私自身もなぜ彼らへの日本語学習支援についてなのか、改めて考えるきっかけとなった。彼らへの支援が必要な理由として、「少子高齢化が進む日本社会を納税者として支える人材の育成」や「児童の権利に関する条約の観点から」と書かれてある文献が多かった。例えば、前者については『日本に住む多文化の子どもの教育/ことばと文化のはざままで生きる』（2016）、『多文化社会に生きる子どもの教育』（2019）。後者については『アジア・太平洋人権レビュー2011』（2011）、『外国人の子ども白書』（2017）などがある。本稿では、後者の立場をとる。また、子どもの権利を国際的に保障する条約の1つに「子どもの権利条約」がある。この条約は子どもの基本的人権を国際的に保障するために定められ、成長過程で特別な保護や配慮が必要な子どもならでの権利についても記されている。

日本ユニセフ協会の Web に記載されている「子どもの権利条約 全文」には、第 28,29 条で「教育についての児童の権利」が記されており、機会の均等や権利を認めるように書か

れてある。日本の法律では、外国人の子どもにとって学校へ行くことは義務ではない。しかし、日本も批准しているこの条約に基づけば、外国人であるかないかにかかわらず全ての子どもに教育を受ける権利がある。

一見、外国の子ども達は他の生徒と同じように学校へ行くことができ、同じように学ぶ環境があるように思われる。しかし、日本語ができないことや外国にルーツがあることが理由で、学校で勉強しにくい状況にいる子ども達が多い。日本語力が低いことで他の生徒と同じスタートラインから教科学習を始めることが出来ない状況を、果たして機会の均等といえるのだろうか。私は、彼らが日本国籍で日本語に不自由しない生徒と同じような学びができる環境になって初めて教育が保障されると言えるのではないかと考えている。そのためには、教科学習だけでなく、彼らの学びの基礎となる日本語の基盤づくりや、彼らが自分たちのルーツに自信がもてるような居場所づくりが必要である。そして、この問題は人権問題の一つとしてとらえることもでき、この問題を抱える子ども達が少数であっても、この状況が少しでも改善されるための方法を考える必要がある。

1.3 支援の現状

外国にルーツのある子どもたちへの支援について、『多文化社会に生きる子どもの教育』（佐藤, 2019）では次のようにまとめられている（p.60~89）。1990年代頃に、就学義務のない外国人の子どもが学校から受け入れを拒否されたことがあった。彼らを日本の学校から遠ざけている状況を踏まえ、2003年に総務省の『外国人生徒等の教育に関する行政評価・監視結果に基づく通知』が出された。以降、彼らの日本語指導の課題であった『日本語と教科の総合学習』に焦点をあて、学校での学びに参加するための日本語の力を育成するためにJSLカリキュラムが開発された。しかし、開発当時、日本語指導は放課後や在籍学級での指導が多く、学校が責任をもって指導する体制がとられていなかった。このことが、JSLカリキュラムの普及を遅らせていたため、この普及のためにも、日本語指導の時間確保が課題であった。その後、2012年に、「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」が文部科学省に設置された。そして、日本語指導が「特別の教育課程」と位置づけられた。2014年には、学校教育法施行規則の一部が改正され、正規の授業時間内に日本語指導をすることが可能になり、日本語指導を保障する体制が出来上がってきた。また、日本語力の評価に関しては「JSL対話型アセスメント：DLA」の開発などで彼らに対する対策が取られてきた。しかし、進路の問題や、進学後の日本語教育、就学前の教育など、まだまだ日本語教育に関する教育体制については不十分である。

その理由として、佐藤（2019）は現在の制度や教育制度の枠組みだけでは対応できない部分があり、少しずつ実践の様子もみられるようになったが、JSLカリキュラムの開発、教科

にとらわれない視点を持つこと、母語との関連を考慮すること、指導する教師の力量に依存している点への改善が必要であると言及している。(p.64~86)

また、他の組織・機関との連携について、佐藤(2019)は、「外国人の子どもの教育は、学校だけでは対応できない。国の施策では、省庁間の連携がとりにくいが、自治体では比較的連携がとりやすい面がある。学校外や地域での支援をどのように構想するかが重要になる。不就学の生徒に対しても、将来を見通す力をつけさせるには、地域での取り組みが欠かせない。」(p.87)と述べている。つまり、現行の体制を学校外の地域との連携により補うということである。

1.4 先行研究

後述するように、外国にルーツのある子ども達に関する文献は多く、彼らへの支援の必要性を述べている文献も数多くあった。学校でのカリキュラムや対策が必要であること、そして地域のボランティア団体の支援の必要性も述べられていた。学校と地域のボランティア団体が個別に活動するだけでなく、互いに連携して子ども達を支援していくことが必要であることも述べられていた。一方で、連携の必要性については書かれているが、具体的な連携のあり方について書かれてある文献があまりない。

『アジア・太平洋人権レビュー2011』では、第1章で外国にルーツのある子ども達の現状が当事者たちのインタビューをもとに書かれており、現場で必要な支援や問題、実際に行われている取組について書かれている。第2章では、人権をめぐる国際的な動向について述べている。地域と学校の在り方については、これまで外国に繋がる生徒たちが直面してきた問題等を挙げ、学校が取り組むべき課題があると指摘している。しかし、学校側が行うべき支援は学校だけの力では不十分であり、「保護者との連携とともに、地域の力と結んでいかなければならない」(財団法人アジア・太平洋人権情報センター, 2011, p.66)と書かれている。

『外国人の子ども白書』(荒牧ら, 2017)は、外国につながる子ども達が必要とする学校とは何かという視点から、教育支援の現状と課題についてまとめている。その中で、佐藤(2017)は、外国にルーツのある子ども達に対する学習指導を効果的に進めるための重要な視点の一つとして、「子どもの生活全体をトータルにとらえた支援の体制を構築するために、学校と学外、特に地域と連携して指導を進めることが必要である。地域の活動に参加することで居場所を確保し、仲間同士で支え合うことができるようになり、学習習慣を身につけたり、学習に自信をもつことで自律的な学習を可能にする。」(p.121~122)と述べられている。

『日本に住む多文化の子どもの教育/ことばと文化のはざままで生きる』(宮崎ら, 2016)では、日本に住む多文化の子どもがもつ「ことばの力」と「アイデンティティ」の二つをどのように支えていくべきか、様々な視点から課題と解決方法の方向性について記されている。

特に、第10章の宮崎(2016)は、「多文化家庭、学校、地域の連携とエンパワメント」について述べている。そのなかで、地域と学校の連携についての問題点が指摘されている。「学校と地域の連携が注目されているものの、連携のあり方に多くの課題も残されている。学校は地域ボランティアやNPOとの連携を委託という形で認識していることが多い。地域の団体を学校の下請けとするような認識は、学校と地域間の権力の差を前提としているため、真の協働とは言えない。」(p.227)

これらの文献で地域と学校との連携に関する記述に共通することは、学校の支援だけで子ども達を支えていくことは難しく、地域と学校が連携して子ども達の学習指導・居場所づくりを行っていくことが今後求められる、という点である。しかし、連携の必要性は書かれているが、その具体的な方法やどのように連携していくべきなのかということは書かれていなかった。これから、学校と地域の日本語教室の連携を実現するためには、具体的な連携の在り方を考えていく必要がある。支援の対象である子ども達には多様なルーツがあり、その支援の方法にも多様性が求められる。

本稿では、私自身の活動範囲である芦屋市を中心とした兵庫県をフィールドとする。兵庫県の地域と学校との連携を取り上げ、その可能性を各地域に広げられるための事例の提供を目指す。

第2章 兵庫県の外国にルーツのある子どもたちについて

2.1 兵庫県の外国にルーツのある子ども達に関するデータ

学校と地域の日本語教室との連携について考えるにあたり、兵庫県内の公立中学校に通う「外国にルーツのある子どもたち」はどのくらいいるのか、地域による人数の偏りはあるのかをまとめる。彼らの人数の違いで支援の進み具合が変わってくると考えられるからである。また、多くの文献で少数在籍校での支援が進んでいない現状について言及されていることが多かった。外国にルーツのある子ども達が多い地域と少ない地域では、連携の在り方も異なってくると考えられる。そのため、兵庫県内の外国にルーツのある子ども達の実態について調べた。

表1は、平成30年度の日本語指導が必要な外国人児童生徒数に関するデータである。¹

¹ 情報が公開されていなかったため、2019年7月12日に、芦屋市にある「子ども多文化共生センター」にご協力頂き、彼らに関するデータを入手することができた。情報公開の許可を得たので、ここで紹介する。

兵庫県内に通う外国人児童生徒は全体で 1002 人。神戸市（約 36%）、播磨西（約 24%）、播磨東（約 15%）地区に多く在籍している。

特に、私のフィールドである阪神地区では、市町によって人数が異なっている。人数の多い順に、尼崎（43 人）、芦屋（30 人）、伊丹（25 人）、西宮（22 人）、宝塚（10 人）、三田（5 人）、川西（4 人）、猪名川町（0 人）となっている。

阪神地区全体の数としては、比較的外国にルーツをもつ子どもが多いようにみえるが、市町によって数に大きな差が出ていることがわかる。

表 1 平成 30 年度日本語指導が必要な外国人児童生徒数(平成 30 年 5 月 1 日現在)(人)

事務所等	市町名	中国	ベトナム	フィリピン	ポルトガル	スペイン	韓国・朝鮮	その他	合計
神戸市	神戸市	156	85	31	6	9	20	52	359
阪神	尼崎・西宮・芦屋・伊丹・宝塚・川西・三田・猪名川町	53	7	18	12	8	6	35	139
播磨東	明石・加古川・高砂・稲美町・播磨町・西脇・三木・小野・加西・加東・多可町	17	18	26	46	16	0	24	147
播磨西	姫路・相生・たつの・赤穂・宍粟・神河町・福崎町・太子町・上郡町・佐用町・播磨高原	26	178	10	3	11	3	6	237
但馬	豊岡・養父・朝来・香美町・新温泉町	8	0	6	0	0	1	0	15
丹波	篠山・丹波	3	0	4	13	0	0	0	20
淡路	洲本・南あわじ・淡路	0	0	1	0	0	0	0	1
県立	高校・中等・特別支援	35	6	11	5	1	11	15	84
合計		298	294	107	85	45	41	132	1002

表 2 は、平成 30 年度の日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数に関するデータである。家庭及び日常で比較的使用頻度が高い言語ごとに分けられている。

兵庫県内に通う日本語指導が必要な日本国籍児童生徒は全体で 305 人。神戸市（約 27%）、播磨西（約 23%）、阪神（約 22%）地区に多く在籍している。

阪神地区では、日本語指導が必要な生徒のうち、中国語（22 人）の次に日本語（12 人）

を母語とする子ども達が多いことがわかる。兵庫県全体としては、日本語支援を必要とする外国人児童生徒のほうが多く、日本国籍の児童生徒より優先的に制度が出来ている理由であると考えられる。

表2 平成30年度日本語指導が必要な日本国籍児童生徒数(平成30年5月1日現在)(人)

事務所等	市町名	日本語	英語	韓国・朝鮮語	スペイン語	中国語	フィリピン語	ベトナム語	ポルトガル語	その他	合計
神戸市	神戸市	8	12	4	8	25	8	9	0	8	82
阪神	尼崎・西宮・芦屋・伊丹・宝塚・川西・三田・猪名川町	12	9	1	4	22	9	0	0	9	66
播磨東	明石・加古川・高砂・稲美町・播磨町・西脇・三木・小野・加西・加東・多可町	6	4	2	1	3	7	1	2	0	26
播磨西	姫路・相生・たつの・赤穂・宍粟・神河町・福崎町・太子町・上郡町・佐用町・播磨高原	7	3	2	3	5	28	8	6	7	69
但馬	豊岡・養父・朝来・香美町・新温泉町	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
丹波	篠山・丹波	0	2	0	0	4	1	0	2	0	9
淡路	洲本・南あわじ・淡路	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3
県立	高校・中等・特別支援	23	9	3	1	7	0	1	1	4	49
合計		57	40	12	17	68	53	19	11	28	305

※ 家庭及び日常生活において、比較的使用頻度の高い言語が「日本語」である児童生徒

日本語指導が必要な外国人児童生徒数(表1)と日本国籍児童生徒数(表2)を合わせてみると、神戸市、播磨西、阪神地区の順に多いことが分かる。また、兵庫県の各地域に外国にルーツのある子ども達が分散しており、その人数は地域によって大きく差があるこ

とも分かる。

私がボランティアとして活動しているこくさいひろば芦屋は芦屋市にあり、阪神地区に含まれるため、外国にルーツのある子ども達が比較的多い地域にある日本語教室の一つであることがわかった。実際、2016年からボランティア活動に携わっているが、日本語教室に来る子ども達の数には毎年増えてきているため、現在はより増えているのではないかと思う。

表1、2のデータ入手先である子ども多文化共生センターで、兵庫県教育委員会が行っている取組についての話を聞くことができた。神戸市では地域の日本語教室の意見を聞いたたり、指導の知識を共有したりする取組を行っており、兵庫県教育委員会としては、多言語相談員の導入、管理職の方へ研修など様々な取り組みを行っているとのことだった。

この話に基づけば、自分がボランティア活動を行ってきた芦屋市だけではなく、他の市にある日本語教室についても調査し、連携体制の有無を明らかにする必要がある。なぜなら、私が感じてきた支援の課題は、あくまで私のボランティア活動中のことであり、より客観的に見る必要があるのではないかと思ったからだ。もう一つの理由としては、教育委員会として、外国にルーツのある子ども達への支援対策はあったが、各地域の学校では必要とされる支援が異なるため、連携の在り方に関しても各地域の学校ごとに違ってくるはずだ。そこで、私自身も活動を行っており、なおかつ外国にルーツのある子ども達が多い芦屋市と、比較的少ない地域にある日本語教室と学校との関係を比較し、それぞれの地域に求められる連携の在り方について考えていこうと思う。

2.2 兵庫県のボランティア団体に関するデータ

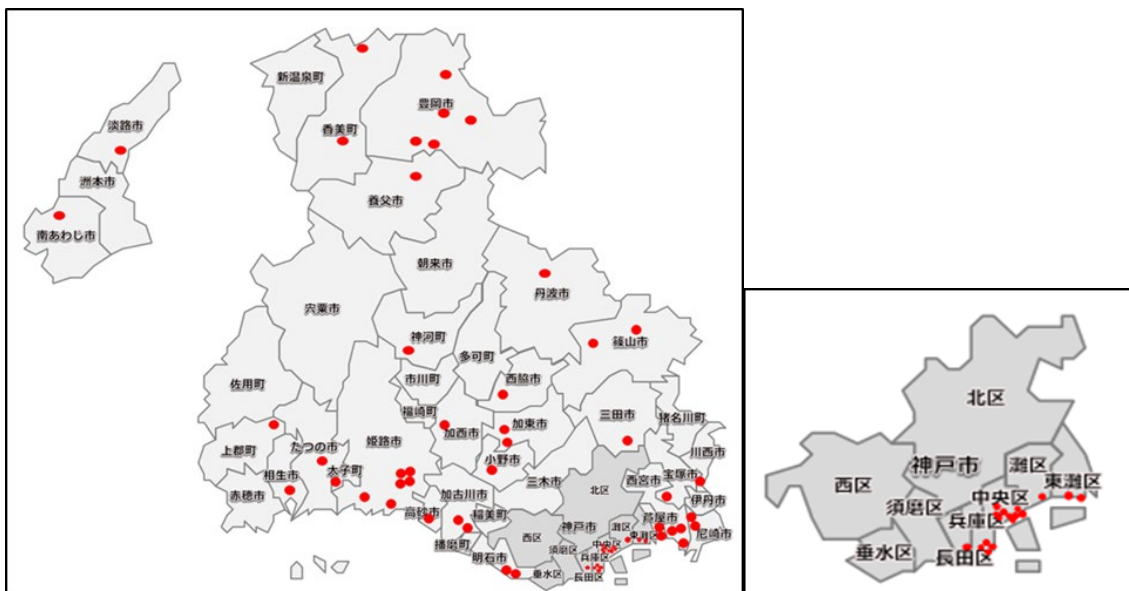
学校と地域の日本語教室との連携を考えていくうえで、兵庫県内に日本語教室はどのくらいあるのか。日本語教室の数が少ない場合、学校との連携を考えることが難しくなるかもしれない。特に、子どもの日本語学習教室の数と、どこの地域にあるのかを知るため、公益財団法人兵庫県国際交流協会（HIA）が公開している日本語教室に関するデータを参考にし、兵庫県内の子ども日本語教室・学習支援教室に関する図を作成した。（図1）

●印は、子ども日本語教室・学習支援教室を表している。HIAのサイトでは、教室の名前と住所が一覧になっており、その住所を参考におおよその位置を●で示した。

図1をみると、宍粟市や朝来市など、いくつかの市や区には子ども日本語教室・学習支援教室が無い。しかし、今回は省略した大人向けの学習教室を合わせると、兵庫県内のほぼ全市町に日本語教室・学習支援教室がある。外国にルーツをもつ子ども達が比較的少ない地域にも日本語教室があるため、どの地域においても学校との連携を考えられるのではないだろうか。

図 1

(2019 年閲覧)



2.3 こくさいひろば芦屋について

はじめに、私が日本語学習支援として参加している芦屋市にある「こくさいひろば芦屋」日本語教室について「10周年記念誌 こくさいひろば芦屋の10年」をもとに紹介する。

「こくさいひろば芦屋」は2006年に芦屋浜地域に開設された。きっかけは、1995年1月の震災で芦屋地区の高層住宅に、阪神間に居住していた外国人が転入してきたことだった。彼らの職場には外国人が多く、仕事上での問題はあまりなかった。しかし、彼らの子ども達が日本の保育所や学校に通い始めると、自分たちが経験していない日本の学校のことがわからない、日本人の親との交流もできないと不安が多かった。そんな時、自分たちのような存在が地域にいることを知ってほしい、他の外国人の親たちとの交流の場をつくりたいという思いから、日本語教室開催と交流の声があがった。その後、様々な人々の支えがあって、「こくさいひろば芦屋」の設立に至った。(以上、辻本(2016)より)

現在は、火曜日・木曜日の19時～20時半に中学・高校生を中心とした夜学習、日曜日の10時～12時に小・中学生を中心とした朝学習を行っている。2007年からほぼ毎年、夏・冬の長期休暇の際に3日以上連続した学習教室(夏休み教室・冬休み教室)を実施している。また、2015・2016年には、芦屋市教委共催のプレスクールも実施した。

日本語学習以外にも、スピーチ大会や地域のお祭りへの参加、母語教室、交流イベントなども行っている。勉強も大切だが、日本語を通して自分自身の思いを述べることや、地域の方々と交流する場を設けることは、子どもたちにとっても彼らの親にとって大切な時間となっている。

第3章 対話

今回、地域の日本語教室とそこに通う子ども達の学校との連携について知るために、長年日本語学習支援に携わってきた人物と対話を行った。まず、外国にルーツのある子どもたちが比較的多い地域で、「こくさいひろば芦屋」の元代表であり、関西学院大学で講義も担当している辻本久夫氏（以下「辻本氏」）に対話をお願いした。私が日本語学習支援ボランティアを始めるきっかけとなった方であり、こくさいひろば芦屋設立にも携わってきた人物であることから、芦屋市での支援の現状に関して詳しくお話が聞けるのではないかと考えた。

そしてもう一つ、外国にルーツのある子どもたちが多い地域として、神戸市長田区にある「特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター（KFC）」の志岐良子氏以下「志岐氏」に対話をお願いした。長田区は、私が住む兵庫区のすぐ隣にあり、身近な地域であること、スクールサポーターとして長田区と関わりがあることが対話として選んだ理由である。

また、外国にルーツのある子どもたちが比較的少ない地域にある日本語学習支援教室として、三田市にある「SKIP」の寿賀素子氏（以下「寿賀氏」）に対話をお願いした。対話として三田市を選んだ理由は、外国にルーツのある子ども達が少ない地域であること、辻本氏からのご紹介があったことや、大学が三田市にあることから私自身と繋がりが深いことによる。

3.1 対話(1) こくさいひろば芦屋

2018年11月1日の木曜日、グルメシティ芦屋浜店3階のフリースペースで、15時～18時の3時間にわたり対話をおこなった。その2週間前、辻本氏に研究内容をお伝えし、対話をお願いした。その時、辻本氏はとても嬉しそうだった。「まだ、教師になれるわけではないけど、地域のボランティア団体と学校を繋ぐ志をもった人になってくれれば嬉しい。」と快く承諾してくださった。そして、事前に研究内容と大まかな質問内容を記載したものを先生にお渡しし、対話への準備をしてくださった。

※なお、下記の結果中のIは執筆者、Tは辻本氏である。また、対話の中に出てきた固有

名詞についてもイニシャルで表している。また、話の流れがわかりやすいように順番を変えているところもある。

学校との連携

- I 「学校と地域の日本語教室との連携って出来ていると思いますか？」
- T 「連携はないね。学校側は、“勝手にやってくれてる”という感じ。特に中学校にその考えが多い。学校としてのプライド？的なものがあるんやろ。うちの生徒の問題やから学校だけで解決するのが当たり前という。連携が出来ていないからもめたこともある。」
- I 「どうして、そのような感じなのですか。」
- T 「市民的な感覚からいうと、僕たちの方がおかしいと。学校、特に中学校は学校関係者以外の人に教室を使われるのをすごく嫌がる。」
- I 「子ども達が行っている学校の先生方がボランティアに顔をだしにきているのは見かけないんですが…来ている先生はいるんですか？」
- T 「ほとんどいないね。学校の先生にも手伝いの案内を出しているが…。」

辻本氏は、子ども達が通っている学校との連携はできていないと言っていた。学校とボランティア団体との距離がある状況がなかなか改善されていないことがよく伝わった。

高校進学

- T 「ある中学2年生の親から“2年生の大事な時期になってから、もう少し勉強を頑張らないと公立の高校にいけないと言われた”という話を聞いた。それまでは、先生は親に対して勉強頑張っていますね、と褒めていた。学校の先生は怒るのではなく褒めるじゃない。ペルーやブラジルでは成績が悪ければ落第だから、成績が悪くても1学年上がったということは、それなりに勉強が出来るからだと親も思った。親は学校の制度も知らないし、勉強も教えられない。それで、親の要望で夜学習を始めた。」
- I 「進学はどのような状況ですか？」
- T 「日本生まれの子ども達は、国籍を問わず6・7割が公立高校に入っている。無理な子もいるが…。外国生まれ・外国育ちの子ども達のほとんどが私学あるいは定時制高校。公立に行った子はこの13年間で2人だけ。」
- I 「え…。そんなに少ないんですか？」
- T 「進路のことで、推薦を受けたい生徒がいた。だが、先生にダメと言われてしまった。学校の成績が良くなく、一般的には今以上の成績がなければいけなかった。理由の一つに内申書が低いこともあったが、途中で来たため仕方がなかった。インドネシアの子なの

で、英検と日本語も頑張っていた。

もう一人の子も、成績は悪いが、英検準1級を頑張って取った子がいた。推薦入試を受けたかったが、成績が悪かったため、校長先生が受けさせないと言った。成績の悪さは日本語ができないからであって、彼らには能力がある。彼らの絶対評価で判断すべきだと言った。結果は落ちてしまったが、最終的に受験させてもらえることができた。校長先生には、地域団体が学校の進路に干渉しないでください、と言われた。子ども達を一生懸命フォローしているのに…。

落ちたら可哀そう、と善意の判断で彼らにその高校を受験させるかどうかを判断するのはおかしい。試験を受けるチャンスを与えてほしい。でないと納得できないと思うし、定時制を受けても通うのが大変。そこに学校との差があるかな。」

学校での学習と見えにくい問題

- T 「海外で生まれて、日本に来た子は漢字が全然書けてないことが多い。けど、会話はできるから先生に分からない。先生は、漢字に弱い子かな、学習が少し弱い子なんかなと思ってしまう。最近でも、親（母親）の学力の問題とかへの理解は少ないね。小学校ってテストの点数はあまり数値化しないし、ちょっと出来ないと思われる程度。」
- I 「その問題はあると思います。初めて子どもたちに勉強を教えた時、日本語を話せていたから何が出来ないのか、すごく悩みました。でも、継続して接することで、読解力が足りない子や、日本語の擬音語が理解できない子、数が分からない子、カタカナの読み書きができない等が見えてきました。それがきちんと見えないからこそ難しいと思います。日本語能力を判断するテストをすとかでなければ。」
- T 「そうやね。日本語力がどのくらいあるのかというチェックがね…（出来ていない）。会話が出来ているかも重要やけど、読解力ができるかが重要。」

ボランティア団体の強み

- I 「こくさいひろば芦屋などのボランティア団体の強みは、子ども達やその親との信頼関係が出来ていることだと感じています。だからこそ、学校では対応できない問題にも対応できるのかなと思います。」
- T 「確かに、子どもとの信頼関係はボランティア団体の強み。小学校は6年、中学校は3年と継続できる期間が短い。彼らと長く接して取り組まないと見えてこない問題も多くあるからね。いじめの問題でも学習の問題でも、子どもたちが先生に対して話しにくいことでも、ボランティアに来ている人には伝えやすいことがある。それは、子どもに限らず保護者もやし。」

学校の外国にルーツをもつ子ども達への対応

- T 「学校には学校文化がある。一番子ども達が悩むところ。もっと子どもたちの意見とかを聞いてあげないと、決められた中でしか言えない状況を学校が作っている。特に学校は、子どもの家庭の事情などにあまり目を向けようとしない。聞いてはいけないと思われる学校文化がある気がする。」
- I 「学校が十分に対応できていない理由の一つは、多忙だからだと思いますし、それもわかります。しかし、子ども達一人ひとりに目を向ける必要があるとも思います。しかしながら、ボランティア団体だけでは、支援できる範囲に限界があると思います。学校との連携ができれば、支援の幅も広がると考えています。多忙であるからこそ、それが必要ではないでしょうか。」
- T 「この問題があまり重要でないと思っている先生のほうが多いやろうね。それがまず問題。子ども達への接し方とか、話の聞き方とか…“ちょっと聞きたいことがあるんやけど、言えるところだけでいいから言ってくれる？”とかね…対応の仕方とかもわからんのやろうね。」

課題

- T 「このことに問題意識を持っている先生はいるけど少ないやろうね。学校の先生の意識の問題やろうね。学校に一人でもいたら、また違う。ボランティアの活動を見に行こうとかなる。先生は、家庭訪問・テストの採点…忙しいことばかり。けれど、外に出て行かなくなったら先生は終わりやね。常に新しい情報とか、発想・視野を広げるために学校の外に出て行かなあかん。それが、今出来ていないことを自覚することにも繋がるし、解決策も見つかる。学校の中ばかりやと、視野がものすごく狭くなる。外に出れば答えがあるかもしれないのに、それに気が付けない。あなたがそれをしたらいい。そうやって動くことも、連携の第一歩。」

辻本氏との対話で、学校とボランティア団体のしっかりとした繋がりが無いことがわかった。今回、対話にでた出来事は、どこの学校と地域の日本語教室でも起こりうる問題である。複雑な背景をもつ子ども達を支援していくには、どちらか一方の支援だけでは難しい。

学校は子ども達が長期間生活する場であり、言語習得に必要な場所でもある。にもかかわらず、教師は多忙なため、支援が十分に行き届いていないのが現状である。問題に対する支援を考える前に、その支援を必要とする子どもたちを把握する段階で立ち止まっている学校もある。それに比べ、身近な所にある地域のボランティア団体の支援は継続して子どもや

親と関わることが可能なため、学校よりもサポートしやすい面がある。もう少し学校教育と地域のボランティア団体とが柔軟に連携できれば、学校と地域の日本語教室の特性をいかした支援、細かな知識の提供、子どもたちを取り巻く環境への正しい配慮や進学率の向上、学習支援の充実が実現できると思った。

3.2 対話(2) 特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター (KFC)

2019年11月27日の13時30分から約1時間、神戸市長田区にある特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター (KFC)にて対話を行った。

対話相手は、神戸定住外国人支援センターの志岐氏で、長田区で外国にルーツのある子どもたちの支援に携わってこられた方である。今回、事前に質問内容を送っていたためそれに基づいて対話をした。

学習に来ている子ども達について

- I 「まず、どのような子ども達が勉強にきていますか？」
- S 「学習支援の場所が、新長田と三宮の2箇所ある。新長田の方はベトナムの子が一番多く来ていて、中国・ミャンマー・ペルー・インドネシア・フィリピンの子どもたちも来ている。三宮の方は、中国の子が圧倒的に多く、それ以外はアフガニスタン・インド・フィリピンの子が来ている状況。ダブルの子もいるので、日本国籍・外国籍両方の子ども達も来ている。」
- I 「同じ学校に通う子ども達が多いですか？」
- S 「バラバラです。電車やバスで来る子も多いので。」

学習の状況

- I 「普段どのような勉強をしていますか？」
- S 「基本的に、中学生のほうは宿題をやることが多い。小学生にかかわらず、日本に来たばかりの子は日本語の勉強をしている。日本語の教材を使ったり、ひらがな・カタカナ・漢字をしたり。後は、それが終わると、KUMONなどの教材を使って言葉・語彙を増やすことをしている。そして、受験前は赤本をやったり受験勉強をしている。」

学校との連携について

- S 「芦屋の方では無いかもしれませんが、神戸では年に1回神戸市教育委員会主催の学校とNGOの情報交換会がある。それがもう6年か7年ぐらいあって…
最初に団体の紹介をする。学校の先生方が沢山来るんです。それは、私たちから小中に

通っている子の名簿を出すんですよ。この中学校からこの子が来ていますと。すると、その学校に全部案内が行く。その学校の担任の先生がこられたり、教頭が来たり、関係ない体育の先生が来ることもあるが、一応その学校の先生が来て子どもに関する情報交換会をする。最初は一方的に団体が話をする。その後、グループに分かれて KFC で学習している子どもの学校の先生が KFC のブースに行く形で。私たちは人数が三宮の方とあわせると 60 人近いので、勉強が大変な子と、そうではない子がいます。それも先生は分かっているのでさっと帰る先生もいる。一応全員分の、何曜日に来ているのか・勉強内容・様子等をまとめたものを一人ひとり作って渡し、何かあれば連絡を貰えるようにしている。近隣の中学校だと 10 人ぐらい来ていたりするので、その先生達とはその場で話をしたりする。ただ、それが年に 1 回だけ。」

- I 「年 1 回しかない中でどこまでできるのか。でも、連絡を取りやすい状況ができていますね。」
- S 「連絡も取れるし、通っていることも知ってもらえている。学校数も、60 人ぐらいになるので、10 校以上の学校がある。うちに来ていることを知ってもらっただけでも。」
- I 「そうですね。通っていることを知ってもらっているかの違いは大きいと思います。」
- S 「それ以外で、今ミャンマーの難民の子を 3 月から支援している。難民の方は政府から正式に認められて難民になった子たちなので、事前に学校へ挨拶に行ったり、行政や地域にも挨拶をしたりがあった。その子たちに関しては割と頻繁に学校とやり取りをしている。というのも、私たちは週に 1 回その子たちの家に行くので、先生たちもそれを知っているので、懇談会の返事が出てないとか、体操服がこの日に買えるというのを伝えてほしいと連絡してきてくれる。後、何校か限られているが結構頻繁にやりとりをしている。夏休みの前も、算数のここは出来てないから特訓させてほしいと先生から連絡があったり。その子たちに関しては、先生は手厚く連絡をくれるし、私たちも連絡を取りやすい関係になっている。」
- I 「芦屋市や、三田市に比べて学校と繋がりができているんだなと感じます。」
- S 「いや、一部ですよ。全体ではないです。ここに来ている 60 人の中で難民の子は 5 人だけ。その小学校 2 校ですけど、そこに関しては密ですね。他はそんなに。」
- I 「連携が必要だと感じますか？」
- S 「さっきも言ったように、夏休みの前にここが出来ていないと連絡を下されば。もちろんそこが出来ていないことは私たちも分かっているんですが、先生から言ってくれるのはありがたいです。」

高校進学

- I 「高校進学の状態についてお聞きしてもいいですか？」
- S 「2005年から活動を始めているんですが、2年目に1人だけ行かなかった。それ以降は全員高校に行っています。」
- I 「公立ですか？」
- S 「いや私立も結構いますね。その年によって公立・私立の人数は変わります。ベトナムの親に公立志向があって…。来年から入学する子は、私立でも学費がほとんどかからない。親の収入が590万以下なら、授業料はほぼ免除になる。私立に行ってもそこまで負担はかからなくなる。それでも、今年度の子も定時制高校とか…。定時制高校と私立の普通科に行くのとどっちがいいのか、難しいところではある。公立に行こうと思ったら定時制にしか行けない子とか。でも、日本に来て2年で、日本語の壁があるだけだから。私立の普通科に行って、1年ぐらい経てば学校の勉強についていけるし、大学に行きたくなった時に定時制よりも入りやすいと思う。ベトナム人の保護者の公立志向がすごくあると感じる。」

学校の対応

- S 「先生も、外国人枠があるのを知っている方もいるが、知らない先生も結構いる。私たちが、初めは先生に聞きなさいと言います。成績も内申点も分かっているから、まずは先生と相談しなさいと。けど、先生に相談してもきちんと教えてくれないと言う子が何人かいる。それはちょっとね。子どもも、親も困るだろうと。私たちが確実な成績表を持っているわけではないので、そこはしんどいなど。
- 私たちは、この近隣の中学校で教員をしている方に、毎年この11・12月に進路相談会ということで来てもらって、保護者抜きで子どもだけで通訳を入れて進路相談会をしている。4月から入学の子は、私立でもほとんど授業料がかからないという情報もキャッチできていない。資料は貰っているが、漢字ばかりの資料をそこまでしっかり読めない。なかなか大変ですよ。」
- I 「もちろん、学校も大変だと思うんです。配慮するべきことも多いし。」
- S 「元教員のボランティアの方が、学校にアプローチしても学校はあまりね…。忙しいのはあるでしょうね。だからこそ、もっと地域に分担したほうがいい。学校ももっと言った方が、自分たちも楽になるのにね。」
- I 「学校のことは学校でしなければいけない、学校の問題という意識があるんでしょうか。JSLカリキュラムや取り出しもあるが、地域によっては取り入れにくい学校もあると思います。せっかく知識を持っているボランティアがいるので、その知識を活用できない

かなと。』

- S 「この地域だと生田中学校でJSLをやっていたりする。学校を少し早めに終わって、みんな長田からでも通ってるんですね。そういう意味では、恵まれているのかもしれないね。」

制度・体制への課題や改善点

- S 「こくさいひろば芦屋ではやっているか分からないが、ここでは、KFCの元学習者で大学生になった子が支援者として沢山関わってくれている。ロールモデルとしてベトナム・コロンビア・中国・ペルーにルーツがある子が。ただ、その子たちは時間や金銭的に余裕があるわけではないので、バイトをしたいところ来てくれている。多少は払っているが、うちも学習支援に対して沢山資金があるわけではない。資金的な援助をとってもらいたきたい。」
- I 「そうですね。私たちもボランティアですから。」
- S 「アルバイト代のようなものができるように資金援助をしてほしい。後、神戸市内のJSLカリキュラムで、生田中学校で一時的なサポートがあるけど、小学生版が無い。国際教室みたいなものはこうべ小学校や駒ヶ林小学校などにあるが、そのような小学生を集めて、小学生版を作ったらいいのではないかなと思う。一人だけで学校にいるのはつらいと思うので、他の学校にそのような子がいることを知ったり、仲間をつくったりするためにも。」
- I 「母語は日本語だけど、日本語が確立していない子への支援も今後必要ですよ。」
- S 「英語圏の子ども達にもつきませんよね。」
- I 「そうですね。英語は英語科の先生がいるので。」
- S 「でも、なにもやってくれないよね。小学校には英語の先生いないですよ。」
- I 「来年から専任教師を置く学校もあるみたいです。」
- S 「じゃあ余計いらなくなってしまうね。そんなことないのに。」

学校に求めること

- I 「学校に求めることはなにかありますか？」
- S 「連携は出来ればいいと思うが、先生方に余裕がないのであれですけど。その、先生個人に思う事がある。例えば、左利きなのになぜ見本をこっち側に貼るのか。細かいようですが、子ども達のことをよく見ているのかと思う事がある。熱心な先生もいるが、当たりはずれで人生が変わるのは可哀想。」
- I 「各学校に熱心な先生もいますが、学校全体でこの問題を知る必要があると思いますし、

それが彼らを見逃さないことに繋がると思います。」

S 「あと、ベトナムの子が高校で教員になりたいと言ったら、外国人はなれないという先生がいて…。教諭にはなれなくても、常勤講師にはなれるんだよ。きちんとした情報を提供してほしい。先生の一言はすごく影響力が大きいので、適当なことを言わないでほしいと思うことがある。選挙権のこととか、確かに配慮もいる問題もあると思うけれど。教諭も、まず常勤講師として働いて、日本国籍を取得して、教諭になる人もいる。その道もあると普通に教えてあげたらいいと思いますけどね。」

I 「言ってはけないと思われてしまうのでしょうか。」

S 「というか、きちんとした情報を知らないというのはある。

ミャンマーの難民の子は、第三国定住難民という形なので、元々ミャンマーに保護者がいて、マレーシアに難民として逃げてそこから難民認定され、第三国の日本にきた。子ども達はほとんどマレーシアで生まれてて、ミャンマーに行ったこともない。なので、ミャンマーで教育を受けたことも、学校に行ったこともなく学校を知らない。勉強もしたことがないので色んなハンデがある。この子たちに関しては政府が正式に受け入れたので、行政・学校に挨拶をして受け入れてもらっている形だからか、すごく丁寧にやってくれている。担任の先生が一人の男の子を取り出して算数を見てくれている。別のクラスの先生がクラスの算数を担当して下さっている。今、3年生ですが、二年上ぐらいまで出来ているんです。学校もやる気があればできるんじゃないかと思ってしまう。そこは、外国人がすごく少ないですが、丁寧にやってくれている。地域的に落ち着いているため、面倒をみなければいけない生徒が少ないからかも知れない。」

志岐氏との対話で、神戸市では、私がボランティア活動をしている芦屋市に比べ連携の体制がつくれていることがわかった。しかし、全ての子ども達の学校と連携が十分に取れているのではなく、一部の学校だけである。また、今回の対話で出てきた地域のボランティア団体と学校との情報交換会は神戸市に彼らを支援する団体が沢山あり、彼らの人数も多いことが実現を可能にしたと思う。今回、神戸市の学校と地域のボランティア団体との連携ができつつあり、これを外国にルーツのある子ども達が少ない地域でも実現を可能にするために参考にできるのではないかと感じた。また、地域と学校が連携することで、より子ども達への支援の幅が広がることも対話を通して確認できた。

3.3 対話(3) 三田国際交流協会「SKIP」

2019年11月7日の13時から約1時間、三田市にあるキッピーモール6階の

三田国際交流協会（まちづくり協働センター）国際交流プラザにて対話を行った。

対話相手は、三田市国際交流協会の寿賀氏で、三田市で15年前から日本語学習支援に携わってこられた方である。はじめは、広報委員会でホームページの作成をされていたが、そこから日本語サロンに関わり、保護者の方の日本語教育に関する声を聴くうちに日本生まれの子どもも含め、外国にルーツのある子どもの学習支援、居場所づくりが必要と痛感し、こども日本語教室「SKIP」を立ち上げられた。

また、三田市国際交流協会は、1989年に設立され、「世界の多様な文化を理解・尊重した多文化共生のまちづくりを積極的に進め、地域社会の活性化と国際化の推進に寄与すること」を目的に活動されていると教えて下さった。

そして、主な活動として、姉妹都市交流、三田での在住外国人交流、語学講座、啓発活動、通訳翻訳、大人の日本語教室、子どもの日本語・学習支援、相談業務などを行っているを紹介して下さいました。

SKIP に来る子ども達について

- I 「まず、SKIPさんのところにはどのような子ども達が勉強にきていますか？」
- S 「SKIPは、金曜の夜のクラスと、土曜の午後のクラスがあります。金曜の夜のクラスは、中学生4人・高校生3人。中学生のルーツは、ベトナム・中国・アメリカ兄弟二人。高校生は、フィリピン・マレーシア・中国です。中学生の中国とベトナムの子は、小学5・6年で来日、それ以外の子は、日本生まれ・日本育ち。ある期間海外にいた子もいます。フィリピンの子も5年生の時かな？途中で来ました。
- 土曜日の方は、もっと小さい子が多く12人ぐらい。中国の子が多くて、それ以外はマレーシア・ベトナム・台湾・ペルー・アメリカの子たちがいます。」
- I 「少ないですね、中でもアジア系が多いですね。」
- S 「そうですね。日本全体そうですけど、三田はほぼ8割以上アジアの人たちなので。」
- I 「ここに通っている子どもは、みんな同じ学校ですか？」
- S 「ほとんど別々です。」

学校との連携について

- I 「子ども達が通う学校との連携はありますか？」
- S 「教育委員会の方とはお話をすることはあるけれど、学校とはあまり、直接担任の先生などと話す機会はありません。本来は、じかに関わっている先生方と直接お話しして、課題の共有や情報交換をすることにより多面的にサポートできると思いますが、先生方も多忙でありなかなか実現が難しいのが現状です。」

それに、学校は学校での世界がありますし、イベント等に担任の先生を招待したりするんですが、忙しい時期のようで、なかなか顔をだすのが、厳しいようです。」

I 「学校の先生方が多忙であることはよくわかります。だからこそ、互いに連携し合って子ども達を支えていくことが必要になってくるのではないかなと思います。

子どもたちにとって、地域の日本語教室は勉強の場だけでなく、自信を持って過ごせる場でもあり、学校では言いにくいルーツのことなどを言える場として大事なんだなと思う時があります。生き生きしている姿を見てほしい気持ちもあります。」

S 「学校で過ごしてる姿しか先生方はしらないと思うので、ぜひ目を向けてほしいですね。本当は学校でそう過ごせるのが一番いいんですけど。学校の先生も、生徒の違う面を見ることで、本来の姿を見てほしいですね。」

高校進学

I 「高校進学はどんな状況ですか？」

S 「ここから高校に行った子たちは、だいたいお昼の学校には行っている。芦屋は夜間も多いと思うが、なんとか。私学の子もいれば公立の子もいるんですけど。受験のために、苦手な国語や社会より点の取れる科目を上げている。兵庫県は、合計点が重要なので、点を上げようとなる。なんとか入ってもそこから大変だし、高校の授業についていくには、日本語のレベルも上がるのでそこが課題です。この前、尼崎の国際科のある高校に入った子がいる。そこは、辻本先生も芦屋の方から何人か入れていたので、学校も対応が慣れていたので、彼らに対する取り出しや、サポートとかあったんです。けど、慣れていない学校だと、先生も忙しいので、入試を受けてきた子どもだから、最低のレベルはあるとのことで、特別なことは出来ないですというのがあった。受け入れも整ってる所に行かせたほうがいいのかなと。」

I 「学力的には入れる学校はまだいくつかあっても、さらに体制面とかを考えなければならぬことは、より進学の幅を狭めてしまいますね。」

S 「入って終わりではなくそこで3年間過ごすことも考えて、さらに次の進学まで考えなければいけませんからね。勉強が出来ないと、しんどくなっていき、友達関係もしんどくなるかもしれない。じゃあ夜間だったらいいかっていうと、夜間は手厚い部分もあるが、夜に行くのは昼よりも精神的に大変な面もある。できたら、周りが通う同じ時間のお昼のほうがいいけど、どこまで学校がやってくれるのか。」

I 「学校はどこまでそのことを考慮して進路指導してくれていますか？」

S 「結構考慮して進路指導して下さっている。

今年の一年生二人のうち、一人は三田市内の公立中学校に行った。そうすると、高

校入試を受けないといけないし、内申もある。日本の子と同じ土俵でやっていかないといけない。その子は勉強も出来るし、熱心な子だからよく頑張っている。だけれど、評価は日本の子と同じなので、決して能力的に出来ない子ではなく、努力しているけども内申・評価としたらあまり良くない。課題を提出しないといけないが他の子の何倍も時間がかかる。けど、期限までに出せない子はそれで評価は下がるよね。同じ基準でしないといけないのかなと思う。日本人の子も下げるし、そこを分けられない。どこに線を引くか難しい。

ガイドラインは学校単位、先生単位では無理なので、そこをもう少し何かしないとね。配慮すべきことは沢山あるので、この子ども達だけではないけど。能力があるのに言語的なことを考えてあげないと、高校も兵庫は内申が大きいので、人生がそこで左右されてしまう。

- I 「点数で能力が判断されてしまう教育ですね、日本の学校は。」
- S 「成績はどうしても点数でつけられてしまう。本当は能力が高くて努力してるのに、それを学校の成績で、点数を低くつけられてしまうと、その成績で子ども達の将来が決まってしまう。特に兵庫県は内申点がすごく重要だから。」
- I 「そうですね。判断がとても難しい問題ですね。外国にルーツのある子ども達だけなのかとか、他の子ども達にも配慮が必要な子はいるかもしれませんし。」
- S 「兵庫県は、成績を相対的に見るので、もう少しどうにかできるんじゃないかな。確かに先生からすると、他の生徒にも色々な問題があるかもしれないのに、外国にルーツのある子ども達だけ配慮できない。難しい問題です。
- けれど、特別支援を受ける子ども達は、きちんとした別の評価がありますよね。このような子ども達の評価の仕方をもう少し変えられないかな。」

学校での対応

- S 「学習習慣というか、日本の学校の制度を親は知らない。中国とかは、小さい時が大変みたいで、両親が教育熱心。日本は、中・高の入試が大変じゃないですか。日本のようにどこかの高校には入れる国も沢山ある。中学三年になって、“公立でいい”と。公立に入るのが難しいと話します。お父さん・お母さんも日本の制度知らないから、そこら辺を私たちが話すことも大事かなと。」
- I 「なにか、勉強面で学校が配慮して下さっていることとかありますか？」
- S 「そうですね。先生は先生で色々考えてくださっていて、プリントにルビをつけたり、その国のことを話題にし、入っていきやすい工夫はしてくださっている。
- けど、兵庫県の学校は、母語支援の人はいるんですが、日本語支援はない。学校で

も日本語支援の初期指導がないと大変なので、教育委員会とは日本語支援について話をしている。ここだけでは時間も限られているし、低学年の子ども、学習言語は少ないが、同じ学年の日本の子なら理解できている学習の言葉「あわせてくつ?」とか「足す・引く」を知らないことも。新出の言葉は先生が説明してくれるけど、問題文の「もとめましょう」の意味は説明しない。同じ1年生だから、一緒に入っていけるとしたら、普通の会話でもしんどかったりするんで、小さい子はその子で大変。学校では先生も気にはしてくれているし、委員会と日本語指導をどうやっていけばいいかなど話ししている。

SKIP と学校との懇談会とかできればいいですね。あと、学校でも、いつどの学校にどこの国の子がくるか分からないので、その準備を全部の学校で全ての先生が対応するのは無理ですよ。来ると分かった時に学校の方でも急いで準備をしている状況なので、せめて過去の対応例を教育委員会中心に、他の市の状況とかも集めておいてもらえれば。

神戸市は来年から大きく改革されるみたいですね。どの先生も困らずに対応できる制度ができるのかな?と思う。詳しくは教えて貰えなかったんですが、楽しみです。

- I 「勉強面で、子ども達が来てから対応するのは、授業遅れてしまうと思うんです。」
- S 「そうですね。子ども達もどんどん成長していきますしね。」
- I 「なかには、日本と外国を行き来したりで、ある学年の勉強が抜けてたり…とても複雑です。なので、準備は大事ですよ。
- あと、学習に来ている子ども達に出来ることは、習った範囲を教科書などで復習したり、宿題を一緒にやったりになる。もし可能であれば、一週間の学習予定が分かると予習できるので、授業の内容も頭が入りやすいし、みんなと一緒に参加できるので。それが自信に繋がるとも思うので、違う方面からの支援も学校との連携によってできるのではと思います。」
- S 「学校側からすると、学校がやる前に勉強して教え方が違うと困るので、その辺は復習のほうか…と思われるんですよ。」

学校での学習と見えにくい問題

- I 「学校の現場でなにか課題や改善点を感じていることはありますか?」
- S 「学校の先生の子ども達に対する問題意識がね・・・。
- 例えば、父親が日本の人でお母さんが外国にルーツがあるとなると、学校の先生は父親が日本人なら特別な支援は必要ない、大丈夫、となってしまうんですね。少し

当然かなと思う気もしますが、実際はそうではないですよ。学校に来るのも、子ども達との関わりが多いのも母親ですよ。幼少期の読み聞かせとかも、お母さんからしてもらったでしょう？お母さんが外国の方だと、子どもの生活言語にも影響があるし、支援がなくても大丈夫というわけではないですよ。

授業でも、日本語生まれで会話も出来ていると大丈夫かなと思ってしまう。同じ学年の子とだから大丈夫だと思われがちです。実際には他の生徒と同じように新しい言葉を習うと覚えられるけど、既に一度習った言葉で、理解できていない言葉や知らない言葉がある。そこを先生は説明しないでしょ？そのフォローが必要。普通の子どもが理解していることでも、彼らにはわからない言葉がある。

先生方のこの考え方や、子どもたちに対する意識をもう少し変えてくださることが必要じゃないでしょうか」

I 「県外教に行かせてもらったことがあるのですが、学校の先生方が外国にルーツのある子ども達のことを認識できていない学校もありました。最近は、とても見えにくい子ども達もいます。だからこそ、学校に来ている彼らを見落とさず、困っている生徒をサポート出来る場として学校が大事だなと思います。中には、不就学の子も達もいるとは思いますが」

S 「学校は見えにくい子ども達、日本生まれ日本育ちで、外国にルーツを持つ子どもを発見できる貴重な場。

だけど、先生方がしっかりアンテナを張っていなければ、分かりにくい。特に、アジア系で、名前も日本の名前だったらね。制度とかが無理でも、教員一人ひとりがこの問題に関心を持ってくれるだけで、知ってるからこそ「どうなんだろう？」って考えることができる。知らなければそれができないので、知ることが大事だと思います。」

体制・制度の課題や改善点

I 「ほかに、子ども達を支えていく上で、体制や制度等の課題、改善点についてなにかありますか？」

S 「さっきも話に出たように、一つは日本語支援を学校で出来るようにしていくこと。母語支援員は今実際に学校に配置されるようになったが、日本語が母語だけど、その日本語があまり分からない子への支援員はつかない。

もう一つは進路の問題。5校3人に特別の入試制度枠が増えても、そこから何がどのくらいできるのかが、今後の課題ですね。兵庫県は広いので、阪神間より離れている所に住む子ども達は、その5つの高校へ通いにくく、通学にとってもお金と時間がかか

る場合がある。それに、3人の生徒を入学させたとして、果たして入学後にどんな支援ができるのか。他の学校よりも体制ができているとはいえ、3人という人数でどれだけのことができるかわからないよね。」

- I 「そうですね。確かに、支援の体制はできつつあると思います。ただ、この制度は外国にルーツのある子ども達の中でも、人数的に一部の子ども達しか使えないと思います。その制度を利用しなければ進学が厳しいという子ども達の中で、落ちてしまった子の方が支援を必要としているのではないかと思います。まだまだこの制度も考えていかなければいけない気がします。」
- S 「大阪には学校で20人の枠があって、入学後はその子ども達だけのクラスを一つ作って別のカリキュラムで学べる。そのようにできるんじゃないかな。学校単位では無理でも、どこかの学校に一クラスでもそのようなのができるといいんじゃないでしょうか。人数が多ければ、まとめて授業しやすいしね。」

三田で日本語学習支援に長年携わってこられた方に話を聞いたことは、違ったフィールドの目線から日本語支援を考えることに繋がった。私自身が活動している芦屋の日本語学習支援教室とは違う問題があることも知ることができた。駅前に教室があるとはいえ、SKIPに通いにくい場所に住んでいる子ども達もいることが現状だった。

SKIPと学校との連携はあまりなく、学校の先生が来られることもあまりないそうだった。外国にルーツをもつ子ども達が少ない地域では学校の受け入れ経験があまりない。加えて外国にルーツのある子どもの多い地域よりも支援が遅れているため、学校とボランティア団体が連携し、多面的にサポートしていく必要がある。制度を変えることが難しくても、連携体制によって、今の制度でできる支援の幅を増やすことができるはずだ。

3.4 対話を終えて

辻本氏との対話からは、芦屋は比較的子ども達の通っている学校とは関わりを持っていくことがわかった。やはり外国にルーツのある子ども達の多い地域のほうが対応も進んでおり、学校や教師たちの問題意識にも違いがあるのかもしれない。志岐氏の話によれば、実際に神戸市では連携体制ができつつあったが、それは一部の学校であることもわかった。

寿賀氏との対話では、復習ではなく予習が可能な支援について提案してみたが、学校には学校のやり方もあるため、実現が難しいという意見だった。

子ども達を多面的に支援していくためには、学校とのしっかりとした連携が必要であるという意見を対話相手全員から聞くことができた。特に学校との連携が比較的行われている神戸定住外国人支援センターの志岐氏との対話から、学校での授業や支援について情報

を共有したり、子ども達を取り巻く支援の課題を共有することは、支援を進める上で大事な情報になることを改めて感じた。しかし、三者との対話で共通していた意見は、学校の先生は多忙であり、なかなか外へ目を向ける時間や機会をつくることは難しく、連携を必要としていても実現、または機会を増やすことが難しいのが現状ということだった。

私自身、教師は忙しく時間を作ることができないことは理解できる。だからこそ連携体制をつくるのが学校側にとっても負担にならない支援として必要であると改めて感じた。

特別枠入試や特別の教科カリキュラムの使用に関しても、日本語学習支援に長く携わってこられたボランティアの方の意見も取り入れることで、普及が進んでいくのではないかと考えている。

また、彼らの両親が外国にルーツのある人だった場合、日本の教育制度を詳しく知らない親が多い。進学に関して寿賀氏との対話の中で、外国にルーツのある子ども達の受験率が高い学校や、他のボランティア団体が進めている高校の方が体制が整っている場合がある、と聞いた。それを聞き、そのような情報も互いに共有することで子どもたちの進学の道が見えてくると思った。学校の対応に関しても、いつそのような子ども達が来るか予測できないことが、対応の遅れや学習の遅れにもつながってきている。予め多くの子ども達を支援してきた、経験の豊富な地域のボランティア団体と連携し、いつこのような子ども達が来ても対応できるような関係づくり、そして対応が遅れないような体制が必要である。

外国にルーツのある子ども達が比較的多い地域では、学校の先生方の問題意識は高いが、三田市のように、学校に2・3人しかいない場合や、今までそのような子ども達の対応を経験したことがない地域の学校は問題意識が低いのもかもしれない。

また、神戸市の学校と地域のボランティア団体との連携に向けた取り組みは他の地域でも応用できる可能性があるだろう。

第4章 実現可能な連携とは

対話などから、地域の日本語教室やボランティア団体と学校とがあまり連携しておらず、別々での対応になりやすいという現状がわかった。複雑な背景をもつ子ども達をサポートしていくためには、学校と地域のボランティア団体の連携が必要になってくる。そして、地域の日本語教室も学校との連携を必要と思い、それを望んでいる。私が連携を必要だと思う理由として、学校だけでは、彼らへのサポートには時間的にも教員の人数的にも不十分であること。また、地域のボランティア団体だけだと学校以外の限られた時間での支援になってしまう。それぞれの特徴をいかし、多面的に彼らへの日本語学習支援をサポートすることが、

学習能力の向上や今後の進路へ繋がるのではないだろうか。

ここでは、今までの対話も含め、自身のボランティア経験から学校と地域のボランティア団体との連携の在り方について、いくつか提案していきたい。

外国にルーツのある子ども達が多い地域

彼らが比較的多い地域として、芦屋市と神戸市を取り上げてきた。芦屋市では、プレスクールの実施や長期休暇中に開かれる学習会に子ども達の学校の先生が来ることもあり、地域のボランティアと学校の先生が会う機会が増えてきた。神戸市では、地域のボランティア団体と学校の情報交換会が年に1回行われるなど、十分とは言えないが連携体制ができつつある状況だった。この二つの市で連携体制が出来てきた理由の一つとして、外国にルーツのある子ども達の人数が多いことが挙げられる。やはり、学校の中で該当生徒が多い問題ほど重視されるものであり、外国にルーツのある子ども達が少ない地域に比べ問題意識をもつ教師が多いとボランティア経験からも感じた。

彼らに関する制度では、各学校の在籍人数によって日本語支援員を加配できる。文部科学省の『学校における外国人児童生徒の受入れに対する教育支援の充実方策について（報告）』（2017）では、外国人児童生徒等教育の充実に関して記載されており、今まで加配定数（教育上の特別の配慮などの目的で予算措置で配置）であった日本語指導のための教員定数を10年間で計画的に基礎定数化（学校数や学級数に応じて配置）し、令和8年度には、日本語指導が必要な児童生徒18人対し1名の教員を基礎定数で配置、加えて、散在地域の対応のため加配定数を措置（現在の基礎定数473の1割にあたる47人をさらに散在地域のために配置）する予定となっている。神戸市や芦屋市のように、彼らが集住している地区の学校では、教員の加配が可能であり支援体制が整ってくる。加配の人数は、外国にルーツのある子ども達が増加するにつれ、多くなることが予想される。彼らの支援に携わる教員が増えることで、地域のボランティア団体と連携する窓口が増えることに繋がるため、今以上に連携体制ができてくると考えられる。例えば、学校に外国にルーツのある子どもが来た場合、提携している日本語教室にも連絡がいくようにすれば、学校に通うまでに期間が空いている場合にはプレスクールを実施することや、過去の学習支援データから、学校での指導方針と地域の日本語教室での支援を話し合い、学校では学習言語を、地域の日本語教室では生活言語や日本語支援と保護者への対応など、役割を分担して行うことができる。そして、定期的に学習状況や生活状況などを互いに報告し、情報を共有することで、彼らへのサポートも今まで以上にスムーズにいくと考えられる。

しかし、集住地域でも支援が行き届いていない現状がある。例えば、日本に来て二年以内の子どもには、必要であれば神戸市・兵庫県共に子ども多文化共生サポーターを付けること

が可能だが、志岐氏との対話でもあったように母語が英語の生徒には支援員がつかない。学校には英語科の教師がいることが理由の一つに挙げられる。そして、集住地域でも各学校によって支援が進んでいる学校とそうでない学校にわかれていた。それは教師個人のやる気、問題に対する意識によって違う。これらの問題を地域のボランティア団体との連携体制をつくることで解決できる可能性がある。学校で支援が不十分な点をボランティア教室で補ったり、学校と一か月に一度定期的に情報交換するなど、彼らの問題について教員に知識や情報を提供する場をつくることで、学校全体の問題意識を高める。一人の先生が負担を強いられるのではなく、多くのサポーターで子ども達を支援する体制をつくるのが、支援を継続していくことに必要である。

また、学校現場で彼らの支援に取り入れられている方法の一つに「JSL カリキュラム」がある。文部科学省によると、このカリキュラムは学校での各学習に日本語で参加できる力を育成することを目指したカリキュラムである。このカリキュラムは日本に来て間もない子ども達や、日本語の能力が低い子ども達にとって、学校で日本語と教科を同時に学ぶことができ、彼らの支援に必要である。このカリキュラムを有効に活用するためには、彼らにどの程度の日本語力があるのか、いつ通常学級の授業に戻るのか、どのように指導するのか、など判断が難しい問題がある。神戸市で行われている年に1度の情報交換会のような取組があることで、実際に対話の中で出てきた神戸市の生田中学校のJSL成功例ができてくる。

このように、外国にルーツのある子ども達の集住地域で連携体制をつくることができれば、それが少数地域にも応用して支援できる可能性がでてくるため、集住地域での支援を進めることも重要になってくる。

外国にルーツのある子ども達が散在している地域

彼らが少数しかいない地域や、今まで外国にルーツのある子ども達がいた経験がない学校では、このJSLカリキュラムがあったとしても、使用することが難しく、時間がかかると考えられる。このことについて、財団法人アジア・太平洋人権情報センター（2011）は、「教育現場で多くの教員たちが日本語が話せれば（それも流暢に話せればまったく）問題ないと認識していることによる」と述べている（p.14）。つまり、多くの教員は日本語を話せる子ども達に対し、日本語指導必要ないと考えている。さらに、散在地域では外国にルーツのある子どもが少ないので、問題意識を持ちにくい。このことから、JSLカリキュラムを導入できるだけの知識・経験をもつ教師が少ないことや学校自体の対応も進んでいないことも理由として考えられる。また、教員の加配についても、彼らの在籍数が少ないことが理由で対象にならない学校も多い。外国にルーツのある子どもが少ない地域では市に数人しかいない地域もある。

他にも、ボランティア活動の中でいくつかの学校と関わることがあったのだが、学校自体の受入れ経験が浅く、彼らの対応を考えているが支援がなかなか進まず頭を悩ませている学校もあった。

外国にルーツのある子ども達が少ない地域でも、地域のボランティア団体と連携することで支援できることもあると思う。

まず、散在地域の学校で JLS カリキュラムの導入について検討していく。地域の日本語教室には、彼らの支援に長年取り組んでいる人が多く、知識・経験ともに豊富である。そして、地域の日本語教室で蓄積されてきた知見を取り入れつつ学校だからこそできる学び、専門知識の豊富な教師による授業・ICT を使用した授業などをふまえて、カリキュラムを考えていく。こうした連携のためには、学校と地域のボランティア団体とが綿密に情報交換を行わねばならないため、神戸市のように学校と地域のボランティア団体が情報交換する機会を設ける必要がある。しかし、神戸市とは違い、他の地域では、ボランティア団体の数が少ないこともあり、学校と一つのボランティア団体との連携になると考えられる。必要に応じて他のボランティア団体と関わる機会を作り、幅広い視野で支援を考えていくためには、他の市と合同で情報交換会を設けることも必要かもしれない。

日本語の取り出し授業を行う際には、学校で使用する教材と、日本語教室で使用する教材を同じにしておくことで、子ども達の混乱を防ぎ、学習の一体化が図ることができる。彼らの日本語力の判断は、地域の日本語教室と学校との二つの目線から総合的に判断することで、学習言語・生活言語なども踏まえ判断できると思う。さらに、学校での授業内容を日本語教室が把握することにより、教室での学習もよりのを絞って行うことが可能になる。

支援の可能性を広げるためにも、予め学校とその地域の日本語教室と連携しておくことで、いつ彼らが学校へ入ってきてても対応できる状況をつくるが必要になってくる。

第5章 おわりに

外国にルーツのある子ども達が比較的多い地域として芦屋市と神戸市を取り上げていた。このテーマについて考えていくうちに、神戸市ほど人数は多くなく、支援も進んでいないかもしれないが、まだ芦屋市は他の地域に比べて連携が進んでいる方だと言えるのではないかと思うようになった。その理由の一つに、同じ学校に通う子ども達が多いことが考えられる。2019年11月時点でこくさいひろば芦屋に通う中学生19人のうち、芦屋市内の4学校（潮見8人・精道1人・山手4人・県立芦屋国際中等5人）に18人が通っている。これらの学校は、今までもこのような生徒がいたため、外国にルーツのある子どもの支援につ

いて問題意識をもつ教師が多い学校もある。学校内、あるいは地域内で人数が揃うと、まとめて取り出し授業をするなど支援しやすい面が多い。また、教師達もこの事に関心をもって、長期休暇中の学習会には顔を出す教師を見かけることもある。

最近、学校との関係が良くなっていると感じた出来事を耳にした。毎年、こくさいひろば芦屋では「スピーチ大会」を行っている。勉強にきている子ども達だけでなく、大人の人も参加している。内容は各自で考えて当日に発表するというもの。発表後には、学年ごとに賞と景品も渡される。内容は、将来の夢を話す子もいれば、日本にきた感想、感謝の気持ち、高校への思い、過去の悩みなど様々である。

このスピーチ大会に参加したある中学校の女の子が賞をとった。その時、彼女の学校の先生が発表を見に来てくださっていた。後日、クラスの配布プリントにはスピーチ大会のことと、彼女が発表した内容が書かれていた。そのことがきっかけで、クラスで彼女は注目された。さらに、のちの体育祭のクラスのスローガンには、「一人はみんなのために。みんなは一人のために」を彼女のルーツであるスペイン語で書いたものが採用された。

これを聞いたとき、地域の日本語教室が行ったイベントでの頑張りが、学校の中で多文化共生の一步となったことに、とても嬉しく思った。この繋がりが、少しずつ学習支援にも繋がっていくと感じた。学校との連携を目指すには、時間のかかることかもしれないが、地域の日本語教室がアクションを起こし続けることで、学校の先生方と関わるきっかけをつくることができる。それが、同じ子ども達を支える立場にいる学校と地域の日本語教室が同じ目線で支援を考えることになり、学校との連携になっていくのではないだろうか。

私自身、外国にルーツのある子ども達の支援に携わって4年目になる。まだまだ知識・経験共に不十分であるが、少しでも子ども達を支えていくことができるように今後も支援に関わっていきたい。そして、教職を目指す者として、こくさいひろば芦屋のボランティアとして、学校と地域のボランティア団体のより良い在り方と支援の連携について考えていきたい。

謝辞

最後に、この論文を執筆するにあたり今までご指導いただきました牲川先生に心より感謝いたします。また、情報提供や対話にご協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。そして、大学1回生の頃よりお世話になっているこくさいひろば芦屋の皆さま、研究演習で貴重な意見をくださったゼミ生の皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。

感想

卒業論文の作成について、Word のコメント機能を使って質問・修正ができたことで、スムーズに進めることができました。文献を引用する方法やフォーマットを細かく教えてくださったことも論文を書く上でとてもよい経験となりました。最後、もう一つ対話を論文に入れることになり、間に合うか心配でしたが、忙しいにも関わらず先生が早くに目を通して下さったおかげもあり、最後まで書ききることが出来ました。ありがとうございました。

引用文献

荒牧重人ら (2017) 『外国人の子ども白書』明石書店。

公益財団法人兵庫県国際交流協会 (2018) 「子ども日本語教室・学習支援教室一覧ページ」
<https://www.hyogo-ip.or.jp/> 2019年10月5日アクセス

こくさいひろば芦屋 (2016) 『10周年記念誌 こくさいひろば芦屋の10年 -震災10後の芦屋浜での共生社会づくり-

財団法人アジア・太平洋人権情報センター (2011) 『アジア・太平洋人権レビュー2011 外国にルーツをもつ子どもたち 思い・制度・展望』現代人文社。

佐藤郡衛 (2019) 『多文化社会に生きる子どもの教育』明石書店。

日本ユニセフ協会 (2019) 「子どもの権利条約」 <https://www.unicef.or.jp>
2019年11月3日アクセス

宮崎幸江/編 (2016) 『日本に住む多文化の子どもと教育 ことばと文化のはざままで生きる』SUP 上智大学出版。

文部科学省 (2017) 『学校における外国人児童生徒の受入れに対する教育支援の充実方策について (報告)』
http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/taikai/29_osaka_hokoku/program/pdf/r1400684_03.pdf 2019年12月4日アクセス

NPO 法人青少年自立援助センター 定住外国人子弟支援事業部（2018）『外国にルーツを持つ子どもの課題と支援』

https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/mondai/h26/k_2/pdf/s2-1.pdf

2019年10月5日アクセス

*e-sports*の将来性

総合政策学部 総合政策学科
宍倉 莉央

目次

第一章 はじめに

第二章 先行研究

第三章 e-sports 先進国との比較

第四章 プロゲーマーの現状

第五章 他スポーツとの比較

第六章 今後の e-sports

第七章 まとめ

謝辞

参考文献

1.はじめに

e-sportsとはエレクトロニクススポーツの略称で複数のプレイヤー同士でのコンピュータゲームをスポーツとして捉えるものである。全てのゲームをe-sportsというのではなく、対戦相手と競い合うことが一つの基準となっている。

市場調査会社Newzooによると2018年における世界のe-sports市場は1000億円を超える見込みである。また2021年には1865億円にまで成長すると予測しており2014年と比べると年平均成長率35.8%になる。データから読み取るだけでもいかに急成長している分野であるかが見て取れるだろう。国別のe-sports市場規模シェアを見ると、アメリカが37%、中国が15%、韓国が7%となっており、3カ国だけで59%と半分以上の世界シェアを占めている。しかし、日本のe-sports市場規模は総務省が発表した報告では4億円程度で世界シェアのたった0.5%にすぎず、日本のe-sports市場は世界と比較すると、まだまだ発展途上と言える。(Newzoo、2019)

しかし2018年は日本で「e-sports元年の到来」と言われており、国内e-sports業界での統一団体となる、日本e-sports連合(JeSU)が2018年2月1日に設立された。JeSUとはコンピュータエンターテインメント協会(CESA)と日本オンラインゲーム協会

(JOGA)の全面協力を得て、日本eスポーツ協会、e-sports促進機構、日本eスポーツ連盟が合併したものである。オリンピック等への選手派遣を目指すとともに、国内外への選手の派遣など、様々な面においてe-sportsの基盤の整備と普及を行っていくことを目標としている。また、大手企業のスポンサーによる経済効果も明白になっている。

例えば、数あるe-sportsタイトルの中でも、プロスポーツを純粹にe-sports化したと見ることができるのが、野球ゲーム『パワプロ』である。e-BASEBALLと呼ばれているプロリーグで、日本野球機構(NPB)とKONAMIの共催で、プロ野球球団の全チームが登録されている。初年度に行われた「BASEBALL パワプロ・プロリーグ2018-19 SMBC e日本シリーズ」冠スポンサーが三井住友銀行で、リアルのプロ野球の日本シリーズの特別協賛も行っている。e-sportsといえば競技性の高い格闘ゲームやFPSなどが印象的だが、日本では実際のスポーツとの結びつきも強めた独自の文化を築きつつある。

私は小さい頃からゲームが好きであり、ゲームと切っても切り離せない生活をしてきた。e-sportsを研究しようと思ったきっかけとしては、高校生の時にたまたま見たゲームの大会のインターネット配信で、プロがゲームの勝ち負けにこだわって本気で戦い、一喜一憂している姿を見て衝撃を受けたからである。他のメジャーなスポーツにも引けを取らない盛り上がりを見せ、画面越したが、応援している観客まで試合会場の緊張感に飲まれ、会場で応援しているような一体感を味わえるところに魅力を感じた。世界中の観客が自国の選手を全力で応援する姿にも見入ってしまった。それまではゲームは娯楽という概念が私の中にもあったが、この大会を見てからゲームは娯楽の域を超えて競技になっていることを初めて知った。若者を中心に盛り上がっているe-sportsだが、私たちの親世代よ

り前の人々には理解されないどころか否定されることも多い。しかしゲームのプロとして生活している人の中には何億、何十億と稼いでいる選手もあり、子供の将来の夢にプログラマーが選択されることは何もおかしくはない時代になってきている。

この論文では、先進国として様々な分野で世界を先駆ける日本がなぜ e-sports の分野で遅れているのかを解き明かすと共に、e-sports について知らない、理解していない人に認知してもらうことを目指した研究である。あまり認知されていない文化を広めていくにあたり、知っている人がその良さを伝えていかなければ広まることはないと思っている。e-sports という新たな文化をより多くの人に理解してもらい、私が e-sports で味わった驚きや感動などを体験してもらうことを最終目標とする。

2.先行研究

卒業論文の作成の際、e-sports についての最新かつ代表的な書籍 3 冊を一通り読んだ。それぞれ様々な観点から e-sports について書かれており、肯定的な意見だけでなく否定的な意見もあった。論文を作成していくにあたり、両方の立場を知ることが重要でありとも参考になった。簡単ではあるがこれらの 3 冊を先行研究として概括していく。

e-sports がどのようにして知られるようになってきたかの経緯や e-sports の歴史を辿るにあたって「e スポーツ論 ゲームが体育競技になる日」(筧、2018)が参考になった。第一章では e-sports とはなにかから始まり、e-sports について知らない人であっても読めるものとなっている。本書のように e-sports を知らない人に向けて書かれた本が他社ではあまり出版されていないため、e-sports を知る第一歩としては良い書籍である。しかし、内容のほとんどが e-sports を肯定するものになっており、ゲームは悪だという世間のイメージを覆すような手がかりを得ることはできなかったため独自に研究する必要があると感じた。

ファミコン以前からスマホゲームまでの歴史について「日本デジタルゲーム産業史」(小山友介、2016)で詳しく書かれていた。この本の内容は日本のゲームタイトルの流行を書き連ねたもので、コアなゲーマーにとってはとても興味深いものであるが、ゲームをしない人が読むとあまり理解できるような本ではないので第三章「e-sports 先進国との比較」で日本のゲームの歴史について触れることにする。

スポーツのデジタル化が進む現代で、バーチャル化の社会的影響や非現実性の価値について「Sport2.0 進化する e スポーツ、変容するオリンピック」(アンディ・ミア、2018)で詳しく述べられていた。全てをバーチャル化することに対し、否定的な意見も数多くある現代で非現実性の価値について述べられている書籍である。これは私の e-sports を認知してもらうという最終目的にも関連しており参考になったため、以下、章ごとに詳しく紹介する。

第 2 章の「融けるリアルとバーチャル」では、デジタルやスポーツの「非現実性」について、どのように対応するかの方法について、私たちが日常生活で現実を求めると同じように、非現実も求めるべきであると述べている。この考え方は私の中にはなかったものであり、非現実が一般的になった今、非現実を求めないほうがおかしいという逆転の発想ともいえる。

第 3 章ではデジタル化への抵抗感について述べられ、主にテクノロジーを使用することで、オフライン世界での物理的な体験が失われてしまうのではないかという懸念について書かれていた。例として、スポーツにおけるデジタルカメラを使用した審判方法(VAR)などが審判における人間の判断という側面を損なう可能性があるという議論がされている。プロの直観的な判断を頼りにしてきたというスポーツのひとつの特徴が失われることになってしまうという考え方もあるが、私は文化の発展の賜物であるテクノロジーを使わない手はないと考えている。実際オリンピックなどの大きな大会などではテクノロジーを用いた公平なジャッジが主流になっており、e-sports の大会などでも画面上での戦いであることか

ら VAR などの技術が使われることは間違いない。まとめとして現実世界から何かを失うのではなく、バーチャルな世界では現実世界での可能な範囲を超えた感覚を追加でき、現実での物理体験を超えることこそがテクノロジーの目指すところであると書かれていた。デジタル化については私の考えとも一致しており、バーチャルは現実と対極にあるものではなく現実をより良いものにするとということだ。今後テクノロジーの発展が加速し、更に現実とバーチャルの境界線がなくなっていく時代になることを考えると、この考え方は誰しもが持たなければいけないものであると感じた。

第 4 章ではゲームはいまだに社会悪なのかというテーマで書かれていた。ゲームは社会から孤立させ、人間関係をバーチャルな関係で代替する若者たちの間に根強く広がっていると述べている社会学者もおり、社会悪だと考えている人も少なくはないだろう。しかし歴史上、新たな文化活動は常に公の詮索にさらされ、それが若者のカルチャーから登場した時にはなおさらである。スケートボードやサーフィンなどは反体制的な要素がしみこんでいる為、街の構造をスケートボードができないような構造にしたり、文化自体を潰したりするような圧力をかけられることも多いがスケートボードやサーフィンなども現在はオリンピック競技として認められていることから、新しい文化が世間に認められるためには一定の時間も必要不可欠であると書かれていた。コンピュータゲームもサーフィンやスケートボードと同じように若者を中心に支持されており、若者のカルチャーであることに変わりはない。大人や政策決定関係者に理解されるような行動ではなく、何よりも排除する傾向になることは仕方がないことであると感じた。詳しくは 5 章の「他スポーツとの比較」で述べることにする。また、ゲームにおいては「こどものインターネットやビデオゲームの利用と、青年の暴力的及び破壊的行動には直接的な関係性があるとする見方もある」と指摘されるが正確な因果関係があるかどうかの明言はなく事実無根である。そうにも関わらず実際にアメリカで起きた銃乱射事件などでは、暴力的なゲームのせいで純粋だった若者がこのような間違いを犯すことになったという説明が行われ、ゲームが悪者にされるケースが存在している。個人的には、近年ニュースを見ていると、容疑者の部屋には大量のゲーム機が置かれていたなど、ゲームを悪者扱いすることが多いように感じる。そういうようなメディアの報じ方もゲームは大人に理解されるものではなく世間から排除したいという思惑を身近に感じられる一例であると考えている。社会悪として考えられる要因であるとしてゲームの健康被害についても書かれていた。ゲームと健康の関係についても 1998 年に DDR(ダンスダンスレボリューション)というゲームが発表され世界で大流行し DDR によって若年層が身体運動に向かう際の障害が取り除かれ、ゲームが新たな身体運動空間を生み出した初の例となった。DDR のような体を動かすゲームはコンピュータゲーム反対派の主な根拠に疑問をなげかけることになり、革命が起きたと言っても過言ではない。このことからコンピュータゲームをする人が皆、暗い画面の前に貼りついたまま、身体を動かさない生活を送っているというイメージは間違っていると主張することができる。近年ではポケモン GO などデジタル的交流と物理的交流が融合するものも多く大阪府吹田市にある VS PARK という

新感覚なスポーツ施設では、バーチャルとスポーツを融合させたアミューズメントがたくさんあり、これらも同じようなものであると私は考えている。ゲームが直接的に健康を阻害するという根拠はないことがわかった。しかし2019年5月にゲーム依存症は病気であるとWHOが認定した為、生活習慣病や依存症については独自に研究を重ねる必要があると感じた。

また、5章以降ではオリンピックとメディアの関わり方について書かれており自分の調べたい研究内容とは離れていたのが割愛する。

3.e-sports 先進国との比較

ここでは e-sports の分野において世界から取り残されている日本と先進国である韓国を比較していく。(日韓コンテンツビジネスフォーラム、2018)

3-1 韓国

1999 年 ケーブルテレビのツニバースが e-sports のリーグを開催し、e-sports 専門チャンネルを開設。

e-sports という言葉がメディアで使われ始めたのはこの時期である。

2000 年 韓国 e-sports 協会 (KeSPA) が発足し、世界中の企業や公的機関が「e-sports」に秘められた“興行”としての可能性に注目し始める。
「21 世紀プロゲーム協会」の設立イベントにて、文化観光部長官が e-sports という言葉を用いたことにより、一般に定着した。
「On ゲームネット」(OGN) が開局され、「StarCraft」リーグの運営が始まり、プロリーグが開始される。

StarCraft・・・宇宙での 3 つの種族間の戦争がテーマとなっており、それぞれの思惑が複雑に絡み合う壮大なストーリーである。人間、エイリアン、宇宙人の 3 種族があり、それぞれがまったく違った戦闘方法で戦い、勢力争いを行う。姉妹作であるウォークラフトシリーズと共にこのゲームは世界中で大ヒットし未だにトップクラスの売上を誇っている。特に大韓民国での人気は爆発的で、テレビ上でプロプレイヤーのリーグ (プロリーグ) がゴールデンタイムで放映されていたほど。(wikipedia)

2001 年 e-sports に関する配信を行うチャンネル「MBC Game」が開局。

2004 年 e-sports 発展中長期ビジョンが発表された。
SKY プロリーグの決勝戦で 10 万人の観客動員を記録。
コミュニティ主導によるイベントやゲームパブリッシャーが運営する大規模なトーナメント大会が催されるようになった。

2006 年 ゲーム産業振興に関する法律の改正がなされた。
RMT(リアルマネートレーディング)の禁止など。
ゲーム産業の開発促進や振興に向け、ゲーム創作の活性化、ゲーム産業の基盤作りとバランスの取れた発展、国際協力および海外市場への進出などに関する中長期のゲーム産業振興のための総合計画を樹立・施行する。(第 3 条)

2014年 「リーグ・オブ・レジェンド」決勝戦では同時アクセス数が75万人を記録。

League of Legends・・・アメリカ合衆国のゲーム会社 Riot Games が開発した Windows、macOS 用の基本プレイ無料ゲームである。多くのゲームレビューサイトなどで高評価を得ており、2012年、世界で最もプレイヤー数の多い PC ゲームとされている。米国ではプロスポーツ選手用のビザが認定されるなど注目を浴びている。(wikipedia)

2016年 ソウル市と文化観光体育部が共同で e スポーツ専用競技場を建設し、オープンしている。

韓国でここまで e スポーツが盛んになった背景について、1990年代に高速なインターネット回線が国内に普及したこと、IMF 金融危機により職を失った人達が、新しいビジネスとして PC バン（インターネットカフェだが、韓国では e-sports の練習場のような存在になっている）の経営を始めたことが挙げられる。韓国ではそのような PC バンが多く存在しており、日常的に PC ゲームで遊べる環境であった。そのため様々なジャンルのゲームにおいてプロゲーマーを輩出している。またプロゲーマーを育成するための e-sports 専門教育機関も早くから増加傾向にあった。

3-2 日本

2007年 日本 e-sports 協会準備委員会が設立される。

2011年 11月15日国内初となる e-sports 専用施設「e-sports SQUARE」が千葉県市川市にオープン。

2014年 4月 TOKYO MX2 にて、日本初となる e-sports 専門情報番組「e-sports MaX」が放送開始。

2015年 4月日本 e-sports 協会が設立される。

2018年 2月日本 e-sports 連合が設立される。

3月7日吉本興業が e-sports に進出すると発表。

4月12日 e-sports を取り扱う番組「YUBIWAZA」がスタート。ロンドンブーツ1号2号の田村淳と矢口真里が、MC を務める。

5月7日 日本 e-sports リーグ協会が設立される。

10月28日 e-sports ゲームなどのオンライン対戦を一般プレイヤー相手に一緒に楽しむという番組「有吉いい eeeee! そうだ! お前んちでゲームしない?」がスタート。

2019年 4月に一般財団法人日本 esports 促進協会が発足。

e-sports の歴史を追ううえで、韓国と日本の間には大きな違いがある。日本では任天堂やソニーなどが家庭用ゲームに力を入れており、その質の良さから日本では家庭用ゲームがメジャーとなった。また現代ではオンラインゲームをするにあたって1台10万円以上もするパソコンを購入しなければならず敷居の高いものとなっている。ネットカフェなどでも最新型のパソコンが設置され始めたのはここ数年であり、オンラインゲームの敷居の高さが、日本が e-sports 後進国になった原因として挙げられる。更に年表から読み取ると韓国では2004年にはすでに e-sports 産業に政府が関わりを持っているのに対し、日本では2019年現在でも政府は e-sports の政策を行っていない。単純に日本は e-sports 先進国である韓国から15年程度遅れていると言っても過言ではない。更に日本の法律でもスポンサー以外から支払われる大会賞金は上限が10万円と決められており、日本で高額賞金の大会があまり開催されないことの要因になっている。

4.プロゲーマーの現状

私の高校時代からの友人に大学に行きながら実際に企業とスポンサー契約を結び、プロゲーマーを経験していた人がおり、e-sportsに関わったことがある人として貴重な経験談や魅力を聞くため、インタビューをした。

4-1 インタビュー調査の概要

調査対象・・・高校時代からの友人 K

同じゲームをやっていて仲良くなった。

出会ったころからとてもゲームがうまく一緒にゲームをやっても絶対に追いつけないと思うぐらいには上手かった。

2年前ぐらい前からある企業のプロチームに所属していたが今は引退済み

インタビュー場所&時間・・・2018年11月10日(土)夜 大阪の飲食店

4-2 調査結果

4-2-1 プロゲーマーになるきっかけ

私「ゲームを始めてどのぐらいたつ？」

K「幼稚園からやってたから15年ぐらいになるかなあ」

私「小さい時からゲームにのめりこんで言った感じ？」

K「うん。その頃から今までずっとゲームやってるかな、受験の時とか以外」

私「最初からプロになろうって思ってゲームやってたん？」

K「そんなことはない。高校の時にPCを買って本格的にネットゲームを始めたんだけど、最初は同じゲームをやっている友達と楽しく遊べたらいいなあぐらいで。」

私「そこからプロになるまでの経緯が知りたい。」

K「最初はAVAにはまってPCを買ってから5年ぐらいやってたんだけど上を目指すようになって必死に練習して強くなろうと思ってき、どんどんやりこんでいくうちに絶対負けたくないっていう気持ちが出てきて、気づいたらゲーム内ランキングの中でも上のほうにいて。AVAではプロにはなってないんだけど2年前ぐらいに出たPUBGがすごい面白くてすぐやりこんだ。AVAで得た経験があったから、結構すぐPUBGでも上位のほうにいて、ある企業がプロゲーマーを募集してたから実績とか送って応募したんよね。」

AVA・・・『Alliance of Valiant Arms』（アライアンス オブ ヴァリアント アームズ、略称：A.V.A またはAVA、韓国のゲーム開発会社 Redduck が開発した次世代オ

ンライン FPS ゲーム。2008 年 9 月 29 日に開始されたクローズドベータテストが同年 10 月 12 日にて終了し、10 月 27 日からオープンベータテストへ移行。同年 12 月 1 日に正式サービス開始。(wikipedia)

PUBG・・・『PLAYERUNKNOWN'S BATTLEGROUNDS』（プレイヤーアンノウズバトルグラウンズ、略称：PUBG）は、韓国のデベロッパーBlueholeの子会社であるPUBG Corporationが開発しているバトルロイヤルゲーム。2017年3月24日にSteamで早期アクセス版の配信が開始され、2017年12月20日に正式版としてリリースされた。最大100人のプレイヤーが、島内にある装備などを駆使して最後の1人になるまで戦い抜くバトルロイヤル形式のゲーム。(wikipedia)

私「それで受かってプロになったってことか～」

K「そうそう。元々大会とかには仲のいい友達と出てていい順位までいけたりしてたから、実績はあったんよね。」

私「やっぱりプロになるのには大会での実績とかいるんやなあ。」

K「そうやなあ。企業側は数字を求めているからゲーム内ランキングとか、大会では何位でしたみたいな具体的な実績を求めている。」

私「プロになるのは狭き門やのにすごいな。」

K「最近はそうでもないんよな。日本でもe-sportsが盛り上がってきているから、結構いろんな企業がプロゲーマーを募集してて昔よりは、プロになりやすくなっていると思う。」

PUBGがリリースされた2017年以降日本でのe-sportsの勢いは加速し、様々な企業がプロゲーマーのスポンサーをするようになった。2017年以前に比べるとプロゲーマーになることの敷居が下がっている反面、稼げるプロと稼げないプロの格差が広がってきていることも現実である。

4-2-2 プロゲーマーの苦労と魅力

私「結構変わっていったんやなあ。プロになってからとプロになる前でどんな違いがあった？」

K「かなり違うなあ。一緒にゲームをやる人も同じチームに入っている人とやることばかりやし、一緒にゲームする人が変わったかな。」

私「ずっと一緒にやってきた人とはやらなくなったん？」

K「やらなくなったんじゃないかとやれなくなったが正しいかな。チームで練習する時間が

結構多いからほかの人とやる時間が無くなった。」

私「それはつらくなかった？」

K「結構つらかった。PUBGのプロになったわけやからPUBGの練習ばかりやし、一緒にやりたい友達とゲームする時間も減ったわけやから、ストレスは結構たまったりしたかな。」

私「きついなあ。やりたいゲームをやりたいときにできないのはマジでつらい。」

K「うん。プロになってそれが一番つらかったかなあ。チームを背負ってるっていう使命感もあって純粋にゲームを楽しめなくなってしまった。」

私「趣味を仕事にするっていいことだと思ってたけどそんなことないんやね。逆にいいこともあった？」

K「あったあった。デバイスとかは企業からマウスとかキーボードとかが送られてきたりして最新のモデルをいち早く使ったりできたなあ。それを配信で宣伝したりして見てる人に勧めて売り上げに貢献するって感じかな。」

私「普通に買ったら最新モデルとかめっちゃ高いし、ただでもらえるのはいいね。」

K「それはありがたかった。あとは自分と同じレベルの人と一緒にゲームをやれるから高めあえるところかな。」

私「確かに、同じぐらいの実力の人とゲームするのが一番楽しいからそれはわかる気がする。プロをやめた一番の理由は？」

K「就活で忙しくなってゲームの時間が取れなくなったってのもあるんだけど、それよりもずっと同じゲームを永遠にやらないとだめってのが一番きつかったかな。実力的にはプロになれたとしても、そのゲームをやり続ける覚悟がないとプロを続けるのは難しいと思う。何年もプロで活躍してる人は精神的にもすごいと思った。」

私「それはプロになってみないとわからんことやなあ。総合的に見てプロになってみてよかった？」

K「よかったかな。貴重な経験できたと思うし、そのゲームを盛り上げてるっていうのを感じれた。まあでも、同じゲームのやりすぎでPUBGがちょっと嫌いになったのはつらかった(笑)」

ここまではプロとしての経験を詳しく聞いたが、ここからはe-sportsの認知度をあげるためにはどうすればよいかということを中心に話した。

4-2-3 今後の日本でのe-sports

私「日本でe-sportsがさらに広まるようにするにはどうすればいいと思う？」

K「もっともっとみんながプロになればいい。昔ほどなりにくくはないし、気軽とは言わないけど敷居は下がってると思う。プロが増えれば競技の人口も増えるし、なによりコミ

ユニティが盛り上がるから話題にもあがりやすくなると思う。だからプロが増えるっていうのは重要なって。」

Kが言っているのは、競技人口を増やすところから始めるということだ。競技人口を増やさなければ、そのジャンルが盛り上がらないのでまず人数を増やして e-sports の普及を図る。

私「ゲームを全くやっていない人に興味を持ってもらうのはできるのかな？」

K「んー、難しいなあ。けど今はスマホゲームとかもいろいろでて、普段ゲームをしない人でもゲームに触れる機会はたくさんあるから、そこからまずゲームに興味を持ってもらうのが大事かなって思う。」

私「なるほど。スマホゲームをゲームに興味を持ってもらうきっかけにするってことね。」

K「そういうこと。いきなり e-sports でやってるような銃撃戦のゲーム見せても絶対面白くないしね。」

私「まあそうやね。なにやってるかとかもわからんよね。あとは、年配の人に興味を持ってもらう方法ってあるかな。」

K「それはもっと難しいなあ。ゲームで重要な反射神経ピークが20代前半って言われているから、年配の人が e-sports に携わっていくにはかなり難しい。けど、ゲームってポケ防止になるからそういう理由でお年寄りにゲームの理解を得るのはいいんじゃないかなあって。」

私「あーたしかに。e-sports に携わらないとしてもゲームへの興味を持ってもらうことで理解は得れそうやね。」

K「うん。まあ年齢別で大会とかに出場できるようにしたりしてもいいかも。それやったら反応速度とかのハンデを気にしなくていいから。でも、おじいちゃんが集まってみんな銃撃戦してたらそれはそれで問題なるかもしれないけど (笑)」

4-3 インタビューを終えて

今回の対話でプロゲーマーを経験していた K の貴重な話を聞くことができた。趣味としてゲームを楽しんでいる私からすれば、ゲームを職業として生活していくことはとても羨ましいと考えていたが、苦悩も多く簡単なものではないことがわかった。また、プロになるとゲームを楽しむというより使命感でプレイしているのではないかと感じた。一般人が思っている理想のプロゲーマーと現実はかけ離れているものであることも思い知らされた。さらに K の経験だけではなく、どのようにしたら老若男女問わず e-sports を広めることができるかの意見ももらうことができた。スマートフォンの普及によって一層身近になっているスマホゲームを、e-sports に興味を持ってもらう切り口にし、まずはどんなゲー

ムでもいいので興味を持ってもらうことが大事だと思った。

4-4 総括

近年プロゲーマーに憧れて将来の職業にプロゲーマーを挙げる中高生が増えているが、生半可な精神力や体力ではプロゲーマーとして生活することは厳しい現実を突きつけられた。この現状はプロゲーマーと直接話さなければ知ることができず、プロゲーマーが将来の職業に挙がるようになってきた現在、世間に認知されなければならないことであると感じた。他のスポーツのプロ選手と同じように厳しい練習に耐える体力はもちろん、自分のプレイしたいタイトルではないゲームを続ける精神力を考えると厳しい職業であるといえるだろう。しかし、e-sports はネット配信で気軽に観戦できる点や無料でダウンロードしてゲームを楽しめるタイトルがたくさんある。視聴者や趣味としてゲームを楽しむ層を増やしていくことは e-sports 市場の規模を大きくすることであり、より多くの人に認知してもらうはやはり大切であると考え。憧れとなるプロゲーマーが増えることで、本気でプロを目指す子供が増えることは良い兆候であり、プロの苦悩を物ともしないゲームと向き合う覚悟がある子供が多く出てくることを期待するばかりである。

5.他スポーツとの比較

この章では、過去に世間からマイナスのイメージを持たれていたスポーツがどのようにして発展を遂げたかを現在の e-sports を比較していく。若者を中心に発展し現在ではオリンピックの競技になっているスケートボードを例として挙げる。

「ユースカルチャー」、「ストリートカルチャー」の一部として若者を中心に人気のスケートボードだが、その発祥から発展には大きな区切りがいくつかある。

5-1 スケートボードの誕生

サーフカルチャーから派生したものであるスケートボードは、サーフィンの陸上練習用の道具としての側面と、街で子供たちが乗って遊ぶおもちゃのひとつとしての側面を合わせて急速に発達していった。当時の日本の若者たちは物凄い勢いで流入してくるアメリカンカルチャーに大きく影響を受けていた。そのアメリカの若者文化の中のひとつにしっかりとスケートボードがあり、小さめのスケートボードを抱えて街に集まる若者も増えていった。

初期のスケートボードは新しい文化として多くの若者に受け入れられ独自に発展をしていくことになり 90 年代後半の韓国やアメリカで発達した e-sports と同じだと考えられる。若者だけの小さなコミュニティで楽しまれるのが一般的であり、社会的影響を与えるような流行の大きさではなかったので叩かれることもなかった。

5-2 スケートボードの発展

クネクネとスラロームで滑るだけのスケートボードが、アメリカ中の街中で坂やバンクや様々なシチュエーションで楽しむことから急激に発達してトリックやスタイルが磨かれていくようになる。アグレッシブな「ストリート」、ストイックな「フリースタイル」、華麗な「ランページ」、と様々なスタイルを全て許容するスケートボードの懐の深さは街の不良やミュージシャン、アーティストらにも大きな影響を与え、「尖った若者はスケートボードが好き」という印象を形作っていった。そのようにして全米に広がったスケートボードがブームのピークを迎え、人気のプロライダー達は他のメジャースポーツ選手に比べてもひけを取らない所得と名声を得るまでになった。熱狂的なファンは好きなライダーと同じデッキ、同じシューズ、同じスタイル、とマネをして、スケートボード関連のメーカーやメディアなども急激に発展をしていった。ライダー達の社会的ポジションもパークで集まって滑っていたスケボー少年時代からは想像できないものとなった。その反面、不良文化の一種としてもスケートボードが急速に世界に広がっていくことになっていった。

初期のスケートボードは若者の遊びの中の一つであったが、この時期ではテレビ CM やメーカーの介入など社会的に無視出来ない大きさの文化になっている。大きくなりすぎた文化は企業などの介入によってビジネスチャンスに利用されるといった流れが確立されてい

るように思える。この頃のスケートボードと 21 世紀に入ってから e-sports を比べると、同じ流れを辿っているのがとてもよくわかる。プロボーダーと同じように現在のプロゲーマーも年収にして十億円以上を稼ぐなど社会的地位の上昇が続いており、ファンやスポンサーの増加の影響で一つの大きなビジネスとして成長している。しかしその後、スケートボードが若者のみに広まってしまったことや不良文化の一種になってしまったことで大人達からの批判に晒されることになってしまう。21 世紀に入ってから e-sports は大きな成長を遂げ注目を浴びるようになってきたが、近年ゲームが体や学力に影響を与えるとして悪い意味で注目を浴びている。まさに今現在の e-sports が批判を浴び始めた 90 年代のスケートボードと同じなのではないかと私は考えている。

5-3 市場の衰退から再流行

爆発的な流行の後、流行の失速によってカリフォルニアを中心に各地にできたパブリックのスケートパークは閉鎖に追い込まれた。ブームに乗って増え続けたメーカーは潰れていきコンテストやイベント、メーカーの契約金などの減少からプロボーダーを諦め普通の職に就く者も多く、スケートボード市場は縮小した。その後、経営が成り立たないプライベートパークが無くなることで、スケーター達は滑る場所を求め街中でスケートボードをするようになっていった。街中で滑る際に建造物を壊すなどのスケーターのマナーの悪さからパブリックパークの設置を求める市民団体などの活動もあり、その需要は一気に全米に広がり、全米各地にパブリックのスケートボードパークが広がっていった。その結果パブリックパークで遊ぶ新たなスケーター達が増え更に流行することとなった。

流行が失速し一度は大手企業が手を引いた市場ながらも成長を続けてこられた理由としては、環境の整備が重要であると感じた。スケートボードパークがなくなり街中の構造物を破壊しながら遊ぶスケーターによって、多くの批判に晒されたとしても急激に競技人口が減り文化が消滅するものではない。文化が流行する際に環境が整備されることは、その文化と上手く付き合っていくために最も重要なことだと感じた。日本での e-sports においても環境の整備という点ではまだまだ出来ておらず、これこそが日本で e-sports の流行が遅れている理由であると考え。新しい文化が流行する際、気軽にその文化に触れられる環境が必要だということを思い知らされた。

5-4 オリンピック競技へ

昨今では初期のブームで愛好者だった若者達が行政の要職に就くような年齢になり、過去に熱中した 20~30 歳台のスケーターが子供を持つ親となり、世界各地で公共スケートパークの開設が進み、日本でも親子で楽しめるスポーツとしての魅力が広く浸透し始めている。オリンピックの競技として認定される為には、若者のみの判断ではどうにもならず行政の役員世代の年齢に理解されるような文化でなくてはならない。スケートボードの初期の流行からは 50 年が経過しているが、e-sports は 1990 年代後半に流行し初めてから 20 年し

か経っていない。オリンピックの競技として認められる為には、物理的な時間が必要であり、スケートボードの例から考えると 20~30 年は先になると考えるのが妥当なのかもしれない。

6.今後の e-sports

現在、e-sports が世界中で旋風を巻き起こしており日本でも 2018 年以降 e-sports 市場は急速に成長している。例えば、プロの e-sports プレイヤーの中には自宅でゲーム配信によって、何千もの視聴者を魅了し他のプロスポーツ選手と遜色ない大金を得ている選手も少なくない。また e-sports のトーナメントが開催されると、まるでオリンピックスポーツのスタジアムと見間違えるような熱狂が起きており、実際にオリンピックの正式種目化へとといった議論も生まれている。

e-sports は、ゲームという産業をさらに大きく躍進させる可能性を秘めており今後のゲーム開発では無視できないものとなっていくことは間違いない。e-sports は誕生したばかりであり、そのシステムもルールもまだ発展途上だが、多くのスポーツ競技同様、今後ますますグローバルの渦の中で成長し、成熟を見せていくと考えられる。もちろん、日本のような地域独自で発展する e-sports もあると思うが、オリンピックの話が出ているように多くの e-sports は、グローバルな環境の中で影響し合ったり、競争があったり、協業したりと、グローバルな動向とは切り離すことができないのが実情である。つまり、プレイヤー、競技主催者、大会に関わるスポンサーなど、e-sports に関わる人であれば、グローバルな動向を把握することが求められるようになってきている。

また、日本ではプロゲーマー養成専門学校や泊まれる e-sports 施設をコンセプトにした宿泊施設「e-ZONE ～電脳空間～」が 2020 年 4 月にオープンされることも決まっている。e-sports に関わる施設や企業が増えていることは確かであり、今後も e-sports 市場が大きくなることが予想される。

しかし、世界保健機関（WHO）は 2019 年 5 月 25 日、ゲームのやり過ぎで日常生活が困難になる「ゲーム障害」を国際疾病として正式に認定するなど、スマートフォンなどの普及でゲーム依存の問題が深刻化し、ゲーム依存がギャンブル依存症などと同じ精神疾患の扱いとされ今後は逆風も強くなると予想される。だが、米国や日本のゲーム機メーカーやソフト会社で作る業界団体「エンターテインメント・ソフトウェア協会」（ESA）は、WHO がネットゲームへの過度な依存を病気と指定することに対し、「ビデオゲームに中毒作用はないと客観的に証明されている」として反対する声明を出した。ESA は「世界中で 20 億人以上がゲームを楽しんでいる」と主張し、そうしたユーザーを病気とみなせば、「うつ病などの本来の精神疾患がささいなものとして位置づけられてしまう」として、WHO に方針の見直しを強く求めた。ESA には、任天堂やバンダイナムコエンターテインメント、スクウェア・エニックスといった日本の大手ゲーム関連企業も加盟しており、反発の声も少なくはない。（朝日新聞、2018）

スマートフォンによって購入せずともゲームを遊べる時代になった今、幅広い世代がゲームへの関心を強めており、「ライト層」や「にわか」と呼ばれる人たちが増えているのも事実である。そのライト層の人たちがスマホゲームにとどまらず、競技性のあるゲームに興味を持つ段階になると、今以上に市場の成長が見込まれオリンピック委員会が無視できな

いほどの規模になると考えている。オリンピックの競技として認められる為に最も重要な条件は幅広い年代への理解だと私は考えており、その条件が達成された際には e-sports がオリンピック競技の 1 つになりお茶の間で楽しまれている光景が当たり前になっているかもしれない。

7.まとめ

新しい文化というものは多くの人から目を付けられることによって当然批判されるものであり、WHO によってゲーム依存が精神疾患として認められたからといってゲームのプレイ人口が急速に減るわけではない。例として、過去にはネガティブな単語として「ゲーム脳」という言葉がよく使われていたことも記憶に新しいが、そこからゲームのプレイ人口が減っただろうか。減るところか e-sports 元年と呼ばれるほどの成長をみせ大手企業が続々と参入してくる時代になっているのである。

私はこの論文を通してゲームをプレイする価値やゲームの正当性を伝えたいわけではなく、多くの人に e-sports という急成長している市場があることをまず知ってもらいたいと考えている。先に述べた通り、新しい文化が認められるまでに物理的な時間が必要だが、様々な年代の方にこの論文に目を通してもらうことでその時間を数年は縮めることができ、世間の e-sports に対する理解も深まっていくことを信じている。

謝辞

本論文の作成にあたり、手厚くご指導いただいた牲川先生に心より感謝いたします。また対話を引き受けご協力してくださった方、そしてたくさんの貴重な意見をくださった牲川ゼミのみなさまにも厚く御礼申し上げます。

参考文献

Newzoo, Global Esports Market Report,2019
<https://newzoo.com/solutions/standard/market-forecasts/global-esports-market-report/>

e スポーツ論 ゲームが体育競技になる日
筧 誠一郎：e スポーツコミュニケーションズ合同会社社長、2018、ゴマブックス株式会社

日本デジタルゲーム産業史
小山友介：京都大学大学院経済学研究科博士、2016、人文書院

Sport2.0 進化する e スポーツ、変容するオリンピック
アンディ・ミア：サルフォード大学教授、2018、NTT 出版株式会社

日韓コンテンツビジネスフォーラム
韓国コンテンツ振興院、日韓デジタルコンテンツ協会、2018

サーフィン・スケートボード・パルクール：ライフスタイルスポーツの文化と政治
ベリンダ・ウィートン、2019、ナカニシヤ出版

ネットゲーム依存症、業界団体が反対声明
朝日新聞デジタル、2018、<https://www.asahi.com/articles/ASL155JD1L15UHBI01J.html>

目次

研究動機

1. 概要---2
2. 二社におけるCAのキャリアプラン---3
3. 客室乗務員に共通する課題---3
 - 3-1. CAの身体的疲労---4
 - 3-2. CAの精神的疲労---7
4. 日本の航空会社で起きた労災問題---9
5. ANA 内定者インタビュー---11
 - 5-1. インタビューの概要---11
 - 5-2. インタビューの結果--11
 - 5-2-1. 導入とCAを目指した結果---11
 - 5-2-2. CAの身体的疲労について---12
 - 5-2-3. 感情労働について---13
 - 5-2-4. 将来のキャリアプラン---14
 - 5-2-5. CAの転職---14
6. CAの労働環境の改善策---15
7. 最後に---16

研究動機：

高校1年生国際交流科に所属していた私は、修学旅行兼研修旅行でカナダに行くため初めてJALの飛行機に乗った。その時見た客室乗務員からお客様を守るという保安員としての覚悟が表れている強さと、日本を代表する航空会社の一つの象徴にふさわしい華麗な印象を感じ取った。その瞬間から私は将来客室乗務員として働きたいという夢を持つようになった。

日本を代表する航空会社といえば日本航空（JAL）と全日本空輸（ANA）が挙げられる。私は日本のフラッグキャリアの航空会社の客室乗務員になるという人生の一つの目標を叶えるため、就職活動時に両社を受験した。憧れの感情を抜きに労働者の視点を持ちながら二社に対して多くの企業研究をし、実際に面接や企業説明会等に足を運ぶにつれ二社の違

いについて以前より深く考えるようになった。二社の社員と実際にコミュニケーションを経験し JAL には親しみやすさ、ここで働きたいという感情が強く芽生える一方で、ANA には様々な意味での厳しさを感じ、ここで働ける事になっても長続きしそうではないなという印象を受けた。JAL での最終面接の際、面接前に 1600 名ほどいる受験者ひとりひとりに劇激励の手書きメッセージ付きの手織りの鶴を一言ずつ応援してくれながら手渡ししてくれた。CA という職業は幼い頃から目指してきた受験者も多くいるため、激励の言葉入りの鶴を見て涙する受験者も少なくなかった。ANA の最終面接時には、着席する席に一つ一つの封筒が用意されていたが、中には印刷された手紙に一言メッセージが手書きで書かれていた。先に JAL の最終面接を経験した私には手織りの折り紙鶴により深く感動してしまった。

このように二社は同じ日本のフラッグキャリアとして名を連ねているが、そこにいる労働者や企業の方針は大きく違うといえると思う。ありがたい事に就職活動では両社から客室常務職の内定をいただくことが出来、実際に就職活動の際に感じた事や企業研究内容を踏まえた上で念願の JAL の CA として働く方を選んだ。しかし日本航空は過去に破綻を経験している会社でもあり、憧れのみで入社を決めるには少し不安が残ることも事実である。また客室常務職は肉体的、身体的にも大きな疲労の伴う職種であるため定年までフライトを続け生計を立てていけるかも疑問である。私は客室乗務員として入社したのち、結婚や子育てというライフイベントに合わせながらも JALCA として働き続ける臨機応変な社会人生活を送りたい。そこでこの論文では、主に日本航空と全日本空輸という日本の航空会社大手 2 社の客室乗務員にとって長く働き続けるために障害となりうる問題点とその実例を基にし、より客室乗務員が働きやすくするにはどういった制度に守られる必要があるのかということを考えていく。

1. 概要

日本航空 (JAL)

社名 日本航空株式会社 Japan Airlines Co., Ltd.

設立 1951年 8月1日

従業員数 12,750人 (2019年3月現在)

全日本空輸 (ANA)

社名 全日本空輸株式会社 ALL NIPPON AIRWAYS CO., LTD.

設立 2012年 4月2日

従業員数 14,242名 (2019年3月31日現在)

	初任給	通勤費	客室乗務員数	その他
JAL	188,000 円	当社規程により支給	5995 人	寮あり
ANA	180,319 院卒:188,221 円	当社規程により支給	8197 人	寮なし

2. 二社における CA のキャリアプラン：

給与面においては、全体的に JAL の方が高い。しかし ANA では院卒や四大卒といった学歴によって細かく初任給が分けられている。また、CA の給与はリードキャビンアテンダント等といった職位や実際の乗務時間等によって大きく変化するため一概にどちらの方が高い低いという風にはいえない。JAL には配偶者転勤同行休職制度、ANA にはリフレッシュ休暇など各社によって違いのある制度もちらほら見て取れる。

客室乗務員は前でも述べたように非常に体力勝負であるため、休日の数やとりやすさは長い目で自身のキャリアを見るにおいても大切である。また客室乗務員として働くと知人と話していると、「国際線に乗るの？それとも国内線だけ？」という風によく聞かれるが、実は近頃では大手国内二社において国内線と国際線どちらにも乗務する条件で航空会社は求人をしている。実際のところ、CA になる事を目指している学生は ANA 派、JAL 派という好みは存在するものの CA になれるのであればどちらの会社に入社する事になってもよいと考える学生が数多く存在する。(あくまで就活をしている時の多くの学生の本音であり、私もその一人であった。) そのため、多くの学生は受験前から福利厚生という現実的な面を考慮して一方の航空会社に絞るとい事はあまりしない。実際に二社に受かった場合に現実的な面をよりリアリティに考慮して一社に決めるため、合否がわかって初めてそのような現実を考えると見える。

しかし、二社の間で最も明白に違うキャリアプランが存在する。JAL では入社して約 2 か月半の訓練後 1 年半から 2 年の間は国内線のみ乗務する。その後社内試験を経て資格を得たのち国際線と国内線両方を乗務する事になる。一方 ANA では、JAL と同様入社後訓練を経た後、すぐに国内線と国際線にて乗務を開始する。つまり、早く国際線に乗務して入社して多くの経験をしたい学生は ANA を選び、より慎重に国内線から国際線へと幅を広げたいと考える学生は JAL を選ぶという、一つの参考にはなり得るかもしれない。

3. 客室乗務員に共通する課題

客室乗務員は長い世代に渡って女子学生にとってあこがれの職業である。しかしその職業

は大きく分けて2つの意味で激務であるといえる。まず一つ目の問題は長時間の労働時間に起因する身体的疲労である。客室乗務員は多くの時差をとまなうフライトで体内リズムが通常でなくなるばかりでなく、お客様の荷物を上の収納棚に積み込んだりと非常に体力が必要となる職業である。2つ目は、客室乗務員は「感情労働」とよばれる特殊な職業である事から、精神的な苦痛が伴う職業である。客室乗務員はお客様に直接サービスを提供し最前線で働く航空会社の社員である事から、客室乗務員の行動がお客様の航空会社のイメージそのものに直結する。その分すべての客室乗務員は行動一つ一つに精神を張り詰めなければならない。

3-1 客室乗務員の身体的疲労

まず一つ目の問題点である「体力面の疲労」からみていく。客室乗務員は基本的に残業がないとされている。しかし客室乗務員の一日のスケジュールをみると実は実際に飛行機に乗る常務前に出勤してフライトに向けて準備をしたりする時間が多く割かれていることがわかる。次の客室乗務員の一日のスケジュールはANAの客室乗務員の一例である。

(図1)

図1：客室乗務員（ANA）の一日のスケジュール（ANA,2019）

日本時間	現地時間	国際線乗務の日 成田 > ニューヨーク	国内線乗務の日 羽田 > 福岡 > 沖縄で宿泊(ステイ)	日本時間
05:00			05:00 起床	05:00
06:00			06:30 自宅を出発	06:00
07:00			07:00 オフィスに到着 07:50 ブリーフィング(打ち合わせ)	07:00
08:00			08:05 乗務する飛行機へ搭乗・準備	08:00
09:00			09:00 NH245便 福岡行き 羽田空港出発 飛行時間1時間45分	09:00
10:00	10:00 起床		10:45 福岡空港到着	10:00
11:00			11:50 NH1207便 沖縄行 福岡空港出発 飛行時間1時間35分	11:00
12:00	12:30 自宅を出発		13:25 沖縄空港到着	13:00
13:00	13:30 オフィスに到着		15:00 同期と一緒に首里城へ観光 その後沖縄料理を堪能	15:00
14:00				14:00
15:00	15:00 ブリーフィング(打ち合わせ) 乗務する飛行機へ搭乗・準備			
16:00	16:40 NH110便 ニューヨーク行き 成田空港出発 飛行時間12時間30分			16:00
	15:00 15:10 ニューヨーク到着			
	16:00			
	17:00			17:00
	18:00 18:00 ニューヨークの夜景を見ながら、 同乗クルーと一緒にディナー			18:00
	19:00		19:00 ホテルに戻りゆっくり休息	19:00
	20:00 20:00 ホテルに戻りゆっくり休息			20:00
	21:00		21:00 翌日の乗務に備えて就寝	21:00

長時間のフライトでも良いパフォーマンスが発揮できるよう、人員構成や乗務スケジュールが配慮されています。

一日に数便乗務します。短い時間でもお客様に良い印象を持っていただけるサービスが求められます。

国内線の場合：一日に2~3便のフライトをこなす事が基本である。午前7時には空港のオフィスに到着し、その日に同じ便で登場するメンバーとの打ち合わせ（ブリーフィング）までに約一時間の余裕がある。この空き時間にはCAが個々に当日に乗務する機材や機内食等の予習をする時間に充てられる。そこからメンバーが顔合わせをしてやっと打ち合わせとなる。そうして9時に離陸予定の機材に約一時間前に乗り込み、9時の定時運航への準備をすすめる。約2時間のフライトを終えたのち、1時間弱という短いブランクを挟み早速次のフライトが待っている。この間、客室乗務員が機材から降りることはなく、機内の清掃の手伝いや次フライトの準備に取り掛かる。

国際線の場合：国際線に乗務する場合、韓国などの近い国に比べ北米などは時差が大きい為、体力の消耗が非常に大きくなる。上の図1では、実際に飛行機に乗りこみ準備を開始するのは、離陸予定の1時間以上前の15時である。空港オフィスには13時30分には到着しなければならない。長時間の飛行時間を要する国際線乗務では、機内食やシートクラス（ファーストクラス、エコノミークラス等）サービスの種類も多岐に亘るため、その分客室乗務員がしなければならない搭乗前の準備も多くなる。結果ブリーフィングが開始される時間の1時間半前にはオフィスに到着し、自主的な準備が求められる。無論個人の客室乗務員としての経験やスキルによってその準備にかかる時間等は差があるため、新人であればあるほどこの時間は長くかかると考えられる。客室乗務員の勤務時間は、飛行機が駐機場を離れた瞬間から、到着地の空港の駐機場に到着するまでの間であるため、この自習の時間はオフィスにいたとしても残業代などのような手当は支給されない。また、図1では一見ステイ先での華やかな生活に目がいくように描かれているが、CAの本来の業務である飛行機の中での仕事の様子は一切この表では省略されている事に気付いてほしい。航空業界は客室乗務員という職業を現実のものより華やかに見せる様プロモーションしている。現実はこの図では12時間30分という1日の半分以上にもなる時間の労働を見事に省いていた。

CAは肉体労働をこなす中で、十分な休養をとれるよう航空会社等から配慮はされているのだろうか。航空連（正式名称「航空労組連絡会」）によると、JALにおいて2008年、乗務時間制限のみでなく休養時間や路線特性への配慮も廃止されたという。1993年までは、1か月に80時間以上フライトしてはならないという規制をJALが決めていた。しかし2008年以降は95時間以上という約15時間も多くフライトしても構わないという労働基準へと変更された。ほかにも、ヨーロッパ2泊4日のフライトを終えた際その後休日が3日あることが決められていたのみだが、それも休日2日へと改悪された。客室乗務員の労働環境悪化は決してJALにおいて起きているわけではない。（ANAでは、1995年時90時間以上のフライトは規制されていたのに対して、2004年以降100時間以上の規制に改悪された。）元JAL客室乗務員で、JALが破綻した際に解雇された客室乗務員の一人である森(2019)によると、CAの身体的疲労と疲労回復条件は、勤務と休暇のインターバルの変化も大きく起因しているという。以下、森(2019)の引用である。

大まかにいえば、4日間の長距離乗務後には3日間の休日が付与されていたものが、現在は、乗務時間が最も長くなるアメリカ東海岸への乗務帰着時に3日間の休日が付与される以外は、アメリカ西海岸、欧州への常務後も2日間の休日付与となってしまうのです。またアメリカ東海岸への乗務が4勤3休となるために、4勤3休4勤1休という変則的サイクルが生じ、当1休日への改善要求（4勤3休3勤2休への変更要求）は組合所属（職場には2つの組合が存在している）を問わず非常に強いものがあります。（p.15）

これを見て、4勤2休のサイクルは一見平日5日働いて土日休みである一般的な会社員と比べて比較的休日が多く、体力の回復も容易でないのかと考えていたが、一方で固定された休日数の中で体力回復を求められる事に難しさを少し覚えた。森(2019)によると実際に勤務インターバルの変更直後には次のような問題が起きたという。

「アメリカ東海岸路線便で成田到着時に前任 CA が倒れ救急搬送」「アメリカ西海岸路線便で乗務中の CA が体調不良で酸素吸入実施」「アメリカ東海岸路線便で出発直前の体調不良による CA 交替で30分の遅発」「欧州線出発時身体不良を訴えた CA が乗務離脱＝欠員のまま運航」「羽田発北京行便乗務中、体調不良の CA が北京着陸後救急搬送」「出社時刻前、社内ロッカールームで倒れた CA が救急搬送」などの悲惨な事態が次々に、日本航空キャビンクルーユニオンに報告されています。言うまでもなく、CAの最も重要な任務は保安任務であり、体調不良で乗務に就くことは避けなければならないのですが、専門家は、「次々にやるべきことがあり、疲れを感じ取る時間的余裕がない」「スケジュール消化のみの「食う・寝る・飛ぶ」の生活」に陥っているためだと分析しています。（p.17）

ここで森のいう「専門家」というのが、誰のことを指しているどのような専門を持っている人なのかは少し疑問ではある。しかし、本来お客様の保安任務が第一である客室乗務員が体調不良で乗務に就くことは避けなければならないという点においては完全に同意する。

森(2019)は、視点を変えて日本の航空業界事情と海外の航空会社の事情を比較している。ここでは、森が比較した1、ジェンダー平等2、仕事の仕方3、休日・休暇について引用する。なお、引用文中の外航とは日本国内航空以外の、外資系航空会社、そして内航とは、JAL、ANAを筆頭とする日本国内の航空会社を指す。

1、ジェンダー平等

外航では男性比率が約3割。内航は1%未満。重量物の取り扱いや旅客のパワハラへの対応力に大きな差が生じる。*筆者は、旅客にも成り得る読者の皆様へ、ご自身の手荷物はご自身で収納、またCAと心地よい時間を共有できる利用の仕方とは?と、是非一考して頂ければと、切に願っています。

2、仕事の仕方

外航では勤務割の決定権がCAにあり、その上セニョリティー制度(定年がない会社も少なくない)で加齢による体力を勘案しながらの勤務割や担当クラスの選択が可能となっています。また勤務割を交換できるスワップ制度を有する会社も多い(一部内航も)。また外航では機内での休憩時間が法律や社内規定で明示されていますが、内航国内線では休憩確保はなく、国際線でも専ら先任CAの判断に委ねられています。

3、休日・休暇

外航ではアムステルダム成田間の常務後は5日間の休日、ロンドン線・ジュネーブ線でも4日間。一方内航ではいずれの路線でも2日間の休日。また外航ではいずれの路線でも2日間の休日。また外航では病気欠勤する者がいる前提の人員計画が作成されています。内航では病気欠勤は私傷病で、収入面や評価を勘案して有給休暇振替することも当然視されています。JALでは、2010年の破綻を契機に、人員整理の強行だけでなく、あらゆる職場で賃金を含めた労働条件の引き下げが行われましたが、現在、CA以外の職種の労働条件は、破綻前とほぼ同程度に改善されています。なお現在のCAの年間休日はJALが123日間、ANAが126日間で、週休二日制の日勤者、年末年始とお盆休み3日間を含ん(2019年は124日間)だ休日数と同じか少ないくらいなのです。(p.17)

1のジェンダー平等において森が書いているCAと心地よい時間を共有できる利用の仕方を考えて頂きたいという考え方には正直疑問を感じる。なぜなら、客室乗務員はあくまでも機内では仕事であるため、お客様がCAの「ために」、CAとお客様の「ために」行動の仕方を考える事はお客様の立場ですする必要はない事だと私は考える。もちろん、お客様が「客は神様」のように機内にて、またはCAに対して横暴にふるまう事はあってはならない。しかし、本来サービスを施すほうの客室乗務員が自らのためにお客様に行動を見直すように求める事は少し違うように思える。一方で、2、仕事の仕方と3、休日・休暇での比較は国内の航空会社において客室乗務員がより健康的に働く事が可能となるような解決策を考える上で非常に役に立ちそうだ。現在のCAの年間休日数が、週休二日制の日勤者、年末年始とお盆休み3日間を含んだ日数と同じくらいかもしくは少ない程であるという事には大変驚いた。客室乗務員は、多くの人が連休や祝日で休暇をとる時期に公共交通機関の繁盛期であるためより働く必要がある。

3-2 客室乗務員の精神的疲労

次に2つ目の客室乗務員を取り巻く精神的疲労の原因について述べる。「感情労働」とい

う言葉を聞いたことがあるだろうか。感情労働という言葉を広めるきっかけになったのはホックシールド（2000）の感情労働論が大きい要因だとされている。ホックシールドは感情労働論を用いてその過酷さを述べたが、その代表的な例として客室乗務員を多く用いている。ホックシールドは実際にデルタ航空の訓練センターにて、客室乗務員が初期教育として受けるパイロットが行うセミナーに参加した。以下は、『管理される心』（ホックシールド、2000）からの引用である。

パイロットは、笑顔は〈客室乗務員の〉財産だと言った。だが実際のところは、私の隣に座っているような新人たちの私的な笑顔は、訓練を経るにつれて、会社の特性—その飛行機は墜落しないという自信、離着陸は時刻表通りだという確約、歓迎と次回への利用への招待の気持ち—を反映するように磨かれていく。訓練教官たちは、自分たちの仕事は、訓練生の笑顔に、彼らがしばしば言うところの「プロフェッショナル」なある一つの態度、ものの見方、感情のリズムを与えることだと考えている。このプロフェッショナルな笑顔が無意識のうちに浸透していくと、労働日が終わってもそれを取り去ることが難しくなる場合がある。今年からワールド・エアウェイズで働き始めたばかりのある乗務員は次のように記している。「長い仕事を終えて疲れきっているときでも、くつろげないことがあります。大笑いをしたり、よくしゃべったり、友達に電話したりしてしまいます。仕事中は自分をハイな気持ちにさせているから、その何となく不自然な高ぶった気持ちからなかなか抜け出せないようです。仕事でうまくやれるようになるにつれて、もっとうまく冷められるようになりたいのですが」。(p.4)

ホックシールドはここで、客室乗務員が航空会社の顔として働く上で、自身の行動が会社の評判へと直結するため、感情を大きくコントロールして働いている事がプライベートでも気持ちをリラックスさせる事が出来ないという事に問題意識をもっている。実際に私はまだ社会人生活を始めていないが、就職活動時客室乗務員に求められる清潔さを表現するため、普段より目鼻立ちを濃くみせるメイクに前髪が顔にかかったりしないようきつく髪をまとめていた。実際に仕事を任されていたわけでもないのに、そのような身なりをして町を歩くだけでずいぶん気疲れをした。実際に機内で会う客室乗務員はその身なりでお客様の視線を気にしながら空の上で仕事をしているのだから、実際の彼女たちの疲労は計り知れないものだと容易に想像がつく。

また、ホックシールドは十九世紀の工場で働く少年と二十世紀の客室乗務員を比較して、一見華やかに見える客室乗務員の隠れた過酷労働を述べている。極端にあるように見える二つの職業であるが、両者の間の違いを綿密に検討していくと、予想もつかなかったある共通の地平へとたどり着くという。表面的には、二者の労働に対する生産物の結果と満足度を確認する方法は異なる。壁紙工場の労働者は、できあがった壁紙の数を数える事によって、仕事の成果を確認する。一方で、客室乗務員はサービスを提供し、乗客が満足した

と思われるときに彼女、彼らの仕事がうまくいったといえる。しかし、客室乗務員には肉体労働に加えて彼の定義している「感情労働」が追加される。客室乗務員の場合は「サービスを提供するときの感情の様式それ自体がサービスの一部である」。「自分の仕事を愛している」ように見えることが仕事の一部になるのである。」と彼は述べている。

さらに、ホックシールド（2000）は身体労働と感情労働の間には相違点もあるが、実は仕事をこなすために労働者が負担しなければならないコストは類似している。（以上 p.6-8）労働者がその労働を行うために使用する自分のなかのある側面一負担または精神の周辺部一から引き離されたり疎外されたりする可能性がある、ということだ。工場労働に携わる少年の腕は、壁紙を作る機械の部品のように働いていた。雇い主は少年の腕を一つの道具とみなし、その速さや動き方を制御する権利を主張した。この状況では、少年の腕と精神との間にはどのような関係があるのだろうか。彼の腕は、ほんとうに彼自身の腕だと言いうのだろうか？という疑問を投げかけた。このテーマを客室乗務員に置き換えると、客室乗務員は肉体労働に加えて「感情労働」が必要とされる。感情労働をする際、それに利用する「感情」は本人の意思（精神）とは分離された気持ちであるというものだ。

ここでは、CAが「感情労働」の代表例として取り扱われてきたが、身の回りの多くのサービス業とよばれる職業は感情労働が関わっている場合が多くある。

4. 日本の航空会社で起きた労災問題

ここまで客室乗務員を取り巻く労働環境と業務内容に潜在している危険性や疲労要因を

1、身体的疲労2、精神的疲労の2つに分けて紹介してきた。客室乗務職は、さまざまな疲労要因に囲まれていたり危険性を伴っているため、多種多様な病気にかかったり怪我をする事がある。しかし、それらが直接企業内に原因があるのかという事が明確ではない事があるため、労災が適用されるかされないかが論争となることが多くある。そのため、客室乗務員が自らの就業先を相手にとって裁判を起し、実際に勝訴した実例が数多く存在す。以下からは、今まで述べてきた問題が実際にどのような事故や病気に繋がっているのか、また客室乗務員が企業を相手にどのように裁判を起し、勝訴を手に入れたのか、またそこにあった客室乗務員を取り巻く機内での危険性について鮫島(2019)を引用しながら考え、述べていく。

以下は鮫島の「航空機客室乗務員の二つの労災裁判の勝利と勝因、目指したもの」から引用した実際に裁判までに発展した客室乗務員の労災例である。

「過労性腰痛症・過労性頸肩腕障害」の労災認定を勝ち取った塚本裁判

塚本裁判は、入社6年目の1980年11月からの約半年間、腰痛で休業した塚本洋子さんの「過労性腰痛症・過労性頸肩腕障害」の労災認定を求める裁判だった。1970年代後半、高度成長の追い風を受けて航空機の大型化や路線の拡大が急激に進む中、航空機客

室乗務員の健康破壊は進み、腰痛者数は増え続ける一方だった。日本航空客室乗務員組合（当時以下「組合」とする）が行った初めての職場健康実態調査で、2600人の客室乗務員の三人に一人が腰痛経験者で、しかもその75%が私傷病とされているという実態が、明らかになった。そして「まだ歩けるから」と無理に勤務を続けているうちに非常に軽微なきっかけで発症しているのがその大きな特徴だった。「軽微なきっかけそのものが腰痛の原因ではなく、軽微なきっかけで発症させてしまう職場の過酷な労働実態・劣悪な労働環境こそが、真の原因」と、CAたちは感じていた。軽微なきっかけのない2人のCAが1977年10月に非災害性腰痛の労災申請を行い、約2年後の1979年7月に業務上認定を勝ち取り、その後、25名が同じように非災害性腰痛および頸肩腕障害の労災申請を行った。その中の一人が塚本さんだった。(p.26)

客室乗務員の労働環境に起因して多くのCAが腰痛を発症しているにもかかわらず、この裁判以前はそれに対して労災認定が受けられなかった。しかし、この塚本裁判をきっかけに日本航空は多くの腰痛を訴える客室乗務員に労災認定をする事となった。以下から鮫島(2019)を引用する。

組合は腰痛対策部を中心に、労災申請に伴う意見書や資料の作成・援助を行うと同時に、精力的な労基署交渉をはじめとする諸取り組みを通じて、会社には労働隠しをさせない一方、「簡単に罹患しすぎる」として判断保留されていた93名全員の業務上認定を実現させた。(p.27)

これは、労働環境のために身体的なダメージを得たCAにとっては有益、もしくはそれを起因させている企業にとって当然の対応であるのではないかと私は感じられた。労働者本人にとって有益に感じられる事象ではあるものの、企業にとっては労災認定が多く発生する事によっていくつかの問題が起きる事も事実である。鮫島によると、災害性腰痛は申請すればそのほとんどが認定され、ついに労働行政は日本航空を腰痛多発企業として「特別労災指導事業場」に指定せざるをえなくなった。という。

日本労働安全衛生コンサルタント会、神奈川支部の公式ホームページによると、

この制度は、厚生労働省（現在）が安全を1950年に、衛生は2年遅れて発足させています。（中略）この制度の趣旨は、労働安全衛生法第78条及び第79条に定める安全衛生計画の確実な実行を求め、推測にはなりますが、同業種の中でも労働災害発生件数が高い、重大災害の発生している事業場、職場関係に問題があった健康障害が懸念される事業場を個別に指定し、安全衛生管理体制、機械設備、職場環境、安全衛生教育等についての改善事項を安全衛生改善計画書として作成させ、継続的な指導を通じて、課題を解決することにより安全衛生管理体制の向上を期し事を狙っております。

企業の社員一人一人に対する労災等を利用したケアは、社員の土岐を守るためにも必要不可欠ではあるものの、JAL や ANA といった大企業においては社員がその企業での労働によって何らかの不便さを得ているという事を公衆に発表する事が伴うため、企業のイメージに少なくとも影響するというデメリットがあると言えると思います。

5. ANA 内定者インタビュー

5-1 インタビューの概要

以上まで、客室乗務員の労働環境を取り巻くいくつかの問題点について実例を用いながら分析と考えを述べてきた。しかし、ここまで述べてきたのは一個人としての意見であるため、来年度から全日本空輸に客室常務職として入社する友人の一人にも意見を聞くことにした。友人が客室乗務員を目指す際に、不安だった事等を聞きだしてそれがよりよい CA の労働環境を考える手がかりになるのではないかと考えた。

友人 M の紹介：関西にある女子大学 4 回生。昨年の 9 月から今年の 6 月まで通っていたエアラインスクールのクラスメイトで、就職活動時の不安であったりつらかった時期を共に乗り越え、お互い第一志望であった航空会社の CA の内定をいただいた。彼女は来年度客室乗務員として全日本空輸（ANA）に入社する。

インタビュー実施日：11 月 24 日

インタビュー方式：お互いのスケジュールの関係により電話にて行った。雑談等を交えながら、1 時間 14 分にわたって通話。

5-2 インタビューの結果

5-2-1 導入と CA を目指した動機

Y：久しぶり～今日は時間とってくれてありがとう～

M：ひさしぶり！ こちらこそ自分で役に立つかわからんけどありがと～よろしく～
(雑談・・・)

Y：じゃあ、早速やけど、卒論のインタビューお願いします、自分が、今回「客室乗務員が健康を保ちながら長く働き続けるためにはどうしたらいいか」って事について卒論書いてるんやんか。

M：うんうん

Y：で、自分の考えでは 2 つの要因から CA って働きづらい労働環境とか労働条件であるのかなあって思ってて、その 2 つの理由が、まず 1 つに身体的な負担の大きさと、2 つ目が精神的なしんどさが多いってところ。

M：あ～～たしかに、朝起きてからフライト挟んで 24 時間起きてる状態とかざらにある

やろうしなあ。お客さんから常に見られてるのもあるし。

Y: そうそう、M は就活始める前とか CA になりたいって思ってた時期にその 2 つが原因で心配とかならへんかった？ほんまに CA やっていけるんかなとかさ。そもそもなんで CA になりたかったん？

M: ん～自分は体力面とか精神面での心配は全くしやんかったなあ。弥生と一緒に昔からずっと CA 目指してたから、就活の時も落ちるか、受かるかっていう心配しかしてなかった。仕事始まってからはやればどうにかなるやろって思ってたし。逆に弥生はそれで心配とかあったん？

Y: すごいな、そんだけ思い強いって。自分はそれで悩んだり、あと給料面で割に合わんってゆわれたりしてるのとかもあって、一時期 CA やめようって思ってた。けど結局やってみやな気すまん性格やから、受けてあかんかったら違うもの考えようって思ってたなあ。

M: そやなあ～他の職業っていう選択肢、じぶんたちなかったもんなあ(笑)

友人 M と私はとても似た価値観を持っていたため、就職活動時期は全く同じ業界、企業のみ受験していた。(偶然的に)

Y: じゃあさ、なんで ANA がずっと第一志望やったん？福利厚生とか JAL と比べて決めたたりした？

M: いや、初めて乗った飛行機が ANA やったっていうのと、家族が ANA 派なんよな、だからなんとなくずっと自分も ANA 派やった。福利厚生見出したのとか正直、書類通過した時にちょっと見たくらいで、無条件に ANA の CA になりたかったな。

Y: おおお～～それはすごいわ。そこまで本気やったんやな

M: なんかも、ANA のほうがよく体育会系って言われるやん？上下関係しっかりしてるとかさ。それが昔から自分運動もしてたから雰囲気的に合ってるかなとは思った。仕事は仕事ってメリハリつけれるというか。

Y: なるほどな、先輩にやさしくしてほしいとか思う自分とは正反対やな(笑)

客室乗務員を長い間目指し実際にその職に就く人の中にも、自身のように一度は違う職種の事を考えてみるも CA という職業に就く人、または一切 CA 以外の職種を検討せずその職業に就く人、それぞれの経緯があるのだと感じた。友人 M のようにその職種のマイナス面を一切考慮せずその仕事に就いた場合、実際の就職後に現実と理想のギャップにつらさを感じる人がいるのではないだろうかと感じた。

5-2-2 CA の身体的疲労について

Y: じゃあさ、最初に話した身体的な負担が大きいって問題あるって言ったやん？それに対して何か意見とかある？

M: なんか、ほんまかはわからへんねんけど、乳がんになりやすいつて聞いたことある。

ずっと飛行機に乗ってたら。

Y：え、それほんまやったらやばいやん。まあけど空飛ぶって普通の行動ではないもんな。

M：うん、それだけ体には負荷かかっているもんな。体力面でしんどそうとか正直就職活動終わって、実際にいろいろ調べてみるようになってやっと思えるようになったんやけど、もうここまできたら実際にしてみるしかなくなったな(笑)

でも最近 JAL では棒使ってる人とかおらん？（最近、JAL の機内では身長が比較的低い CA が機内上の手荷物収納棚が閉まっている事を確認するために、棒のようなものを使って体への負担を軽減している事を見かける）

Y：あ、おるなあ、あれもそう思えば身体的な負担を減らしてるってことか。じゃあ M は働き始めて 30 代とかになってさ、体が痛み始めたらどうする？無理してでも仕事続ける？

M：今の気持ちではなにがあっても続けたいなあ。けど、う～ん。子供がもしいてて、その子供に将来介護させてしまうような程悪化する可能性があるなら、子供に迷惑かけたりしたくないからきっぱりやめるかな、その時には。最近お母さんが体壊してさ、健康がないと何もできへんなって身に染みて思ったんよ。

Y：そうなんや。

乳がんのリスクが高まるという情報を聞き、改めて CA という職種が特殊な職種であることに気付かされた。実際に乳がんのリスクが職業を通して高まるのかという事については今後の課題とする。しかし、先日も内定先から体力に自信があっても現在から体力の向上に努めておくようリマインドの連絡がきたため、体力が他の職業よりも必要となるのは事実でありそうだ。

5-2-3 感情労働について

Y：「感情労働」って聞いたことある？客室乗務員がその代表例らしい。

M：初めて聞いた。誰の本にあるって？？？（興味を示す）

（「感情労働」について、当論文を用いて説明）

M：なるほどなあ～～。ずっとオソの状態であって、精神的に追い詰められるってことか。確かに精神面でも疲れる事多そうよなあ。あ、そうそう、この前 ANA に乗ったときに思ったんやけどさ、最近不愛想な CA さん増えてるなって思ったんよ。なんか塩対応っていうか。

Y：え～、なんかそれはイメージする CA さんと違うよなあ。

M：そうそう、けどそう思ったのは自分だけじゃなくてさ、自分のお母さんも最近愛想悪い人増えてるなって言ってて、だから今話きいて日本でもちょっと客室乗務員の在り方も変わってきたんかなあって思った。

Y：それは面白いなあ、自分では考えたことも思ったこともなかったわ。

M：うん～もしかししたら、相手の CA さんがほんまに偶然愛想悪いだけか、お客さん選んで対応変えてるとかもありえるけどなあ。

Y：たしかに。ファーストクラスも担当する CA さんやったら、エコノミーのお客さん見下すとか無きにしも非ずよな。したらあかんことやけど。

M：それぞれ、自分らまだ学生やしな。

不愛想と捉えることのできる必要最低限のサービスが受け入れられ始めているのではという友人の仮説は非常に興味深いものであった。もし本当にそのサービス自体が許容され始めるならば、客室乗務員の感情労働による負担は少し軽減されるかもしれない。しかしその一方で、日本を代表する航空会社ともいえるフルコストキャリアの CA としてお客様から求められる高いサービス基準に応える事も必要である。この矛盾点が、客室乗務員の感情労働が解決する事が難しい一つの要因であると私は考えている。

5-2-4 将来のキャリアプラン

Y：ANA の CA としてキャリアプランとかある？例えば自分なら、結婚とか子育てとか、ライフスタイルに合わせて地上職も経験したりしながらさ臨機応変に長く健康に働きたいって思ってるんやけど。

M：そやなあ。自分はずっと最前線で CA として働きたいかも。あ、けど就活してるときに人事のお仕事楽しそうやなあった 2 人で言ってたやん。だからがつつり人事ではなくても、人事とか就活生をサポートするようなお手伝いはたまにしたいかも。

Y：あ～、あの時人事の人めっちゃ輝いて見えたよな(笑)じゃあ、結婚しても子供産んでも、M はずっと CA？

M：まあさすがに子供産んだりしたら育休とって、あとは子供いたらフライトを何割にするとか制度あるからさ、それは利用するかなあ。旦那さんの稼ぎがちゃんとあれば。

Y：まあ経済状況にもよるよな、それは。

彼女と私の共通点として、就職活動時に実際に採用活動の手助けをしてくださる採用グループの方に憧れを持ち、入社後なんらかの形で同じように学生の就職活動に携わりたいという気持ちがあった。

5-2-5 CA の転職

Y：あ、そうそう。あと一つゼミの中でたしかにって思う意見一つあったんやけどさ、客室乗務員ってもしやめたとしても転職しづらいついてきて、それも一つの問題点って言えるんかなあって思ってさ

M：あ～たしかに。エアラインスクールの先生が言ってたんやけど、CA やめた人はそう

いうエアラインスクールの先生になってCA目指してる学生の手伝いしたりとか、あとは企業のマナー講師とかそういうくらいしかないって言ってたなあ。

Y：やっぱり一般企業で会社員として働くスキルってCAしてたからって身につきはしやんよな～。

M：うん、言えてる。

以上、友人Mへのインタビューを通して様々な新しい視点を発見することができた。彼女は就活を始める前に客室乗務員の労働環境の実態について考える事が一度もなく、一つの目標に向かってひたすら突き進んだ事について大変驚いたが、客室乗務員を目指す就活生の多くは彼女と同じような意志の強さを持っているだろうと感じた。彼女と話していた中で最も驚いたのが、近頃客室乗務員の在り方も変わってきているのではないだろうかという意見だった。感情労働の論に代表されるように、客室乗務員は航空会社のイメージを代表してお客様とコミュニケーションを行うため、「お客様は神様」という思考に近い行動をすと思われがちである。しかし、友人Mは実際に近頃不愛想とまで感じ取れるCAの対応を受けて、よりお客様と近い立場での接客が許容されてきたのではないかという意見を持っていた。私は、まだそのようなCAの接客を経験した事はないため多くの飛行機を利用するお客様はいまだに多くの要求を客室乗務員に求めているであろうと考えている。客室乗務員に求められているサービスに昔と現在比べて変化はあるのだろうかという問題点は、今後の課題にしたい。また、後半で述べた客室乗務員は退職後他業界への転職がしづらいという点においてだが、それは事実であると考えている。しかし人によっては仕事の合間に資格を取得し、公認会計士として新しいキャリアをつむ女性等もいるため一概にはいえない。よってこの問題に関しては、個人の努力やスキル次第であるといえよう。

6. CAの労働環境の改善策

日本の航空会社のCAがより健康的に長く働きつづけるために、どのような改善策が考えられるか。一つの案として、機内での客室乗務員の休憩時間を乗務時間に応じて義務づけることが考えられる。長時間のフライトを多くもつ大手国内航空会社2社においては、機内の中にCAやパイロットが休養をとるための専用の休憩室が用意されている。(図2)

図2：日本航空が所持するボーイング787に設置された休憩室(チャイナネット,2019)



しかし上で森(2019)を引用した際に述べたが、外資系では機内での休憩を必須としている一方、日本国内の航空会社ではこの休憩室の利用をリードキャビンアテンダントの判断のみにまかせている。客室乗務員の休憩の有無さえもリードキャビンアテンダントの判断に左右されるのは問題点であると考え。各リードキャビンアテンダントの健康状態などのコンディションや方向性によってその機内に乗務するすべてのCAの休憩時間や休憩の有無に大きく関係してくるからだ。普遍性と公平性をもつ社内基準や航空法により設定する事が望ましいと考える。

これだけにとどまらず日本の航空会社にとって、外資系の航空会社から客室乗務員に対する制度において学ぶ点が多いと考えている。CAが体調がすぐれない等個人の理由でフライトが出来なくなった場合、気軽に代替のCAとシフトチェンジできる点も非常に魅力的な制度といえる。日本の航空会社においてはそのような場合有給制度を利用するのが暗黙の了解であるらしい。

ヨーロッパ2泊4日のフライトを終えた際休日が3日あることが決められていたが、それも休日2日へと改悪された制度等を、また3日の休日に増やすなど、以前の制度を復活させる事も効果的であろう。しかしその際に必要となる人員をどのように増加させるかというところが企業の課題として残る。客室乗務員一人一人が意識的に日常生活の中で体力を増やす、もしくは維持するためにジムに通う等、個人の自己管理も必然的に求められると言える。

一方で、感情労働によって引き起こされる客室乗務員の精神的疲労は、まだまだ課題が残るものだと考えている。なぜなら、お客さまがCAに求めるサービスの質は現在と長きにわたるこの先において変化がないものだと考える。特にJALやANAといったフルサービスキャリアにおいては、お客さまはそのサービスに見合った価値を支払っているため、その分お客様の要求が高くなるのも当然だ。しかし、CAが機内の中でお客様の視線を気にせず体と心を休められるような空間を増やす等、小休憩をこまめにとることによって少しずつ負担の改善は見込めるかもしれない。

7. 最後に

今回、この卒業論文を通して自身が長くキャリアを続けていくためにどのように個人で対策をとればいいのかという事を深く考察することが出来た。実際に客室乗務員として働くにあたって、日ごろからの自己管理が大切であるという事を改めて感じた。社会人として卒業論文を書くにあたって得た知識を大切に、多くの経験を積みながら長く社会に貢献していきたい。

引用文献

日本航空株式会社(2019). 参照先: https://www.jal.com/ja/csr/iso/human_resources.html

東洋経済(2019). 参照先: <https://toyokeizai.net/articles/-/229405?page=3>

チャイナネット (2019). 参照先 : http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2013-09/13/content_30018091_5.htm

全日本空輸株式会社 (2019). 参照先 : <https://www.anahd.co.jp/group/recruit/ana-recruit/newgrads/ca/mission.html>

A.R.ホックシールド. (2000). 管理される心 感情が商品になるとき. 京都: 世界思想社.

社会医学研究センター. (2019). 労働と医学. 東京都: 公益財団法人社会医学研究センター.

大川朗子. (2010). 働くすべての人のための労働法. 東京都: カナリア書房.

目次

はじめに

第1章 日本における歯科医療の現状

- 1.1 歯科医療をとりまく現状
- 1.2 歯科診療所の現状
- 1.3 歯科医師過剰問題と歯科衛生士不足
- 1.4 日本人の口腔保健状況と口腔保健意識

第2章 問題設定と豊明市について

- 2.1 問題設定
- 2.2 豊明市の人口ビジョン
- 2.3 豊明市の福祉医療制度

第3章 フィールドワークを通して見た歯科業界

- 3.1 フィールドワーク
- 3.2 一日の流れから見る X 歯科医院の特長
- 3.3 小括

第4章 開院に向けての検討事項

- 4.1 Y 歯科医院のマネジメント
- 4.2 スタッフ構成
- 4.3 診療および勤務時間
- 4.4 休診日
- 4.5 診療科目
- 4.6 建築デザイン

おわりに

引用文献

はじめに

住宅地や街中以外にも、オフィスビルや病院の中、サービスエリアでも見かけるコンビニエンスストア。道路を挟んで複数のコンビニエンスストアを見かけることもしばしばある。しかし、歯科医院はそのコンビニエンスストアよりもさらに多く、歯科医院の過剰による患者の争奪戦が起きている。この一方で、歯科診療医療費は長年にわたり伸び悩みが続いている上に、少子高齢化や小児のう蝕（虫歯）罹患率は減少の一途をたどっており、市場規模は縮小している。

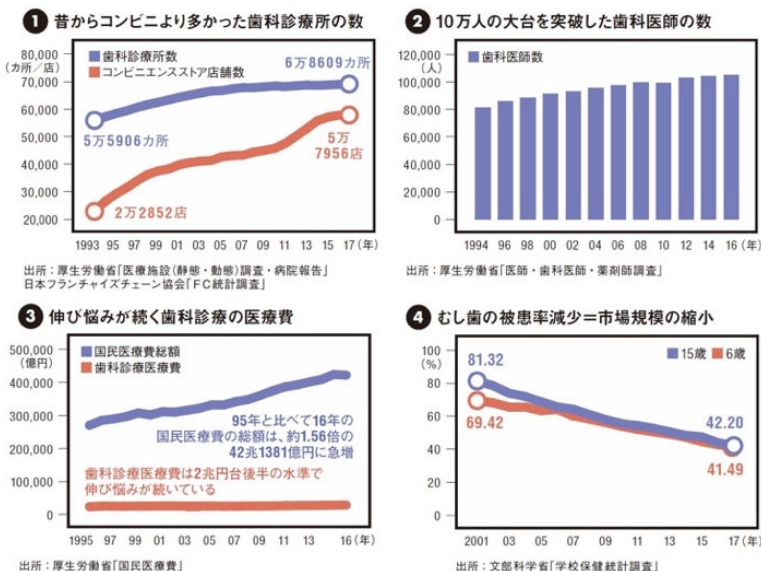
私は、大学卒業後は歯科医療に携わる仕事に就きたいと考えている。そこで、経営面から歯科業界を研究し、将来に活かせる知識を獲得していきたい。

第1章 日本における歯科医療の現状

1.1 歯科医療をとりまく現状

厚生労働省の2017年医療施設調査によると、全国の歯科医院数は68,609軒、歯科医師数は104,533人で、前年と比べると561人、0.5%増加している。一方で歯科診療医療費は約2兆5千億円のまま横ばいで推移している。これは、う蝕罹患率の漸次減少に伴う歯科受診者数の減少、治療処置の軽症化によるものだと考えられる。(図1) これらに加えて、歯科医師の勤務先は診療所の開設者が約6割程度を占めており、歯科医院の過当競争が起きている。(図2)

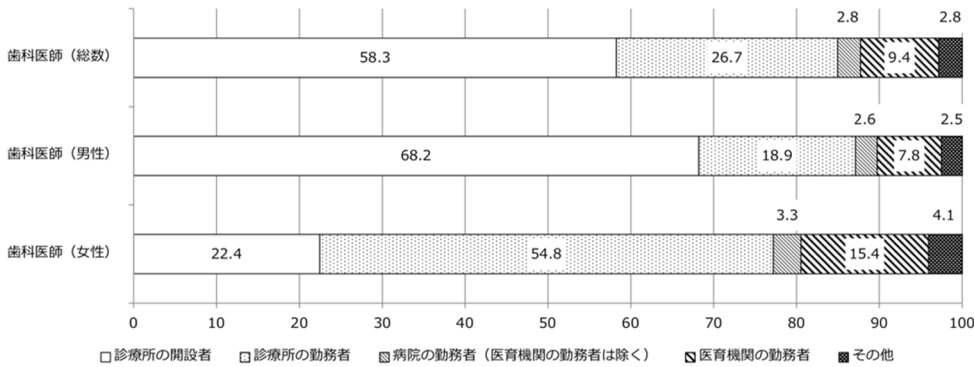
図1 歯科医療の現状



伊藤博之「コンビニより多い”歯科医院”の厳しい現状」PRESIDENT Online, 2019

<https://president.jp/articles/-/28072>

図2 勤務先別の歯科医師の割合



厚生労働省 医師、歯科医師、薬剤師調査, 2015

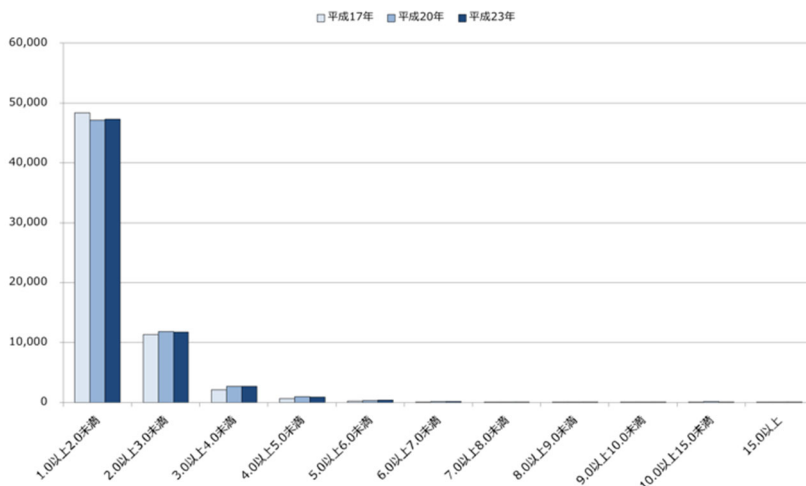
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000075061.pdf#search=%27勤務先別の歯科医師の割合%27>

1.2 歯科診療所の現状

約8割の歯科診療所が常勤換算歯科医師数は1名であり、歯科診療所に従事する歯科医師の平均年齢は上昇傾向にあり、最新の調査結果では52.9歳となっている。(図3、図4)

歯科診療所を受診する推計患者の年次推移(年齢階級別割合)を見てみると、高齢化の進展に伴い、高齢者の歯科受診患者は増加しており、歯科診療所の受診患者の3人に1人以上が65歳以上となっている。(図5) 歯科医療の現場でも少子高齢化による影響が顕著に見られることがわかる。

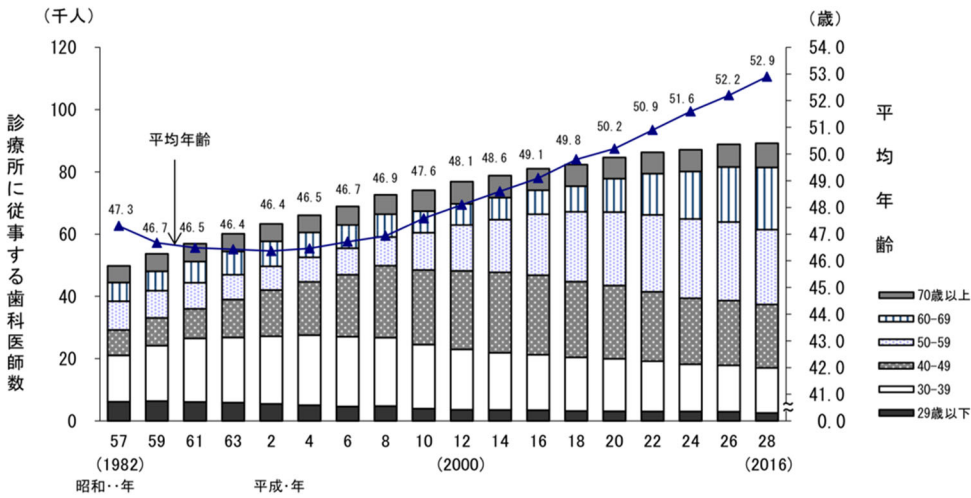
図3 常勤換算歯科医師数別の歯科診療所の数の推移



厚生労働省 医療施設調査, 2015

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000087739.pdf>

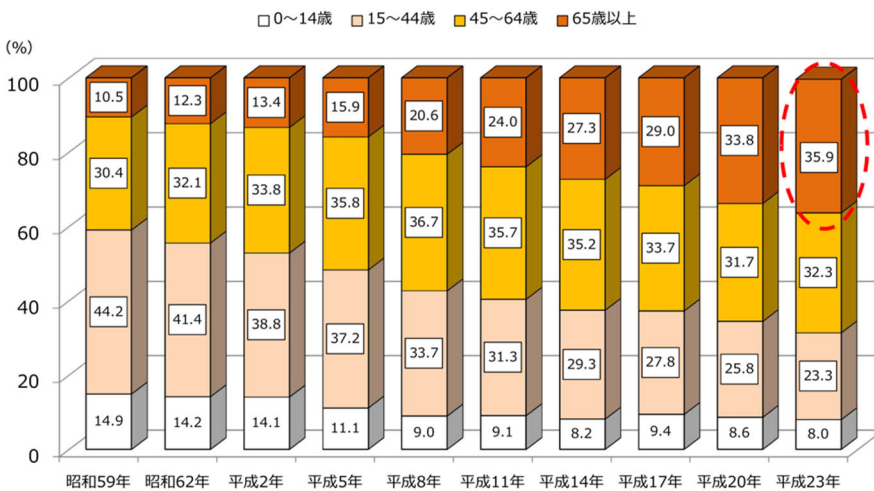
図4 年齢階級別に見た診療所に従事する歯科医師及び平均年齢の年次推移



厚生労働省 医師、歯科医師、薬剤師調査，2017

https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/16/dl/kekka_2.pdf

図5 歯科診療所を受診する推計患者の年次推移（年齢階級別割合）



厚生労働省 医師、歯科医師、薬剤師調査，2015

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000075061.pdf#search=%27勤務先別の歯科医師の割合%27>

1.3 歯科医師過剰問題と歯科衛生士不足

今日、歯科医師過剰問題が発生している。歯科医師過剰問題とは、1960年代、国民の生活が豊かになり、う蝕が文明病の一つとしてあげられるようになった。しかし、1965年ごろの歯科医師数は、人口10万人あたり35人程度しかおらず、需要に追いつかなくなっていた。これ

を根拠に1969年に厚生労働省が「1985年までに人口10万人に対する歯科医師数を50人にする」という目標を掲げ、全国的な歯学部を増設と定員増加を行なった。なお歯科医師は増え続け、現在は10万人を突破して、人口10万人あたりでは82.4人にまでなっている。加えて、歯磨剤へのフッ素の配合や歯みがき習慣の定着により、う蝕が激減することで歯科の患者数は減少傾向にあり、需給のミスマッチが顕在化した。

医科と歯科を比較してみると、医師319,480人（人口10万対医師数は215.7人）に対して歯科医師は104,533人（人口10万対歯科医師数は82.4人）おり、数多の疾患がある中、4分の1が歯科専門の医師になるのだ。そこで、何を根拠に歯科医師10万対50人としているかという点、保険診療で高収入が得られる条件がこの比率となると厚生労働省が発表している。つまり、現在の歯科医師数では、歯科医師は高収入が得られないという事になる。

一方で歯科衛生士は歯科医師数に対して不足している現状にある。看護師（看護師、准看護師）は1,558,340人であり、1人の医師に対して約4,87人の看護師がいる一方で、歯科衛生士は132,635人であり、1人の歯科医師に対して約1,27人の歯科衛生士しかいない。歯科衛生士は相対的歯科医行為（予防処置など）を行うことができ、円滑な歯科診療を行うには歯科衛生士の確保が重要になる。しかし、歯科衛生士の確保ができないという、歯科衛生士の不足が問題となっている。

この二つの問題による弊害を考えると、患者数減少のために過剰診療や、早期治療等の保険点数が低い処置への関心が薄くなること、歯科衛生士が確保できないことにより予防処置が提供できないことなどが挙げられる。また、患者数確保のために処置の粗製濫造も懸念される。

1.4 日本人の口腔保健状況と口腔保健意識

3歳児の1人平均う蝕数は、1989年では2.90本あったが、2016年には0.54本へ減少。う蝕罹患率も1989年の55.8%から、2016年には15.8%まで年々減少してきている。(図6) これは同時に日本人の口腔保健に対する意識の向上を表しているのではないだろうか。ここで、近年積極的に口腔保健対策に取り組むようになった日本と以前から口腔保健対策を促進してきたアメリカ合衆国国民の口腔保健に対する保健行動や意識の比較を歯学とは関係のない学部にいる大学生を対象に調査をした論文をから引用する。(中條他, 2014, p. 62-63)

セルフケアに対する口腔保健行動と意識

1) 1日の歯磨き回数

「1日2回磨く」と回答した者が両者ともに最も多かった。「1日3回磨く」と回答した者はアメリカが23.3%と多く、「時々磨く」と回答した者は日本が3.6%で多かった。歯磨きの回数は、日本とアメリカでは有意差が認められた。しかし、歯磨き回数のロジスティック回帰分析の結果、1日3回以上ならびに1日2回以上についての日本とアメリカで調整オッズ比に有意差は認められなかった。

2) デンタルフロスの使用頻度

「1日2回以上」「1日1回」と回答した者は日本に対し、アメリカが多く46.5%の者が毎日デンタルフロスを使用していた。また、「使用したことがない」と回答した者はアメリカよりも日本が多く49.4%であった。デンタルフロスの使用頻度は日本とアメリカでは有意差が認められた。

プロフェッショナルケアに対する口腔保健行動と意識

1) 専門家による口腔清掃

日本56.6%、アメリカ78.6%で、両者ともに半数以上の者が専門家による口腔清掃を受けたことがあると回答した。専門家による口腔清掃の経験がある者の中で、口腔清掃を「3ヶ月ごとに受診している」と回答した者は、日本の学生12.8%に対し、アメリカの学生5.9%であったが、「1年に1回以上」定期的に口腔清掃を受けている者は、日本の学生34.0%に対し、アメリカの学生73.5%であり、日本とアメリカの定期的な口腔清掃の頻度には有意差が認められた。

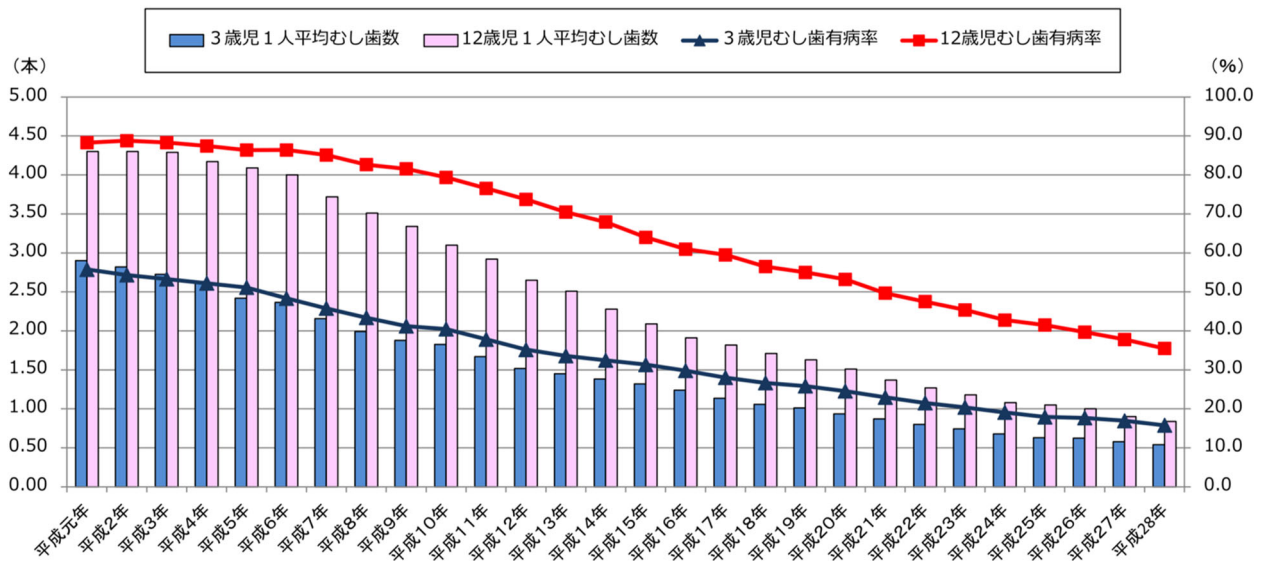
(2) は直接的な関係がなかったため中略)

3) 1年間にう蝕予防処置にかけることのできる金額

「分からない」が両者ともに多かった(日本48.8%、アメリカ47.6%)。日本は42.7%の者が「8,000円未満」と回答しているのに対し、アメリカは23.8%であり、「25,000円以上」と回答した者は、日本の2.4%に対し、アメリカの19.0%で、う蝕予防処置にかけることのできる金額は両者間に有意差が認められた。

中條さやか, 犬飼順子, 高阪利美, 宇野智子, 中垣晴男, 向井正視, 2014
「日本とアメリカの大学生の口腔保健行動と意識に関する事例研究」 日衛学誌 JJSDH Vol. 8 No.
2 (p. 62-63)

図6 3歳児、12歳児の一人平均う歯数、う蝕罹患率の年次推移



3歳児:平成25年度まで:母子保健課・歯科保健課調べ、平成26年度以降:地域保健・健康増進事業報告、12歳児:学校保健統計調査(文部科学省)

<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000358782.pdf>

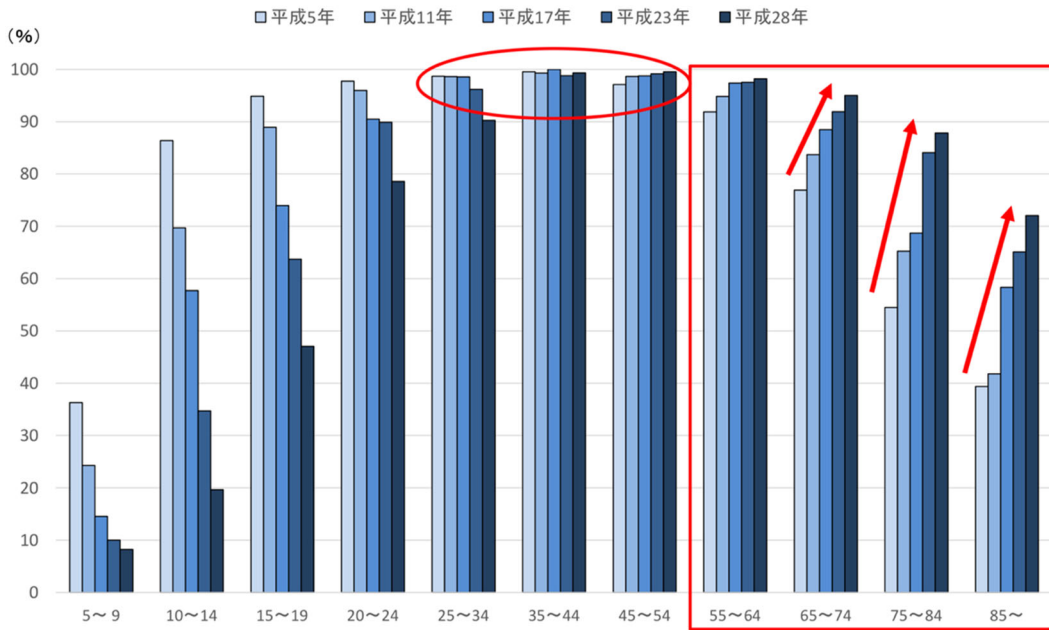
以上の中條ら(2014)の研究結果によれば、アメリカに比べて日本の口腔保健意識は低いことが伺えた。しかし、近年は徐々に意識が高まっていることがう蝕罹患率の低下から予想される。また、次に述べるように高齢者の平均残存歯数の推移もその成果だと言えるだろう。

成人において咀嚼能力に大きな支障を及ぼさない喪失歯数は10本以下であるという研究結果に基づき、厚生労働省により「80歳になっても自分の歯を20本以上保とう」という、8020運動が提唱された。その後、国の予算に8020運動推進対策費(1992年)や8020運動推進支援事業(1993年)が組み込まれた。さらに、2000年からは8020運動推進特別事業が実施されている。8020の達成率は、運動開始当初は7%程度(平均残存歯数4~5本)であったが、厚生労働省の調査(2005年歯科疾患実態調査)では、80歳~84歳の8020達成率は21.1%で、85歳以上だと8.3%にまで伸びた。また、厚生労働省の「健康日本21」では中間目標として8020達成率20%を掲げたが、2007年に出された中間報告では、それを上回る25%を達成した。

その後、2017年6月に厚生労働省が発表した歯科疾患実態調査(2016年調査)では、達成者が51.2%となり、国民の口腔内健康への意識の向上が見受けられる。

現在歯数の増加に伴い、高齢期においては、歯周病だけでなくう蝕にも罹患する可能性が高まることから、現在歯が健全な状態や機能を維持するための取組が必要だと考える。40~44歳までは、う蝕が原因で抜歯に至ったケースの割合が、歯周病より多く、50~54歳以降の各年齢層においては歯周病が原因で歯を抜くに至ったケースが多くを占めている。(図7、図8)

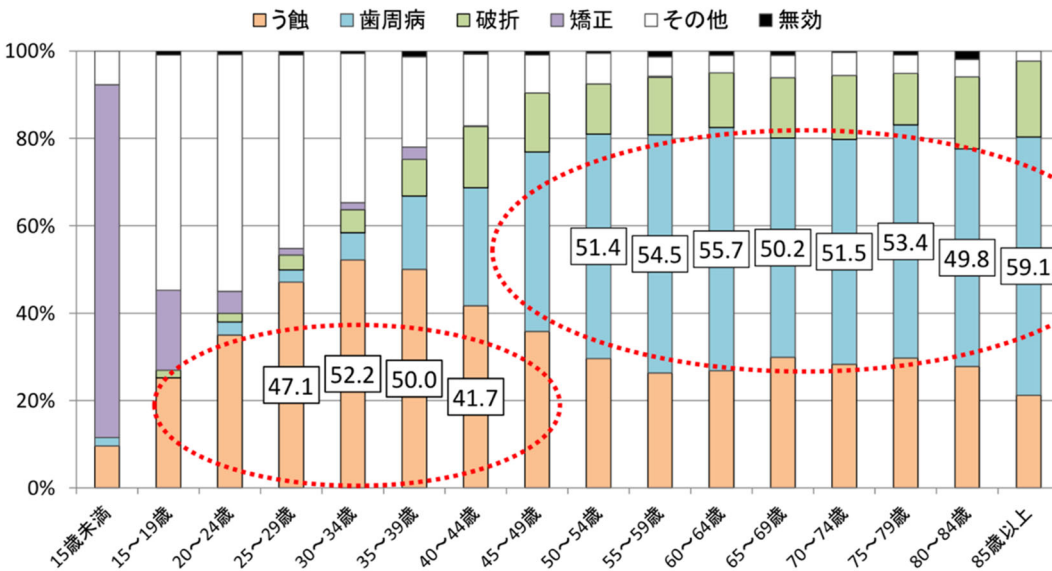
図7 年齢階級別のう蝕罹患率の年次推移



厚生労働省 歯科疾患実態調査, 2016

<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000358782.pdf>

図8 永久歯の抜歯に至った主な原因



財団法人 8020 推進財団 永久歯の抜歯原因調査, 2005

厚生労働省 歯科疾患実態調査, 2016

<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000358782.pdf>

第2章 問題設定と豊明市について

2.1 問題設定

ここでは日本で最も一般的なスタイルの歯科医師1名体制の歯科医院を愛知県豊明市に開院をすると仮定して、医院マネジメントをしていく。愛知県は三大都市の中で最も都道府県人口10万人対の歯科医師数が平均値の79.3人に近い、72.4人となっている。(東京：122.0人 大阪：88.7人) 豊明市は名古屋市の東に位置し、国道1号、伊勢湾岸自動車道などの主要道路や名鉄名古屋本線が通っており、交通の要衝地である。このことから名古屋のベッドタウンとして稼働年齢層から人気の市である一方で、高齢化も進んでいるのが現状だ。年齢別人口も全国平均と相似していることから、愛知県豊明市を選んだ。

図9 名古屋市と豊明市の位置関係



豊明市 豊明市について

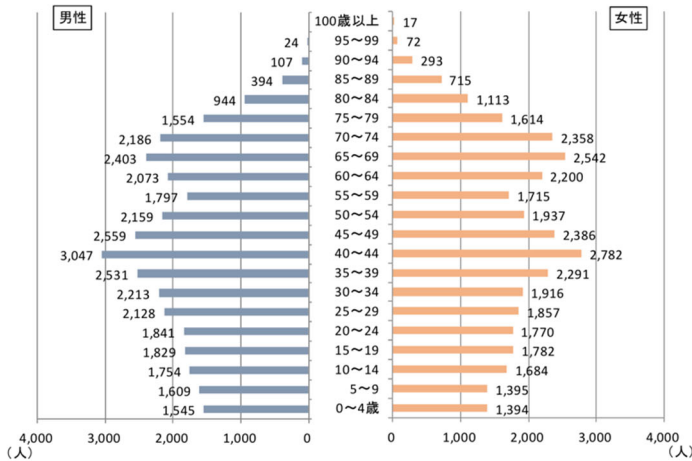
<https://www.city.toyoake.lg.jp>

2.2 豊明市の人口ビジョン

総人口は、1970年代に大きく増加したが、1985年以降は増加が鈍化している。2005年以降はほぼ横ばいとなり、2019年10月現在は69,008人となっている。2015年における年齢5歳階級別男女別人口(住民基本台帳)によると 団塊ジュニアと呼ばれる1970年代前半生まれが該当する「40～44歳」が男女ともに最も多い。当該世代より出生時期が遅い年齢階級ほど人口は少なくなる傾向にあり、「0～4歳」では男性で1,545人、女性で1,394人となっている。こうした傾向は、全国の5歳階級別人口と相似の傾向にあり、現状で推移した場合、人口減少となる状況にある。加えて、1970年代に転入した世代が多いため 急激な高齢者の増加が今後見込まれる。実際に2010年国勢調査の65歳以上人口割合は20.5%(愛知県は20.3%)。愛知県下において、高い伸び率を示している。

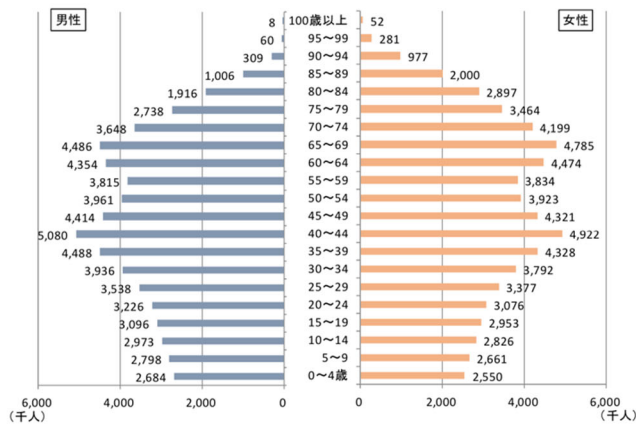
図 1 0 豊明市の 5 歳階級別人口

豊明市



(資料) 平成 27 年 1 月 1 日住民基本台帳年齢階級別人口

参考：全国



(資料) 平成 27 年 1 月 1 日住民基本台帳年齢階級別人口

豊明市 人口ビジョン・まち・ひと・しごと創生総合戦略, 2016

<https://www.city.toyoake.lg.jp/secure/2175/H27sougousenryaku.pdf#search=%27豊明市人口ビジョン%27>

豊明市の合計特殊出生率は 1.42 であり、全国の 1.38 を上回る水準ではあるが、愛知県は 1.51 であり、県内では平均を下回っている。隣接市区は、名古屋市緑区 1.60、大府市 1.73、刈谷市 1.77 と高い出生率になっている。1990 年以降、豊明市の出生数は概ね 600～700 人で推移しており、極端な少子化傾向は見られなかったが、2008 年から 600 人を下回り自然減へ進行している。

年代別純移動率(自然増減影響を控除した年代移動時の社会移動率)は、高校卒業、大学卒業、就職時に流入がみられる。しかしマイホーム取得時の流出が大きい。社会増加数が最も多かったのは、1994 年の 489 人であったが、2004 年にはマイナス 115 人の社会減に突入し 2012 年までマイナスが続いた。その後、年には 2013 民間事業者による新規住宅開発(分譲住宅の販売)などもあり 146 人の増加となっている。その中には、純移動率では毎年マイナスとなっている 30～34 歳の増加もみられた。純移動率とは 1,000 人あたりの流入出の数を割合として算出した流入人口と流出人口の差を示すものである。純移動率が正の値の場合は流入人口が流出人口よ

り多いことを示し、負の値の場合は流出人口が多いことを表す。豊明市による豊明市まち・ひと・しごと創生総合戦略市外転出者アンケート調査（2015）によると、「住宅の都合(新築・借り換えなど)」が(36.1%)と最も高く、次いで、「親や子どもとの同居、近居」(17.8%)、「結婚」(15.4%)となっている。一方、「就職(新規採用での就職)」(2.

4%)、「転勤」(11.2%)、「転職・退職」(12.4%)の割合は低く、仕事上の都合よりも個人的な理由での転出割合が高い傾向にあることがわかる。転出前と転出後の住宅所有形態について(単数回答)のアンケートでは、転出前は「借家(戸建、マンション等)」が(56.8%)と過半数を占めているが、転出後は約半数が「持ち家(戸建、マンション)」と(50.3%)を占めていることから、「住宅の都合」により転出した方の多くは、住宅購入を契機に転出していることがうかがえる。

次に昼夜間人口を見てみると周辺自治体から高校生・大学生が流入している状況がみられるが、生産年齢人口区分のほとんどの世代が流出している。しかし名古屋市、刈谷市からの流入人口も多く、周辺に居住し通勤している人も多いことが特徴である。豊明市には、公立と私立の高校が1校ずつあり、大学は3校ある。この他に流入の対象と考えられるものとして、中京競馬場があり、年中無休で営業しており、コース内部は遊園地として平日も開放している。他にも、藤田医科大学病院は1,435床の病床数があり、標榜診療科は23科ある。愛知県に2施設ある基幹災害医療センターの一つとして、愛知県の災害医療の拠点の役割を果たすほか、特定機能病院その他の機能を有している。

これらのことから、豊明市はベッドタウンとして発展してきた一方で、現在は単身世帯や賃貸住宅に住居する一般世帯の住居購入時の転出抑制や、豊明市へ昼間流入している生産年齢人口の転入促進が課題であると言えるだろう。

2.3 豊明市の福祉医療制度

次に、豊明市の福祉医療制度について述べる。

・後期高齢者福祉医療制度

対象者：後期高齢者医療の被保険者で、障害者、ひとり暮らし（非課税）、寝たきり、認知症老人など

助成範囲：保険診療分の自己負担額

助成期間：後期高齢者医療の資格取得日から

所得による制限あり

・子ども医療制度

対象者：12歳（小学校6年生）の年度末（3月31日）までは入院・通院の医療費、15歳（中学卒業）の年度末（3月31日）までは入院の医療費、15歳（中学校卒業）の年度末（3月31日）まで通院・入院の医療費

助成範囲：保険診療分の自己負担額

助成期間：誕生日から15歳（中学校3年）の年度末（3月31日）まで

所得による制限なし

・障害者医療制度

対象者：身体障害者手帳1～3級の方、4級の腎臓機能障害の方、4～6級進行性筋萎縮症の方、知的障害でIQ50以下の人、自閉症状群と診断された方

助成範囲：保険診療分の自己負担額

助成期間：手帳等受領後又は判定診断書の診断日以降、交付申請書受付日から

所得による制限なし

・母子・父子家庭医療制度

対象者：母子、父子家庭の親とその子、父母のいない子（18歳の年度末まで対象）

助成範囲：保険診療分の自己負担額

助成期間：受給資格者であることを確認した日から

所得による制限あり（児童扶養手当の所得制限額）

・成人歯科検診（節目歯科健診）

市内歯科医院にて歯科健診・歯周疾患健診・口腔内X線撮影（歯科医師の判断）が無料で受けられる。

対象者：満20、25、30、35、40、45、50、55、60、65、70歳の豊明市民
一部負担金：無料

申し込み方法：実施歯科医院に直接申し込み

豊明市 福祉医療制度, 2019

<https://www.city.toyoake.lg.jp/2178.htm>

第3章 フィールドワークを通して見た歯科業界

3.1 フィールド調査の概要

私は歯科業界をこの目で見ると、大学3年生の頃から歯科医院でアルバイトをしている。私の勤めているX歯科医院は大阪府にある大型ショッピングモール内にあり、常勤の歯科医師2名と非常勤の歯科医師4名（うち矯正歯科2名）、計6名（男性4名、女性2名）の歯科医師が在籍。歯科衛生士は常勤4名、非常勤1名、歯科助手は常勤が6名、非常勤が7名在籍しているほかに非常勤で保育スタッフが1名在籍している。1.2で述べたように、約8割の歯科診療所で常勤換算歯科医師数は1名であることからすれば、非常に大規模な歯科医院であると言える。診療時間は月、火、水、金（以下平日と記す）が9時30分から19時まで、土、日（以下休日と記す）が9時30分から18時30分までで、すべての診療日を昼休診なしで行なっている。スタッフが昼休憩を前半

と後半に分かれて取るため、昼休診なしで診療している。勤務時間は平日が9時から19時30分まで、休日が9時から19時までで、昼休憩は平日、休日ともに1時間30分あり、シフト勤務。診療科目は一般歯科、矯正歯科、小児歯科、歯科口腔外科と医療法によって規定され、歯科で標榜できる4つの診療科目全てを行なっている。この他にも、審美治療、歯周病治療、インプラント治療などの自費治療も行なっている。診療台は8台あり、うち2台が個室にある。

3.2 一日の流れから見るX歯科医院の特長

ここで、私の目線で見た医院の1日の流れ（平日）を、その特長と共に書いていきたいと思う。

【ひとりひとりに挨拶をしてから始業】

9時から始業なので10分前に控え室に着くように出勤する。白衣（スクラブ）に着替え、身だしなみを整える。X歯科医院の身だしなみの決まりとして、髪色、ピアス、ネイルや爪の長さ、額を出す髪型をすることが規定されている。身だしなみを整え、診察室に行くと他のスタッフひとりひとりに挨拶をして回る。それから、朝の準備を開始するのだが、診療台が多い分やることも多い。しかし、スタッフが多いため各自分担して効率よくできる。そして9時20分頃から受付担当のスタッフ1名を除いた（待合室にはすでに患者さんがいるため）スタッフ全員で朝礼を行う。まず、ひとりひとりにファイルが配られる。そこには医院がさらに向上するためにスタッフが各自で考えてピックアップした文章が書いてあり、順番に読み上げていく。この文章は毎日同じものを読むのではなく2、3日ごとに変わる。その中でも特に印象に残っているものがある。それは、スタッフ間のコミュニケーションを図ることで雰囲気が良くなり、患者さんにとってもいい空間になる。また、コミュニケーションの希薄化はスタッフの離職に関与しており、挨拶一つとっても重要な役割を果たしている。私はこれにとっても共感した。仲のいいスタッフ同士や上司にだけ挨拶をするような環境であったら、されなかった場合には気まずさや疎外感を感じる。しかし、X歯科医院では先ほども述べたようにひとりひとりに挨拶をしてから仕事を始める。これは歯科医師も同じで、たとえ院長であってもあちらから挨拶をしに回ってくれる。

【効率を高める】

次に、目指すべき医院の姿が箇条書きでまとめてあるので読み上げる。最後に当日のアポイントの確認などを行い、朝礼が終わる。9時30分から診療が始まるのだが、待合室から患者さんを誘導する際には誘導するスタッフが、「〇〇さん、〇番チェアに誘導します。」とインカムで他のスタッフ全員に伝える。これを聞いて、他のスタッフは作業をやめ患者さんに挨拶をする。どの診療台に患者さんを誘導するのは、タイムキーパーという役割のスタッフがその都度状況を見て決める。タイムキーパーは日替わりで、その日の診療が円滑に行うことができるように指示を出す役割だ。

【患者さんからの信頼を得る】

患者さんが診療台に座ると、診療を担当するスタッフが挨拶をする。もし、新規の患者さんや初めて担当する患者さんならば、「治療を担当させていただきます、歯科医師（or 歯科衛生士）の〇〇と申します。よろしくお願いたします。」と名前を名乗って挨拶をする。誘導するスタッフも、治療をするスタッフも必ずマスクを下げ、表情が見えるようにしている。そしてどの患者さんにも

治療を始める前に、治療の流れを（治療計画）を説明し、了承を得る。例えば、根管治療（う蝕や外傷により歯髄が感染や壊死している場合に行う歯の神経の治療）を行う場合、神経を取り除き、消毒した後に充填剤を詰めて根管を塞ぎ、被せ物を装着する。何度かに分けて消毒と殺菌を繰り返さないといけない場合がほとんどで、被せ物もその場で出来上がるわけではないので、患者さんには何度も来院してもらう必要がある。しかし、なぜ1日で終わらせてくれないのかという疑問と不安や嫌悪感を抱く患者さんも少なくないと思う。そこで、症状についての説明と治療の流れをまとめた医院独自のリーフレットを配布した上で説明を行う。これによって、患者さんの疑問などを解消するだけでなく、痛みが治まったからといって、治療を自ら中断してしまうことを防ぐことができると考える。治療が終わると、治療経過や注意事項を説明し、患者さんからの質問などにも答え、次の予約を取る。歯科医師、歯科衛生士は担当制になっており、患者さんのセルフケアの状況などの把握ができるだけでなく、信頼関係が生まれることで気軽に相談できる“かかりつけの歯医者”になることができているのではないだろうか。

【適切な医療安全管理体制】

患者さんが診療室から出る際も担当していたスタッフが、「〇番チェアから出られます。」とインカムで伝え、手の空いているスタッフが診療台の片付けに向かう。診療台や触れた可能性のある箇所を消毒用エタノールで二度拭きし、使用した器具と機械を回収する。そして次の患者さんの準備をする。使用したハンドピース（歯科切削器具）も患者さんごとに毎回滅菌をする。これは普通のことと思うかもしれないが、2014年の調査によると適切に滅菌を行なっている歯科医院は3割程度ということが明らかになり、厚生労働省はハンドピースの滅菌を含めた、医療安全管理体制を徹底するように都道府県に通知した。しかし、医療安全管理を適切に行うためには、膨大な人件費と経費を要する。ハンドピースを例にとると、洗浄、注油をしてからオートクレーブ滅菌（高圧蒸気滅菌）をし、オイル抜きをする。オートクレーブ滅菌には時間がかかるため、その間にも代替りのハンドピースが必要になる。ハンドピースは1本6万円ほどするので、数を揃えるには大きな経費がかかる。X歯科医院では40本ほどのハンドピースが用意してあるため、適切な滅菌が行えている。他にも、コップや器具を置くトレイ等は使い捨てのものを使用している。

【マニュアルにより徹底された電話対応とキャンセル抑制への取り組み】

電話が鳴ると基本的には受付スタッフが対応するのだが、受付スタッフが対応中である場合はインカムで、「電話お願いします。」と伝えられ、他のスタッフが対応する。原則3コール以内で電話を取ることが決まっている。電話応答のフレーズもマニュアルがあり、スタッフ全員で統一されている。実際に私がアルバイトに応募するために電話をかけた際に、素早い応答と明るい声と丁寧な言葉遣いに非常に良い印象を受けたことを覚えている。また電話は2回線契約しているため、同時にかかってきた場合にも対応できる。同時にかかってくることなど多くないのではないかと考えていたが、よくこういった場面を見かける。

また、アポイントの時間に患者さんが来院しなかった場合、アポイントの5～10分以内に受付スタッフが電話をかけるようにしている。そして、別の日程でアポイントを取っている。このことについて久保倉弘孝氏の著書「選ばれる歯科医院の作り方」でも書かれており“無断キャンセルの理由は、患者さんが忘れてしまっている場合がほとんどである。無断でキャンセルした患者さんは

「すっぽかした」という負い目の心理が働き、再びその医院に行きづらいと感じ、中断患者となってしまうケースが多い。無断キャンセルに対する電話は中断患者を防ぐことになり、それはまた患者さんにとってのメリットでもある。”という旨のものだった。そこで私は中断患者発生によるデメリットを考えてみた。患者さん側には治療の重複（初診料、レントゲンの再撮影等）、病状悪化の可能性。医院側には患者数減少、技工物と作成にかかる費用未払いの発生がデメリットとして挙げられる。また、来院前日になると、自動的にお知らせメールが送信されるシステムを導入している。アポイントを忘れていた患者さんのキャンセルを抑制できるだけでなく、予定などが入り来院できなくなった患者さんが事前にキャンセルをするきっかけにもなっているのではないだろうか。事前にキャンセルがわかると、別の患者さんのアポイントをそこに入れることができるので、大変ありがたい。

【スタッフルームはコミュニケーションの場】

昼休憩の時間になると、受付のスタッフが歯科医師や歯科衛生士のその日のアポイント状況を加味してスタッフの休憩を前半と後半に振り分ける。大体5、6人ずつの場合が多い。X 歯科医院が女性スタッフのためにワンルームのマンションをスタッフルームとして近くに賃貸しているため、そこで各自持参した昼食を食べることが多い。ショッピングモール内にあるのでフードコートに食べに行くスタッフもいるが、食べ終わるとスタッフルームに戻って休む。スタッフルームでは、仕事の話もするが、プライベートの話などをすることが多い。私はX 歯科医院に勤め始めてしばらくは学校の都合などもあり、15時からシフトに入っていた。1日フルでシフトを入れるようになってから、スタッフとより円滑にコミュニケーションが取れるようになり、アルバイトの時間が楽しく感じるようになった。これは昼休憩のスタッフとの会話のおかげだと考えている。

【清潔で安全な環境づくり】

昼休憩が終わると午後の診療に戻る。午後の仕事として午前と違う点は、掃除やゴミ捨てなどが加わることだ。主にアルバイトスタッフがこれらを行うのだが、他のスタッフが手伝ってくれることも多い。まず、空いている診療台からスピットン（患者さんがうがいをする洗口装置）に漂白剤を吹きかけ時間を置いて水で流す。次に診療台とその付近の床を拭く。治療で使用した材料が床に付着しているので、それを濡らした雑巾で拭きながら、それでも取れないものはスパチュラで剥がす。それからフローリングワイパーで取りきれなかった埃や髪の毛を掃除していく。しかし、全ての診療台がタイミングよく空くことはなかなかなく、他の午後の仕事をしながらタイミングを見計らう必要がある。他の仕事とは、ゴミの収集と超音波スケーラー用のチップの数を種類ごとに数えることだ。X 歯科医院には4種類のチップ（計52本）があり、1本でも見当たらないことがあると回収したゴミの中を探すこともある。チップが全てあることを確認した後、ゴミを捨てに行く。

床掃除とゴミ捨てが終わる頃になると、もう使わない診療台を閉める作業にはいって行く。これはタイムキーパーのスタッフが残りのアポイントや急患を見越して、閉める診療台を決める。診療台の閉めの作業は、診療台のヘッドレストにしてあるカバーとワークテーブル（診療台についている可動式のサイドテーブル）のカバーを交換、キャビネット内に入っている器具を回収する。次にバキュームに電解酸性機能水を吸引させてから、バキューム内のクリーニングを行う。これが終わると、スピットンを洗剤でスポンジ洗いと掃除用の歯ブラシを使い細かいところの汚れを掃除し、

スピットンとバキュームのフィルターとそれらのフタを回収する。回収したフィルターとフタを別の掃除用の歯ブラシで隅々まで洗い、診療台に戻してから、スピットンを水で流し、バキュームに水を吸引させて診療台の電源を切る。

【情報共有とインタラクション】

全ての患者さんの診療が終わると、スタッフ全員（受付スタッフも含む）で明日の診療の準備をする。準備が終わると終礼をし、その日の来院患者数、キャンセル数と無断キャンセル数、キャンセル率を受付スタッフが発表する。その後、受付、助手、歯科衛生士、歯科医師ごとに何かあったら全スタッフに共有する。これらを踏まえ、院長から総括と明日のアポイントなどの確認事項が共有されて終礼が終わる。

【生産性の最適化が産む X 歯科医院の経営サイクル】

残業は全くと言っていいほどなく、終業時間はきっちりと守られている。これは、人件費を投資してスタッフ数を確保していることで、手を抜くことなく、且つ効率的に様々な作業が行えているためだと考える。

以前院長に、経営について伺ったことがある。損益分岐点を引き下げるためには・費用（経費、人件費）を減らす（節約する）・売り上げを増やす という2つの方法がある。しかし、院長は経費を減らさず、売り上げを増やし、そこで出た利益をさらに費用に回していると話していた。つまり、患者さんにもスタッフにも利益が還元されているのだ。具体的には、このサイクルを実現するために保健治療を中心にやりつつ、それ以外の自費診療、主にインプラント（1本40万円ほど）や矯正（1人100万円ほど）で出た利益を内装、設備へ投資するとともに、人件費として投資してスタッフに還元しているという。実際、X 歯科医院は大阪府内の歯科医院の中でも終業時間が早い方だ。そして残業もない。昼休診なしで多くの患者さんを診た上で、適切な医療安全管理を行っている。必要なスタッフ数を確保するために、人件費を投資し、我々スタッフに働きやすさを提供してくれている。このサイクルの元にある自費治療のインプラントなどはリスクもあるため、練達した技術が必要とされる。インプラントなどの自費治療以外にも患者さんの様々なニーズに対応するために、常に院長は知見を広げ、鍛錬を重ねている。こうした院長の姿勢や在り方に加えて、医療安全管理を適切に行い、且つ優れた歯科医療を提供している事実はスタッフの仕事に対するプライド、愛社心につながっていると私自身が実感した。

3.3 小括

X 歯科医院のように、日曜診療や昼休診なしというスタイルで診療できる歯科医院は決して多くない。しかし、スタッフの少ない歯科医院でも X 歯科医院のような生産性の最適化により、収益性の向上だけでなく、スタッフの満足度を向上させ、離職率の抑制ができるのではないだろうか。さらに、生産性の最適化によるこれらの利益は患者さんにも還元されると考える。私は、病院は待たされるというイメージを持っている。アポイントの時間に行っても30分以上待たされることもざらにあり、予約制の意味はあるのかと思う。しかし、X 歯科医院は患者さんを待たせることなく、アポイントの時間通りに診療を始める。私が患者さんの立場ならば、X 歯科医院は時間通りだから

遅刻しないようにいかないと申し訳ない、という心理が働く。これは、多くの患者さんも同じではないだろうか。それを証するように、X 歯科医院では遅刻する患者さんは少ないと感じる。

第4章 開院に向けての検討事項

4.1 Y 歯科医院のマネジメント

今日日本の歯科業界では歯科医師過剰問題に加えて、国民の口腔保健意識の向上によるう蝕罹患率の低下により、需要と供給のミスマッチが顕著化している。そこで、数多ある歯科医院から患者さんに選んでもらえるのはどのような歯科医院なのか検討していく。第2章で述べたように、ここでは愛知県豊明市に歯科医師1名体制の歯科医院の開院に向けて、第1章の歯科医療の現状や第2章の豊明市の特徴、第3章のフィールド調査によって発見したこと、自らの目で見た歯科業界をもとに検討していきたい。

4.2 スタッフ構成

スタッフ構成：歯科医師（常勤）1名、歯科衛生士（常勤）2名、歯科助手・受付（常勤）2名

第3章のX 歯科医院は常勤と非常勤のスタッフ合計24名体制で運営されていたが、Y 歯科医院は常勤スタッフのみの合計5名体制とする。なぜなら、歯科医師1名体制であれば、歯科衛生士の他に、最低でも助手1名と受付1名がいれば仕事を回せるからだ。

4.3 診療および勤務時間

診療時間：月、火、水、金 9時30分から18時30分（昼休診なし）

土 9時00分から18時00分（昼休診なし）

勤務時間：月、火、水、金、土 9時から19時（休憩1時間）

土 8時30分から18時30分（休憩1時間）

芳野素子, 荻原勝, 遠藤敏哉, 小林義樹, 下岡正八, 2005「矯正患者の診療日時に関するアンケート結果」によると、平日の来院曜日と予約曜日は火、水が最も多い。また、最も多い来院時間と予約時間は、平日が16時から16時59分まで、土曜日が14時から14時59分までであった。最も多い来院時間帯と予約時間帯は平日が夕方（15時から17時59分）、土曜日が午前中（9時から11時59分）であったという。これらのことを考慮して、上記の診療時間に設定した。

休憩はX 歯科医院を参考にして、スタッフの休憩を前半と後半に分け、昼休診なしのスタイルにする。これによってスタッフの拘束時間も最小限に抑えられ、QOLの向上を実現できるのではないだろうか。

4.4 休診日

休診日：木、日、祝日

多くの歯科医院が各郡市区の歯科医師会に入会しており、歯科医師会のほとんどで日曜日、祝日の診療が規則で制限されていることが影響していると考えられる。豊明市の歯科医師会に入会するメリットには、県歯科医師会、ならびに日本歯科医師会に入会することができ、多くの福利厚生や会員のみが参加できる各種研修会への参加などができる。また、2.3の豊明市の福祉医療制度で述べた、成人歯科検診を実施することができる。無料で検診が受けられることから、今まで来院したことのない患者さんの来院のきっかけにもなり新規患者の確保にも繋がる。

4.5 診療科目

診療科目：一般歯科、口腔外科、小児歯科

これらの標榜診療科目の他に、高齢者歯科、歯周病治療、審美歯科、予防歯科

2.2の豊明市の人口ビジョンによると高齢者、子育て世代が多いことがわかる。そのため、小児から高齢者まで幅広く対応。また、豊明市内には大学が3校もあり、市内に居住している大学生に加え、近隣地域から通学してくる大学生も多い。若年層が多いことから審美歯科にも力を入れることで来院のきっかけになるのではないか。

4.6 建築デザイン

4.6.1 内装

・診療スペース

個室は作らず、患者さん同士が見えないように仕切りを設けたセパレートタイプの診療スペース。→あえて患者さんとスタッフの動線を分けず、スタッフが患者さんひとりひとりに挨拶を交わせるように。

・診療台

開院時は歯科医師1名体制の歯科医院では最も一般的な診療台数である3台を設置。

患者数増加に伴うスタッフ増員に備えて、診療台1台分のスペースをカウンセリングルームとしてスペースの確保をしておく。

・スタッフルーム

医院内にスタッフルームを完備

3.2でも触れた通り、スタッフルームはコミュニケーションの場だと考える。また、Y歯科医院は休憩が1時間なので医院内にスタッフルームがあると、着替えや移動の時間を省くことができる。

4.6.2 外装

・駐車スペース

診療台3台全てが稼働し、治療が終わった患者さんのお帰りの時間と来院される患者さんの時間が重なることを想定した場合に備えて、診療台数の倍の6台分の駐車スペースを完備。また、車椅

子を利用される方、足の不自由な方、ベビーシートを使用される方などの乗り降りに配慮し、各駐車スペース2,800mmの幅員を確保。他にも自転車やバイクなどが2台から3台止められるようサイクルポートを設置。

- ・スロープ

ベビーカーや車椅子を利用される方、足の不自由な方などへのバリアを、スロープを設置することでフリーに。900mmの幅員があれば、自走用大型車椅子でも曲がり角を曲がることのできるため、スロープの幅員は900mm確保し、車椅子を利用されている方おひとりでの来院を可能に。また、手すりは足の不自由な方が摺りながら体を支え、歩行していただけるように直径32～36mmの平坦型のものを設置。

- ・二重引き戸タイプの自動ドア

一般的な引き戸タイプの自動ドアより開口部が1.3倍広く、車椅子やベビーカーでの利用、歩行介助をしながらでも通り抜けることができる。

2.2の豊明市の人口ビジョンによると高齢者、子育て世代が多いことがわかる。また、豊明市は車社会のようなので、これらのことから、ユニバーサルデザインを取り入れた医院の設計と駐車台数を確保した駐車場にする。

おわりに

一般的に、経営を回していくためには費用を削り、売上を増やし損益分岐点を引き下げる必要がある。費用（経費や人件費）を削るために、適切な医療安全管理や医療の提供ができていない歯科医院も多くあることがわかった。患者さんは、歯を削るハンドピースが適切な滅菌処理をされていなくても、それを知る由もないからだ。しかし、仕事に対するプライドや志を持っているスタッフに選ばれる医院になれば、患者さんにも選ばれる医院になり、必然的に売上も伴ってくるのではないだろうか。第4章で具体的なマネジメントを書いたが、根本に在るのはこのサイクルだと考える。

引用文献

伊藤博之「コンビニより多い”歯科医院”の厳しい現状」PRESIDENT Online, 2019

<https://president.jp/articles/-/28072>

厚生労働省 医師、歯科医師、薬剤師調査, 2015

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000075061.pdf#search=%27勤務先別の歯科医師の割合%27>

厚生労働省 医療施設調査, 2015

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000087739.pdf>

厚生労働省 歯科疾患実態調査, 2016

<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000358782.pdf>

厚生労働省 医師、歯科医師、薬剤師調査, 2017

https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/16/dl/kekka_2.pdf

財団法人 8020 推進財団 永久歯の抜歯原因調査, 2005

厚生労働省 歯科疾患実態調査, 2016

<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000358782.pdf>

3歳児:平成25年度まで:母子保健課・歯科保健課調べ、平成26年度以降:地域保健・健康増進事業報告、12歳児:学校保健統計調査(文部科学省)

<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000358782.pdf>

豊明市 人口ビジョン・まち・ひと・しごと創生総合戦略, 2016

<https://www.city.toyoake.lg.jp/secure/2175/H27sougousenryaku.pdf#search=%27豊明市人口ビジョン%27>

豊明市 豊明市について

<https://www.city.toyoake.lg.jp>

豊明市 福祉医療制度, 2019

<https://www.city.toyoake.lg.jp/2178.htm>

中條さやか, 犬飼順子, 高阪利美, 宇野智子, 中垣晴男, 向井正視, 2014

「日本とアメリカの大学生の口腔保健行動と意識に関する事例研究」 日衛学誌 JJSDH Vol.8 No.2 (p.62,63)

芳野素子, 荻原勝, 遠藤敏哉, 小林義樹, 下岡正八, 2005「矯正患者の診療日時に関するアンケート結果」

卒業論文

総合政策学部総合政策学科 4回 手島智輝

テーマ：外国人が鉄道を利用する際に困難のないサービスとは何か

論文構成：

第1章 序論

- 1.1：動機
- 1.2：問題意識
- 1.3：目的

第2章 訪日外国人の実状

- 2.1：訪日外国人の実状
- 2.2：インバウンド対策を行う上での仮説的な課題点

第3章 鉄道におけるインバウンド対応の実態

- 3.1：調査場所及び選択した理由
- 3.2：調査内容及び方法

第4章 鉄道各社でのインバウンド対応の差(比較)

- 4.1：調査結果及びデータから見えたもの
- 4.2：これからの課題

第5章 まとめ

第1章 序論

1.1: 動機

このテーマについて考えるようになったのは、鉄道を利用する際に、駅などで困っている外国人を見たことがあり、何度か助けたことがあったのが始まりである。最初は自分も英語を話せないので身振り手振りで対応を行った事があった。自分自身が留学を経験した際に、ホストファミリーがいなければ全くもって鉄道を利用するのは難しいと実感したことがあり、日本に来ている外国人の気持ちがこんな感じなのかと思ったことで、より興味を持つようになった。留学後に日本に帰ってからは、困っている外国人を駅で見た際には積極的に声をかけるようになった。しかし、そこで思ったのが日本の鉄道でのサービスについて、外国人対応可能な案内サポートがあるはずなのに、なぜ彼らは困っているのかと言う点だった。勿論、彼らの自国とは鉄道のシステムは多少異なっているとは思いますが、サポートを利用すれば困難ではなくなるはずだ。つまり、他の理由がまだあるのでは無いかと考えた。

1.2: 問題意識

現状としてインバウンド対策は鉄道各社ごとに様々となっており、何か決まった物があるという訳では無い。そのため、1つの鉄道がやっている事が他の所では実施されていないかたたりもする。だからと言って全ての鉄道会社に共通するマニュアルの様な物があったとしても、それを必要としない会社や、コスト面で不可能な会社も出てくる可能性があるだろうから難しい。住んでいる近辺ではあ国人を見かける事が少ない為、車内放送等で英語やその他の言語が流れているのを疑問視する人もいるのが現状となっている。勿論、日本人にとっては日本語やひらがな以外の放送やディスプレイ表示を見る事もないだろうし、最近ではスマートフォンのアプリ等で乗り換えや構内図等も簡単に調べる事が出来る様になっているので、10代~20代の方は殆どディスプレイなどを見なくなっているのでは無いかとも考えられる。電車に乗っていても、殆どの方が目的の駅を日常で使用しているので、座席に座った後は降りる駅までスマートフォンを触ったり、友人たちと会話したりしていた。しかしながら、日本に来た外国人は、日本人ほど慣れていないので、ディスプレイや路線図等を乗った後に確認している姿が良く見られる。

1.3: 目的

日本語以外での案内表示やディスプレイ等がなぜ必要になってきているのか、それを実際に外国人の人が見たり使用したりしてどのように思っているのかを少しでも明確にする事が可能になれば、本当に必要になってくる物や情報を発見する事が出来るのでは無いかと考えている。自分自身の中で疑問に思うだけでなく、本稿では主に直接見て聞いてを行う事により問題の解決方法を探し出す事を目指す。

第2章 訪日外国人の実状と課題

2.1 : 訪日外国人の実状

現在日本に来る外国人の数は増加しており、日本政府観光局(JNTO)によると、2018年度で約3120万人が訪れており、2017年が約2800万人であることから増加傾向にあるとされている。その中でも、やはりアジア圏からの訪日外国人が圧倒的に多い。国別だと多い方から中国、韓国、台湾、香港の順になっており、近場からの訪日外国人の数が圧倒的になっていた。在留外国人の割合で言うと、中国、韓国、ベトナム、フィリピンの順になっていた(日本政府観光局(JNTO)、2019)。この2つのデータから見ても、中国と韓国の2か国から来た人の数が多いことが分かった。

また、日本政府観光局(JNTO)が出していた2017年度の都道府県別訪問率ランキングによれば、観光及びレジャー目的で訪日する外国人約2500万人の内44.1パーセントが大阪府を訪れており関西圏では大阪と京都へと訪れる人が多いことが分かった。大阪や京都を訪れる数が多い理由として考えられるのが、中国や韓国から飛行機を利用して約2時間で

来ることが可能だからではないかと考える。また、大阪からであれば近畿圏の観光地にも行きやすく、関東圏よりも混雑はしていない点があると考えられる。

2.2：インバウンド対策を行う上での仮説的な課題点

2.2-1：仮説的課題の予想

前述の様な訪日外国人の方々が鉄道を利用する際に困難になって来る点としては、持ってきた荷物が大きいため、座席に座る事が困難になってしまう事だろうか。勿論、全てが外国人だとは考えたくはないが、私が実際に鉄道を利用している際にも大きなスーツケースを1人あたり2個程度持った人がどのようにして荷物を置くかで悩んでいる様な姿や、荷物がある為に1つのボックス席を全て荷物で埋めてしまっていた事もあった。座席の上の網棚を使えばよいと思うかもしれないが、そこに乗りきらないサイズの荷物で来る人も意外と少なくは無いと個人的には思った。

それ以外の問題点としては、外国語での自動放送によるアナウンスだ。外国人が増えて行く中で、鉄道会社は対応策として自動放送に英語、中国語、韓国語を用いて案内をしている事も増えてきているように感じられるが、使用している音声によっては聞き取りにくく感じられるものもあると思う。自分の使用している沿線の1つでは英語の音声が使われているのだが、正直なところ発音があまり上手に聞こえず、何を言っているのだろうかと思ったことがあったからだ。自動放送の音声は各鉄道会社によって異なっている様に感じられるし、聞き取りやすい所は理解しやすいと思えたのだ。実際、国が同じでも地域によって発音やアクセントが異なっていると言う事を海外留学中に聞いた事があり、そういった点も対策を行う上では考えて行く必要が出てくるのかもしれない。

2.2-2：現地調査前に調べてみた点

このテーマを調査するに当たって、事前にインターネットやウェブ記事等でインバウンド対応をどう行っているのか、また将来を見据えての計画等があるのかを調べてみた。

関西圏では無いものの、関東の東武鉄道では、駅にWi-Fiを設置し、主要駅にはタブレット端末を設置、さらに英会話研修や英語対応能力検定も実施しているようだ（東武鉄道, 2016）。実際に自分もタブレット端末で案内をしている所を見たことがある。

関西圏では近鉄ではインバウンド専用商品や、外国語での案内スタッフの配置、さらに主要駅にタブレット端末を配備して通訳を行っているようだ。JR西日本では外国人スタッフによる案内、係員用ツール（タブレットなど）の配備と活用、多言語表示に対応した駅や車内のディスプレイの導入、多言語での駅頭掲示等を行っており、それだけではなく観光庁が行った訪日外国人へのアンケート調査から見えた課題点への取り組みも行われていた（JR西日本, 2018）。南海では、タブレット端末による車内の自動放送の他に、一部の駅及び車掌がポケットクを新たに導入して、更なる利便性を発展させようとしているようだ。阪急では、駅ではタブレット端末及び紙ベースの案内ツールを用いていたが、それに加えてインバウンド対策として業務用携帯端末によって言語だけを利用して外国人と会話

をするだけでなく、イラストや画像を用いて案内を行う取り組みを始めているそうだ（阪急電鉄, 2019）。

第3章 鉄道におけるインバウンド対応の実態

3.1: 調査場所及び選択した理由

調査場所として駅を調べるにあたって、候補地が3つあった。1つ目に浮かんだ場所がJRの大阪城公園駅で、選んだ理由としては、自分の住所から近い関西の観光名所で真っ先に浮かんだ場所で、イメージとして外国人の方が利用していそうだったからだ。2つめが難波で、これは近鉄、南海、大阪メトロの3つを調査しようと考えていた。理由としては関西の中ではアニメやゲーム関連の店が多くあるエリアに近い点と、近鉄は伊勢志摩、名古屋、橿原神宮、奈良、京都と様々な場所に向かう事が出来る点、南海は関西空港に行ける点、メトロは利用者数が多く、大阪の中心から来る事が出来る点で選んだ。最後にJR天王寺駅で、私は知らなかったが、大阪に住んでいる友人から天王寺を利用する外国人が結構居ると言う話を聞き、良く考えると電車で関西空港、京都、奈良、和歌山方面に行く事が可能かつ、駅からすぐあべのハルカスへと行く事が可能であると言う点に気づき、追加で調査を行う事にした。

3.2: 調査内容及び方法、期間

全ての駅に共通して行った調査点：駅改札(出口)の数、外国人対応専門の場所があるか、対応している言語。行った日によって時間帯は変化するが、朝夕のラッシュ時やピーク時を避けて調査。移動や休憩も含めた上で10時～16時頃で調査。

3.3: JR 大阪城公園駅

調査日時：8月10日～8月13日 10時～16時頃の間

個別調査内容：外国人による駅員への質問の有無。

外国人観光客が多く利用するはずだと考えたため、駅の改札口で対応を行っている可能性があると思ったので、実際にどのような対応をしているのか調べてみたかった。

【1：外国人対応デスク】

大阪城公園駅には、外国人対応デスクは無かった。その為、外国人観光客が質問などを行う場所は改札にいる駅員の場所のみだった。その為、外国人観光客が集中していた時間帯には列が少し出来ていた様に感じられた。

大阪城公園駅に外国人対応デスクが無かった理由として考えられるのが、この駅を利用する外国人の殆どの目的地が大阪城だからでは無いかと言う点で、他の駅と比べるとこの駅は利用目的がはっきりとしているから、そこに外国人対応デスクを配置しなくとも目的地にたどり着く事が可能だと考えている可能性がある。私が話を聞いた人全員が大阪城に

行くと答えてくれていた為、そう思い込んでしまっているだけかもしれないが、可能性が無いわけではない。駅にはエレベーターが設置されていて、かつ大阪城方面にはスロープがあるので、バリアフリー対策がしっかりと行われているように感じた。

改札口が1つしかない為、駅員が外国人対応を行っていたが、慣れている人とあまり慣れていない人とで所要時間に少し差が出てしまっていたが、駅員が2人以上いたケースが多くカバーしてお互い助け合っていた様に感じられた。

【2：外国人観光客の特徴】

切符を購入している人よりかは Japan Rail Pass を持っている外国人の割合が多い様にも見られた。外国人の割合は、中国人が多い印象だったが、意外にもアメリカ、カナダ、フランス、イタリア等アジア圏以外の観光客も訪れていた。加えて、Japan Rail Pass を持っていた人の多くはアジア系の人ではなく、アメリカやカナダ、ヨーロッパから訪れていた人の様に感じられた。アジア圏の人に関しては、中国と韓国からの観光客の人は切符を購入しており、ICOCA 等の IC カード乗車券を持っている人が多くいた。他に調査を行った駅に比べると、ベビーカーや車いすで訪れている外国人観光客の数が多く、家族皆で訪れていると言うケースがとて多かった。ほとんどの人は目的地が大阪城公園だったため、歴史が好きな人が多く、関西にある他の城も訪れた事がある人や、これから訪れてみたいと言ってくれたりした。

【3：その他気づいた事】

大阪城公園駅から大阪城までの周辺にある喫茶店やレストランなどでは、インバウンド対策として外国語で書かれたメニューがあり、多くの観光客がそこで立ち止まり飲食を行う又は購入していた。駅周辺でインタビューを行った際にも聞いてみたのだが、やはり英語等の表記があった方が自分たちにとっては少なくとも読めない訳では無いので助かるとの事だ。それだけでなく、私が話を聞いた中国と韓国の人達は、自分たちの母国語での表記やアナウンスが増えてきてくれる事が自分たちにとって移動する際の手助けになると言ってくれた。全員がそう言っていた訳では無く、一部の人は、日本語を勉強したいから来たのに、母国語があったら答えが分かってしまうと言う人もいた。

3. 4：難波駅近辺：大阪難波駅(近鉄)、南海なんば駅、大阪メトロなんば駅

調査日時：8月19日～8月25日 10時～16時頃の間

個別調査内容：外国人対応デスクの認知度及び利用状況

難波は鉄道の駅が多く集まっているエリアで外国人が多く利用しているイメージがあり、普段自分が利用している際にも外国人をよく見かける。普段利用している際に思ったことが、大阪城公園駅とは異なり外国人対応デスクや観光案内所が多く設置されており、

そこを利用している人がそれなりにいるような気がしていたため、この調査中に利用状況を3ヵ所それぞれで調べてみたいと思った。

難波では、近鉄→南海→大阪メトロの順に調査を行った。

3.4-1:大阪難波駅（近鉄）

【1：外国人対応デスク】

大阪難波駅(近鉄)では、外国人対応デスクがあり、場所は改札と切符の券売機の間くらいので、駅員の方々がいる場所とは別にあった。そこにいる係員は1人で、話す事の出来る言語は基本的に英語だった。人によっては中国語や韓国語を話す事が出来て、もわかる方法としては対応デスクの上にプレートが置いてあり、そこにある言語は対応可能と言う事だった。対応デスクの認知度は非常に高く、理由として改札前にあり目立つからで、私が調査を行っていた際にはかなり多くの外国人が利用していた。観光客以外の外国人の方も利用していたが、はっきりと異なっていたのが持ち物で、外国人観光客の殆どがガイドブック等の情報雑誌を手を持っていた。

【2：外国人観光客の特徴】

外国人対応デスクを利用している人のほとんどがアジア圏の人の様に感じられて、その中でも中国からの人が多かったのか近くで会話を少し聞いてみた際には中国語を使用して案内を行っていた。中国語を使用していた為細かく内容を確認する事は出来なかったものの、特急の乗り方やどのホームに行けば良いのかを聞いていた様で、何番ホームに乗りたい電車は来るよと言った情報を伝えていた様だった。中国語以外でも英語を使用して案内をしていた際には、周辺情報を聞いている人が多い様にも感じられた。私が調査をメインで行っていた方の改札は地下にある為、どの地下出口を出れば良いのかを聞いている人がいた。

【3：その他気づいた事】

外国人対応デスクに人がいない際には駅員の方がポケットクを用いながらジェスチャーを使って案内を行っていた事もあったが、対応デスクの方々よりは多少案内しにくそうな様子だった。

駅構内でも何かを探しているような外国人観光客がいて話しかけてみると、どの列車に乗れば良いのかがわからず、電車に乗り遅れたと言う人やここから先の乗り換えの方法が良く分からなくて、どうしたらいいか分からなくなったと言う人がいた。情報として、列車の中では外国語の案内放送もあると伝えたと、知らなかったと答えた人も多く、案内放送に関する事はあまり伝わっていないのかとも考える事が出来た。

大阪城公園駅とは異なり、目的地が複数ある為か多くの外国人観光客が駅を訪れていた。外国人対応デスクが無かった場合は大阪城公園駅と同じように駅員に尋ねているケー

スもあったのだが、対応にかかっていた時間はやや多かったように思えた。しかし、そう言った際にどう対処を行えばよいのかのマニュアルがあるのか、外国人に対しての質問等は殆ど同じだったように感じ取れた。

3.4-2:南海なんば駅

【1：外国人対応デスク】

南海なんば駅では、一番大きい改札口の前に対応デスクと対応窓口を設けており、切符の券売機横にあった。加えて、券売機の前には関西空港までの値段や買い方が英語で書かれた案内があり、券売機は勿論英語対応もしていた。対応デスクは窓口とは異なり、切符の購入などは出来ないものの、それ以外の質問を請け負っているように見えて、他の調査地よりも役割分担がはっきりとしているように思えた。

【2：外国人観光客の特徴】

南海ではアジア圏の人たちも多かったのだが、それ以外の国から来ている外国人観光客の人も多かった。全員がどこから来たのかまでは分からなかったが、インタビューを行った人にはヨーロッパ圏の国から来ていた方が多く、アメリカやカナダなどから来た人よりは多かった。南海が関空へ乗り入れている為、多くの人は関空から来たと答えてくれて、南海を利用した理由はJRとは異なり直接難波に来ることが出来るからと言う理由の方が殆どだった。難波に来たい理由としては、アニメのグッズ等を購入出来るからと答えてくれた人や、宿泊するホテルが難波の方が近い人、そしてアニメやゲーム等を通じてネットで知り合った友人と会うと答えてくれた人がいました。ほとんどの人がアニメ関連で訪れた人で、関東だと秋葉原、関西だと難波の近くにある日本橋に訪れる人が多いそう。日本橋を訪れても多くの外国人観光客が様々なお店で買い物をしていた。

【3：その他気づいた事】

改札前以外にも周辺の観光案内所があり、そこは窓口3つで勿論外国語対応を行っていた。駅から出てきた外国人の方で観光をしたい方や大きい荷物を預けたい人たちが多く利用していたと感じられた。この観光案内所は改札とは別の階にあり、様々な要望に応える為か多くのパンフレット等が用意されていた。独立したスペースの為、大きな荷物を持っていたとしても、外では無い為安心して質問を行う事が出来る様になっていた。

アニメ関連で訪れていた人の中には、若い日本人が見ていない様な古いアニメや漫画等を直接探しに来て、それを持ち帰る人は多いそうで、そういったグッズを持って電車を利用すると他の利用客から少し避けられる様なケースがあった人もいたそうで、話を聞いた人の中にもいる事が分かった。他の乗客からしてみると、全く知らない物を多く持っている人は近寄りたいたいのかもしれないと彼らは話してくれた。

南海の駅は他にある鉄道の駅とも近く、交通の便は優れているのでここから別路線で移

動すると言った人もいたが、多くの外国人観光客がなんば駅周辺にあるものを目的地としているように感じられた。中には一度なんばに来てから荷物を預けて、また南海に乗って出かけるという外国人観光客もいた。

3.4-3:大阪メトロなんば駅

【1：外国人対応デスク】

大阪メトロのなんば駅には、対応カウンターだけではなく、外国人向け案内デスクがあった。対応カウンターは駅の改札口横で、改札の外にいる人に向けて対応を行う人がいた。改札内にも注意を向ける事が出来るので、臨機応変に対応する事が可能なのかもしれない。対応デスクに関しては、改札から少し離れた場所にあり、その場所だけ区切られている為、中で何を話しているのかは恐らく分からない様にしていた。実際にデスクの近くに行ってみたものの、中で話している内容は殆ど聞き取る事が出来なかった。中の様子は確認する事が出来て、だいたい2人の係員がおり、基本的には英語での対応となっていた。これを判断できたのは、近鉄の外国人対応デスクと同じようにプレートが机の上であり、中国語や韓国語を話す事の出来る人はプレートを自分の前に置いていた。プレートはデスクだけでなく改札横の対応カウンターの方にもあった。利用状況としては、乗降客がとて多い事もあってかかなり多く、改札横のカウンターには日本人も多く道などを尋ねに来ていた。外国人観光客は対応カウンターの方にも訪れていたのだが、この駅で降りた外国人観光客に関しては、対応デスクの方を訪れている人が多い印象を受けた。

【2：外国人観光客の特徴】

地下鉄の対応デスクは、改札横のカウンターでは切符の購入方法や行先を聞いている人が多く、別であった対応デスクでは周辺の観光案内やロッカーの場所などを聞いていた人が多い様な印象だった。

話を聞いてみると、デスクで質問を行っていた人の多くはデスクの方が自分の荷物が他人にぶつかったりしないから安心と言う人が圧倒的に多く、そう言った人たちに共通していたのが、大きな荷物を持っていたと言う事だ。

それ以外の理由としては、地下を歩いて目的地へと行こうとしたが、思っていたよりも複雑で迷ってしまったからここを頼りにしてきたと言う人もいた。御堂筋線のなんばではそう言った人が多かったが、千日前線と四つ橋線ではあまりそう言った人はおらず、千日前線からの乗り換えの方法などを聞いている人はいた。そう言った人達は難波が目的地ではなく、中間地点として訪れたり、日本にいる友人との待ち合わせの場所として利用していたりするようだ。

【3：その他気づいた事】

地下鉄のなんばを調査すると言っても3つの路線がなんばに来ていた為、一番外国人だ

けでなく日本人も乗っている御堂筋線を初めに調査してみたのだが、意外と四つ橋線に乗っていた外国人観光客の方もいて、理由を聞いてみると御堂筋線が混んでいるからと答えてくれた人や、自分が宿泊しているホテルからだとか四つ橋線の方が近かったからと答えてくれた人がいた。四つ橋線の方ではあまり対応デスクに聞き込みをしている外国人の姿は見られなかったが、やはり人の多い御堂筋線では多くの外国人観光客が質問をしている姿を確認できた。人が多い理由として本数が多いと言う事も挙げられて、本数が多いと1本間に合わなくても直ぐに次の電車が来ると言う安心感があると答えてくれた人もいた。

3.4-4:難波にある3つの駅の共通点

難波の3つの駅に共通していた点としては、外国人対応デスクはしっかりと配置しており、改札近くや改札の横にあるため何かあったらすぐに聞くことが可能であったことと、利用している人そこに対応デスクがあることを知っている人が多かったことだ。外国人対応デスクがあると言うことを前提に鉄道を利用している外国人の方も多いようで、話を聞いた人のほとんどが最初に利用する際などには対応デスクを利用していた。理由としては、道の途中にある案内板でも理解することは出来るのだが、人から聞いて確認を行った方が安心することができるからと答えてくれた方が多かった。

ポケットや業務用タブレットを利用して案内を行う場面も何度かあり、そのような機械を用いていたケースでは、外国人の利用者も素早く情報を得ることができていたようで、納得されていた様子も確認できたが、稀に間違いが発生していた様で、その際には外国人観光客も駅員も戸惑っていた様子が確認できた。

3.5 : JR 天王寺駅

調査日時：9月13日～9月16日 11時～16時頃の間

個別調査内容：改札(出口)の数、外国人対応デスクの有無、
駅構内の移動しやすさ、案内表示の充実度。

【1：外国人対応デスク】

天王寺駅では、改札が4つあり、2つは複合施設への直結改札で、残りの2つの中で、あべのハルカスへとほぼ真向いにある改札口の方にあった。改札の外にあり、前の2つの調査地と同じようにプレートを机の上に置いて対応可能言語を示していた。しかしながら、私が調査を行っていた際は担当者が不在の事が多く、外国人対応デスクはあまり使用されていないのかと思っていたら、担当者はデスクを離れて改札横にある券売機近くで切符の購入方法などを丁寧に教えていた。対応デスクに居なくても、自ら行動を起こして手助けを行う担当者が多かったように感じられた。理由として考えられるのが、切符を購入する際に困っていた外国人が多かったからだ。

【2：外国人観光客の特徴】

天王寺駅では、調べてきた中では一番多く外国人観光客がいたように感じられた。理由としては、天王寺からあべのハルカスはとても近かったと言う事と、電車に乗れば多くの観光地へと行く事が出来ると言う事だと思われる。その為、大きなスーツケースを持った人や、小さな子供を連れた家族等が多く利用していた。天王寺駅はホームが多く、少し特殊な構造をしている為か、殆どの人が行き先表示を確認していたり、駅係員に尋ねたりしていた。天王寺周辺を目的地にしていた外国人観光客の殆どがあべのハルカスの展望台を見に来ていた人で、インタビューを行った人の6割程度がそう答えてくれた。

【3：その他気づいた事】

私も天王寺駅を訪れたことが無かったので、ホームに着いた後はどこに行けば良いのかが分からなくなってしまった。つまり、日本人でも迷うのだから全く情報を知らない外国人観光客も悩んで、駅係員に尋ねる事が多くなると感じた。実際にホームで様子を見てみると、駅員に乗る列車がここに来るのかと乗車位置を尋ねている人が多かった。そう言った人の為に下の図1の様日本語と英語で案内表記を行っていた事が確認できた。それ以外にも、同じ方面に行く電車が全く別のホームから発車するというケースがあり、駅員が伝えていた事もあった。



図1：列車の案内表記(天王寺駅 15,16 番ホーム)

第4章 鉄道各社でのインバウンド対応の差(比較)

4.1：調査結果及びデータから見たもの

全ての現地調査が完了した後に個人的に感じた共通点や相違点などを考えてみると、調査したすべての鉄道会社がインバウンド対策として何らかの対応を取っていたと言う点が共通していた。対応を行っていない会社が無かった事を考えると、利用客の割合が多かったのかもしれないと思いさらに調べてみると、近鉄では定期外の利用客が4割ほどとなっていたので、その中に外国人が含まれていると考え、今後さらに定期外で近鉄を利用する外国人の数が増加するかもしれない。近鉄の沿線には歴史がある建造物や街並みがあるエリアや、新しく造られたあべのハルカスの様な建物が有る為、たくさんの外国人観光客が利用しているようにも感じられた。

又、全ての調査箇所において平日と土休日を含んで調査を行った。個人的に土休日の方が外国人観光客の数は多い様な気がしたからだ。しかし調査を行ってみると、意外と平日にそれぞれの場所を訪れていた外国人観光客も多かった。実際に訪れていた外国人観光客の方々に話を聞いている際に聞いてみたのだが、その理由として彼らは別に平日と土休日は関係なく訪れているので、土休日のほうが人は多く混雑していると言った理由で平日を選んでいる人も多かった。よく考えてみると彼らは観光客なのであって日本に滞在していたり、働いたりはしていないので、スケジュールが合った日に訪れる事が出来ると改めて理解した。平日訪れていた外国人観光客は多くが2回以上日本に来たことがある人たちで、1回目の際に自分たちが来て感じたことを元に次以降はどうするかなどを話し合ってから来たと言う人もいた。

駅での様子等を見ていると、駅員や対応デスクに話を聞いている人たちはほとんどが初めての来日で、初めてでない人はスマートフォンのアプリを用いて質問を行っていた様に感じ取れた。スマートフォンのアプリで、外国語で乗り換えを検索できるものがあるそうだが、それだけだと不安だと言って聞きに行く人も多く見る事が出来た。各鉄道会社がそれぞれアプリを出しており、それを用いて案内をして、改札で対応デスクがないところでは翻訳アプリや別の駅にいる第二言語以上を習得している人とタブレットを介して会話を行っているケースもデータとしてあり、それだけでなく無料ネットワークのサービスエリアの拡大なども徐々に整いつつあるように見られる（国土交通省 2018）。情報がインターネットですぐに入手することが可能になった反面、本当にそれが正しいのかどうか分からないと言う意見も調査中に何人かの外国人観光客から出たのだが、実際のところは各会社が提供しているアプリの情報や公式の多言語 SNS から発信されている情報があるよと教えたところ、そう言った公式の情報発信サイトなどがあつたのを知らなかった人も多くいて、知れて良かったと言ってくれた。

JR 西日本では公式 HP から言語を選択すると4カ国の言葉を選ぶことが可能になっている、スムーズに情報を得ることが可能になっている。それだけでなく、図3のように駅の

外側やホーム内には直接情報を得ることのできるQRコードが張られている案内板があり、こちらでは3か国語に対応していた。

JR西日本以外の現地調査を行った2社は、近鉄では自動放送による乗り換え等の不安解消、大阪メトロでは自動放送及び車内ディスプレイに外国語での案内をそれぞれ行っており、外国人の利用者が多くそれを確認している様子も移動中の車内で確認することが出来ており、認知度としてはかなり高く頼りにされている様子だった。

それ以外のインバウンド対策としては図3の様な駅のナンバリングで、各鉄道会社でアルファベットと番号を駅名に示すことで、会社ごとの区別を行っていたり、色を分けることによって相手に伝えやすくなっていたりしている。天王寺駅では、大阪環状線、大和路線、阪和線と3つの路線を走る電車が走行しており、それぞれ行き先が異なっている為、誤って別の列車に乗ってしまわない様になっている。大阪環状線は図9の様な黒地に赤色の線、大和路線は図8の緑色、阪和線はオレンジ色となっている。



図2：駅ナンバリングの例(大阪メトロ)↑



図4：JRの看板(青色)↑



図3：駅外側にある案内図↑



図5：JRの看板(桃色)↑



図6：JRの看板(黄色)↑



図7：JRの看板(薄紫色)↑



図8：JRの看板(深緑色)↑



図9：大阪環状線の看板(大阪駅除く)↑



図10：行き先と種別が異なる幕(大阪環状線なのに幕は大和路快速で緑色)↑

自分が調査を行った限りでは、JR西日本の駅看板にナンバリングは行われていなかったが、図4から9の様に看板を色で分けておくことで観光客がこれからどの路線に乗って行くのか、また乗り換えの際に確実に判断を行う事が出来ると私は考える。加えて図11や12の様に看板等と同じ色のアルファベットを電車の幕に使用する事でも、視覚的な情報からすぐに乗る列車を判断できるようになってきている。



図11：列車の先頭にあるアルファベット表示



図12：列車横のアルファベット表示

4.2：これからの課題

実際に現地に訪れて自分の目で見たり聞いたりしていると、まだ情報の入手が少し困難である点と、無料で利用することが可能な Wi-Fi やネットワーク設備が無いところが多く、観光客を呼び込もうと思っても上手く行かないエリアが残ってしまっている点が調査から見えてきた今の課題点ではないかと感じられた。

私が進級論文で留学生との対話を行ったのだが、その中にもいくつかの課題があったので、その一部をここに書こうと思う。対話相手は中国から来た人で、日本語は日常会話程度であれば問題なく話せるレベルであった。その彼女に日本の鉄道での困ったことを聞いた際に、駅構内にある地図の話になった。私の質問は太字にしている。

私(質問)：駅構内の地図ってわかりやすいの？ 相：全然(食い気味に)。分かりにくい。直感で行く。(半笑いで) 自分がまあ…地図を見るのが苦手なんです(苦笑い)。

私：俺も苦手やから、そう言うのはよくわかるよ。調べて、その後は直感(笑いながら)。

私(質問)：テーマ的にサービスの改善だから、なにかあった方が良いものとかあったりする？

相：うーん……(かなり悩んで)やっぱり地図かなあ。 私：あれば母国語の方が良い？

相：いや、そうではない。空間の想像力がすごく下手だから、各階層の地図が良い。 駅にあるのはすごく複雑だから。

対話相手は駅構内等で見かける構内図の話をしてくれた。勿論、地図を見る事が苦手であるとは言っている物の、現地調査を行っていた際にも何人かの外国人観光客が同じような事を言ってくれた。私個人的にもあまり立体的になっている構内図は好きでは無く、理由としては自分自身に立体での把握能力があまりない時にとっても見にくくなっているからだ。

それ以外の課題点としては、外国人以外の利用客からの不満が出る可能性だと思われる。こう考える理由としては、個人調査を行っていた際に数名の日本人の鉄道利用者にも声をかけて聞いてみたのだが、日本語以外が外国人に聞き取りやすくするためなのかは分からないが、外国語の放送が少し大きめの音声に聞こえてしまうようで、仕方がないと理解していてもやはりあまり納得はしていない様子だった。こう言った意見は少なからず出ているようで、JR 西日本では新幹線の音声は英語と日本語のみとなっているが、その理由としては「日本人のお客様がご利用の大半を占めており、車内での静音性を保ち、お客様に心地よくご利用いただくため、日本語と英語による自動放送としている一方で、訪日外国人のお客様のご利用が増加する中で、多言語によるご案内の必要性についても認識しており、当社では、車掌が携帯するタブレット端末の翻訳機能等を活用し、多言語によるスムーズなご案内に努めており、また列車の運行が乱れた場合等に、英語による車内テロップでの案内も行っており、車内サービス向上に取り組んでいる。」とのことだ (JR 西日本 2019)。

外国人観光客が増えていく中で、いつも通り鉄道を利用している人たちから見ると多言

語対応の放送などは情報がスムーズに流れてこないと感じてしまう方もいるようなので、鉄道各社がこれから先案内放送等を更に多言語対応へと変化させていくのかは今後も重要な課題点になって行く様に感じられる。

第5章 まとめ

まず初めに、今回調査を行った計7か所で様々な外国人観光客が私の聞いた質問に対して正直に回答をしてくれたことに感謝をしたい。現地調査を行う上で何よりも重要になってきたのが実際に鉄道を利用して移動を行っている外国人観光客にインタビューを行う事だった。彼らの協力が無ければ、調査を行う上で現状の課題点を詳しく知る事は出来なかつただろうし、全員がとても丁寧かつ親切に教えてくれた為、彼らがどの様な事で困っているのかを知る事が出来た。

外国人観光客が増えて行く日本の中でも古くから残っている観光名所と新しく出来た建物とが密集しているエリアである関西地区での移動手段は鉄道、バス、車、自転車等多くあるが、外国人観光客が観光地へ行く為には殆どが鉄道での移動となって来るだろう。そんな中で鉄道各社はインバウンド対策を行う事で、スムーズに移動してもらう事が一番良い事だと思われる。

今回調査を行った4社では、それぞれが行っているサービスは似ている物の、各社の特徴を活用してインバウンド対策を行っていた様にも感じられた。しかし、実際に鉄道を利用していた外国人観光客の方々に話を聞いてみると、それぞれの調査個所によって様々な困難があったり、全てに共通していた点があったりした。全員では無いが、殆どの方がネットワーク問題に関して話してくれて、実際にどんな形で使用しているのか等を見せて頂く事もあった。また、前述で述べたホームに来る列車がどの方面へと行くのか区別する為に用いている駅看板の色では、図10の様にどの路線かを示すアルファベットと、幕の快速等書かれている文字が異なっており、その方面へと向かわずに別の路線へと向かっていく列車がある駅で困っていた人も多くいた。天王寺駅の様に様々な方面に列車が走行している場合、普段から駅を利用している日本人ならある程度はどの方面へと向かう列車なのか理解する事が可能であるが、初めて利用する外国人観光客が直ぐに理解する事が出来ない様にも感じ取れた。外国人観光客からすると一見分かりやすい様に見えるものが逆に困難に陥ってしまうケースもあると言う事が今回の調査で確認する事が出来た。

その他で挙がってきた問題点は案内放送だ。英語での音声案内や車内でのディスプレイ表示が多くなってきているが、案内放送で話されている英語に各鉄道会社で差が生じてしまっているのだ。天王寺でインタビューを行っていた際に話を聞いたある外国人観光客が私に「何故案内放送でイントネーション等が異なっている放送があるのか」と訪ねてきた。私は調査を行う中で、さほど音声に注目をしていなかったのだが、その人は電車に乗る事が好きだそうで、様々な意見を聞く事が出来た。その人が感じた事は、僅かな差のようだがそれだけで聞き取りにくく感じてしまう単語等があり、移動した際に間違えそうに

なったようだ。実際に他の人に聞いてみた際にも、発音や文字が一致しないと言う人が何人かいた。実際に調査を行った方のデータによると、ローマ字表記が少し異なっているものも見た際に分かりやすいものと分かりにくいものが出てくると言う事が判明している（三枝ら, 2018）。私たち日本人は何らかのハンディキャップが無い限りは音声や漢字で書かれた駅看板等を見て判断する事が可能かつ、子供でも読める様にひらがなも書かれている為外国人観光客が困っていた点は困難に感じる事が無いだろうから、このような発想にはあまりとどろき着かないのかもしれないが実際に海外に行くと日本語表記がある場所は殆ど無いし、英語圏以外だと英語すら通じない場所もある。外国人観光客は日本でそれに似た状況となる可能性があるため、どのようにして対策を行うのが課題になりそうだ。

インバウンドでこれから更に増えて行くであろう外国人観光客に対してのサービスの質をどれだけ向上させていく事が出来るか、その鍵は、現状で挙がってきている問題点などをどうやって解決していくのかを話し合い、現場にいる駅係員の意見も取り入れて改善を行って行けるかにありそうである。

引用文献

- 運輸協会誌(2019年2月) 画像とイラストによるインバウンド旅客対応 阪急電鉄株式会社.
- 国土交通省(2018年2月). 鉄道分野におけるインバウンド受入環境整備について.
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/kankotf_dai18/siryou2.pdf
- 東武鉄道株式会社 グループインバウンド情報発信室(2016年11月). 特集Ⅲ 東武鉄道における訪日外国人対応の概要について(pp.27-31) 一般社団法人 日本地下鉄協会.
<http://jametro.or.jp/upload/subway/wmuZtZopSzJu.pdf>
- 三枝令子, 庵 功雄, 岩田一成, 今村和宏(2018). 外国人にとってわかりやすい標識表記を考える: 留学生へのアンケート調査の結果をふまえて(pp123-126) 一橋大学教育研究開発センター.
- JR西日本(2018年10月24日). JR西日本におけるインバウンドの取り組み 訪日のお客様への対応のさらなる充実.
https://www.westjr.co.jp/press/article/2018/10/page_13287.html
- JR西日本(2019年11月8日閲覧) JRおでかけネット よくあるご質問——新幹線車内の自動放送は日本語と英語で流れていますが、四カ国語での放送は実施しないのですか.
https://faq.jr-odekake.net/faq_detail.html?id=9082&category=&page=1
- 日本政府観光局(JNTO) (2019年11月8日閲覧) 月別・年別統計データ (訪日外国人・出国日本人) 訪日外客数の動向
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/index.html

中学生の不登校の現状と要因
—中学校卒業後の進学を選択肢拡大案—

氏名：中川真里奈

論文構成

第1章 はじめに

1. 研究動機
2. 問題意識
3. 目的
4. 定義

第2章 中学生の不登校の現状と考察

1. 不登校の現状
2. 中学生の不登校に対する考察

第3章 高校生の不登校・中途退学の現状と考察

1. 高校生の中途退学の現状
2. 高校生の中途退学に対する考察

第4章 エリクソンの心理社会的発達理論における青年期のアイデンティティの問題

1. 心理社会的発達理論とは
2. 心理社会的理論と中学生の不登校

第5章 最終学歴と就職の関連性

1. 最終学歴と就職の関連性の統計データ
2. 最終学歴と就職に関する考察

第6章 通信制高校、定時制高校、高認とは

1. 通信制高校とは
2. 定時制高校とは
3. 高認とは
4. 入学方法及び取得方法

第7章 進学を選択肢拡大案の提示

1. 進路指導
2. 社会の認知度
3. 選択肢を取った後の課題

第8章 おわりに

第1章 はじめに

1. 研究動機

本研究テーマを選んだ理由は私自身の不登校の経験からである。私は中学2年生の夏休み明けから卒業するまでの約1年間、不登校を経験した。私自身でも明確な原因は分からないが、夏休み明けに諸事情により学校を連日欠席したことや、学校といった集団があまり好きではなかったこと等、様々な要因により不登校になったと考えている。当時の私は学校に行く必要性を感じる事がなく、不登校状態に陥っていた。次第に私の中で学校へ行くという選択肢は無くなっていき、私自身から学校を離れていった様な状態であった。結果として、私は中学へ復学することなく、そのまま全日制の高等学校へ進学した。

しかし、高等学校に進学した後は様々な苦難を経験した。例えば、人間関係や、周囲との関係である。幸い、高等学校は卒業することができ、現在の大学に在籍している訳だが、あの高等学校での経験は少しほろ苦い経験であった。現在、考えてみると、いわゆる"普通"と考えられている全日制の高等学校に拘ることがなければ、その経験をすることは少なかったのではないかと考える。

これらの動機により、私は中学生の不登校の進学に焦点を当て、全日制の高等学校に進学することが全てではないということを提言する為、本論文において、選択肢拡大案として、通信制高校及び定時制高校、高等学校卒業程度認定試験（以下、高認）等の選択肢を提示する。

2. 問題意識

上記では、不登校の中学生の進学に焦点を当て、本論文を執筆していきたいという旨を述べたが、ここでは、なぜ中学生の不登校の進学という点が問題なのかについて述べる。

簡潔に述べると二点を挙げる事ができる。一点目は不登校状態にある中学生の進学率の低さ、二点目は進学率の低さによる将来的な影響である。一点目に関しては、そもそも不登校状態にある中学生の場合、高等学校へ進学することが困難な場合がある。例えば、出席日数や、内申点といった問題である。また、全日制の高等学校は、不登校の中学生が現状で置かれている環境と類似している為、進学しても継続しないという問題点も存在している。二点目に関しては、高等学校へ進学することが無ければ、大学といった高等教育を受ける機会や、専門学校といった職に直結する養成機関に進学することが少なくなる。その結果として、ニートやひきこもり、ワーキングプアといった現在の日本で問題視されている状態に繋がることになる。これらの状態になることを回避する為にも、高等学校卒業の資格を得ることは大切であり、その後の人生に繋がっていくことが求められているのである。なお、データについては後の章で述べる。

3. 目的

本論文における目的を述べる。一点目は中学生の不登校の現状をまとめた上で、問題意識の箇所で述べた進学率の低さという課題を抽出することである。進学率の低さが既述した通り様々な問題に繋がる為、その危険性についても述べていきたい。そして、二点目は進学を選択肢拡大案の提示として、通信制高校及び高認に主たる焦点を当て、普通科の高等学校以外の選択肢提示を試みたい。

これらの問題意識及び目的に沿って、卒業論文を構成していくこととする。

4. 定義

本論文において用いる語句の定義をしておく。まず、不登校という言葉は、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者(ただし、「病気」や「経済的理由」による者を除く)」(文部科学省、2018)を用いる。

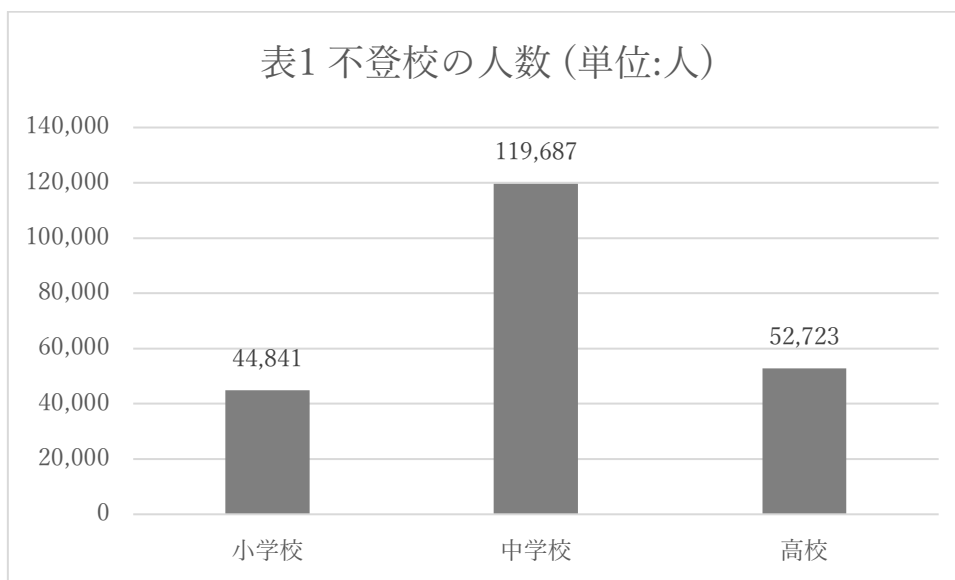
また、本論文において、中学校及び高等学校という概念を度々用いるが、それには国公立及び私立の両方を含むこととする。

第2章 不登校の現状と考察(中学生を中心に)

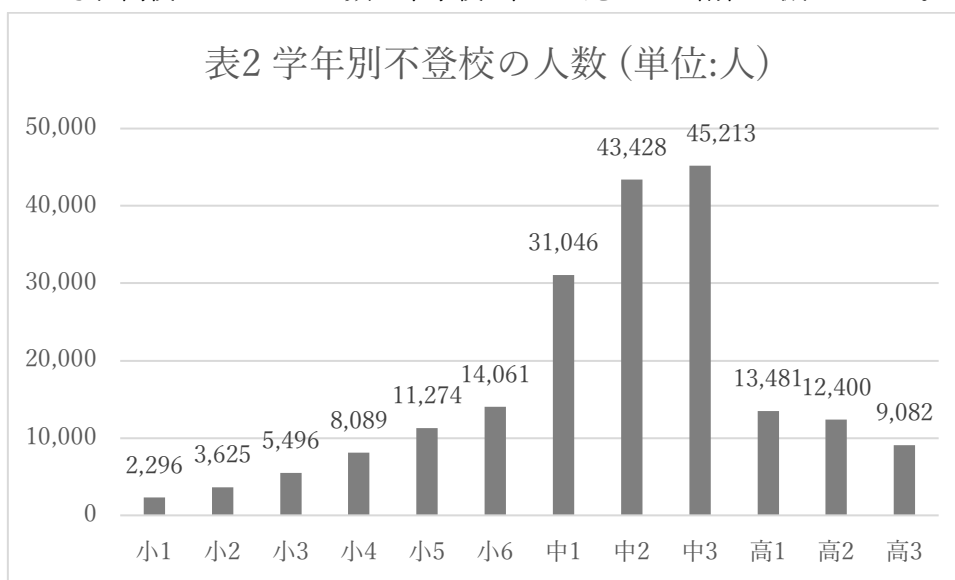
1. 不登校の現状

本章では、中学生を含む不登校の現状についてまとめた上で、それに対する考察を行う。まずは、「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生活指導上の諸課題に関する調査結果について」(文部科学省、2019)(以下、児童生徒指導の諸課題に関する調査)に基づき中学生の不登校の現状を述べていく。

まず、不登校の人数は小学生について、在籍生徒数6,451,187人に対して不登校が44,841人(0.7%)であり、中学校について、在籍生徒数3,279,186人に対して不登校が119,687人(3.6%)であり、高校について、在籍生徒数3,242,065人に対して不登校が527,23人(1.6%)である。(表1参照)



次に、学年別に見てみると、小学校1年生から中学校3年生までは右肩上がりが増えていき、高校になるとその数は中学校3年生に比べて三割程に減っている。(表2参照)



不登校の要因については、児童生徒指導の諸課題に関する調査には分類として、「本人に係る要因」があり、その中の区分として「学校・家庭に係る要因」がある。「本人に係る要因」とは、不登校の本人に何らかの傾向、例えば「あそび・非行」や「無気力」、「不安」といったものがあることに起因して不登校になっているということである。その「本人に係る要因」で分類をした後、さらに「学校・家庭に係る要因」で区分をしているが、「学校・家庭に係る要因」とは、学校や家庭に何らかの課題、例えば「いじめ」や「学業不振」、「周囲との関係」といった課題があることに起因して不登校になっているということである。つまり、不登校の要因には本人と学校及び家庭の二つの要因があるということである。

要因について、小学生の場合は、「本人に係る要因」として最も多いものが、「不安の傾向がある」という要因(35.9%)である。そして、「学校・家庭に係る要因」に関しては多い順から三つを挙げると、①「家庭に係る状況」(55.5%)、②「いじめを除く友人関係をめぐる問題」(21.7%)、③「学業の不振」(15.2%)である。

中学生の場合は、「本人に係る要因」として最も多いものが、「不安の傾向がある」という要因(32.4%)であるが、「無気力の傾向がある」という要因も30.0%と、近い数字である。そして、「学校・家庭に係る要因」に関しては多い順から三つを挙げると、①「家庭に係る状況」(30.9%)、②「いじめを除く友人関係」(30.1%)、③「学業の不振」(24.0%)である。

高校生の場合は、「本人に係る要因」として最も多いものが、「無気力の傾向がある」という要因(32.9%)である。そして、「学校・家庭に係る要因」に関しては多い順から三つを挙げると、①「それらに該当しない(提示された項目のどれにも当てはまらない)」(29.0%)、②「学業の不振」(17.9%)、③「いじめを除く友人関係をめぐる問題」(17.5%)である。

そして、中学生の不登校の卒業後の進路等については、「不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査～」(文部科学省、2014)(以下、不登校実態調査)及び少し年代は遡るが、保坂(1996)に基づき中学生の不登校の卒業後の進路等について述べていく。

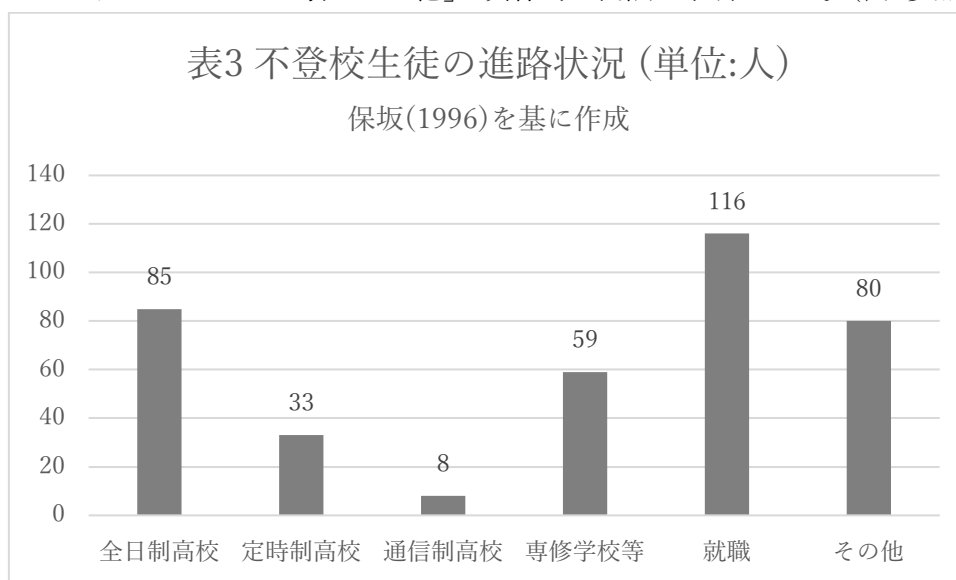
まず、不登校実態調査の説明だが、これは文部科学省の初等中等教育局児童生徒課が行った追跡調査であり、平成18年度(2006年)に不登校だった生徒の5年後の状況を把握する為に、実態調査を行ったものである。不登校実態調査によると、大きく以下の点が卒業後の進路として調査が行われている。

就業状況に関する問い、「(現在、何か仕事についていますか)」に対しては、多い順から三つを挙げると、①「特に仕事にはついていない」(703人、43.8%)、②「パート、アルバイトとして会社などにつとめている」(517人、32.2%)、③「正社員として会社などに勤めている」(149人、9.3%)である。そして、就学状況に関する問い、「(現在、どこか学校に通っていますか)」に対しては、多い順から三つを挙げると、①「通っていない」(809人、50.4%)、②「大学」(304人、19.0%)、③「専修学校(専門学校)・各種学校」(239人、14.9%)である。ここで注意しておきたい点は、就業状況に関する問いの「特に仕事にはついていない」という項目には、就学も含まれるという点と、就学状況に関する問いの「通っていない」という項目には、就労も含まれるという点である。この点については詳細に触れられていなかった為、どの程度含まれているのかは不明である。

そこで、保坂(1996)を参照して、卒業後の進路に関して詳細に見ていく。まず、保坂(1996)の不登校の定義は、本論文中における定義と異なるので、その点を確認しておきたい。保坂(1996:15)によると、「不登校とは、生徒本人ないしはこれを取り巻く人々が、欠席ならびに遅刻・早退などの行為に対して、妥当な理由に基づかない行為として

動機を構成する現象である。(中略)具体的には、『妥当な理由』とは、病気、けが、事故、忌引き、家庭の事情、出席停止など、教師が出席記録をとる際に用いられる『欠席取扱事項』に認められた事由がこれにあたる。これを本調査に即してより具体的にいえば、一年間の欠席日数が30日以上長期欠席者のうちから、学級担任の指導記録から明らかに『不登校』ではないものを除いていく形をとっていくこととする」と述べている。そして、調査の概要について、対象は、A市において1990年度に年間30日以上欠席した中学3年生(473人)から有効データのみを抽出した468人を対象にしている。さらに、そこから上記の不登校の定義に当てはめ、不登校生徒を381人としている。方法は、A市の各学校における進路指導担当者に対するアンケート調査を対象者が卒業して三ヶ月後に行っている。

不登校の卒業後の進路状況について調査結果を基にして述べると、以下の表の通りであった。進路状況としては、「就職」が最も多く、次点で「全日制高校」、その次に「その他」となっている。方法が進路指導担当者に対するアンケートであり、当事者に対するアンケートではない為、「その他」の具体的な内訳は不明である。(表3参照)



ここまで客観的に不登校の現状としてデータをまとめてきたが、それに対する考察を次で行う。

2. 中学生の不登校に対する考察

本項目では、上記の不登校の現状に関するデータに対して、中学生を中心に私の考察を述べる。まず、不登校の割合(人数)に関して、小学生が0.7%、中学生が3.6%、高校生が1.6%という割合に関して、これを見てみると、中学生の不登校の数が多いことが明白であるだろう。この理由について、小学校から中学校への進学に伴う学業の変化、友人関係の変化といった、環境の変化が第一に挙げられると考える。学業の変化に関しては、中学校へ入学すると、定期試験という存在に初めて出会うことになる。小学

校の場合は、試験があったとしても、全科目を定期的に受けるものではなかった為、一つの科目の試験対策を行っていけば良かったが、中学校になると複数の科目を一度に対策することが求められる。この様なことにより、中学生は今までのことのない経験をするのである。その過程において点数の低さや勉強方法が分からないこと等に挫折してしまえば、不登校に繋がるだろう。また、友人関係の変化に関しては、小学校から中学校が一貫となっている学校を除くが、基本的に中学校へ進学することになると、小学校に比べて一校辺りの在籍人数が多くなる。在籍人数が多くなることは、必然的に他者との関わりの機会も増えていき、それに対応する様に、人間関係の悩みも増えてくるだろう。

次に、学年別不登校の人数についてだが、これは先に述べた通り、小学校1年生から中学校3年生までは右肩上がりであり、高校1年生になると、その数は半数以下に減少している。この理由として、義務教育ということが関係していると考え。周知の通り、中学校までは義務教育であるが、高校は義務教育ではない。それにより、高校で不登校になると、出席日数が足りなくなり、留年することとなり、中途退学という手段を取るようになることがある為、高校生の不登校は中学生に比べて少ないと考える。また、小学校から年齢に上がるに連れて不登校の人数が増えていることに関しては、中学生という年代が影響していると考え。詳しくは後にエリクソンの心理社会的発達理論を用いて述べていくことにする。

不登校の要因については、分類として「本人に係る要因」があり、その下の区分として「学校・家庭に係る要因」が存在している。私は、「学校・家庭に係る要因」がある為に、「本人に係る要因」への繋がりが存在していると考え。つまり、学校や家庭に何か問題がある為に、本人が何らかの状態に陥り、不登校になるということである。例を挙げてみると、学校の友人関係に悩んでいる為に、それを考えることに疲れて、無気力という形になり、不登校になるのである。

そして、中学生の不登校の卒業後の進路に関しての不登校実態調査において、先に述べた通り、「とくに仕事にはついていない」者(就業していない者)が半数近くを占めている。また、「学校には通っていない」者(就学していない者)も半数近くを占めている点に着目した。もちろん、就業と就学のどちらかをしている場合もこれらの数には含まれるが、圧倒的に何もしていない者が多いと言えるのではないか。これらの者は引きこもりやニートと呼ばれる状態に陥っている、もしくは陥る可能性が高いと言えるだろう。この点を考えてみると、高卒の資格を経ることの重要性が分かる。

上の不登校実態調査を補うものとして、少し古い調査ではあるが、保坂(1996)の実態調査から考えられる点は多く存在する。「高校進学にはやはり大きな壁が立ちはだかっているように見える」(保坂、1996:11)と述べられている通り、全日制の高校へ進学することは、不登校の中学生にとって容易な選択ではないだろう。そして、本論文でも主張したい点である、通信制高校への進学は381人中8人(2.1%)と極めて少ない。この原

因には、そもそも高校への進学をしないということが考えられるが通信制高校の認知度の低さといった点もあるだろう。この点に関連して、保坂(1996:14)が「社会的な器(制度)としての定時制・通信制への進学を見直すことが必要」と述べている通り、従来からその必要性は主張されているのである。この点も踏まえて、進学を選択肢拡充を図っていきたい。

第3章 高校生の不登校・中途退学の現状と考察

1. 高校生の中途退学の現状

本章では、高校生の中途退学の現状をまとめた上で、それに対する考察を行う。現状のデータは「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生活指導上の諸課題に関する調査結果」によるものである。

まず、中途退学者数は、在籍生徒3,242,065人に対して、48,594人(1.4%)である。なお、その数は、昭和57年の106,041人から毎年、減少傾向にある。高校生が中途退学をする理由としては、表4の通りである。また、表4の「学校生活・学業不適応」及び「進路変更」の内訳は表5及び表6の通りである。

そして、「不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査～」(文部科学省、2014)によると、「中学校卒業後の高校進学状況」に関して、中学生の不登校の高校進学率が85.1%であるのに対し、高校中退率は14.0%である。

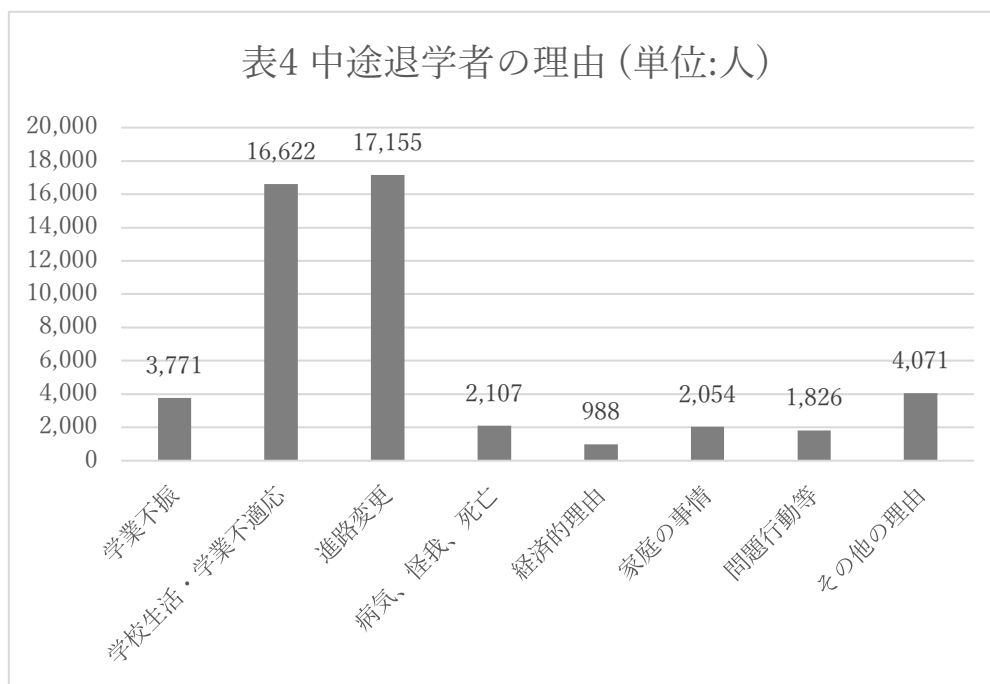


表5 学校生活・学業不適応の内訳 (総数:16,622人)
(単位:人)

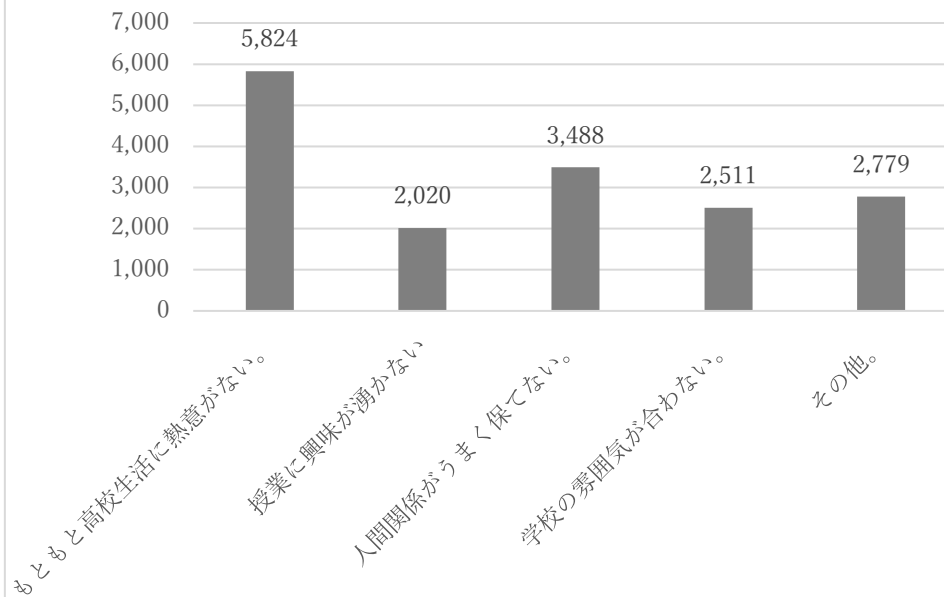
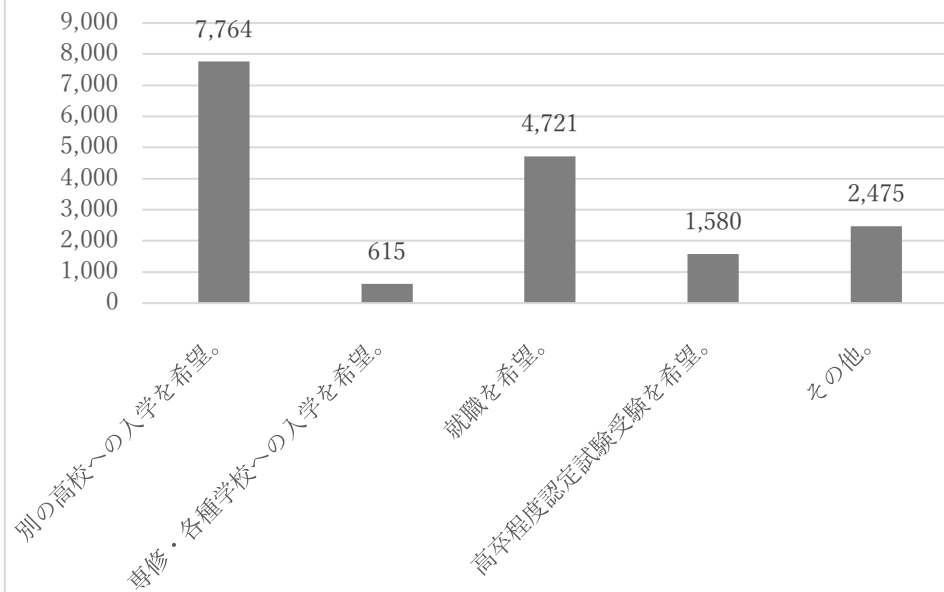


表6 進路変更の内訳 (総数:17,155人)
(単位:人)



2. 高校生の中途退学に対する考察

ここでは高校生の中途退学に関して、考察を行う。

まず、中途退学者数に関して、その数は48,594人(1.4%)である。割合で見ると少ないかもしれないが、人数で見ると、約5万人である。毎年約5万人の高校生が中途退学していることになり、決して珍しいものではないだろう。本論文では目的と異なるので、詳細な言及は避けるが、中途退学者に対する支援、例えば、編入に対する支援や高認取得に向けた支援を拡充させていく必要があるだろう。

また、中途退学をする理由としては、「学校生活・学業不適応」と「進路変更」が多数を占めている。「学校生活・学業不適応」に関しては、その内訳にある「もともと高校生活に熱意がない」や「人間関係がうまく保てない」といった項目は、既に不登校の現状の箇所でも述べた、不登校の要因に通じるところがあるだろう。この点を考えてみると、不登校の状態にある中学生が単に高校へ進学しただけだと、中途退学に繋がるという解釈が出来る。したがって、高校へ進学する際(進路指導)には、将来のキャリアを見据えた指導が必要である。また、「進路変更」に関しては、その内訳の多くを占めているのが「別の高校への入学を希望」という項目である。この「別の高校への入学を希望」ということは、全日制高校から、通信制高校や定時制高校への進学を指すだろう。なぜならば、通信制高校や定時制高校から全日制高校へ転校することは、単位の関係上困難だからである。また、全日制高校から全日制高校への転校という例も少ない。この点を考えてみると、上記の理由で全日制高校に馴染めなかったことが原因で中途退学に繋がっていると言える。そこには中学時代の不登校といったことも含まれるのではないだろうか。

そして、中学生の不登校の「中学卒業後の高校進学状況」における高校進学率が85.1%に対し、高校中退率が14.0%ということに関してだが、高校生全体の中途退学者の割合が1.4%であることに比べてみると、圧倒的に多いと言える。この点を考えてみると、不登校状態を経験して高校へ進学する中学生に対して、高卒資格の重要性、その後の進学や就職といった視点を伝えることが重要なのである。

ここまでは、統計データに基づき高校生の不登校及び中途退学の現状と考察を述べてきたが、その背景として中学での不登校の経験が存在している可能性があると考えた。次に発達心理の観点から、特に中学生に不登校が多い要因を述べていく。中学生は小学生や高校生に比べて、身体的及び精神的な発達が始まる多感な時期であり、その為に不登校に繋がっているのではないかと考えるからである。この考えに基づき、次章ではエリクソンの心理社会的発達理論を基に、中学生の不登校の考察を行う。

第4章 エリクソンの心理社会的発達理論における青年期のアイデンティティの問題

1. 心理社会的発達理論とは

まずは心理社会的発達理論の説明を行う。心理社会的発達理論とは、米国の発達心理学者であるエリク・ホーンブルガー・エリクソン(Erik Homburger Erikson)が提唱した概念である。発達段階という人の一生を誕生から始まり死で完結する一連のプロセスと捉え、人間は八つの発達段階があるという考えである。その八つの発達段階毎に「心理社会的危機」と言うものが存在している。「心理社会的危機」とは、それぞれの発達段階における人が発達する上での克服すべき課題を乗り越えないと生じるものである。人がそれぞれの発達段階において、その社会的環境からの課題に適応しようとする心理学的努力を行う。その過程でぶつかる「心理社会的危機」は何らかの異常な出来事というよりむしろ、正常なストレスの緊張状態を指す。それぞれの発達段階にはそれぞれの「心理社会的危機」が存在しており、例えば中学生を含む青年期の場合だと、自我同一性の確立がそれに該当する。その「心理社会的危機」にうまく対応することが出来れば、「力(Virtue)」と呼ばれる今後の発達においても良い働きを行う能力を身に付けることが出来る。一方でうまく対応することが出来なければ、「心理社会的危機」を抱え、今後の良い発達に影響を及ぼすこととなる。

中学生を含む青年期(13-19歳)の場合の「心理社会的危機」はアイデンティティの形成(Identity)対アイデンティティ拡散(Identity Diffusion)である。エリクソンはアイデンティティを、「『わたしとは誰であるか』という一貫した感覚が時間的・空間的になりたち、それが他者や共同体から認められている」(エリクソン、1959=2011:224)ということ、と定義付けしている。さらに、エリクソンはアイデンティティの説明として、「自分自身の中で永続する斉一性(自己斉一性)という意味と、ある種の本質的な特性を他者と永続的に共有するという両方の意味を含んでおり、その相互関係を表している」(エリクソン、1959=2011:224)と述べている。しかし、このエリクソンの考えるアイデンティティを巡っては、議論が分かれているそうである。そして、アイデンティティ拡散については「自分が何者なのかわからず混乱し、自分たちの社会から与えられる制度化されたモラトリアムを利用することができず、社会的位置付けも得ることができない状態」(エリクソン、1959=2011:139)と定義されている。エリクソンはこのアイデンティティ拡散は様々な形を取りうると述べている。例えば、自意識過剰、選択の回避と麻痺、否定的アイデンティティの選択といったものが挙げられている。選択の回避と麻痺ということは、ある選択(重大なものを含む)を迫られた時に、その選択自体を回避することや、感覚が麻痺しているかのように、その選択について真剣に考えることなく、あるがまま受け入れることである。また、否定的アイデンティティとは、「発達の危機的段階において、最も望まれない・危険な・しかも最もリアルなものとしてその人に示された、あらゆる同一化や役割にひねくれた基礎を持つアイデンティティ」(エリ

クソン、1959=2011:151)と説明されている。そして、アイデンティティ拡散のさらなる具体的な例を挙げると、現在で考えてみると、非行や引きこもりといった現代社会において問題視されている状態が挙げられるだろう。そこには不登校も含まれると私は考える。なぜなら、アイデンティティが拡散することにより、既述した選択の回避により、学校へ登校するということを回避するからである。そこには、エリクソンの言う麻痺も生じているだろう。

ここまでをまとめると、青年期においてはアイデンティティを確立させることがこの過程において求められる課題であると言える。このアイデンティティを確立させることが出来ないと、「人間の社会というジャングルの中では、自我アイデンティティの感覚がなければ、生きている実感を持つことができない」(エリクソン、1959=2011:96)とされている。また、アイデンティティ拡散が起これば、「アイデンティティ拡散の感覚に対する防衛としての不寛容」(エリクソン、1959=2011:98)が生じる。ここで言う不寛容とは、「他人を排除することにかけては、非常に排他的で、不寛容で、残酷になる」(エリクソン、1959=2011:99)ということである。エリクソンが言うには、皮膚の色、文化的背景、趣味や才能、グループの内外、といったことで他者に対して不寛容が生じるということである。

そして、その「心理社会的危機」を乗り越えることにより得る「力(Virtue)」は、「忠誠(Fidelity)」を獲得する。この考えは社会に対しての忠誠及び帰属集団に対しての忠誠と言い換えることができる。つまり、青年期におけるアイデンティティの確立を通して、自分の存在意義を知り、今後の発達に向けての準備を行っていくのである。具体的には、次段階の「初期成人期」における「心理社会的危機」である「親密対孤立」に繋がっていくことになる。どの発達段階にも言えるが、各発達段階で「心理社会的危機」を乗り越える過程において、人間は成長しその結果として得る「力」により、その後の発達に繋げていくのである。

2. 心理社会的発達理論と中学生の不登校

ここでは、心理社会的発達理論に基づいて中学生が不登校に陥る理由について私の意見を述べていく。この青年期の特徴は、アイデンティティの確立の時期と言える。言い換えると、「自分探しの時期」とも言える。アイデンティティの確立(形成)について、杉村(1998:49)は「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の間の視点の食い違いを相互調整によって解決する作業」と定義付けをしている。そして、「このプロセスの根底には青年期の社会的認知能力の発達が想定できる」とも述べている。つまり、アイデンティティの確立は自己と他者との関係性において、自己と他者との線引きをしつつ相互に調整することだと述べているのである。つまり、アイデンティティの確立を簡潔に述べるならば、「自分は何者なのか、将来的な自分はどうかありたいのか」といったことである。さらに具体的に述べると、「将来どんな仕事

に就くのか、やりたいことは何なのだろうか」といったことを他者との関わりを通して考えていく時期である。そして、そのアイデンティティを確立する為には、勉強、部活、恋、遊びといった様々な経験を通して確立していくのである。

ここで最も重要なのは、他者の存在である。杉村(1998:49)が「アイデンティティは自己と他者との間のバランスの問題」と述べている様に、アイデンティティを確立する過程においては、自己だけでなく、他者の存在も重要となってくる。しかし、他者との関係性に疲れて、その過程においてアイデンティティ拡散が生じる可能性も存在している。健全な発達においてはそれらを乗り越えることが出来る。その理由は、積極的な他者との交流や自分の役割、価値をその過程において見出すからである。しかし、アイデンティティ拡散として、様々な弊害が生じ、その状況に陥るということも存在している。具体的に中学生の時期に言えば、非行傾向、引きこもり、精神疾患等が挙げられるだろう。精神疾患に関しては、「児童精神科」という存在があり、専門的知識を持つ医者による治療が必要な通り、この時期の精神疾患を扱うことは高度な専門性が要求されると言える。そして、そのアイデンティティ拡散の具体例として、本論文のテーマである不登校も存在していると考えられる。アイデンティティ拡散として、これらの状況に陥ることは、適切な過程である学校内においてのアイデンティティの確立過程ではなく、これらの状況、即ち不登校の状態においてアイデンティティの確立を求めているからである。本章最後に述べるように、筆者は不登校の状態でもアイデンティティの確立は可能であると考えているが、一般的に、アイデンティティ拡散が生じている状況は、社会的に問題として捉えられている為、それにより、より一層アイデンティティ拡散が生じる可能性が存在している。つまり、不登校という過程でアイデンティティを確立しようとしても、社会的にはそれが好ましくなく、学校に登校させようとしている。この「させようとしている」ということにより、大人に対する不信感が募り、アイデンティティ確立が妨げられていくのである。

特に中学生が不登校になる理由を心理社会的発達理論に基づいて述べるならば、まず、社会との関わり過程においてアイデンティティを確立することが困難であると感じる。その困難を感じることは、一般的に感じることであるが、多感な時期である中学生の場合だと、自分自身の存在意義を疑うことや自分自身の役割を否定することに繋がりうる。そして、その過程に身を置くことに疲弊、言い換えればアイデンティティ拡散が起き、不登校という状態になるのである。ここで私が強調したいことは、不登校になることは社会的に問題として捉えられ、改善すべきだと考えられているが、無理してその状況を改善する必要性は無いということである。もし、無理してその状況を改善したとしても、さらにアイデンティティ拡散が生じ、自分自身の存在意義を疑うことや自分自身の役割の否定に繋がっていき、それが確固たるものになる可能性がある。そうすると、不登校の状況でアイデンティティの確立を見出そうとしている中学生にとって、アイデンティティの確立はさらに困難になり、今後の発達過程に進めな

い、例えば引きこもりの状態、ということに繋がりを。この点に関しては、私の卒業論文のテーマが進学の選択肢拡大である通り、重要な論点だと考えている。

中学生が不登校になることを心理社会的発達理論に基づいて述べると、学校というアイデンティティの形成過程において様々な困難を抱え、アイデンティティ拡散が生じ、アイデンティティの形成過程を社会の関わりの中で見出すことを回避し、不登校という過程においてアイデンティティを形成しようと試みる様になるのである。言い換えると、学校においてアイデンティティを形成することを避けるということである。しかし、学校ではなく、不登校という過程においてアイデンティティを形成しようと試みても、適切なアイデンティティの獲得が困難な場合もあるだろう。そうすると、エリクソンの言う青年期の課題であるアイデンティティの獲得が出来ず、今後の発達に影響を与えていくのである。この不登校の過程にアイデンティティを見出すということが、中学生の不登校の状態になっている一つの原因だと考える。

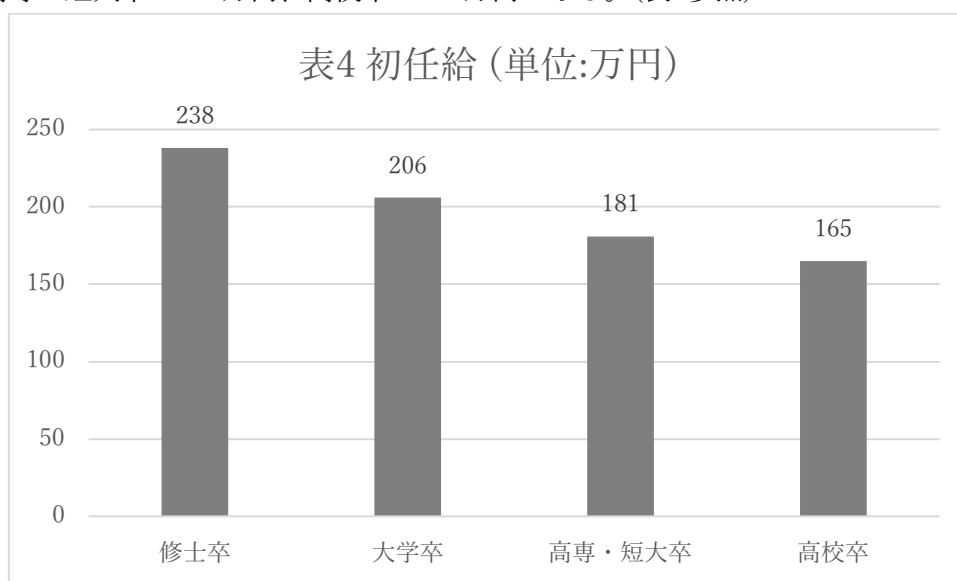
しかし、不登校の過程にアイデンティティを見出すことは、問題ではないと私は考える。つまり、不登校の過程においても、アイデンティティを形成することが出来るということである。既に、学校での過程においてアイデンティティの形成に困難を感じ、アイデンティティ拡散が生じ、不登校に陥ると述べた。その不登校の過程においてアイデンティティを形成することの特徴は、自己と向き合う時間が長いということである。確かに、不登校の状態だと、他者と関わる機会が多くない為、アイデンティティの形成は困難になるかもしれない。しかし、その分、自己と向き合い、自己について考える時間が多くなる為、その過程を通して、アイデンティティを形成していくのである。また、本論文の目的でもある、通信制高校、定時制高校、高認といった様々な選択肢を取った後の場合だと、他者との関わりが生まれて来る。この他者との関わりにおいて、不登校の中学生にとって重要なことは、「他者から強制されていない他者との関わり」なのである。それらの経験を通して、アイデンティティの形成に繋がっていくのである。

第5章 最終学歴と就職の関連性

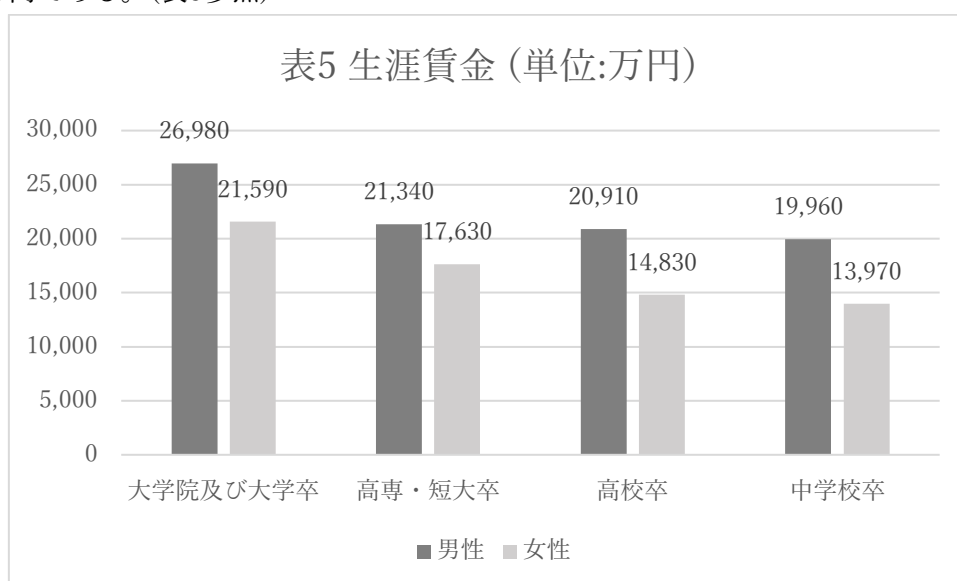
この章では、最終学歴と就職の関連性を述べることを通して、「なぜ、高卒資格が必要なのか」ということを主張していきたい。ここで就職を扱う理由は、就職が進学をした後に迎える出来事であり、人生を左右する重要な出来事だと考えているからである。また、中学生の不登校に対する考察の箇所でも述べた様に、中学生の不登校が引きこもりやニートといった状態に陥る可能性がある為、それに陥らない為にも、最終学歴と就職の関連性について述べていきたい。

1. 最終学歴と就職の関連性の統計データ

まずは最終学歴と就職の関連性の統計データを見てみることにする。厚生労働省(2018)によると、初任給に関して、大学院修士課程修了が238万円、大学卒が206万円、高専・短大卒が181万円、高校卒が165万円である。(表4参照)



また、労働政策研究・研修機構(2018)によると、学校を卒業後、直ちに就職した場合の生涯賃金(60歳までで退職金を含めない金額)は大学及び大学院卒の男性が26,980万円、女性が21,590万円、高専・短大卒の男性が21,340万円、女性が17,630万円、高校卒の男性が20,910万円、女性が14,830万円、中学校卒の男性が19,960万円、女性が13,970万円である。(表5参照)



2. 最終学歴と就職に関する考察

本項目では、上の統計データを基にして、中学生の不登校という観点から、最終学歴と就職という点を見ていくことにする。言い換えれば、中学生の不登校と最終学歴、就職がどう関連しているかということである。

まず、前提として、私達人間は何らかの形で仕事をして、賃金を得て生活をしていかなければならない。今の社会を考えてみると、大学卒を前提としている企業数は多く、最終学歴が低くなればなる程、非正規雇用になる可能性が高くなるだろう。この点を考えてみると、最終学歴の重要性は明白だろう。

第1章で述べた通り、中学生の不登校生徒の進路状況は中学校卒で就業をしていることや、何も就業や就学を行っていないという状況がある。前者の場合は、就職をしている為、賃金を得て生活することは出来るが、問題となってくるのは後者である。後者、即ち、ニートや引きこもりといった状態に陥ることは、生活をしていくことが困難になってくる。さらに言うならば、中学生の不登校がこの様な状況に陥る可能性は高い。つまり、義務教育を終えた時に、高校という次の段階に進むことが出来なければ、社会との間に大きな壁を作ってしまうことになる。それを防ぐ為にも私は中学生の不登校が将来的にも社会と接する機会を少しでも多く持つことを可能にする為に、全日制高校以外の選択肢の提示を行い、全日制高校以外でも、高卒資格を得ることが出来るということを伝えたいのである。

第6章 通信制高校、定時制高校、高認とは

1. 通信制高校とは

通信制高校とは主にレポートを提出し、決められた日に学校に通い単位を取り、卒業する高校である。歴史的背景は、1961年の学校教育法の改正によって規定された「高等学校の通信制の課程」が始まりである。当初は「4年以上」の就業年数とされていたが、1988年に就業年数が3年となった。また、1988年には大学入学資格検定の合格科目は通信制高校において単位認定をすることが可能となった。

概要としては、普段の学習は学校から与えられる課題(レポート)を行い、それを提出することで進めていく「自学自習」が基本となる学校形態である。そして、決められた日に学校に通い(スクーリング)、決められた日数の授業に出席し、「単位認定試験」を受けて合格すると単位が取得でき、卒業することが出来るという仕組みである。また、サポート校と呼ばれる、通信制高校へ提出するレポートの添削や単位認定試験に向けた対策授業を行う施設が併設されている場合もある。サポート校には、全日制高校同様に、体育祭や文化祭といった行事を行っているところも多い。そして、通信制高校の特徴は、

登校日数の少なさであり、その間に自学自習をするが、それだけではなく、アルバイトや仕事といった様々なことを行うことができるという利点がある。また、「全日制過程での集団生活(group living)に抵抗がある生徒や、不登校などを経験している生徒が、自分のペースで学び、自分の状況に合わせて登校できるというメリットがある」(餅川、2013:70)と述べられており、中学校で不登校を経験した者ならではの利点も存在している。一方の欠点としては、登校日数が少ない為に、学びが不十分になることや、教員との関わりが少ないということが挙げられる。また、公立通信制高校の場合は学費が安い、私立通信制高校の場合は学費が高く、金銭的な負担となることも挙げられる。

2. 定時制高校とは

定時制高校とは、「夜間その他特別の時間又は時期において授業を行う課程」と定義付けがされている。歴史的背景としては、1948年に作られた勤労青少年の為の高校である。つまり、中学校卒業後に仕事等で全日制過程の高校へ進学出来ない生徒の教育の場として始まったものである。また、「終業後の夜間に学校に来て学習する生徒のために作られた課程」(餅川、2013:68)とも述べられている。定時制高校には、夜間制、昼間制、昼夜制の3つが存在しているが、大多数が夜間制の形態を取っている。仕事が終わった後に通うことができるということが一番の利点であるだろう。その様々な人が入学するというのも、利点の一つだと考える。この点に関しては、「不登校生徒や高等学校中退者などが増えてきて、それらの生徒への対応の一環として、学ぶ意欲のある生徒に対して門戸を開いている定時制課程が利用されている実態がある」(餅川、2013:68)と述べられている。一方の欠点としては、夜に学校があるということで、生活リズムが夜に偏ることが挙げられる。

3. 高認とは

高認とは、高等学校卒業程度認定試験の略称で、1951年に始まった大学入学資格検定(以下、大検)が始まりである。大学入学資格検定は、戦前の「専門学校入学者検定試験」、「実業学校卒業程度認定試験」、「高等学校高等科入学資格検定」が礎となって作られた。その当時の背景を見てみると、高等学校へ進学する者は一部であった為、当時の大検の難易度は現在に比べて遥かに高かった。しかし、1980年代に高校の全入時代へ突入したことにより、高校中退者の増加が問題となった。そして、1990年代には不登校の増加や社会的ひきこもりの顕在化といった問題が明らかとなっていった。この様な背景を踏まえて、学校教育の非適応者に社会への復帰を果たす為の救済措置としての位置付けとなった。そして、2006年には名称を「高等学校卒業程度認定試験」に変更した。

この高認の利点について、西村(2008:52)は「義務就学期間において長期に不登校を続けて小学校や中学校を卒業していない者に、合格後の高等教育機関への進学だけではなく、各種資格試験や公務員試験の受験資格取得を積極的に可能にし、社会復帰への道筋

をいくつか提供することになった。また、受験科目の精選など受験者への負担軽減措置と相まって、外国人もまた日本の高等教育へのアクセスが容易になった」と述べている。一方の問題点としては、「大学入試自体に関わって、高卒認定試験の位置づけが低下してしまった点」(西村、2008:52)を述べている。つまり、高認ではなく、大学入試の方が受験生にとって重視されている為、高認の位置付けが大学入試に比べて低下しているということである。言い換えると、大学入試を見据えて勉強をしている者にとって、高認を取る為にそれに特化した勉強をする必要がないということである。

4. 入学方法及び取得方法

ここでは、通信制高校及び定時制高校の入学方法と、高認の取得方法について述べる。

通信制高校の入学方法は、一般的な筆記試験を行わずに、書類選考や面接による入学がほとんどである。また、私学の場合、通信制高校は全国各地にあり、自分の住んでいる都道府県の通信制高校に入学しなくても良いので、遠方の通信制高校へ通うことも可能である。この点は、地理的環境に関わらずに入学出来るという利点と言えるだろう。そして、通信制高校に入学する時期は、一年間に複数の入学時期を設けていることがある為、全日制高校や後述する定時制高校とは異なり、4月以外の時期にも入学が可能である。

定時制高校の入学方法は、基本的には全日制高校と同じであり、一般入試は3月に、推薦入試は2月に行われる。試験は、国語、数学、英語の三教科と面接が一般的である。また、定時制高校は通信制高校と異なり、入学を4月に限定している為、通信制高校の様に4月以外の時期に入学することは認められていない(転入、編入を除く)。なお、公立の場合が多く、地域は限定されている。

高認の取得方法は、8月と11月に行われる試験に合格することである。受験資格は、受ける試験の日が属する年度の終わりまでに満16歳以上になる人であり、2005年からは全日制高校等に在籍していても、試験を受けることが可能となった。これにより、中途退学前に高認を取得することが可能となり、一種の保険を掛けることが可能となった。科目としては、国語、地理歴史、公民、数学、理科、英語の中から、8科目から9科目を選択して受験する。なお、一度試験を受けて合格した科目は免除される。また、高校で単位を得た科目を単位免除という形で、免除することも可能である。試験内容としては、中学から高校基礎レベルであり、マークシート形式で行われ、合格点は100点中40点以上である。

これらの通信制高校及び定時制高校卒業又は高認を取得すると、全日制高校を卒業したのと同様の資格を得ることが出来る。つまり、大学や専門学校に進学する資格を得ることが出来るということである。ここで注意すべき点は、高認を取得しても、高卒資格を得ることではないということである。言い換えると、高認を取得すると、あくま

でも高卒と同等とみなされるということである。その為、企業に就職する際には、高卒以上に該当しない場合がある為、注意が必要である。つまり、高認はその後を見据えて、それを実現する為の資格なのである。具体例として、大学入試が挙げられ、大学入試を受ける為には、基準として、高卒が求められるが、高認を取得することにより、その基準を満たすことが出来るということである。

第7章 進学の実験的拡大案の提示

本章では私が一番主張したいことである「全日制高校以外の選択肢としての、通信制高校、定時制高校、高認の選択肢」について述べていくことにする。その際、進路指導、社会の認知度、という二つの視点から述べていく。

前提として、表3(不登校生徒の進路状況)の箇所でも確認した通り、定時制高校や通信制高校に通う不登校の中学生は少なく、多くが全日制高校や就職という選択肢を取っている。その後の追跡調査が無い為、卒業したかどうかは分からないが、不登校の状態から、全日制高校へ通うということは、想像以上の困難が生じると考える。つまり、中学校の状態から不登校であった中学生が、高校へ入学したその日から、突然学校に通い出すということは考えにくい。もちろん、いじめを受けていて不登校になっていた生徒が、いじめた側の生徒が全くいない遠方の高校に進学する場合や、中学校時代に不登校の状態でも勉強に励み、進学校に通う場合といった特殊な例では、そうなるかもしれない。しかし、多くの中学生の不登校の要因の多くが、第2章で確認した通り、「無気力」や「不安」といった要因に起因する為、高校へ入学しても再び不登校になる可能性が高いだろう。そこで、私は全日制高校以外の選択肢を不登校の中学生が取ることができる為の提示を行う。

1. 進路指導

中学生が進路選択をする際に、大きな影響を与えるのが中学校内に設置された進路指導の存在である。仙崎(1977:39)は中学生の進路選択について、「主体的な進路選択能力が乏しく、『所得』、『階層』、『教育水準』を背景にした親の意識が強く反映している場合が少なくなく、また、父母、教師とも志望校の選択は高卒後の進路希望ではなく、合格可能性を目安として決められることが多い」と述べている。つまり、中学生の進路選択においては、その中学生の主体的な意見が最重視されるのではなく、周囲の意見が重視されている現状があると言える。不登校ではない中学生がこの様な状況であるならば、不登校の中学生はどうだろうか。教員との関わりが希薄な為、主体的な意見を伝えることが困難であろう。また、内申書という問題も存在している。中学校の場合は、試験の成績だけでなく、授業態度や部活動といった勉強以外の点も内申書に記載されることに

なる。この内申書は公立高校の入試を受ける際に必要となってくる。不登校の場合は、出席日数は当然のことながら、この内申書にも影響が表れてくる。その為、進路の選択肢が極めて限られてくるのである。

そこで、私が主張したいことは、進路指導において、通信制高校、定時制高校、高認といった高校についての指導も行っていくべきだということである。ただ、不登校の中学生が進路指導を受けないという可能性も存在しているだろう。といっても、全く進路を考えないことはあまり想定されない為、何かしらの形で進路指導を受けることになるだろう。例えば、適応指導教室において進路指導を受けるといったことが挙げられる。これらの通信制高校、定時制高校、高認についての指導を行うことによって、不登校の中学生の選択肢が広がっていくだろう。具体的には、不登校の状態によって、その内のどれが好ましいかを考慮して指導を行うことが良いだろう。例えば、少しなら学校に登校出来る状態の者には、通信制高校を、昼間に仕事をしたいと言っている者には定時制高校を、全く学校に登校出来ない者には高認をすすめるといったことである。しかし、これら三つの選択肢を進路指導で提示することには問題も存在していると考え。その問題とは、それらの選択肢を取った後は、完全に不登校の中学生自身の判断に委ねられるということである。つまり、その選択肢を取った後に、中学校同様に、通信制高校や定時制高校に馴染めることが出来ず、通信制高校や定時制高校を退学するという問題が生じてくる。一体どうすればこの問題を少しでも改善出来るのだろうか。

私が考えることは、進路指導において、純粹に高校に進学するといったことだけを指導するのではなく、さらに将来的な視点を踏まえた指導を行うことであると考え。例えば、いずれかの手段で高卒資格を経た後に、大学や専門学校等へ入学することによって出来る学びの内容や、将来的な職業選択に関わることを伝えていくべきであると考え。そうすることにより、自分自身の具体的な将来像を想像することができ、ただ「純粹」に高校へ進学するというのではなく、高校へ進学する一つの「動機付け」を行うことが出来るだろう。

ここまでをまとめると、進路指導において、通信制高校、定時制高校、高認といった選択肢を提示することと同時に、将来的な視点、言い換えると、人生というキャリア形成の視点を踏まえて指導を行うことが、中学生の不登校にとって、大切であるということである。

2. 社会の認知度

本項目では、学校から少し離れて社会という大きな観点から進学の選択肢拡大を考えてみたい。結論を先に述べると、社会において、通信制高校、定時制高校、高認といった選択肢に対する認知度の低さ、または、それに対するスティグマが存在している為、それらの選択肢を取る場合が少ないということである。それを払拭することが出来れば、中学生の不登校が通信制高校、定時制高校、高認といった選択肢を取ることに繋がると

考える。

認知度の低さに関しては、文部科学省(2013)「高等学校卒業程度認定試験合格者の企業等における扱いに関する調査の結果について」によると、「高卒認定(大検)を知っている割合は、企業において60.3%、自治体において76.6%」との数字が出されている。この数字に関しては、いわゆる普通の高卒と比べてみると、その認知度の低さは明らかであろう。

スティグマに関しては、藤岡(1980)が「通信教育を"代用品""二流の教育"とみなす通念が広く存在し、「苦学力行」という暗いイメージがたえずつきまとっていた」と述べている様に、通信制高校に対する社会的なイメージはあまり良いとは言えない。また、古くから定時制高校は不良の行く所とのイメージが社会に根強く残っている為、定時制高校に対するスティグマも存在しているだろう。一方の高認に関しては、認知度の低さの箇所でも述べた通り、スティグマ以前にその認知度の低さが挙げられる。その認知度の低さにより、高認取得者を異質な者として見る社会の目というものも存在しているのではないだろうか。

これらの社会における認知度の低さ及びスティグマに対抗していく為には、前提として、正しく、その存在を社会に認知させる必要があると考える。今日では、LGBTの人への理解や障害者への理解といった、いわゆる、少数派の多様性を尊重する社会へと変わりつつある。その流れの一つに、通信制高校、定時制高校、高認といった手段が存在していることを広めていくことはどうだろうか。確かに簡単に世論を動かすことは出来ないが、そうだからと言って何も行動をしなければ、状況は改善しないままである。その為にも、社会に対して働き掛けていく必要があると考える。

そして、社会において、通信制高校、定時制高校、高認の理解が進むことによって、必然的にそれらの手段を取る中学生が増えることとなる。そうなると、中学生の不登校がそれらの手段を取ることが容易になることに繋がり、新たな選択肢として、全日制高校以外の選択肢を知ることに繋がるだろう。

3. 選択肢を取った後の課題

ここまで、新たな選択肢の提示として、進路指導と社会の認知度という二つの視点により私の考えを述べてきた。この二つの視点により、中学生の不登校が進学する選択肢が少しでも広がることに繋がると考えている。それにより、中学生の不登校がいずれかの手段で高卒資格を経て、不登校の状態を継続させることなく、社会復帰に繋がっていれば良いと考えている。

しかし、一方で課題も存在しているだろう。通信制高校、定時制高校、高認という選択肢を取った後に生じる課題である。本論文においては、理想論として、これらの選択肢を取ることが良いということを述べてきた。しかし、実際においては、不登校状態に陥った中学生が抱えている問題は深く、容易に解決することが出来る問題ではないだろう

う。その為にも、心理的なサポートを含んだ総合的な取組みが必要なのである。その一つの取組みにこれらの選択肢への支援が含まれていれば幸いである。そして、それが今後の社会において求められてくるのではないだろうか。

第8章 おわりに

ここで第1章から第7章までの内容を簡単に振り返りたいと思う。第1章では、進級論文の時から考えていた不登校というテーマに関して、私が卒業論文でも扱った理由を述べて、卒業論文の目的や定義を述べた。第2章と第3章では、不登校や高校の中途退学の現状をまとめた上で、それに対する考察を行った。第4章ではエリクソンの心理社会的発達理論を用いて、中学生が不登校に陥る過程について私の考えを述べた。第5章では、高卒資格が必要な理由、新たな選択肢提示がなぜ必要なのか、ということ強化する為に、最終学歴と賃金に関する考察を行った。第6章では、簡単ではあるが、通信制高校、定時制高校、高認のそれぞれの概要を説明した。そして、第7章では、新たな選択肢提示の方法として、①進路指導、②社会の認知度といった視点から、それぞれ私の考えを述べていった。

振り返ってみると、中学生の不登校に対する考察が多かったが、私が本論文を通して主張したいことは、次の一言にまとめることが出来る。それは、「不登校だとしても、道は存在している」ということである。たとえ、全日制高校へ行かずとも、他の手段で高卒資格を得て、それにより、大学や専門学校へ進学し、社会へと羽ばたいていけるのである。これが一番伝えたいことである。

[引用文献]

- 1) 杉村和美(1998)「青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し」『発達心理学研究』9巻1号、45-55
- 2) 仙崎武(1977)「進路指導の実態と課題」『教育社会学研究』32巻、31-50
- 3) 西村史子(2008)「大学入学資格検定の変遷」『和光大学現代人間学部紀要』1号、43-52
- 4) 藤岡英雄(1980)「通信教育の可能性」『教育学研究』47巻4号、298-307
- 5) 保坂亨(1996)「不登校生徒の中学卒業後の進路」『進路指導研究』17巻1号、9-16
- 6) Erik H. Erikson(1959) *Identity and the Life Cycle*
エリク・H・エリクソン著、西平直・中島由恵訳(2011)「アイデンティティとライフサイクル」誠信書房

目次

第1章 はじめに

第2章 サークルの代表を務めた1年間

第3章 ～人を動かす～ D・カーネギーから読み解くサークル運営

3-1 本、著者の説明

3-1-1 本作を読み終えて

3-2 『人を動かす力』から解くサークル運営の成功要因

3-3 『人を動かす力』から解くサークル運営の失敗要因

3-3-1 カーネギーの言葉から得るヒント

第4章 まとめ～組織運営にとって必要なこと～

第5章 社会人になって

第6章 参考文献

謝辞

1. はじめに

私は就職活動での多くの社会人の方々との会話を通して、集団社会で仕事やプライベートなど様々な場面において、やはりコミュニケーション能力は必要不可欠だと感じた。この論文は、就職するまでの間に人と関わるすべを身に着け、社会に出て、何年たってもいろんな人たちと良い関係を作っていくために、自分が周りを巻き込んで動かせる存在になるという自己の成長につなげるために書くものになる。

数あるコミュニケーションの中で私が目を付けたのはリーダーシップ論だ。

リーダーシップとは、主にチームや組織を率いて目標達成に向かうその力を指すことが多く、企業であれば主にマネジメントを行う方に求められる能力としてあげられる。かの

有名な経済学者のドラッカーも「リーダーシップとは、組織の使命を考え抜き、それを目に見える形で明確に確立することである。リーダーとは目標を定め、優先順位を決め、基準を定め、それを維持する者である」(P・F. ドラッカー,2000)と述べている。リーダーシップが大事だという話は、社会人になるよりも前の、高校・大学時代においてもよく耳にしたのではないだろうか。私自身もそうであるが人によっては、就職活動で自身のリーダーシップに関する経験話を話したことがある方もいるだろう。そのため、必ずしも上司や管理職、経営層にだけ当てはまるものではなく、チームに所属していれば、誰にでも求められる能力だといえるのだ。主に上司が部下に対してあらゆる施策を行うことをいうマネジメントとは違い、部下がいる、いないに関わらず、チーム全体をひっぱるリーダーシップが社会進出において大切であると考えられる。

2. サークルの代表を務めた一年間

まず役職については積極的に就きたいと希望する人もいれば、面倒なので就きたくないという人もいる。なにせ100名を超えるサークルの代表を引き継いだ当時は不安が大きかった。たとえば伝統ある関学公認サークルなので不祥事は起こせないなどだ。しかし、その分責任感も強く抱き、楽しみという気持ちも強かった。「現状維持では自分が満足できない」「これから先長く続くサークルづくり、新しいことを」「伝統行事を大切に+前年度以上に」など様々なことを胸に引き継いだ。代表としてのスタンスとしては、まず周りに流されずに、堂々としていた。それと自分が楽しめる環境づくりを心掛けていた。理由は、代表が楽しめていないのに部員が楽しめるわけがない、上がぶれると、下もぶれるという教えを先輩から貰い、私も深く共感したからである。

そして私は大学2年生の夏から1年の間フットサルサークルの代表を務めた。その1年間で私はサークルを一層活気づける為、部員を増やすことに最も力を入れた。サークルは近年部員が減少傾向にあった。そこで私はサークル全体を客観的に見る事を心がけた結果、新入生や参加率の低い部員へのコミュニケーションが不足していることと、先輩後輩という縦の関係に偏りがあることに気付いた。状況改善の為にサークル活動外のプライベートでも部員と交流し、コミュニケーションをとるなど、良い縦の関係を築くための取り組みを行った。その結果、9月に開催される、私たち幹部4人の活動の集大成である夏合宿では参加者が前年に比べて30名増え、100名を越した。私が代表を務めている1年間、幹部たちだけでなく、自然と同期達も様々な面で自分に力を貸してくれた。例えば、幹部4人だけでは大変な作業をしていることを察し、追いコンで卒業生へ送るムービーやアルバムの制作などを、自主的に協力を申し出てくれた。一番私が助かったのは、後輩とのコミュニケーションを積極的に行ってくれたことだ。もともと私の同期は進んで人づきあいをする人たちばかりということもあるが、私の目が届き切らないところで起きているトラブルなども、面倒見の良い同期のおかげで救われた。いろんな人に支えられて大きな成果を上げることができたのである。私はサークル代表という経験から、状況分析力、課

題解決力、そしてなにより良き先輩、同期、後輩を得ることができたのだ。

3. ～人を動かす～ D・カーネギーから読み解くサークル運営

3-1. 本、著者の説明

『人を動かす』という本を、この論文の主張を支える文献として取り上げる。

著者のデール・カーネギーは米国ミズーリ州の貧しい農家に生まれ、州立の学芸大学を卒業後、教師、セールスマン、行商人など、雑多な職業を経験した。言わば人づきあいの権化として、人とうまく付き合っていく方法の伝道師となったカーネギー氏の原点は、この「転職」の多さに由来するのかもしれない。

様々な職種を経験して、苦労の上、成功を取めた後に、ニューヨークで立身出世を夢見るが、さらなる挫折や紆余曲折を経てYMCA（キリスト教青年会）の弁論術担当講師（研修やセミナー講師）で身を立てることに喜びを感じることで自分の本文を発見するに至り、人気も集まり、次第に注目を浴びるようになる。やがてデール・カーネギー研究所を設立し、人間関係研究の先覚者となった。

『人を動かす』は、1936年に出版された本だが、自己啓発本の起源ともいわれていて、現在でも多くのビジネスマンに読まれている超定番のベストセラーでもある。本書の最大の特徴を一言でいうと、「相手の立場で考えて、相手の立場でものを言う」ことに尽きる。ビジネスの人間関係において、いまではそのアプローチは基本中の基本となった。その基本を作ったのがデール・カーネギーの『人を動かす』なのである。本書は、「人を動かす三原則」「人に好かれる六原則」「人を説得する十二原則」「人を変える九原則」など、人間関係についての原則を豊富な逸話を交えて紹介している。以下、内容の全体を把握しやすいように、目次を掲載する。

■PART1 人を動かす三原則

- 1 盗人にも五分の理を認める
- 2 重要感を持たせる
- 3 人の立場に身を置く

■PART2 人に好かれる六原則

- 1 誠実な関心を寄せる
- 2 笑顔を忘れない
- 3 名前を覚える
- 4 聞き手にまわる
- 5 関心のありかを見抜く
- 6 心からほめる

■PART3 人を説得する十二原則

- 1 議論を避ける

- 2 誤りを指摘しない
- 3 誤りを認める
- 4 穏やかに話す
- 5 “イエス”と答えられる問題を選ぶ
- 6 シャベらせる
- 7 思いつかせる
- 8 人の身になる
- 9 同情を寄せる
- 10 美しい心情に呼びかける
- 11 演出を考える
- 12 対抗意識を刺激する

■PART4 人を変える九原則

- 1 まずほめる
- 2 遠まわしに注意を与える
- 3 自分の過ちを話す
- 4 命令をしない
- 5 顔をつぶさない
- 6 わずかなことでもほめる
- 7 期待をかける
- 8 激励する
- 9 喜んで協力させる

3-1-1 本作を読み終えて

まずは、まったくエピソードの内容が思ったほど古臭くないってことである。デール・カーネギーという方はリンカーンの研究をしていたということもあってか、リンカーンなどの百年以上昔の大統領の逸話なんかがたくさん収録されているが、そんな昔の偉人でもやっぱり人間関係（特に上司や同僚、取引先）には悩まされており、その解決法も現代でも通用しそうなやり方だと思う。あとは、取り上げられている人間関係をうまく円滑にする方法がとても基本的で、当たり前のことだと言う点だ。この本で書かれていることの大半は、相手の立場に立って考えるということと、相手に敬意を払うことである。この二つが手を変え、品を変え何度も沢山の具体例とともに登場してくる。相手を小さなことでもいいから誉めて褒めて褒めつくしてそのうえで相手を思いやる、そういうことができる人間が成功できると書いてあった。そこだけ聞くとすごく当たり前のことを言っているみたいであった。正直、言われなくても分かっていると言うような気持ちにはなった。しかしそれでも、逆に言えばそれは小手先の技術ではないということだと思う。実際この本の中

では何度も、ここに書いてあることは小手先でないし、心から実践しないと意味がないと書かれている。確かに、心から思ってもいない誉め言葉を聞いたってうれしくもならないし逆に不快になるだけだ。だから、相手のことを心から敬意を払い思いやる行動を自然と取れるような人間になるということが一番の他人を動かすための成功の道なのだと考えた。

3-2. 『人を動かす力』から解くサークル運営の成功要因

次に、自分のサークル運営を実例として、その成功理由を『人を動かす』から説明する。

3-2-1 勧誘

まず初めに、現在の大学生の、一般的なサークル・部活参加状況をまとめておく。

[Benesse Holdings, 2014]

あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか。

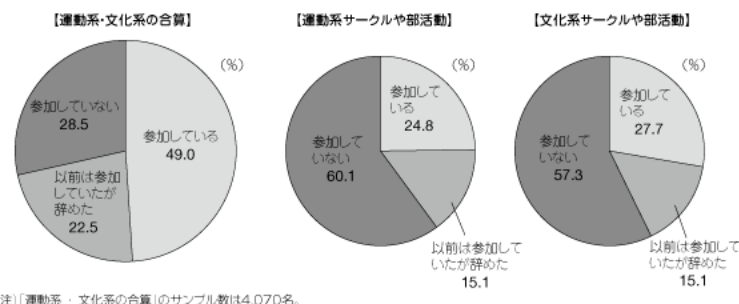
【「参加している」と回答した方にお聞きします】

●週にどのくらいサークルや部活動をしていますか。複数参加している場合は、すべての合計日数をお答えください。

●1週間を通して、サークルや部活動を何時間くらいしていますか。複数参加している場合は、すべての合計時間をお答えください。

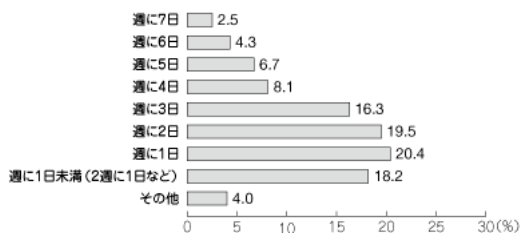
大学生のサークルや部活動への参加状況を図 2-2-2 に示した。全体では「参加している」が 49.0%、「以前は参加していたが辞めた」(22.5%)、「参加していない」(28.5%)であった。さらに「運動系」と「文化系」での参加状況を示したが、「運動系」「文化系」それぞれで「参加している」の比率は 25%前後であった。なお「運動系」「文化系」を掛け持ちしている比率は全体の 3.5%であった。

図2-2-2 サークルや部活動への参加状況(全体)



次にサークルや部活動への1週間あたりの参加日数を図 2-2-3 に示した。最も多かったのが「週に1日」の 20.4%で、次いで「週に2日」(19.5%)、「週に1日未満(2週に1日など)」(18.2%)であり、1週間あたり2日以下の割合がほぼ6割となった。

図2-2-3 サークルや部活動への1週間あたりの参加日数(全体)



注1)「あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか」に「参加している」と回答した者のみ対象。
注2)サンプル数は1,993名。

次に学年別に1週間あたりの参加日数の平均(表2-2-7)と、参加時間の平均(表2-2-8)を示した。まずそれぞれのサンプル数をみると、学年が進むにつれて減少していることが読み取れる。参加日数では学年による違いはみられず、参加時間をみると2年生と3年生が、1年生と4年生に比べやや多い結果となった。4年生は通学日数・大学で過ごす時間が少ないという傾向がみられたが、サークルや部活動においても費やす時間が少ないことが確認できる。

表2-2-7 サークルや部活動への1週間あたりの参加日数:平均(全体・学年別)

	全体 (1,914)	1年生 (589)	2年生 (511)	3年生 (449)	4年生 (365)
平均(単位:日)	2.4	2.3	2.4	2.5	2.3

注1)「あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか」に「参加している」と回答した者のみ対象。
注2)参加日数の平均は「週に7日」を「7日」、「週に1日未満」を「0.5日」のように置き換えて、「その他」を除いて算出した。
注3)〈 〉内はサンプル数。

表2-2-8 サークルや部活動への1週間あたりの参加時間:平均(全体・学年別)

	全体 (1,962)	1年生 (604)	2年生 (517)	3年生 (462)	4年生 (379)
平均(単位:時間)	7.0	6.3	7.6	7.5	6.8

注1)「あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか」に「参加している」と回答した者のみ対象。
注2)〈 〉内はサンプル数。

冒頭でも記している通り、私が代表を任されたときサークルの部員数は減少傾向にあった。そこで私はサークルを活気づけるために、増員に取り組んだ。そのために目を付けたのはやはり4月から入ってくる新入生である。毎年恒例としてチラシ、ビラ配り、新入生への連絡と宣伝、歓迎会や練習会などのイベントは行っていたが、いまいちサークルの魅力を伝え、手ごたえのある勧誘はできていないように感じた。

サークルは必須の活動ではないが、新入生はそれぞれ「大学生活を充実させたい」「スキルを身に付けたい」「素敵な先輩がいる」などの思いを胸に、雰囲気が良くて活動しやすいところを選んで入会する。そのため、メンバーの表情が暗いところや、楽しく活動できなさそうなサークルは、どうしても敬遠されてしまう。活動内容が堅いサークルだったり、落ち着いたのある雰囲気が特徴だったりしても、ファーストコンタクトでは明るく楽しいムードを出し、まず新入生が踏み込んで来やすい雰囲気をつくるのが大事であると考えた。

それらを踏まえて私が実践したのは「ランチ会」である。まだまだ頼れる友達も少なく、不安を多く抱えているだろう新入生に向けて、友達作りの場を提供したのである。

その狙いは、まずはフットサルサークルではサッカーができないと活動できない、入ったとしても楽しくないだろうという概念をなくし、コミュニティづくりの場として提供し、同期の人と話し、気が合う友達をつくる。その過程で先輩たちと交流し、自分のサークルならではの、縦の関係の魅力と、居心地の良さを感じてもらい、大学生活の4年間このコミュニティで過ごしたいと思ってもらうことである。

サークルに入会した場合のメリットを示すことも大切だと考えた。自分たちのサークルに入会すると、どんなメリットがあるのかを伝えることは非常に大事なポイントである。「先輩後輩のつながりが密接で、就活に活かせる」「未経験のスポーツでも、先輩が丁寧に指導してくれる」「語学力が身に付く」「ディベート力が鍛えられる」「サークルのイベントが多くて、カップルができやすい」など、新入生の気持ちになり、魅力を感じそうな切り口で伝えることを心掛けた。

ここで私は「人を動かす三原則」の3つ目、「人の立場に身を置き、強い欲求を起こさせる」を実践することができた。

「こういう話がある。エマーソンとそのむすこが、子牛を小屋に入れようとしていた。ところがエマーソン親子は、世間一般にありふれた誤りをおかした。自分たちの希望しか考えなかったのである。むすこが子牛を引っ張り、エマーソンがうしろから押した。子牛もまたエマーソン親子とまったく同じことをやった。すなわち、自分の希望しか考えなかった。四肢を踏んぱり動こうとしない。見かねたアイルランド生まれの女中が、加勢にやってきた。彼女は、論文や書物は書けないが、少なくともこの場合は、エマーソンよりも常識をわきまえていた。つまり、子牛が何を欲しがっているかを考えたのだ。彼女は、自分の指を子牛の口にふくませ、それを吸わせながら、やさしく子牛を小屋へ導き入れたのである。」(第一章 人の立場に身を置く P51)

つまり、以下のようなことになのだ。

「人を動かす唯一の方法は、その人の好むものを問題にし、それを手に入れる方法を教えてやることだ。」(第一章 人の立場に身を置く P51)

人間は自分の利益になることに強い関心がある。その利益を得る手段を教えてやる事によって、行動を導ける。では、心構えはどうか。

「人を説得して何かをやらせようと思えば、口をひらくまえに、まず自分にたずねてみることだ。どうすれば、そうしたくなる気持ちを相手に起こさせることができるか？」

(第一章 人の立場に身を置く P54-55)

常に相手の望むことを第一に考えることが大切なのだ。

「われわれは、自分の問題を解決することには、いつでも関心を持っている。だから、その問題を解決するのに、セールスマンの売ろうとしているものが役立つことが証明されさえすれば、こちらから進んで買う。」(第一章 人の立場に身を置く P63)

自分が相手に何かを望むのであれば、まず、相手の身になって考えるということだ。し

かも、相手の問題を解決するものであればあるほど、相手は自分から進んで来るということである。だから、相手の問題を解決することを強調することで、自ずと興味を示し、歩み寄ってくるということになるのだ。

人に何かをやれと言われても、中々行動に移せない人がある。また、行動に移せたとしても“言われたから”“指示を破って怒られたくないから”行う作業には効率や生産性が欠けてしまうものだ。人を動かすためには、相手に自らの意思で行動を起こさせるよう働きかけることが重要である。デール・カーネギーは、そのためには相手の立場に身を置き、相手の視点から物事を考えることが大切だと記している。平たく言えば相手の気持ちになり、どうすれば「行動したい！」という欲求のトリガーを引けるのかを考えて働きかけることが大切なのだ。

3-2-2 相談

私はよくサークルの同期や、後輩から様々な相談を受けていた。人間関係、バイト、恋愛などの内容だった。サークルをよくするためにも親身になって相談に乗ることも大切だと感じていた。

この時私は「人に好かれる六原則」の、「聞き手にまわる」を実行できていたと感じた。

D・カーネギーはこの章の中でコミュニケーションをとる会話の中で、最も重要なことは「聞き上手になること」だと結論付けている。

「話し上手になりたければ、聞き上手になることだ。興味を持たせるためには、まず、こちらが興味をもたねばならない。」(第二章 聞き手にまわる P123)

自分の意思を相手に伝え理解してもらいよりも、相手の話すことに興味を持たなければならぬと言っている。では、それはどういった理由からだろうか。

「話し上手とは、おどろいた。あのとき、わたしは、ほとんど何もしゃべらなかったのだ。しゃべろうにも、植物学に関してはまったくの無知で、話題を変えもしないかぎり、わたしには話す材料がなかったのだ。もっとも、しゃべるかわりに、聞くことだけは、たしかに一心になって聞いた。心からおもしろいと思って聞いていた。それが、相手にわかったのだ。したがって、相手はうれしくなったのである。こういう聞き方は、わたしたちがだれにでも与えることのできる最高の讃辞なのである。」(第二章 聞き手にまわる P113)

自分が一方的に聞いているだけなのに、話し上手だという評価を得た話を例に挙げている。これは、自分が聞き役に徹することによって、相手の満足感を満たし、快いものにしたことが最大の原因のようだ。では、これはどういったことからくるものなのだろうか。以下の引用を読み、人間の心理が理解できた。

「ただ、心の重荷をおろさせてくれる人、親身になって聞いてくれる人がほしかったにすぎない。心に悩みがあるときは、だれでもそうだ。腹を立てている客、不平を抱いてい

る雇い主、傷心の友など、みな聞き手を欲しがっているのである。」(第二章 聞き手にまわる P122)

「世間には、自分の話を聞いてもらいたいばかりに、医者を呼ぶ患者が大勢いる」(第二章 聞き手にまわる P121)

相手の話を聞いているとき、自分が聞き手にまわっている時にどういったことに気がつくればいいのか。

「相手が喜んで答えるような質問をすることだ。相手自身のことや、得意にしていることを話させるように仕むけるのだ。」(第二章 聞き手にまわる P123)

すなわち相手が話しやすい状態を作り上げることが大事になるのだ。

3-3. 『人を動かす力』から解くサークル運営の失敗要因

次に、サークル運営でうまくいかなかった点を挙げ、その要因と改善の方向を『人を動かす』から示していきたい。私のサークルでは毎年9月の夏合宿で幹部の任期が終わり、引継ぎが行われる。会社の場合、同じ内容の仕事に長期間取り組むことも多い。まったく同じ仕事でなくても、日々の業務の中で経験を積み、トライアンドエラーを繰り返しながら、できるようになったことを会社に還元していく。しかし、学生の組織の場合、運営の中心となる学年は毎年変わる。大人は日々の業務だが、学生の組織でできる同じような企画やイベント、その他の活動は1年の中で何回あるだろうか。学園祭が年1回のように、それほど携われる活動量は多くないのではないかというのが現状である。

大学生は時間があり、活動期間は数年あり長いと思うかもしれないが、意外と経験できることは少ないものである。慣れてきた頃には、「ハイ、引退です。お疲れ様でした!」といって華々しく引退していく先輩たち。引退までに数年間で経験したこと、そこから得たものはすべて引き継がれるのだろうか。現実には、そうではない。もちろん、タスク面での引きつぎは皆やるだろう。しかしそれは、去年の資料や企画書であり、やることリストでしかない場合がほとんどである。「〇〇月△日 までにこれをやり、この順番でやって、これを決めて…」しかし、そんなものは引きつぎではない、不十分であると私はかんがえる。その人がその活動で得たもの、やりがい、感じたこと、楽しかったこと、つらかったこと。これらも含めての引継ぎなのだ。

私の所属するサークルは男女の代表、副代表の計4人で構成されており、私たちは各ポジションに合った人を後継者に選び任命したのだ。しかしこれだけ引継ぎに対して意識していても、私が引き継いだ後輩はお世辞にも上手くいっているとは言い難いものであった。まず幹部4人ともが自己主張が激しくなかなか意見がまとまらなく、各々のプライドが常にぶつかり合い、衝突を起こすことも多々あった。そのたびに相談を受けていたが、自分たちの代の時には有り得もしなかったことであり、なかなか改善できるような助言をできずにいた。

ここで私は「人を動かす三原則」の1つ目、「相手を批判しない」を後輩にアドバイスとして行うべきであった。

人間はつい自分のモノサシで物事を計りがちだが、誰しも考えがありそれぞれの尺度で行動しているものである。時には相手の言動に憤りや不安を感じてしまうこともあると思うが、その感情をそのままぶつけてしまえば、相手の人格や考えを否定してしまうことになりかねない。自分にとっては「あり得ない」行動でも、相手は相手なりの考えがあり自分は正しいと思って行動しているかも知れない。

デール・カーネギーは本書の中で「人を非難するのはどんな馬鹿者にもできる。そして馬鹿者ほどそれをしたがるものだ」と記している。人を非難することは、相手にとってもあなたにとっても損にしかならないのである。

また、人は自分のことを否定する相手に対して警戒心を抱いてしまうものである。逆に自分を肯定してくれる相手に心を許すのだ。相手に良い印象を抱かせ、関係を円滑にするためにもできるだけ相手を批判せず、相手の思考や気持ちを理解してアクションを起こすようにするべきである。

「およそ人を扱う場合には、相手を論理の動物だと思ってはならない。相手は感情の動物であり、しかも偏見に満ち、自尊心と虚栄心によって行動するというをよく心得ておかねばならない。」(同上)

さらに「人を説得する十二原則」の八つ目、「人の身になる」ことを教えるべきであった。

私たちは人に接する時に、自分の意見や願望をその人に押しつけて、その人が思っていることや考えていることをないがしろにしてしまいがちだ。人とのコミュニケーションで大事なものは、その人の身になって考えることだと、D・カーネギーはこの章で述べている。

「他人にものを頼もうとするときには、まず、目を閉じて、相手の立場から物ごとをよく考えてみようではないか。「どうすれば、相手はそれをやりたくなるだろうか」と考えてみるのだ。」(同上)

人の考え方は千差万別で、自分の考えが他の人と同じだということは稀である。その人がどう考え、どういう意見を持っているのかを尊重することこそが、人とのコミュニケーションを円滑にする秘訣なのだ。

「相手の考え、行動には、それぞれ、相当の理由があるはずだ。その理由を探し出さねばならない、そうすれば、相手の行動、相手の性格に対する鍵まで握ることができる。ほんとうに相手の身になってみることだ。」(同上)

人の行動は、その人が色々と考えた結果であり、結果があるからには原因があるわけである。すなわち、その人が考えた原因を探ることによって、その人がとった行動の理由が解るということになる。であれば、その人の身になることにより、その人の行動が理解で

き、その人とのコミュニケーションも深くすることができるということになるのだ。

「原因に興味を持てば、結果にも同情が持てるようになるのだ。おまけに、人の扱い方が一段とうまくなる。」(同上)

結果、すなわち行動にも同情が持てるということは、感情的にその人を受け入れることができるということに繋がる。こちらが、感情的にその人を受け入れることができれば、相手もこちらを受け入れることができると言えるだろう。

私たちは次期幹部選びの際に、その後輩がサークルにどのように貢献できるかという、一人一人の能力的な面でしか選んでなかったのかもしれないと後になって気づいた。もちろんなにもその4人のすべてが悪かった言うわけではないが、もっと後輩の適性或性格も考慮して引き継いでもよかったかもしれない。人を見ることももちろん、そこには適性或、その後輩の性格や、能力やかけられる時間や熱意等を十分に考慮しての判断が求められるのだ。

3-4 カーネギーの言葉から得るヒント

カーネギーは本書でこう述べている。

「相手は間違っているかもしれないが、彼自身には、自分が間違っているとは決して思っていないのである。だから、相手を非難しても始まらない。非難は、どんな馬鹿者でも出来る。理解することに努めねばならない。懸命な人間は、相手を理解しようと努める」

相手と口論になり、ネガティブな感情のやり取りをするとエネルギーをたくさん使うだろう。そんなときは、自分の正しさを証明する前に、相手の正しさも認めよう。すると、相手は気持ちが穏やかになり、こちらの話に耳を傾けるようになる。デール・カーネギーはこれをこのように表現している。

「口論や悪い感情を消滅させ、相手に善意を持たせて、あなたが言うことを、おとなしく聞かせるための文句は、『あなたがそう思うのは、もっともです。もしわたしがあなただったら、やはり、そう思うでしょう。』とって話を始めることだ」

やはり本質は「相手の立場で考えて、相手の立場でものを言う」。この部分の徹底理解が、リーダーシップ力を高めるためのヒントになる。

4. まとめ～組織運営にとって必要なこと～

組織の運営を好循環させるためには、組織に属するメンバーの人間関係が極めて重要な要素である。その中核にあるのは、ものごとの見方や考え方、仕事に対する心構えであり、コミュニケーションの在り方だ。個々人がそれぞれに、仕事とは何か、仕事力とは何か、自分は何をすべきかを考えて行動し、経験を深める中で段階的に能力を高めて発揮することが、組織の活動に良い結果をもたらす。

カーネギーは、人は、どんなに悪人で、誰が見ても間違っていると思っていなくても、決して自分が間違っているとは認めないものだと言った。そして批判をされたり非難をされた

りしても、心から自分の行動を変えることはないとも言った。むしろ、批判すればするほど、かたくなに自分が正しいことを主張するだけで、望ましい行動を取らせることができなくなる。相手を動かすには、相手の行動に対して批判も非難もせずに、相手がなぜそのような行動をとったのかを考えて認めてあげることが必要であり、承認欲求を満たしてあげることが、相手の心を動かすためには最重要なのだと説く。

組織運営でも、まったく同じなのだ。新規事業の立ち上げなどは、まわりからの批判・非難・苦情がつき物だが、新規事業がでてこないと嘆いている会社ほど、新しいアイデアやチャレンジに対して、必要以上に厳しい批判や苦情を投げかけているものである。もちろんリスクが高い新規事業の立ち上げには、批判と修正は必要だ。しかし、それはあくまでもビジネス・アイデアに対する批判であるべきなのだが、日本の文化では、アイデアに対する批判と、人格に対する批判が同一視されてしまう傾向が強いのだ。

このようなアイデアに対する批判と人格に対する批判の混在を許してしまう環境では、誰だって、二度と新しいことに挑戦しようとする気が起きなくなってしまうだろう。

むしろ、その反動として、自分の正当性に固執することや、自分がうけてきた仕打ちと同じ仕打ちをしかえしてやろうとするあまり、他人の挑戦に対しても同じような批判や非難をするようになってしまう。こうなると、もうその組織から画期的なアイデアは生まれにくくなり、ますます悪循環に陥ってしまうだろう。こういった状況になるのを避けるためには、新規事業担当者の人格はもちろん、行動やアイデアに対しても、批判や非難、苦情などはできるだけしないように心がけ、ビジネス・アイデアに改善すべき点や決定的な欠陥があったとしても、「できない理由」や「うまく行かない理由」を説いて相手を追求するのではなく、どうすれば課題を解決できるかといった建設的な議論ができるように舵を取るべきなのだ。

そもそも、とにかく新しいことを嫌うのが現代企業なのかもしれない。なぜなら、典型的な現代企業の中には成功しようとしている人を応援する人などいないように思える。評価がそのまま自分の将来のポジションや企業のヒエラルキーに直結してしまう組織においては、他者の成功を応援することは自分をおとしめるだけだ。また、特に日本では他の人と同質であることが求められる社会であり、出る杭など打たれるだけなのだ。少しでも人と違うことをいえば、それだけで嫌がられる。さらに、人間は本質的に変化を嫌う。これまで経験してきたことは受け入れられるが、それ以外のことは受け入れられない。イノベーションを起こしそうなことほど受け入れられないということだ。ここまで書いて思いますが、本当に大変であるが、誇張でもなんでもなくて、こんなことが日常茶飯事で起こりうるのだ。しかし、私の意見としては、こういうものだからこそ、もし考えたアイデアが、筋がいいものであって、それでも批判されるということは、とても大きな可能性を秘めているということではないだろうか。アイデアを批判されるということは、まだ誰もそのことの可能性に気がついていないということなのだ。批判されるということは「チャンス」だ。だから、批判が起こった時にそれをネガティブに捉えられるのではなく、ポジ

タイプに捉えて、その批判をうまく活用するぐらいの気持ちでやるのが一番ではないかと考える。

カーネギーは、率直で、誠実な評価を与えることだとも言った。

『人を動かす』の中でカーネギーは、「人を動かす秘訣はひとつしかない」と断言している。そして、その秘訣とは「みずから動きたくなる気持ちを起こさせること」と言う。

前節の批判、非難、苦情を言わないことと表裏一体だが、批判や苦情、そしてパワハラまがいに強制的に脅したりしても、人は決して自らすすんで建設的な行動をとることはない。上でも述べたように、そのような方法ではいろんなところに悪影響が起きてしまい、むしろ逆効果なのだ。カーネギーはそのようなことをする代わりに、相手に自らすすんでやってみたくなる気持ちをおこさせる工夫が必要だと説いた。それが相手に対して重要感を持たせること。つまり、自分自身が重要な人物であると思ってもらうことだというのだ。具体的には、相手の行動に対して率直に高い評価を与えることだ。そうすることで、自尊心が満たされ、こちらから強制しなくても、自らすすんで新しいチャレンジをするようになる」と述べている。そのためには、相手が自分自身のことをどのように自己評価しているのか？そして周りからどのように評価してもらいたいのか？どのような領域で重要人物だと思ってもらいたいのか？を知った上で、その自己評価にあった評価を伝える必要がある。当然、他人の真価を認めようとする努力が必要であり、お世辞などでは逆効果になってしまう。相手の真価を探す努力が、誠意となって相手に伝わるのだ。

たとえば、相手がこれまでにない困難なことにチャレンジして、初めてできたことや、気付いたこと。結果や成績よりも、それらを成果として感謝し評価することが、重要だと言う。人は評価などで傷つきやすい生き物だが、傷ついても行動を変えることはできる生き物なのだ。自分自身がかけがえのない価値を持っていると認知させることで、はじめて評価を恐れずに、自ら行動を取れるようになるのだ。

カーネギーは強い欲求を起こさせることも、人を動かすただひとつの秘訣であると言った。「自ら動きたくなる気持ちを起こさせること」に関連している。カーネギーは、自動車会社フォードの創業者のヘンリー・フォードの「成功に秘訣があるとすれば、それは、他人の立場を理解し、自分の立場と同時に、他人の立場からも物事を見ることの出来る能力である」という言葉を引用して、人の立場に身をおくことの重要性を説いている。誰しも自分のことで頭がいっぱい。だから、その人を動かすには、その人の好むものを話題にして、手に入れる方法を教えてあげること。たとえば、タバコをやめさせたいと思う人がいるとしたら、その人にタバコの害を説明したり、説教しても動かない。その代わりに、タバコによってかなえられない自分の望みや、タバコをやめることで達成できる夢を教えてあげることなのだという。または、なにか相手にやって欲しい行動があったとした場合、自らそのアイデアを思いついたように仕向けることで自尊心を満たしつつ、自らすすんで行動をとってもらえることが出来る。

余談ではあるが、私は3回生に時の喫煙者の意識をかえることを目的とした進級論文を書いた。その中の考察として、「タバコの値上げなどに伴って禁煙者・非喫煙者が増えてくる最近では、タバコそのものを毛嫌いする嫌煙家も多く増えている。そのためマナーを守っている喫煙者の人達まで、肩身が狭くなっているのが現実です。だが、喫煙者の肩身がこんなに狭くなっているのには、過去にタバコのマナーを守らなかった喫煙者の存在が深く関係しているのである。一人がマナー違反をするだけで、非喫煙者に「これだから喫煙者は…」というイメージを与えてしまう。一人のマナー違反によって、数多くの喫煙者達が肩身の狭い思いを強いられており、自分のマナー違反で喫煙者の肩身が狭くなれば、結局困るのは自分自身になるというわけだ。マナーを守らない喫煙で害を被るのは、非喫煙者だけではなく喫煙者も一緒です。タバコを吸う人は、自分も喫煙者の看板を背負っているという気持ちを忘れてはいけないのだ。」と説いたが、カーネギーの考え方を知り新たな結論を得ることができた。

リーダーシップを発揮して、メンバーだけでなく、経営者や投資家などに、自ら望ましい行動をとってもらうためには、まずはその人の望むことは何なのかを知る必要がある。このような努力の結晶として、彼らのゴールにいたる手段を提供することができるのだ。

“人を動かす”とはどういうことか。私が本書を読んだ動機は、自分の要求を他者に満たさせたいという気持ちからであることは紛れもない事実であった。しかし、本書を通じて、私が学んだことは、“人を動かす”こととはまず何よりも“相手に関心を寄せる”ことから始まるということである。“お世辞ではなく、本心から、気持ちを寄せる誠実さ”が、他人の心を奮い立たせるのである。この概念が、私の心に響く概念であった。その一方で、“自分を動かしたい”と思っている人の気持ちを考える上でも必要な概念であると感じた。

5. 社会人になって

私は2020年の4月から某証券会社に就職する。証券会社の業務内容は、投資家と株式会社の仲介として、「引き受け」、「売り出し業務」、「募集・売り出しの取り扱い業務」などを行う。企業が株式を発行して、投資家が株式を購入する。その際に、株式売買の仲介手数料を得ることで収益を生み出している。また、証券会社は、投資家に株式を購入してもらうことで、資金を調達し、株式会社は、株式の発行による資金調達を証券会社から行ったりもする。そして新入社員の私は主に営業をすることとなる。この本を読み、営業マンになる身として、相手を尊重することを肝に銘じて仕事をしたいと感じた。相手を尊重するそういう人の話には、自然と人は動きたくなる。だから、こういう気持ちが起こるように、お客様とお互いに関係を作っていく。友人関係をつくっていく。これが、人を動かす秘訣なのだと思う。人を動かしたい。そう思うこともあるだろう。しかし、無理やり操作しようとするれば、逆効果です。操作されていると思ったら、反発したくなるのが、人間の心というものだ。人を動かそうと人を操作しようとしたら、人は動いてくれな

くなるものなのだ。だから、相手が動きたくなるようにする。ここが、人を動かすポイントになることを学んだ。

そして人を動かすポイントを学んだうえで、アイデア批判を乗り越えたいと思う。もし、何かしらの結果が出るまでたどり着けたのなら、驚くほど急激に周りの反応は変わるだろう。なぜなら、「結果が出た=今後このアイデアが将来『普通』のことになるかもしれない」に変わるからだ。批判する人たちは常に新しいことのない「普通」の状態の中にいたいのだ。そのため、あなたのアイデアが将来「普通」のことになるかもしれないという結果が見え始めると、次第にそちらのほうに流れていく。あのアイデアは新しいことだと思っていたら、どうやら将来「普通」のことになり、自分が乗り遅れてはいけない対象となることができるのだ。そういうムーブメントが起こるまではひたすら「批判的な反応は必ず起こる。批判は真っ向から打ち返す」というマインドを持ちながら進めていきたい。

この章の最後に、以下のような文がある。「何か素晴らしいアイデアが浮かんだ場合、そのアイデアを相手に思いつかせるようにしむけ、それを自由に料理させてみてはどうか。相手はそれを自分のものと思い込み、二皿分も平らげるだろう。」この言葉を本当に実現できるような社会人になりたい。

6. 参考文献

- D・カーネギー. (2016). 人を動かす. (矢部敬一, 編, 山口博, 訳) 創元社.
- Benesse Holdings. (2014). 参照先: サークルや部活動への参加状況: https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/daigaku_jittai_2_2_3.html

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた卒業論文指導教員の牲川波都季教授に心より感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂戴いたしました牲川ゼミの皆様にも深く感謝致します。

関西学院大学総合政策学部

2019年度 研究演習 II-18 卒業論文集

発行日	2020年1月8日
発行	関西学院大学総合政策学部 牲川波都季 669-1337 兵庫県三田市学園 2-1
編著者	関西学院大学総合政策学部 研究演習 II-18 (2019年度) 履修生
問合わせ先	牲川 波都季 segawa@kwansei.ac.jp
